

岩村田遺跡群

上の城遺跡Ⅱ

長野県佐久市岩村田字上の城上の城遺跡Ⅱ発掘調査報告書

(古墳後期～平安時代集落)

2016.3

長野県佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第238集

岩村田遺跡群

上の城遺跡Ⅱ

長野県佐久市岩村田字上の城上の城遺跡Ⅱ発掘調査報告書

(古墳後期～平安時代集落)



H1-4

把手付杯（原寸）

2016. 3

長野県佐久市教育委員会



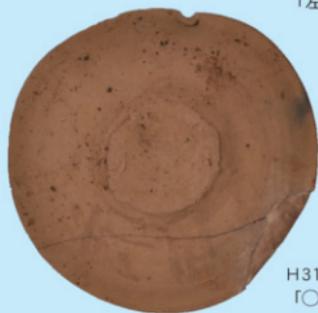
H3-8
「盛」



H31-13
「左」



H27-7
「東」



H31-30
「〇玉？」



H27-26
「東」



H45-14
「午」



H46-5
「氏？」



H27-27
「几」



グ226 (JL43) 青銅製鈴



F2-4
「亢」

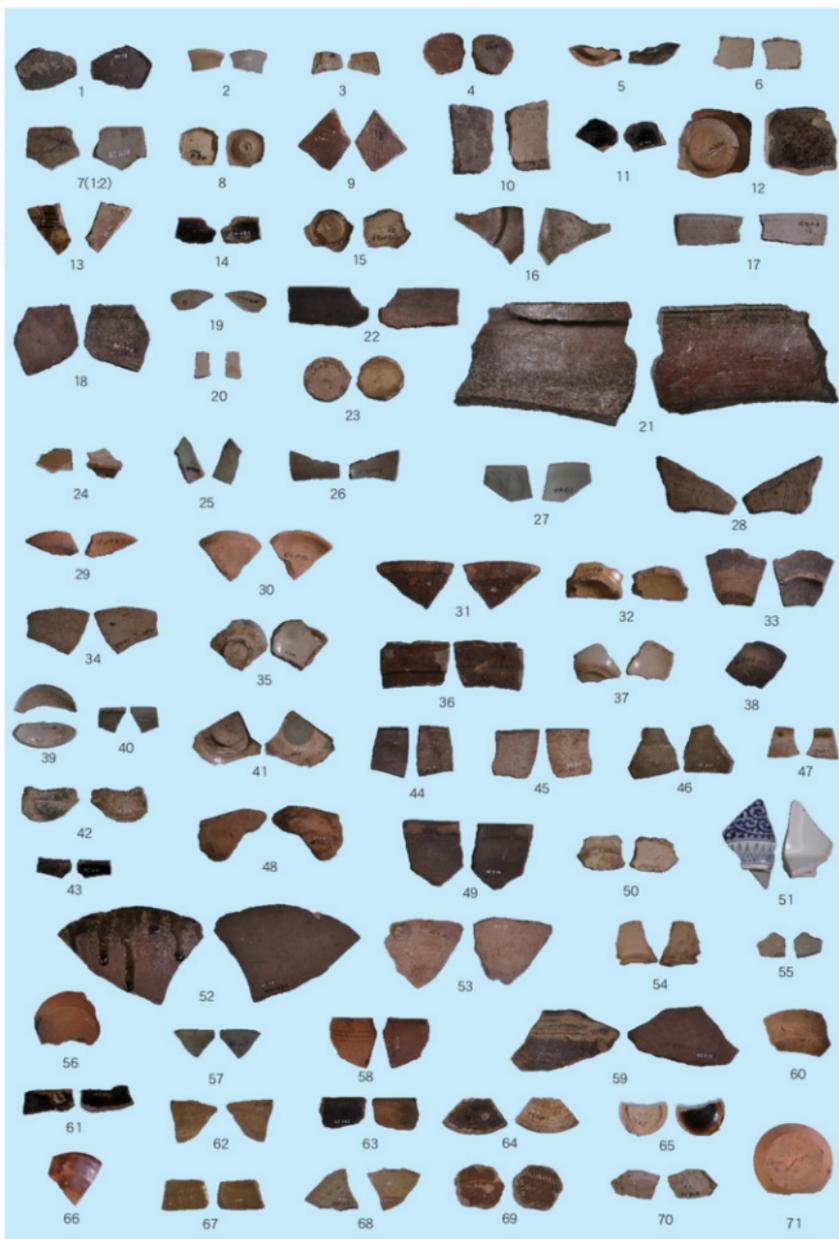


H27-78
「神功開宝」(初鑄年765年)



H38-22
「太平通寶」(初鑄年976) グ129 (サ15) 青銅製巡方





報告書の概要

調査面積 約2,000㎡
 検出遺構 竪穴住居址 47棟 (7～10世紀)
 掘立柱建物址 9棟 (奈良・平安時代)
 土坑 (土壘) 5基 (平安時代・中世)
 溝址 5本 (中世)
 単独ピット 199個

47棟 (7～10世紀)
 9棟 (奈良・平安時代)
 5基 (平安時代・中世)
 5本 (中世)
 199個

甲斐型土器杯



F 4-2 (P70出土)

竪穴住居址47棟
 古墳時代後期17棟
 奈良時代10棟
 平安時代20棟

上の城道跡Ⅱの報告書は「長野県施工昭和48年度国庫補助道路改良事業(国)141号線工事」にあたって昭和48年(1973)7月～11月に行われた発掘調査の報告書である。昭和49年2月に佐久市教育委員会より『うえのじょう-佐久市岩村田上の城道跡緊急発掘調査概報-』出されている。以来40年以上が経過して本報告書となった。

昭和48年の発掘調査は、遺構の掘り下げや測定の記録が不十分であり、ことに堀方がほとんど意識されていないため、床下の構造は不明である。柱穴や付属施設が検出されないままに終わった住居址があるように看取された。カマドはカマド崩壊土を平面図にし、カマド本体は埋もれたままで土層の記録しているため、カマドの構造がわからないものがあった。またカマドの掘方も掘り下げられていない。

これら資料的に不備な点が多々見られる発掘調査ではあるが、昭和48年頃にあつて広い面積の発掘調査の草分けとして大きな成果を残している。岩村田上の城地籍に古代の集落が展開していたことを記録し、それから40年以上にわたる佐久市の行政による埋蔵文化財発掘調査の起点となった調査である。整わない体制の中で、佐久考古学会をはじめとする地域の研究者と考古学専攻生、地元の高校生や地域の人々が一体となった熱意の賜物のような発掘調査であつたと思われる。

出土遺物

縄文時代

縄文土器深鉢・黒曜石製石鏃・黒曜石製石核

古墳時代後期

土師器 杯・埴・高杯・鉢・甗・小型甕・長胴甕・丸胴甕・壺
 須恵器 杯蓋・杯身・壺
 その他 土製紡錘車・白玉・土錘・砥石・磨り石

奈良時代

土師器 杯・鉢・武藏甕
 須恵器 杯蓋・杯・高杯・高台付杯・壺・甕

平安時代

その他 鉄製刀子・鉄製鎌・古銭(神功開寶、初鑄年765年)
 土師器 杯・鉢・武藏甕・ロクロ甕
 須恵器 杯・椀・皿・壺・甕

灰釉陶器 杯・皿・壺・蓋

緑釉陶器 皿(1点のみ)

金属製品 青銅製鈴・鉄製角釘・鉄製鏃・鉄製鎌・鉄製防錘車・太平通寶(初鑄年976年)・青銅製這方・鉄製止め金具

その他 砥石・凹石・磨り石・軽石製磨り石

中世

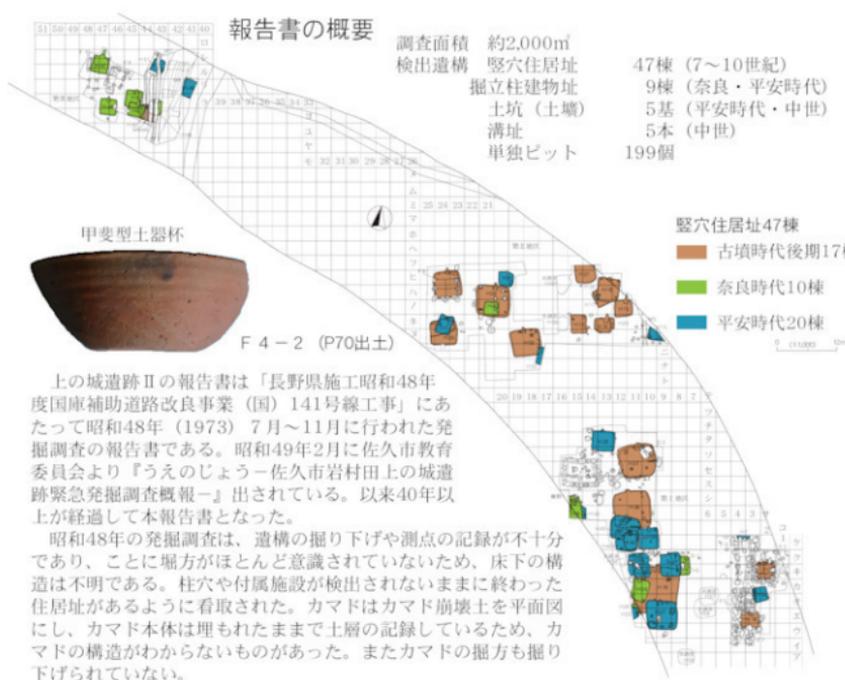
土師質土器 かわらけ・内耳鍋
 陶器 常滑壺・古瀬戸瓶子・鉄軸椀

磁器 青磁蓮弁文碗・青白磁瓶子

古銭 開元通寶・元祐通寶・咸平元寶・皇宗通寶・元豐通寶・至道元寶・紹聖元寶

近世

磁器
 古銭 寛永通寶・文久永寶



例 言

1. 本書は佐久市岩村田に所在する岩村田遺跡群上の城遺跡Ⅱ埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査原因者及び原因
長野県佐久建設事務所
長野県施工昭和48年度国庫補助道路改良事業（国）141号線工事
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名および所在地
上の城遺跡Ⅱ（略号 U J Ⅱ）
長野県佐久市岩村田字上の城3,111～2,595 畑・山林
5. 発掘調査期間及び調査面積
発掘作業 昭和48年（1973）7月28日～11月18日
調査面積 2,000㎡
整理作業 昭和49年（1974）3月20日～29日・昭和49年4月28日～5月6日
・昭和49年12月23日～昭和50年1月10日
遺物洗浄、一部の注記、接合、調査記録の整理などを行っている。
平成25年（2013）5月15日～平成28年3月31日
遺物注記、土器接合、遺物実測、遺物トレース、図面修正、構構図トレース、
編集・刊行
6. 昭和48年（1973）7月28日～11月18日の発掘作業と昭和49年（1974）3月20日～5月6日・
昭和49年12月23日～昭和50年1月10日の整理作業については原因者負担により実施した。
平成25年5月15日～平成27年3月31日の整理作業及び報告書の刊行は全額を国庫補助金及び市費
の公費により作成した。（平成25・26・27年度市内遺跡発掘調査費用）
7. 本書の作成は主として森泉かよ子が行った。
8. 本遺跡の遺物等の資料は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。
9. 付編の「上の城遺跡から出土した動物遺体」については山梨県立博物館の植月学氏に分析を含め
て寄稿していただいた。中世・近世の遺物については（財）長野県埋蔵文化財センター市川隆之
氏にご指導して戴きました。ここに改めて謝意を表します。

凡 例

1. 挿図中の遺構の縮尺は竪穴住居址1/80、カマド址1/40である。異なる場合は図中に明記してある。
2. 挿図中の遺物の縮尺は、土器1/4、石器は1/4・石器小型品1/2である。
3. 図版中の遺物写真の縮尺は土器ほぼ1/4、石製品ほぼ1/2・1/4である。異なる場合は明記してある。
4. 挿図中のスクリーントーンは各図の凡例にしたがっている。

遺構		床面・地山		掘方		焼土
		炭化物・灰		粘土		
遺物		内面黒色処理		石器磨り面		石器自然面
		灰釉陶器		陶磁器施釉範囲		須恵器断面

目 次

巻頭図版

報告書の概要

例 言

凡 例

目 次

第Ⅰ章 発掘調査の概要	1
第1節 発掘調査の経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	2
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	3
第1節 自然環境	3
第2節 基本層序	3
第3節 歴史環境	4
第Ⅲ章 遺構と遺物	12
第1節 竪穴住居址	12
第2節 掘立柱建物址	76
第3節 単独ビット	84
第4節 土坑	86
第5節 溝址	88
第6節 グリッド出土遺物	91
第7節 中世・近世遺物	98
第Ⅳ章 まとめ	100
引用・参考文献	108
付 編	149
遺物図版	153
報告書抄録・奥付	

付表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	5	付編表1 出土動物遺体一覧表	151
第2表 遺構一覧表	109		
第3表 遺物一覧表	115		

挿図目次

図1 位置図	1	図13 H7号住居址	16
図2 基本層序模式図	3	図14-1 H8号住居址(1)	17
図3-1 周辺遺跡分布図	5	図14-2 H8号住居址(2)	18
図3-2 東一本柳古墳出土金銅製品	6	図15 H9号住居址	18
図4 全体図(1:500)	7	図16 H10号住居址(1)	19
図5 第Ⅰ地区全体図(1:250)	9	図17 H10号住居址(2)	20
図6 第Ⅱ地区全体図(1:250)	10	図18 H10号住居址(3)	21
図7 第Ⅲ地区全体図(1:250)	11	図19 H11号住居址	22
図8 H1号住居址	12	図20 H12号住居址	23
図9 H3号住居址	13	図21 H13号住居址	24
図10 H4号住居址(1)	14	図22 H14・20号住居址	25
図11 H4号住居址(2)	15	図23 H15号住居址	27
図12 H5号住居址	16	図24 H16号住居址	28

図25	H17号住居址	29
図26	H18号住居址 (1)	30
図27	H18号住居址 (2)	31
図28	H21号住居址 (1)	31
図29	H21号住居址 (2)	32
図30	H22号住居址 (1)	33
図31	H22号住居址 (2)	34
図32	H24号住居址	35
図33	H25・26号住居址	36
図34	H27号住居址 (1)	37
図35	H27号住居址 (2)	38
図36	H27号住居址カマド	39
図37	H27号住居址 (3)	39
図38	H27号住居址 (4)	40
図39	H27号住居址 (5)	41
図40	H28号住居址	42
図41	H30号住居址	43
図42	H31号住居址 (1)	44
図43	H31号住居址 (2)	45
図44	H32号住居址 (1)	46
図45	H32号住居址 (2)	47
図46	H32号住居址 (3)	48
図47	H33号住居址 (1)	49
図48	H33号住居址 (2)	50
図49	H34・H36号住居址	51
図50	H35・H42号住居址 (1)	52
図51	H35・H42号住居址 (2)	53
図52	H37号住居址 (1)	54
図53	H37号住居址 (2)	55
図54	H37号住居址 (3)	56
図55	H38号住居址 (1)	57
図56	H38号住居址 (2)	58
図57	H39号住居址	60
図58	H40号住居址 (1)	61
図59	H40号住居址 (2)	62
図60	H43号住居址	62
図61	H44号住居址	63
図62	H45号住居址 (1)	65
図63	H45号住居址 (2)	66
図64	H46号住居址	67
図65	H47号住居址 (1)	68
図66	H47号住居址 (2)	69
図67	H48号住居址	70
図68	H49号住居址	71
図69	H50号住居址	72
図70	H51号住居址	72
図71	H52号住居址 (1)	73
図72	H52号住居址 (2)	74
図73	H52号住居址 (3)	75
図74	H53号住居址	76
図75	F 1号掘立柱建物址 (1)	78
図76	F 1号掘立柱建物址 (2)	79
図77	F 2・F 3号掘立柱建物址	80
図78	F 4号掘立柱建物址	81

図79	F 5・F 6号掘立柱建物址	82
図80	F 7・F 8号掘立柱建物址	83
図81	F 9号掘立柱建物址	84
図82	単独ピット (1)	84
図83	単独ピット (2)	85
図84	単独ピット (3)	86
図85	土坑	87
図86	溝址 (M5～M8)	89
図87	M6号溝址	90
図88	グリッド遺物 (1)	91
図89	グリッド遺物 (2)	92
図90	グリッド遺物 (3)	93
図91	グリッド遺物 (4)	94
図92	グリッド遺物 (5)	95
図93	グリッド遺物 (6)	96
図94	グリッド遺物 (7)	97
図95	中世・近世遺物 (1)	98
図96	中世・近世遺物 (2)	99
図97	古墳時代後期の編年	102
図98	奈良・平安時代の編年	104
図99	墨書分布図	106
図100	住居址規模・形態図	107

図版目次

口絵一	墨書土器・皇朝十二銭・鈴・巡方
口絵二	中世・近世遺物
図版1	H1・H3・H4 (1)号住居址
図版2	H4 (2)・H5～H10 (1)号住居址
図版3	H10 (2)～H12 (1)号住居址
図版4	H12 (2)～H14号住居址
図版5	H15～H18 (1)・H20号住居址
図版6	H18 (2)・H21・H22号住居址
図版7	H24～H26号住居址
図版8	H27 (1)号住居址
図版9	H27 (2)・H28・H30・H31 (1)号住居址
図版10	H31 (2)・H32 (1)号住居址
図版11	H32 (2)・H33 (1)号住居址
図版12	H33 (2)～H37 (1)号住居址
図版13	H37 (2)～H39 (1)号住居址
図版14	H39 (2)・H40・H42～H45 (1)号住居址
図版15	H45 (2)～H47 (1)号住居址
図版16	H47 (2)～H49号住居址
図版17	H50～H52 (1)号住居址
図版18	H52 (2)・H53号住居址・掘立柱建物址
図版19	単独ピット・土坑
図版20	溝址・グリッド遺物 (1)
図版21	グリッド遺物 (2)
図版22	グリッド遺物 (3)・石製品 (1)
図版23	石製品 (2)
図版24	石製品 (3)
図版25	石製品 (4)
図版26	金属製品 (1)
図版27	金属製品 (2)・古銭 (1)
図版28	古銭 (2)

第Ⅰ章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の経緯

上の城遺跡は佐久市の北東にあって、岩村田市街地の南端の地にある。調査地点は本調査の原因であった「長野県施工昭和48年度国庫補助道路改良事業（国）141号線」工事により、遺跡の破壊が余儀なくされたためである。

佐久市教育委員会では昭和48年7月11日に市教育委員会と建設事務所の立ち会いのもとに、県教育委員会の指導主事桐原建氏と佐久考古学会員とで遺跡の分布調査を行った。その結果、遺物が採集され遺跡の存在が確認された。道路工事業により、遺跡の破壊は避けがたく、事前に緊急発掘調査をして遺跡の記録保存を行うこととなった。昭和48年7月27日に調査委託契約を佐久建設事務所長と佐久市教育委員会教育長との間でかわし、発掘担当者を藤沢平治氏に依頼し承諾を得た。

昭和48年7月28日に佐久市役所において、打ち合わせ会及び、結団式を行い7月29日に発掘調査に入り、同年11月18日発掘調査を終了した。『うえのじょうー佐久市岩村田上の城遺跡緊急発掘調査概報』を昭和49年2月刊行している。

本書は平成25年度から始めた市内遺跡発掘調査事業の一環として刊行した。

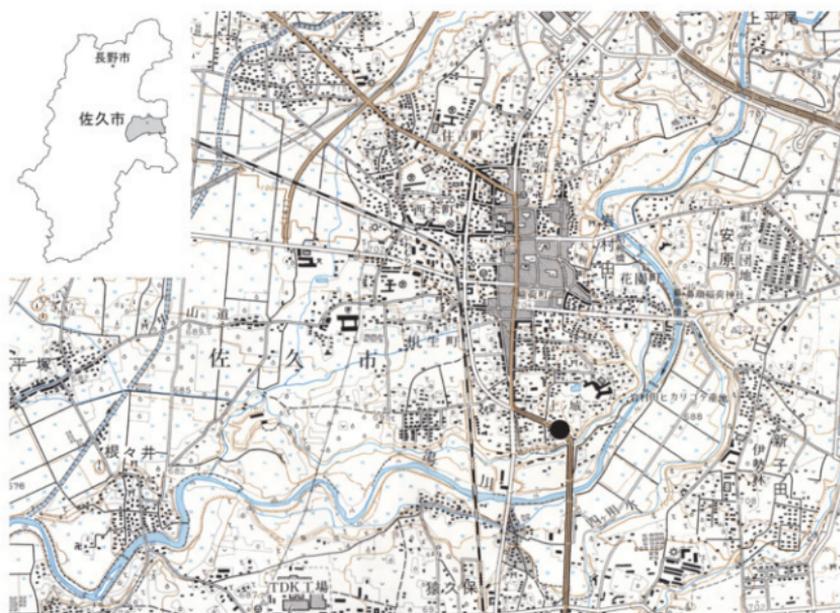


図1 上の城遺跡Ⅱ位置図 (1:25,000) 平成7年11月国土地理院発行

第2節 調査体制

昭和48年度(1973)

(事務局) 教育長 細萱勇美
担 当 木内 捷

(調査団)

発掘担当者 藤沢平治(野沢北高教諭)

調 査 員

土屋長久 武藤 金 三石延雄 井上行雄 森泉定勝 森泉好治 新村 薫 佐藤 敏 佐藤 守 渡辺重義
黒岩忠雄 新津海三 白倉盛男 小林秀人 高村博文 白田武正 青木幸男 鳴下幸恵 林 幸彦 川島雅人
小林幹男 川上 元 大田啓吾 小柳義男 福島邦男 広瀬忠好 田中達明 鶴飼行雄 森山公一 矢島宏男
百瀬新治 林 和夫 上原幸安 前原 豊 小池哲芳 前田順子 西沢やよい 藤井裕紀枝 増沢利定 小原ひさ江
多田井幸視 本田 実 渡 信武 林 文典 松本文一 浅間郷土史研究会 野沢南校郷土史班 上田高校郷土史班
佐久高校生 岩村田高校生 上田染谷丘高校OB 野沢北高校生 野沢南校OB 北佐久農業高校生 浅間中学生

平成25年度(事務局)

教 育 長 土屋盛夫
文化財課長 三石宗一
文化財調査係長 比田井清美
文化財調査係 須藤隆司 小林眞寿 富沢一明 上原 学
神津一明 久保浩一郎 林 幸彦(嘱託)

平成26年度(事務局)

教 育 長 楊沢晴樹
文化財課長 三石宗一
文化財調査係長 比田井清美
文化財調査係 小林眞寿 富沢一明 上原 学
神津一明 久保浩一郎

平成27年度

教 育 長 楊沢晴樹
社会教育部長 山浦俊彦
文化振興課長 小林 聖
企画幹 三石 健
文化財調査係長 大塚広樹
文化財調査係 小林眞寿 富沢一明 上原 学 神津一明 生島修平
(報告書作成)
報告書編集 森泉かよ子
報告書作成分担 土器接合 依田好行・中澤 登、石膏復元 小島 真
図面修正 細谷秀子、デジタルトレース 上原美千代・細谷秀子・加藤ひろ美・林まゆみ・土屋邦子
遺物実測 堺 益子・森泉かよ子・依田好行・中澤 登・小島 真・細谷秀子・柳澤孝子(石器)
拓 本 中澤 登

第3節 調査日誌

(昭和47年)

7月28日 打ち合わせ・調査団の結団式
7月29日 調査区を設定し、表土除去作業
8月6日 表土除去作業をほぼ終了
8月7日 I地区H3・H4号住からI地区のプラン確認を始める
8月17日 II地区のプラン確認を始める
29日 H27の覆土上部より「神功開寶」出土
10月10日 III地区のプラン確認を始める。
10月25日 H38号住の北西隅より、「五銖銭」(現在行方不明)
10月27日 I地区の発掘調査を終了
11月12日 II地区のほぼ発掘調査を終了
11月13日 III地区のほぼ発掘調査を終了
11月14日 I・II・III地区の全体図を作成、発掘調査終了
11月18日 テント・機材の撤収を行う

(平成25年度)

報告書作成作業に入る
土器接合・石膏復元、図面修正

(平成26年度)

土器接合・石膏復元、遺物の実測と撮影
遺構・遺物のトレース

(平成27年度)

報告書作成作業(編集・原稿・補足など)
遺構・遺物トレース

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 自然環境

上の城遺跡は佐久市岩村田地籍に所在し、岩村田台地の南端にあり、南流する湯川が西方向にむきを変えたる地点にあたる。東と南が湯川に接している。

台地の南端の標高は704.5mを測る。湯川の第一段丘の標高が683.8mを測ることから、約20mの断崖に臨む集落である。

佐久平は北に浅間山、東に荒船山や八風山などの関東山地（佐久山塊）が連なり、南は蓼科山・八ヶ岳の山々に囲まれている。中央を千曲川が北流し、千曲川右岸の佐久平北部では浅間山の火山灰が基盤を成している。湯川は浅間山から南流し、この地点で東に向きを変えて、蛇行し、落合で千曲川と合流する。

浅間山の最も古い山体である黒斑山は、約25,000年前に大規模な水蒸気爆発をしている。その際に黒斑山の東半分が山体崩壊を起こし、土石なだれとなって、群馬県北麓と長野県側の南麓側を覆った。これが「塚原泥流」と呼ばれ、「流れ山」が佐久市塚原地籍を中心に、点在している。

その後、13,000年前には浅間山南麓の大規模な噴火により、軽石流が覆っている。これが「第一軽石流」である。この軽石層の最大の厚さは30mを測るといふ。軽石流は小河川でも浸食され易いため、浅間山麓から放射状に浸食谷が形成され、「田切り地形」を生み出している。田切り地形の上面は畑地、田切り内の低地は水田耕作がなされてきた。この田切り地形がみられるのは佐久市長土呂地籍あたりまでで、南側では消滅していく。この上の城地籍は第一軽石流を基盤に上面には、第一軽石流が湯川によって浸食された土砂が二次堆積した湯川層が堆積している。

第2節 基本層序

昭和48年の調査において、財団法人日本色彩研究所栗監修『標準土色帖』を使用していないため、土層の表現は統一されていない。また、測量基準点は4か所もうけられたが、どの点も標高数値の記録がなく、標高は不明である。また地形からみると測量基準点は第Ⅰ～Ⅲ地区ごとに高さは異なっているようである。第Ⅰ・Ⅱ地区では、同じ地区内で異なった測量基準点を使用しており、遺構間の高低の比較は単純にはできない。



図2 基本層序模式図

第3節 歴史環境

本報告書は昭和48年（1973）に発掘調査された成果を記したものである。この上の城遺跡の発掘調査は広い面積と4か月という長期にわたる発掘調査の初例である。佐久考古学会の会員を主体に、地元の皆さん、高校の郷土史クラブ、大学の考古学専攻生などが参加している。調査体制がまだまだ整わないなか、工事のブローダーに迫られないながらの調査であったようである。本遺跡は佐久における広い面積の埋蔵文化財の発掘調査のスタート点と言える遺跡である。

本遺跡は古墳後期～奈良・平安時代の堅穴住居跡と掘立柱で構成される集落跡である。中世は溝（堀）・土坑・ピットがある。多くのピットからは中世の掘立柱建物跡が組めるとみられるが、中世の遺構は十分に検出されていようである。

ここでは岩村田地区周辺の遺跡について歴史的背景を見てみる。

遺跡の南を湯川が西に流れ、湯川沿岸に弥生前期の遺構遺物がわずかに出土している。11.下信濃石遺跡、仲田遺跡、7.東大門先遺跡で見ついている。今のところ住居跡は発見されず、土坑または遺物の包含層のみである。

佐久市内において弥生中期前半の遺跡は発見されておらず、弥生中期後半になって遺跡が展開する。中期後半の集落は佐久市の北域では湯川・滑津川沿岸の段丘上にみられる。湯川の左岸を下流からさかのぼると寄塚遺跡群寄塚遺跡、宮の上遺跡群、根々井芝宮遺跡、右岸では川原端遺跡（個人住宅地）森下遺跡（中部横断道路関係）、鳴沢遺跡群五里田遺跡（警察官宿舎）、北西の久保遺跡（現佐久大学）、岩村田遺跡群西一本柳遺跡（国道141号線バイパス・店舗用地）など多くの遺跡がある。

弥生後期の遺跡は湯川水系の弥生中期に後出して集落を構成し、湯川河岸段丘上では西一里塚遺跡、川原端遺跡、鳴沢遺跡群五里田遺跡、北西の久保遺跡、8.北一本柳遺跡、9.西一本柳遺跡に集落が見られる。湯川沿岸から離れ、低地を囲んで対岸の岩村田・長土呂地籍に集落を増やし展開している。本報告書地点には弥生中期・後期の集落はないが、すぐ北の3.藤ヶ城跡（岩村田小学校）、現在こども未来館がある6.柳堂遺跡、岩村田駅周辺には弥生時代後期の住居跡がある。

古墳時代になると古墳前期の集落が、北陸新幹線の佐久平駅付近の周防畑遺跡群跡の前遺跡、湯川の左岸横和の寄塚・今井西原遺跡、上信越自動車道が湯川を渡った上平尾側の低位段丘の腰巻遺跡に集落がわずかに発見されている。古墳時代中期は、やはり湯川の右岸沿い北西の久保遺跡、9.西一本柳遺跡、5.西八日町遺跡に集落が展開している。

古墳時代の地域の長の墓は古墳であるが、本遺跡から2.25km西にある根々井大塚古墳は、古墳前期の墳丘墓としては佐久では最も古いとされている。古墳の北にある餅田遺跡のS字甕などを含め、弥生終末から古墳初頭に近い土器である。

中でも北西の久保遺跡の古墳群、北西久保古墳群の17号墳（南北23.9×東西24.6mの円墳）からは形象埴輪が多量に出土している。形象埴輪は巫女・武人・鷹匠・農夫など人物、飾り馬・裸馬・鹿・鶏の動物、家・太刀・盾・鞆の器材埴輪がある。6世紀後半とされるまとまった埴輪の出土例は長野県内ではここだけである。10.東一本柳古墳は、住宅街になって今は姿をどめていない。この古墳の規模は、南北径10m、東西径6.8mの円墳で、主体部は南に開口する横式石室（両袖式）である。全長6.1m、石室の奥壁幅1.8m、玄門で幅2.1mを測る。副葬品の馬具・円頭柄頭・鈿・耳環・勾玉類・鉄鏃が出土している。7世紀後半に築造されたと推定される。馬具の毛彫りの金銅製杏葉などは全国的にも発見例の少ない貴重な資料である。（『佐久市の文化財』）

本報告書地点の上の城に集落が営まれ始めたのは古墳後期から奈良・平安時代にかけてである。本遺跡の西隣に当たる5.西八日町遺跡を見ると、調査地区の西側に古墳中期の5世紀後半の堅穴住居が16棟調査されている。古墳時代後期の住居跡は6世紀35棟、7世紀17棟とされ、細別できない古墳後期9棟を含めると61棟が調査されている。岩村田小学校の児童館（『上ノ城遺跡』）からは古墳時代後期の堅穴住居跡が6棟発見されている。3.藤ヶ城跡からも古墳時代後期の住居跡が発見されている（現在調査中）。12.大井城跡（『黒岩城跡』）は古墳中期の5世紀後半の住居跡10棟、古墳後期の6世紀の



図3-1 周辺遺跡分布図(1:10,000)

地図 番号	遺跡名	種別	所在地	時代						在久市 遺跡番号	備考
				新	野	弥	古	中	近		
1	上の城遺跡II	集落跡	岩村田			○	○	○		52	古墳後期～平安時代(惣穴住居47、土坑4、溝4。)本館古書 昭和48(1973)年度調査
2	上ノ城遺跡I	集落跡	岩村田			○	○	○		52	古墳時代(後期惣穴住居9・溝3、竈遺1)、ビット郡 平成15.16(2003・2004)年度調査
3	藤ヶ城跡I	集落跡	岩村田	○	○	○	○	○		52	平成18(2006)年度調査中
4	観音堂遺跡	集落跡	岩村田			○				52	平安時代(惣穴住居12、井戸4、土坑墓3、土坑15、竈柱1、単段ビット 791、溝 平成29(1997)年度調査 養牛時代(後期土坑4・溝2)、ビット3 平成21(2009)年度調査
5	西八日町遺跡	集落跡	岩村田	○	○	○				52	養牛時代(後期遺跡1) 昭和47(1972)年度調査
6	柳堂遺跡	集落跡	岩村田	○				○		52	養牛時代(後期土坑墓13) 平成12(2000)年度調査
7	東大門先遺跡	集落跡	岩村田	○	○	○	○	○		52	昭和47年・平成15年から21年にかけてI～IVの発掘調査がなされ、養牛時代 中期から中世におたる集落跡を抽出
8	北一本柳遺跡	集落跡	岩村田	○	○	○	○	○		52	昭和47年～21年にかけてI～IVの発掘調査がなされ、養牛時代中期から 中世におたる集落跡を抽出
9	西一本柳遺跡	集落跡	岩村田	○	○	○	○	○		52	昭和47年～21年にかけてI～IVの発掘調査がなされ、養牛時代中期から 中世におたる集落跡を抽出
10	東一本柳古墳	古墳	岩村田	○						115	平成16年(2004)発掘調査 寺院関連遺構 養牛前期土器群
11	下信濃石遺跡	寺院跡	岩村田					○		52	昭和59年度調査 古墳時代後期惣穴住居14棟、中世(竈柱建物3 惣穴54・土坑290
12	大井城跡	集落・城郭	岩村田			○				52	平成20年(2008)に館跡の調査。他の調査で、養牛から平安時代の惣穴住居
13	野馬窪遺跡	集落・館跡	須久保	○	○	○	○	○		122	

表1 周辺遺跡一覧表

住居址4棟ある。

奈良・平安時代の住居址は西隣の5.西八日町遺跡で65棟、7.東大門先遺跡で15棟調査された。さらに西に続き、9.西一本柳遺跡、北西の久保遺跡に展開する。5.西八日町遺跡では平安時代の9世紀代までの集落であり、本遺跡と同時期である。

中世の遺構は、2.上の城遺跡地点で堀と火葬墓、11.下信濃石遺跡では中世龍雲寺とみられる寺院関連遺構と竪穴建物址、12.大井城跡の黒岩城跡では竪穴建物址・土坑、6.柳堂遺跡では館跡、4.観音堂遺跡では町屋を含む堂址などいずれも中世北佐久の地頭である大井氏に関連する中世遺跡が連なっている。

3.藤ヶ城跡は、江戸時代末の元治元年（1864）に内藤氏が築城した城で、築城からわずか4年で明治維新となっている。本丸は岩村田小学校になり、周囲も宅地化され、所々に土塁や堀跡、井戸が残っている。



図3-2 東一本柳古墳出土の馬具金銅製杏葉・ベルト金具

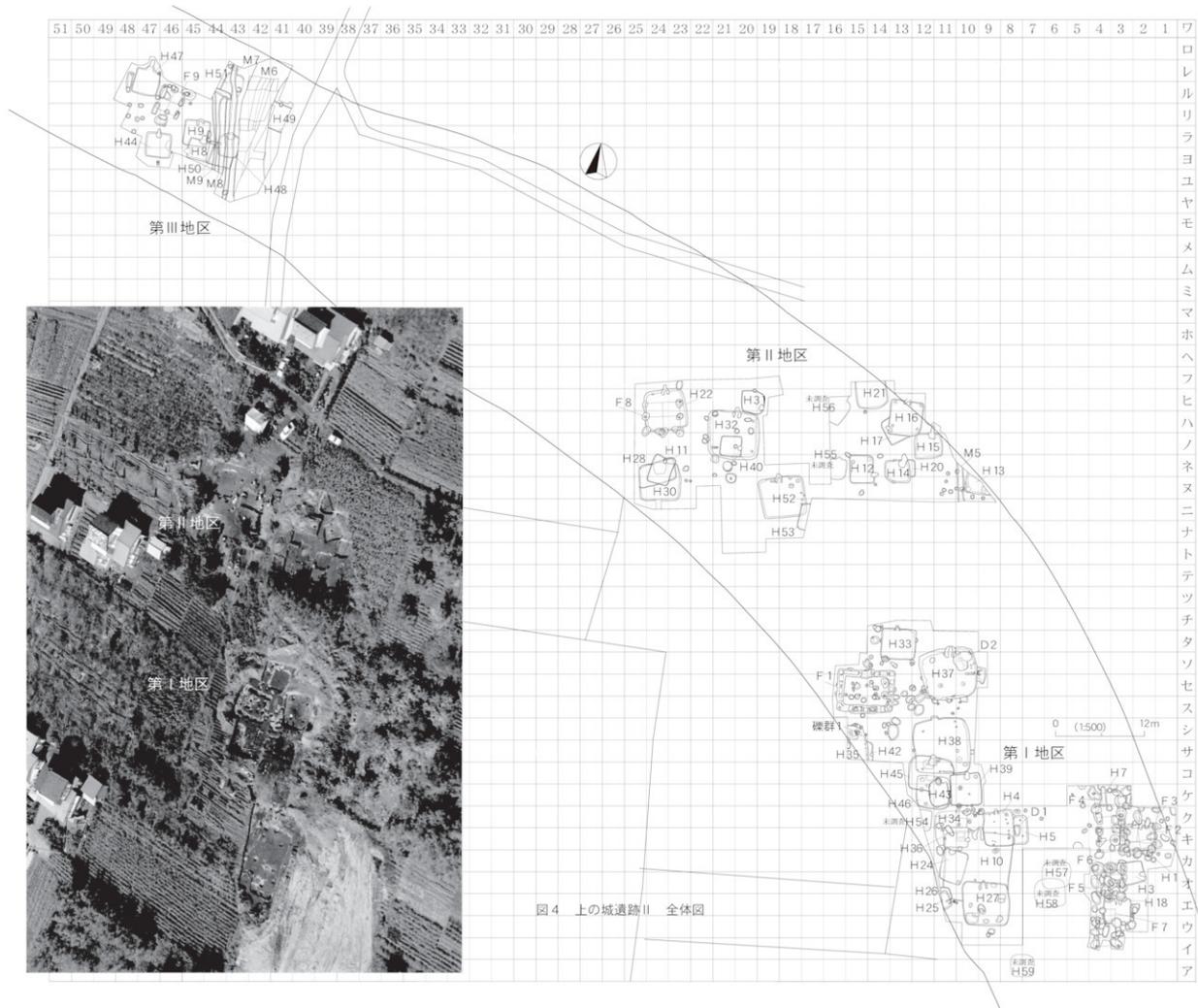


図4 上の城遺跡II 全体図

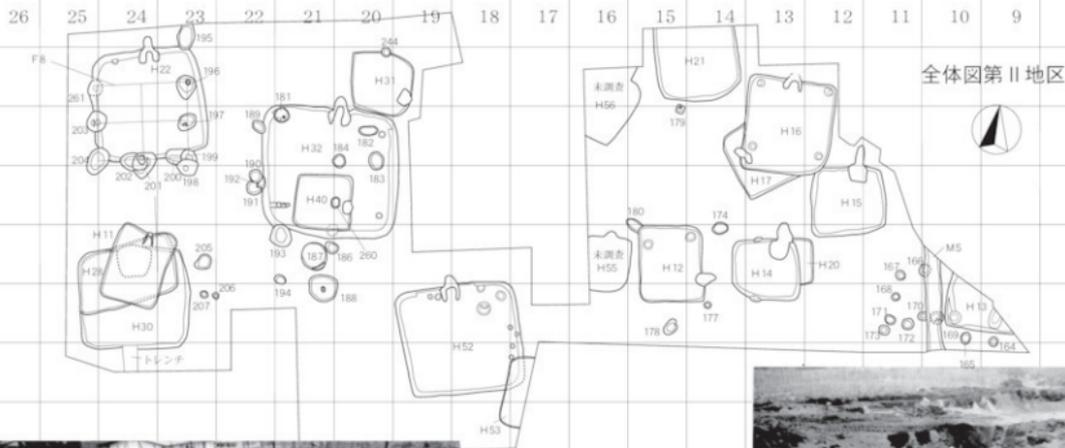
チ
タ
ソ
セ
ス
シ
サ
コ
ケ
ク
キ
カ
オ
エ
ウ
イ

18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



H10・H27・H4号住居を見る（北より）

図5 上の城遺跡Ⅱ 第I地区全体図



全体図第II地区



H32・H31号住居址 (東より)



H52号住居址調査風景 (西より)

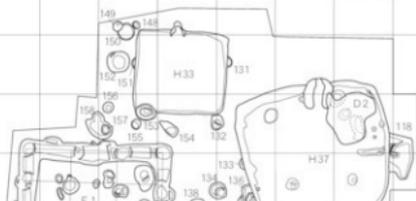


図6 上の城遺跡Ⅱ 第Ⅱ地区全体図 0 (1:250)

12m

へ
フ
ヒ
ハ
ノ
ネ
ヌ
ニ
ナ
ト
テ
ツ
チ
タ
ソ

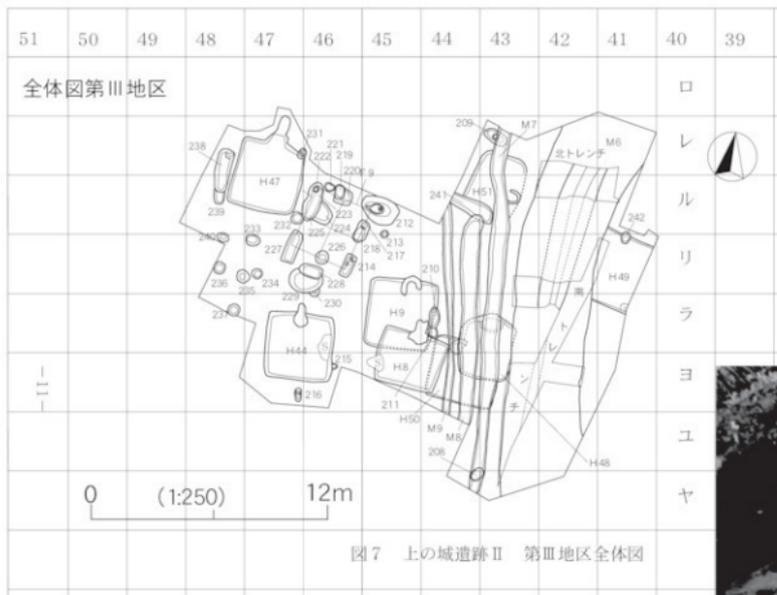
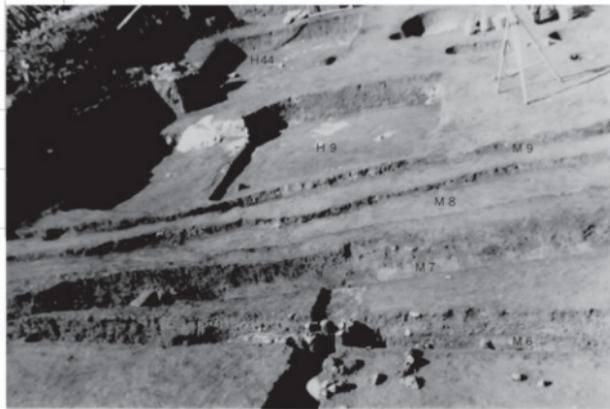


図7 上の城遺跡Ⅱ 第Ⅲ地区全体図



第Ⅲ地区 東より望む

第三章 遺構と遺物

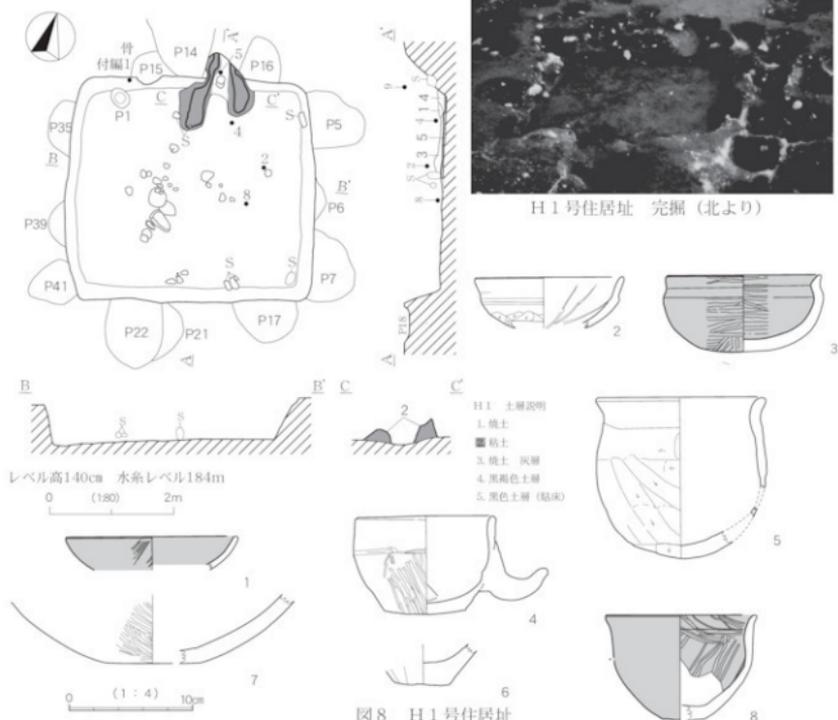
第1節 竪穴住居址

1. H1号住居址 (I地区)

ク2グリッドにありF2・F3・P15・P22・P41に切られる。規模は南北3.3m、東西3.66mを測り、形態は方形を呈し、壁高は66cmを測る。カマドは北壁に中央にある。カマドは袖の粘土・灰層が残っていた。長径36cmの穴が西北壁下にあるが深さは不明。

出土遺物には土師器・須恵器が2.3kgと骨がある。骨は上層なので本址に伴うかわからない。須恵器は甕の破片と武蔵甕片の0.9kgがあるが掘立柱建物址の混入品であろう。土師器は杯・把手付杯・小型甕・鉢・丸胴甕・長胴甕底部が実測された。刷毛目の甕片が少しある。

H 1



杯類は丸底を呈し、内面に暗文を持っている。4の杯は片側に把手が付く。口縁は横ナデ、内面見込はナデ、外面底部は雑なミガキが施される。食膳用ではないようだ。これらにより、古墳時代後期7世紀代の住居址であろうか。

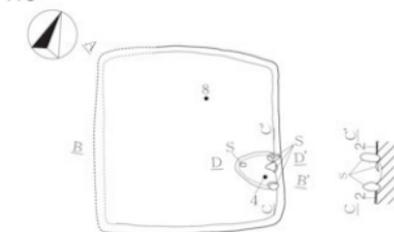
2. H3号住居址 (I地区)

カ2グリッドにあり、F5・F6を切る。規模は南北2.81m、東西2.64mとみられるが東壁は明確ではない。形態は方形を呈し、カマドは東壁の南半中央にある。カマドの袖は細長い川原石を立てている。カマド内には支脚石が残る。床は張床され、柱穴はない。

出土遺物には須恵器・土師器がある。2・3・11の須恵器は混入品である。12の土板は再加加工され端面が擦れている。土師器は杯・椀・皿・甕がある。土師器杯・椀は底部が回転糸切りされ、内面はミガキ・黒色処理の加工がされる。8の皿は回転糸切りされ、高台が貼付される。底には「盛」と墨書される。甕は口縁部「コ」字形を呈する武蔵甕である。9の杯は混入品である。

これらより、本住居址は平安時代で9世紀後半の住居址であろうか。土師器厚手甕の破片570gもある。

H3



H3号住居址 完掘 (東より)

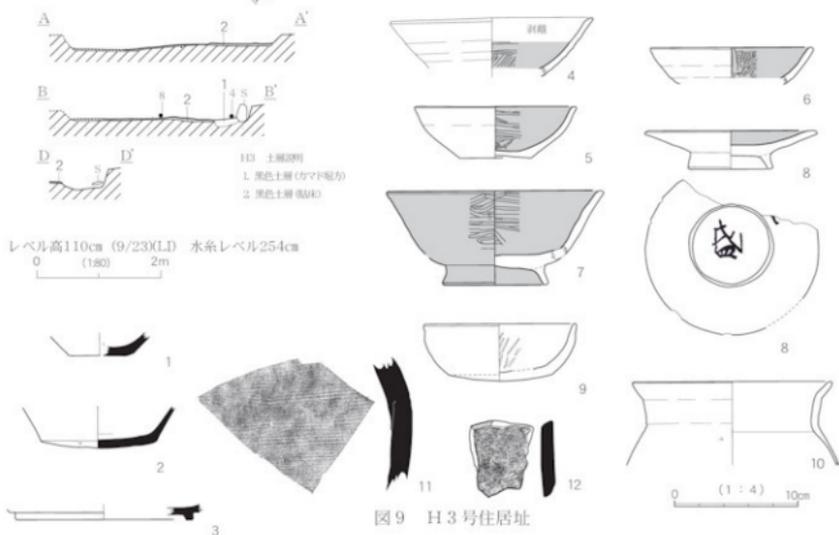
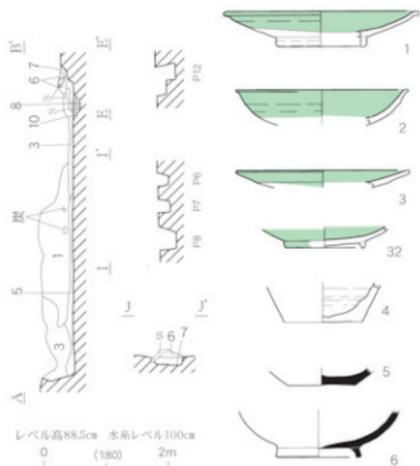
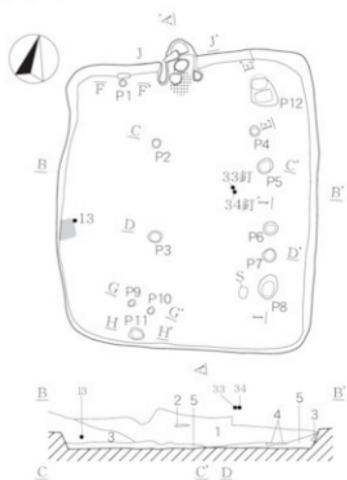


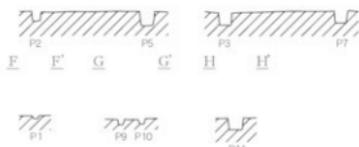
図9 H3号住居址

H4-1



H4 土層説明

1. 黒褐色土層
2. 赤土層
3. 赤色土層
4. 黄色砂礫
5. 赤褐色土層
6. 黒色焼土層
7. 粘土質焼土層
8. 焼土層



H4号住居址 カマド (南より)

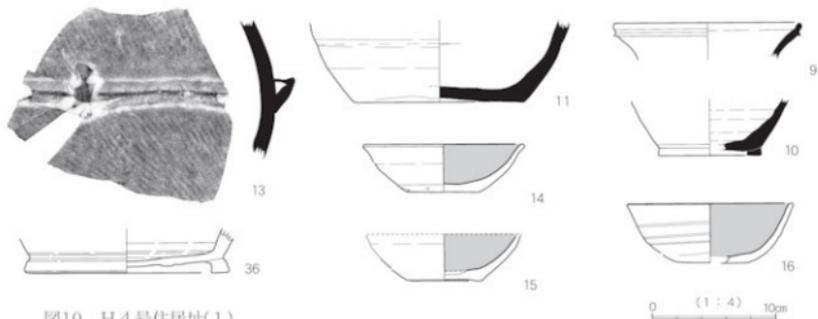


図10 H4号住居址(1)

H14-2

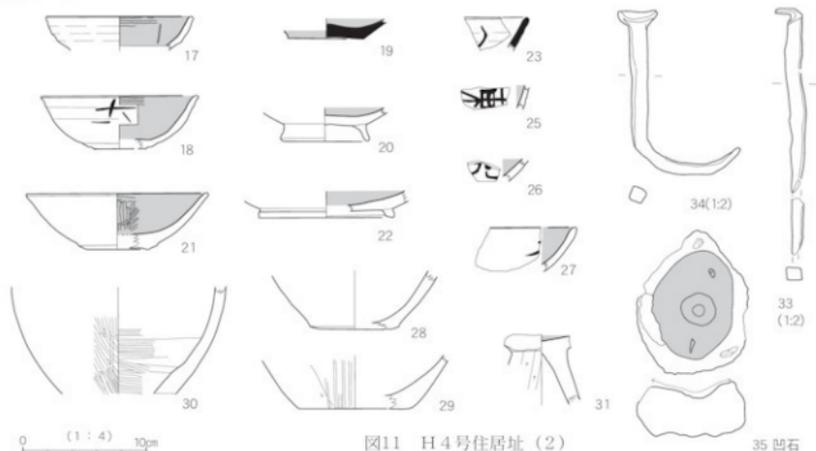


図11 H4号住居址(2)

35 凹石

3. H4号住居址(1地区)

ク8グリッドにあり、H5・H10を切る。規模は南北4.55m、東西4.0mの南北に長い長方形を呈す。壁高は27cmあり、北壁の中央にカマドを持つ。住居址の北東にあるP12は貯蔵穴とみられ、P1・P2・P3・P4・P6のピットは土層説明がなく性格はわからないが、位置から主柱穴の4本柱とみられる。

出土遺物は灰軸陶器・須恵器・土師器・角釘・凹石がある。灰軸陶器は、椀と皿があり、高台は短く内湾する。漬け懸けで施軸され、内面に重ね焼き痕を持つ。32の灰軸椀は、見込み部が摩耗し朱が付着し、転用碗であろう。須恵器椀は軟質で、底部回転系切りされ高台を貼付している。須恵器壺がある。土師器杯は口径・器高とも小さいもので、内面ミガキ・黒色処理、底部は回転系切りされる。土師器椀は高台が短く、内湾する。土師器の杯または椀の外面に墨書があり、18は「大(または太)一」・25は「東」と判読できる。23も「東」か。19は軟質の須恵器杯の内外が黒色である。杯類は破片が3.5kgあり、甕の実測個体はないがロク口甕、武蔵甕の両者の破片2kgがある。

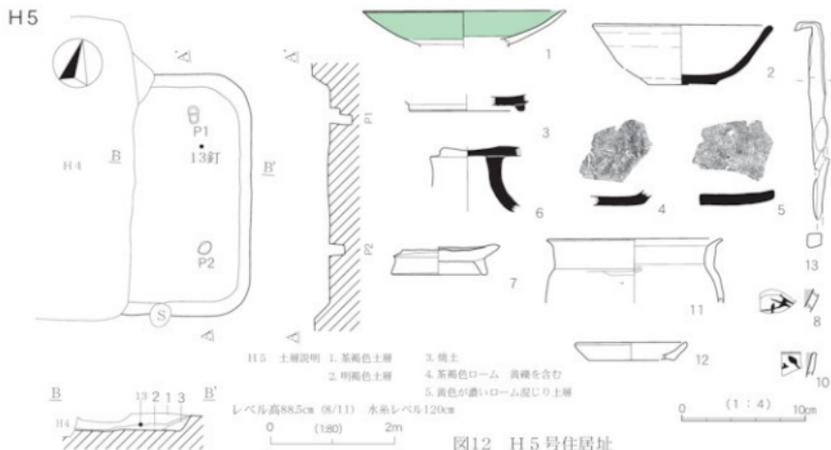
これらより本住居址の年代は平安時代9世紀後半であろうか。

4. H5号住居址(1地区)

ク7グリッドにあり、H4・D1に切られ、H10を切る。規模は南北3.51mを測り、東西はH4住に切られるため1.75mを調査する。壁高は29cm、カマドは北壁にあったがH4住に切られて東端部の痕跡を残すのみである。東側の床面に主柱穴2本が検出される。P1は径16cm、深さ40cm、P2は径20cm、深さ24cmを測る。

出土遺物は土器と鉄製角釘がある。8・10の墨書の土師器杯片、7の土師器椀、11の武蔵甕、2の須恵器杯は平安時代の所産である。3・4の須恵器高台付杯、6の須恵器高杯は奈良時代である。12は中世のかわらけで異なる時代の遺物を出土している。本住居址を切るH4号住は9世紀代であり、1・2・7・8・10・11はH4号住の遺物と同期とみられる。重複関係からは、奈良時代が本住居址の年代とみられる。4の須恵器杯底部はヘラの小口で調整されたため、刷毛目状になっている。5の底部は回転ヘラ削りされている。

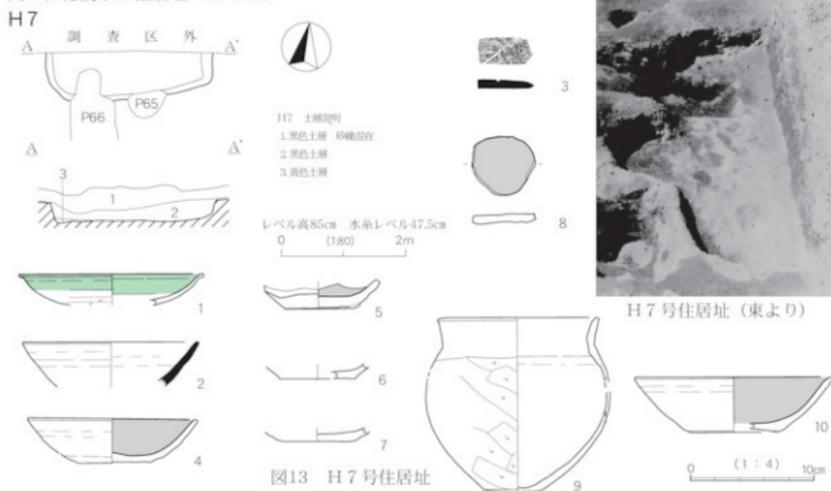
これらより本住居址は奈良時代とみられる。



5. H7号住居址 (1地区)

ケ3グリッドにあり、北の大半は調査区域外であり、南壁をP65・P66が切る。規模は南北0.7mを調査、東西は2.42mを測る。

出土遺物は、灰軸陶器・須恵器・土師器・土板がある。灰軸陶器皿(1)、須恵器杯(2)、土師器杯(6・7)、土師器椀(5・10)、須恵器土板(3)・土師器土板(8)がある。土師器杯は底部回転糸切り、内面ミガキ・黒色処理される。5は転用して使用したと思われる。これらより本址は平安時代9世紀後半の住居址であろう。



6. H8号住居址 (Ⅲ地区)

ラ44グリッドにあり、H9・H50・P211を切る。規模は南北2.45m、東西3.06mを測り、形態は長方形を呈す。壁高は34cmを測る。カマドを北壁中央に持ち、そのままよく残っている。カマドの幅は100cm(焚口幅44cm)、高さ26cm(焚口高さ10cm)、カマドの奥行60cmを測る。煙道の延長は60cmと長い。天井を礫で覆い蓋をしている。火床には軽石製の支脚石が立っている。支脚は西に寄っており、2個口のカマドとみられる。柱穴は見つかっていない。

出土遺物は須恵器・土師器・鉄製角釘・骨がある。破片は2.7kgあり、武蔵甕の破片が多い。図示した点数は多いが破片が大半である。遺物の出土のレベルは上層からであるため、本址に伴わないものもある。須恵器は蓋・杯・高台付杯・壺がある。1の須恵器杯蓋は、内面に「X」の刻書がされる。須恵器杯2・3は底部回転糸切りされ、底部は平底で底径の割合が大きく、口縁部は直線の外傾する。土師器の杯がなく、土師器の甕は6の武蔵甕である。口縁部形態は「く」字形を呈している。

これらより本住居址は奈良時代8世紀とみられる。



H8号住居址 完掘 (西より)

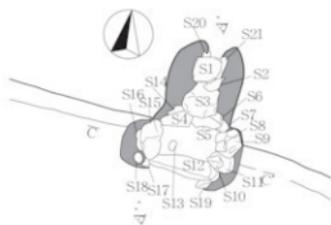
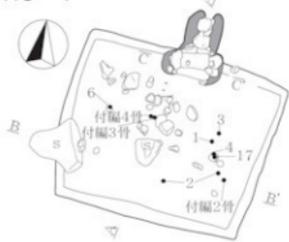


H8号住居址 カマド (南より)



H8号住居址カマド 煙道 (北より)

H8-1



レベル高89cm 水系レベル170m
0 (1:80) 2m

H8 土層説明
■ 黒灰色土層 粘土
■ 黄褐色土層 (粘土)

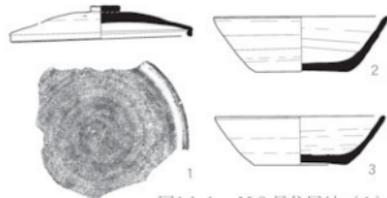
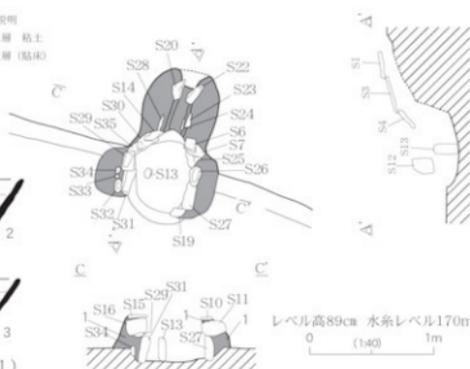
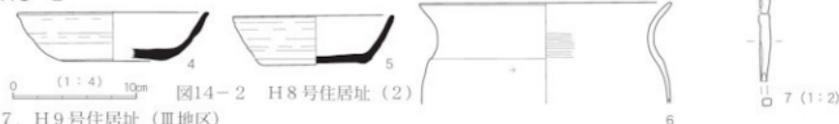


図14-1 H8号住居址 (1)



レベル高89cm 水系レベル170m
0 (1:40) 1m

H8-2

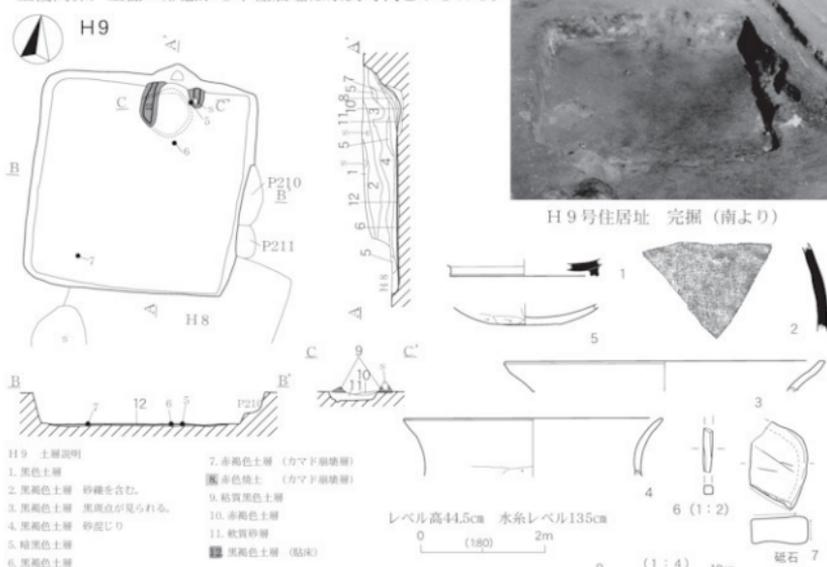


7. H9号住居 (Ⅲ地区)

リ44にあり、H8・P210・P211に切られる。規模は南北3.33m、東西3.21mを測り、形態は方形を呈す。壁残高は50cmを測る。カマドは北壁中央より、やや東に寄ってある。両袖の粘土がわずかに残る。柱穴は見つかっていない。

出土遺物には、須恵器・土師器・鉄製角釘・流紋岩製砥石がある。土師器の量は少なく、実測個体は小片である。破片は須恵器が0.11kg、土師器は武蔵甕の他に厚手の甕と合わせて0.69kgがある。土師器杯の破片はない。3の武蔵甕の口縁は小片ではあるが口縁部形態「く」字形である。

重複関係、土師器の形態から本住居は奈良時代とみられる。



H9号住居 完掘 (南より)

H9 土層説明

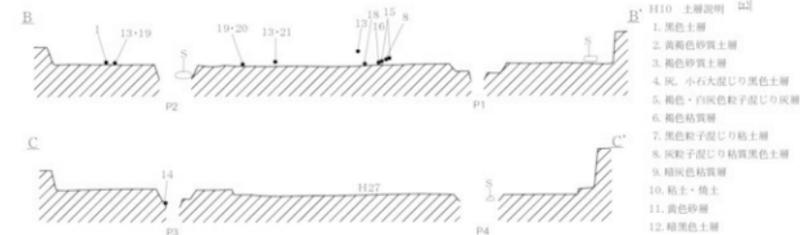
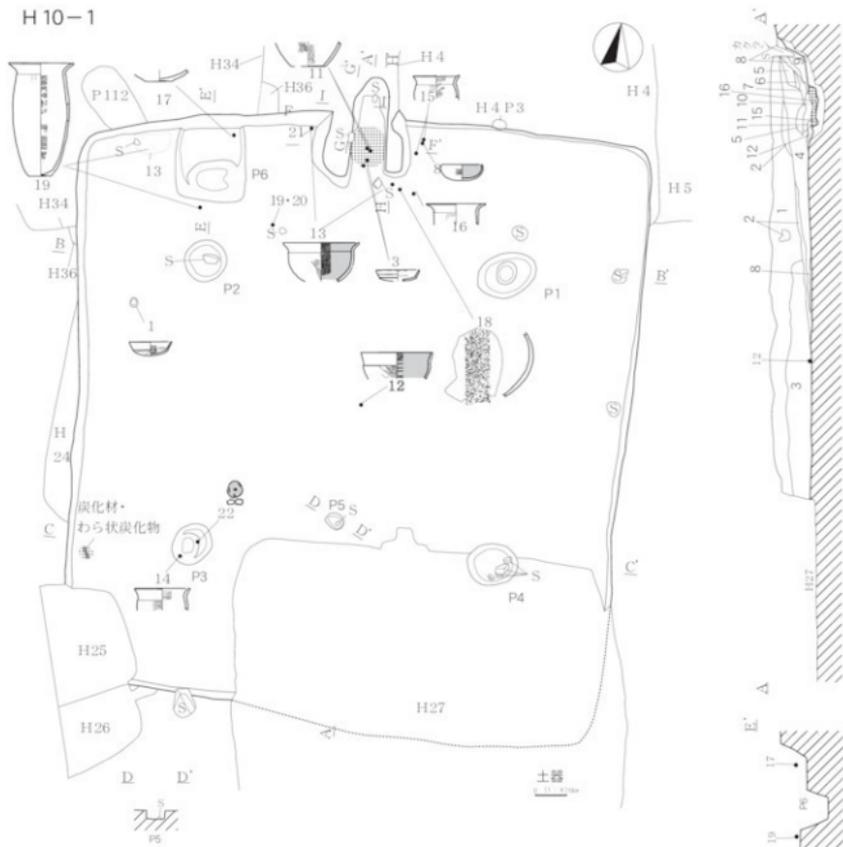
- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1. 黒色土層 | 7. 赤褐色土層 (カマド崩壊層) |
| 2. 黒褐色土層 砂礫を含む。 | 8. 赤褐色土層 (カマド崩壊層) |
| 3. 黒褐色土層 黒高点が見られる。 | 9. 粘質黒色土層 |
| 4. 黒褐色土層 砂塵じり | 10. 赤褐色土層 |
| 5. 粘質黒色土層 | 11. 軟質砂層 |
| 6. 黒褐色土層 | 12. 黒褐色土層 (粘土) |

8. H10号住居 (I地区)

キ8グリッドにあり、H4・H5・H24～H27・H34・H36・P112に切られ、P247を切る。ことにH27に切られ南東は床面まで壊されている。規模は南北9.2m、東西8.68mを測る大型住居地で、形態は方形を呈す。壁残高は65cmある。カマドは北壁中央にあり、袖・火床・煙道を残している。カマドは焼土がよく残り、焚口幅60cm、火床の奥行は70cmを測る。右袖は芯材に加工した軽石2個を入れている。

出土遺物には土師器・軽石製の紡錘車・鉄の増場の破片(20・21)がある。須恵器はない。土師器は杯が10個体実測され、いずれも丸底を呈す。実測個体の他に、土師器杯の破片が1.65kgある。1～5の杯は底部がヘラ削りされ、外稜をもって口縁は外傾し、口縁外面は横ナデ。2の内面は横ナデ後ミガキ調整される。4は内面と口縁外縁は横ナデ後、内外に塗の黒色処理がされる。5は丸底で口縁が内傾し、ミガキ調整後黒色処理される。7は浅い丸底の底部から外稜をもって口縁が大きく外反し開く。内面は横ナデ後ミガキが施され、塗の黒色処理がなされる。8は杯全体が内湾する器形で、内面ミガキ黒色処理、外面は底部ヘラ削り後、「×」の刻書がなされる。9・10の杯は丸底から口縁が外反気味にそのまま開き、内外ミガキ調整され、10の内面は黒色処理される。

H10-1



レベル高100cm 水系レベル200cm

図16 H10号住居址(1)

- H10 土層説明
1. 黒色土層
 2. 黄褐色砂質土層
 3. 褐色砂質土層
 4. 灰・小石大層じり黒色土層
 5. 褐色・白灰色粒子じり灰層
 6. 褐色粘質層
 7. 黒色粒子じり粘土層
 8. 灰粒子じり粘質黒色土層
 9. 粘灰色粘質層
 10. 粘土・焼土
 11. 黄色砂層
 12. 暗黒色土層
 13. 白灰色粘土層 粘質程度じりみつでない。
 14. 黄色粘質程度じり層
 - 15. 黄色灰層 小礫、白灰色・黒色土層じり。(焼土)
 16. (カマド方位)
 - 8' 12層崩壊層

H 10-2

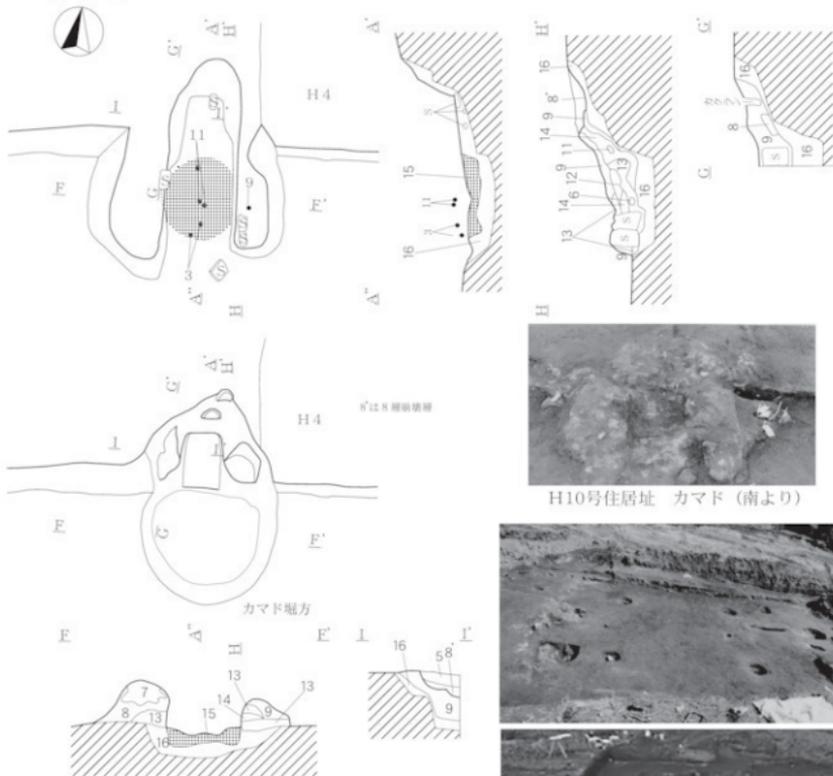


図17 H10号住居址 (2)

レベル高100cm 水準レベル200cm

0 (1:40) 1m

杯形土器の器形は5種ある。

11は甕、12・13は鉢で内外ミガキ処理され、内面は黒色処理される。14・15は小型の甕、17は甕の底部で内面ミガキ調整される。18は丸胴甕で内外に刷毛目調整される。16・19は長胴甕で、19の外表面はヘラナデである。

20・21の埴塼の破片は本住居址が鉄製品の生産にかかわること示している。

これらより本住居址の時期は古墳時代後期7世紀代であろう。

H 10-3

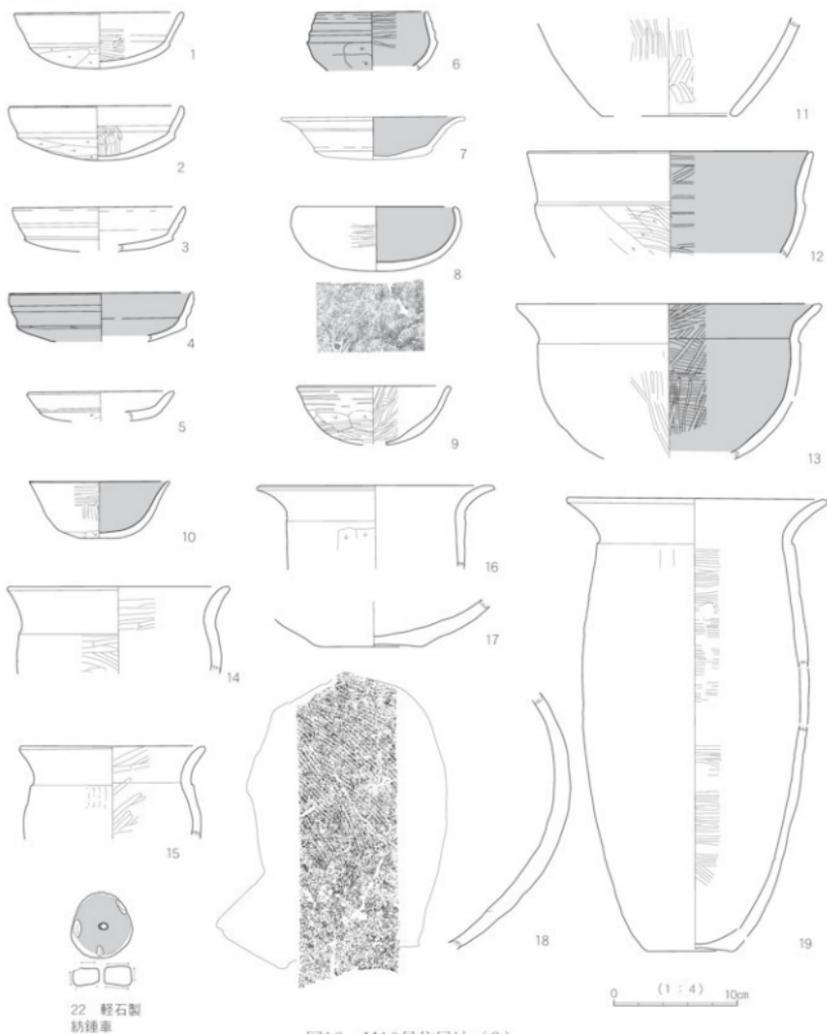
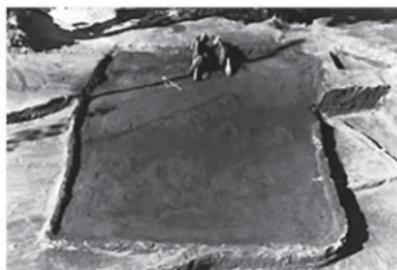


図18 H10号住居址(3)

9. H11号住居址 (第II地区)

ネ23グリッドにあり、H28・H30を切る。規模は南北3.57m、東西2.76mの長方形を呈すると思われる。南側は他の住居址と重複しているため明確ではない。主軸はN-12°-Eを指し、壁高は20cmを測る。カマドは北壁中央にあり、切石を馬蹄形に袖材として並べカマドを構築している。煙道の一部が残り、カマド中央より北に支脚石を置いている。



H11号住居址 完掘 (南より)

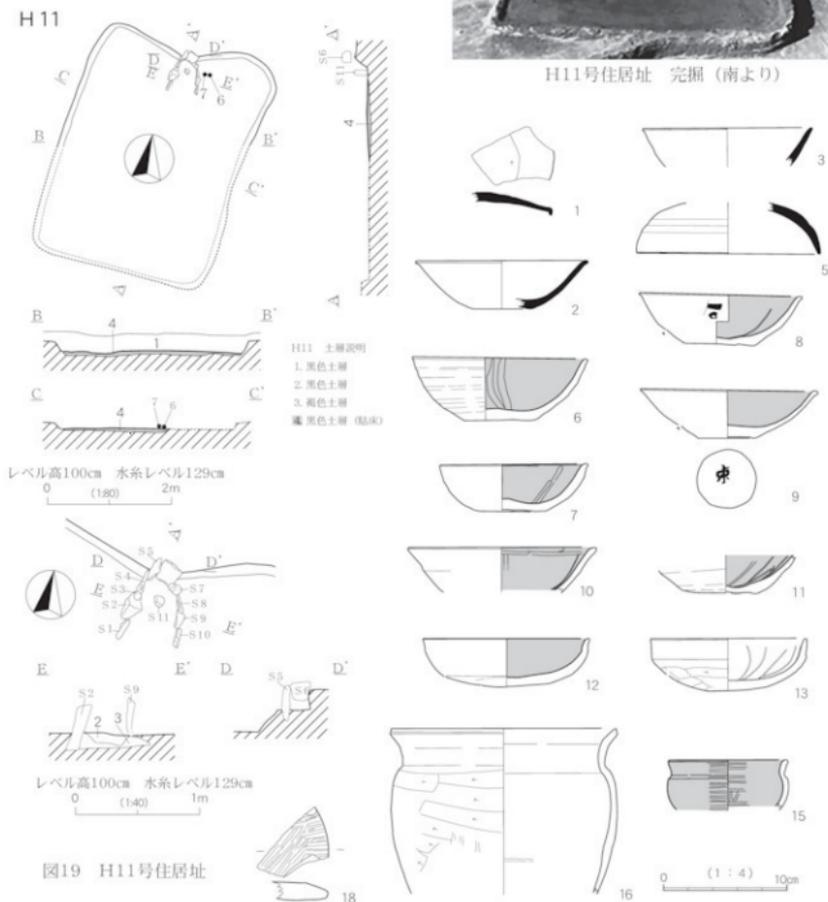


図19 H11号住居址

カマドの規模は外側で長さ74cm、幅50cmを測る。

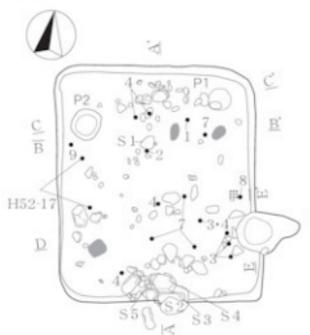
出土遺物には須恵器と土師器がある。重複するH28・H30の遺物を含んでいる。本住居址に該当する遺物は6～11の土師器杯と椀、土師器甕である。土師器杯は底部径が口径に比べ小さくなり、内面黒色処理され暗文を持つ。底部は回転糸切りされる。土師器甕は武蔵甕で口縁部形態が「コ」字形を呈している。2の須恵器杯は軟質であり、土師器の杯と共通の器形である。判読不明ながら墨書が土師器杯8・9にみられる。12・13の杯はH30号住居址のものであろう。

軟質の須恵器杯、土師器杯の底部は回転糸切りされ、底径が小さい。武蔵甕の口縁部形は「コ」字形である形であることから、本住居址は平安時代9世紀後半であろうか。

10. H12号住居址 (第Ⅱ地区)

ネ14グリッドにあり、P180を切る。規模は南北3.63m、東西3.07mと南北に長い長方形で、隅は比較的丸い。カマドは東壁の中央より南にあり、カマドの主軸はN-80°-Eを指す。

北の床面に径48cm、深さ16cmのピットP1・P2がある。焼土・灰が床面を覆っていることから焼失家屋とみられる。遺物の高さは土層断面に載るもののみデータが残る。他は出土地点のみで高さ不明。



レベル高100cm 水系レベル120cm
0 (180) 2m

H12



- H12 土層説明
1. 小磯黄色土層
2. 黒色土層 小磯を含む。
3. 暗黒色土層
4. 灰層
5. 焼土
6. 黄褐色土層

図20 H12号住居址

0 (1:4) 10cm

出土遺物には土師器があり、須恵器は杯蓋の破片がわずかにある。土師器は手捏、鉢、壺、甕、長胴甕がある。1の土師器手捏は高さ4.2cmを測り、外面はミガキ、内面はナデ調整である。土師器鉢は丸底で内面はミガキ・黒色処理される。外面はヘラ削り後ミガキが施される。3は壺で、内面は口縁と胴部はナデ調整である。4は壺で口縁にミガキが施される。5・7は口縁部形が「く」字形を呈するである。

これらより、古墳時代後期の末7世紀後半の住居址とみられる。

11. H13号住居址 (第II地区)

メ9グリッドにあり、北側の大半は調査区域外である。規模は南北2.4mを調査し、東西は3.3mを測る。形態は長方形または方形を呈すとみられ、壁残高は22cmを測る。周溝が西壁と南壁下にある。ピットは南壁下にありP1は径60cmの円形で深さ28cm、P2の長径は区域外で不明であるが短径は64cm、深さ28cmを測る。カマドは検出されていない。区域外にあるとみられる。

出土遺物には須恵器・土師器と鉄製の紡錘車がある。2の須恵器壺、4の須恵器蓋は前代のもので、混入品である。土師器杯6・7と碗の8は内面がナデ調整のみで、ミガキ調整されていない。9・10は碗はミガキ・黒色処理される。11の土師器杯も混入品である。土師器甕は厚手のロクロ甕で、胴下部はヘラ削り調整される。13の土師器甕は底部とみられ、底部外面は回転糸切りされ、内面にロクロ痕をのこす。鉄製紡錘車の円板は径5.4cmを測る。

これらより本住居址は平安時代であろう。

H 13

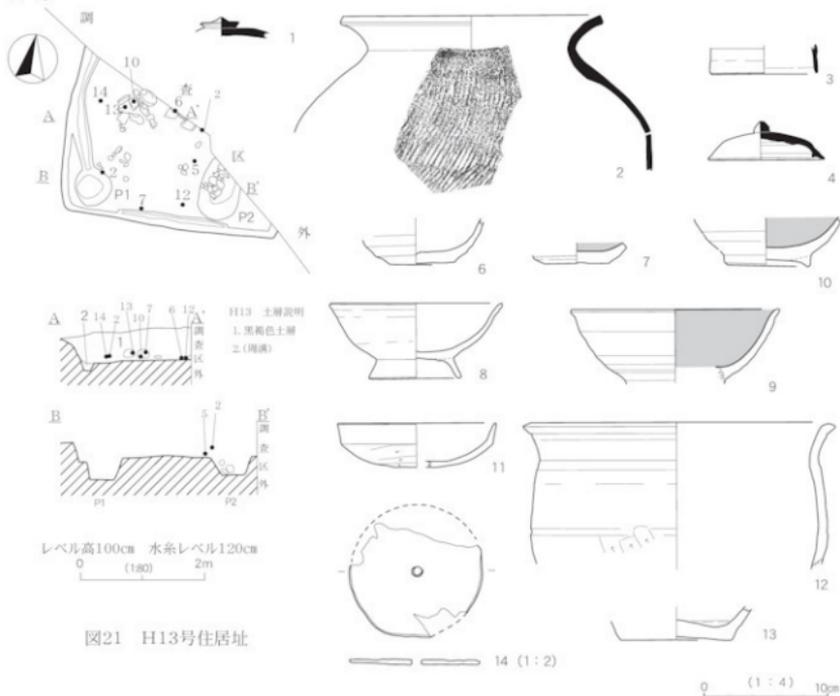


図21 H13号住居址

H 14・20

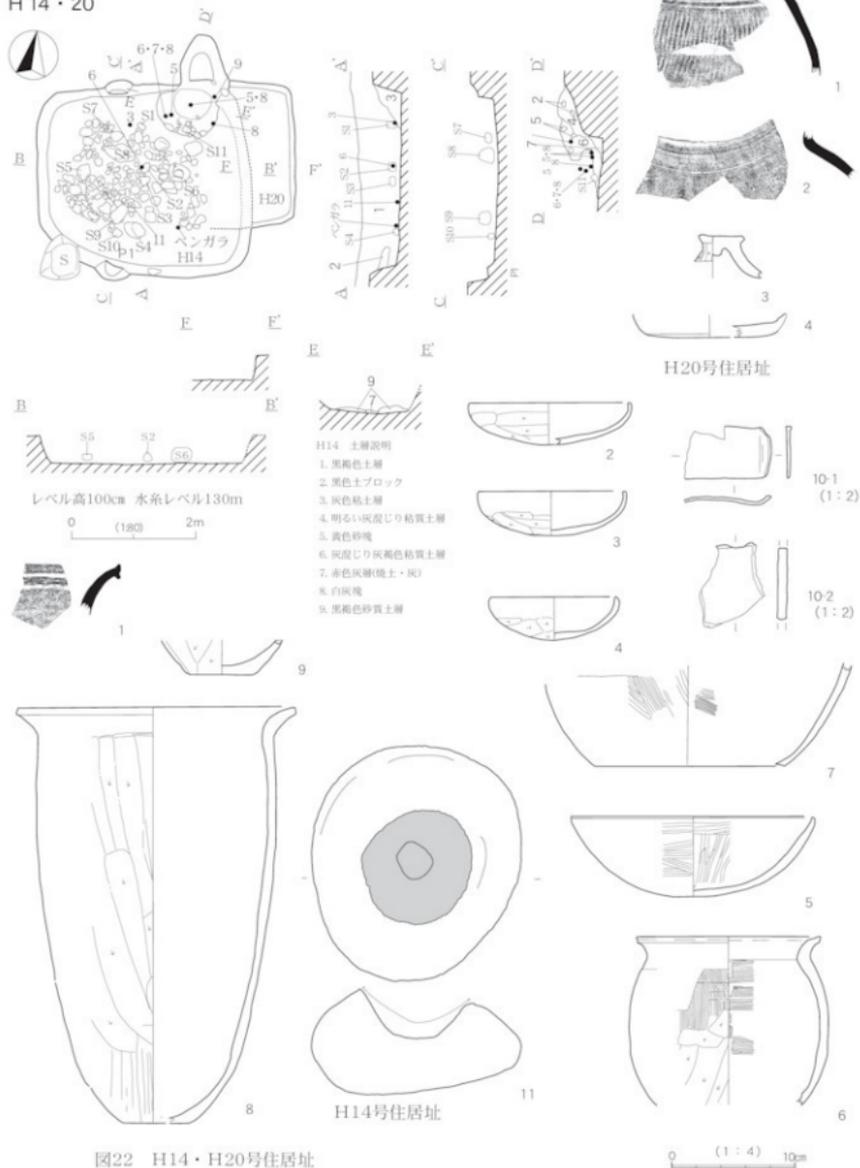


図22 H14・H20号住居址

12. H14・20号住居址（第Ⅱ地区）

ネ13グリッドにあり、発掘調査時において、H14号住居址はH20号住居址を切るとされている。

H14号住居址の規模は南北2.84m、東西3.13m、壁高50cmを測り、東西に長い隅丸方形。

H20号住居址はネ12グリッドにあり、H14号住居址に切られ、東壁側が残し、規模は南北2.16m、東西の残存0.92mとしている。壁高は49cmを測る。遺物からはH20とH14号住居址では時間差はH20号の遺物が新しく看取される。また、北壁の東端にあるカマドは、カマドの軸がH14号住居址とは不整合である。床面の高さはH14と20号住居でほぼ同じであり、これらのことから、新旧は逆転し、H20号住居址が切るのでなくろうか。カマドはH20号住居のカマドの可能性が多大である。発掘調査の際は2棟同時に掘下げており、新旧は検討されていない。H20号住居址は礫の範囲を含む東西3.93mほどの住居址とみられる。H14号住居址は、外周が残る程度で、Cエレベーションの北端の僅かな落ち込みがカマドの煙道となるかと思われる。Aセクションの北壁下にある灰白色粘土がH14号のカマドの残骸かとも思われる。

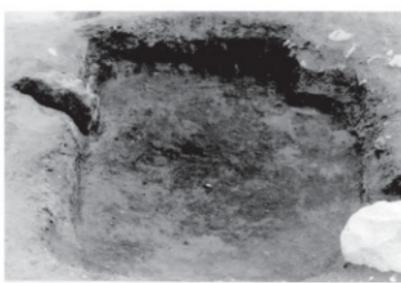
H14号住居址と注記された遺物には、須恵器・土師器、鉄製の鎌、凹石がある。2～4の土師器杯は薄手で、器高の低い小型のものである。外面は口縁横ナデ後、底部が手持ちヘラ削りされ丸底。内面はナデである。5の鉢は大振り、内側のミガキは放射状で暗文様である。6はハケ甕で、外面に縦方向のハケ目を残す。7は丸胴甕の胴下部で内外にハケ目が残る。8・9は長胴甕で、8の口縁は短く外向気味に折れている。胴部外面は縦方向にヘラ削りされる。

H20号住居址の出土遺物は須恵器・土師器が半々で1.2kgある。須恵器はいずれも胴部片で、拓本に示した1は甕で外面に叩きが施される。2は壺で横ナデされ、細い沈線がめぐる。土師器杯は平底で、手持ちヘラ削りされる。高杯の脚は小型品で、裾部外反度が強い。脚部外面はヘラ削り、杯部内面はミガキ・黒色処理される。4の土師器杯は平底ぎみで、底部外面はヘラ削りされる。

調査時のまま遺構・遺物を報告し、遺物は古墳時代後期末7世紀後半であろうことから、H14・H20号住居址の2棟の遺物とした。



H14号住居址 礫出土状況（東より）



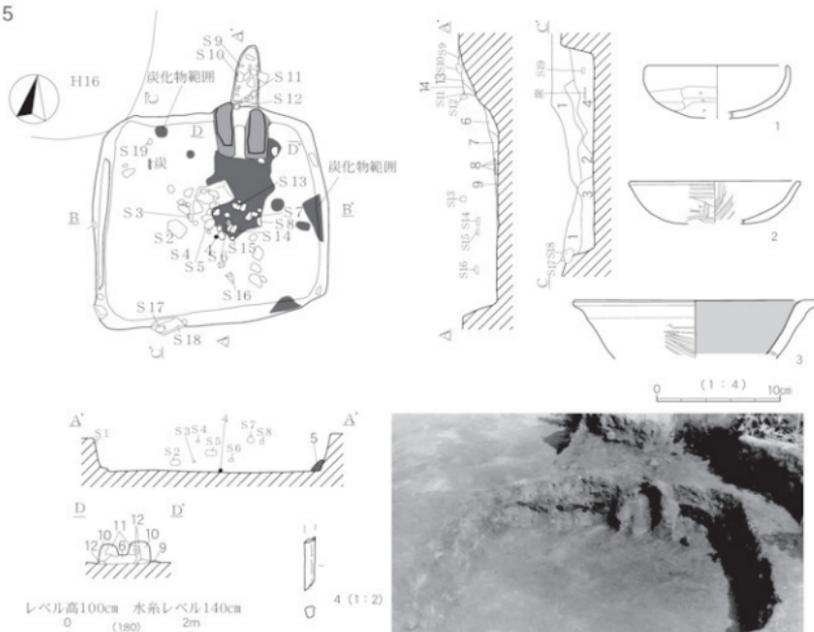
H20号住居址 完掘（西より）

13. H15号住居址（第Ⅱ地区）

ノ11グリッドにあり、H16に北西隅の壁をわずかに切られる。規模は南北3.08m、東西3.4mと東西に長い長方形を呈す。壁高は59cmを測る。カマドは北壁中央より東に寄り、煙道と袖の粘土が残る、火床には灰がある。炭化物範囲がカマドの前面、壁際にある。礫群は住居址中央付近にあるが浮いている。柱穴は検出されていない。

出土遺物には土師器と鉄製角軸が出土する。実測個体は破片であり、そのほかの破片はあわせて500gで、土器量がきわめて少ない。1の土師器杯は丸底で、底部ヘラ削りされる。内面ナデである。2の杯は丸底で内外ミガキ調整される。3は厚手の鉢で、内外ミガキ調整され、内面は黒色処理される。

これらより本住居址は古墳時代後期であろう。



H15 土層説明

1. 黄褐色土皮じりの黒色土層
2. 黒色土層
3. 暗褐色土層
4. 褐色砂層
5. 炭化物層
6. 赤褐色粘質土層
7. 粘土を含む灰層
8. 白色灰層
9. 桃色灰層
10. 灰褐色粘質土層
11. 桃色粘質土層
12. 黒褐色粘質土層
13. 黄褐色土層
14. 褐色土層

図23 H15号住居址

H15号住居址 完掘(南より)

14. H16号住居址(第Ⅱ地区)

H12グリッドにあり、H19号住居址に切られ、H15・H17号住居址を切る。H19号住居址は調査時全体図では南東に重なって記録されるが、図面に合わせるポイントがなく、正確な位置に落とせない。あることは確かだが図面にできなかった。本址の南東にカマドとメモ書きされた礫を伴う切り込みがある。H19号住居址に関連がするのであろうか推測の域を出ない。

H16号住居址の規模は南北4.57m、東西4.24mを測り、隅丸方形を呈する。壁高は57cmを測る。住居址の四隅に柱穴を持っている。ほぼ円形を呈し、径40cm、深さ56・80cmを測る。

出土遺物には須恵器・土師器がある。須恵器壺は、口縁外面に縦の櫛歯の刺突がめぐらされている。胴部は叩きが施される。土師器杯は2種あり、底部丸底の2と、底部回転糸切りの3がある。3は後出の平安時代のもので、本住居址には伴わない。土師器甕は丸胴甕と長胴甕がある。4の長胴甕は薄手で、口縁部が長く、口縁部の形態が「く」字形の武蔵甕に近い。胴部外面のヘラ削りは縦方向である。

土師器長胴甕の破片は1,060g、丸胴甕の破片は750gある。

これらより、古墳時代後期末7世紀後半に本住居址は位置づけられよう。

H 16

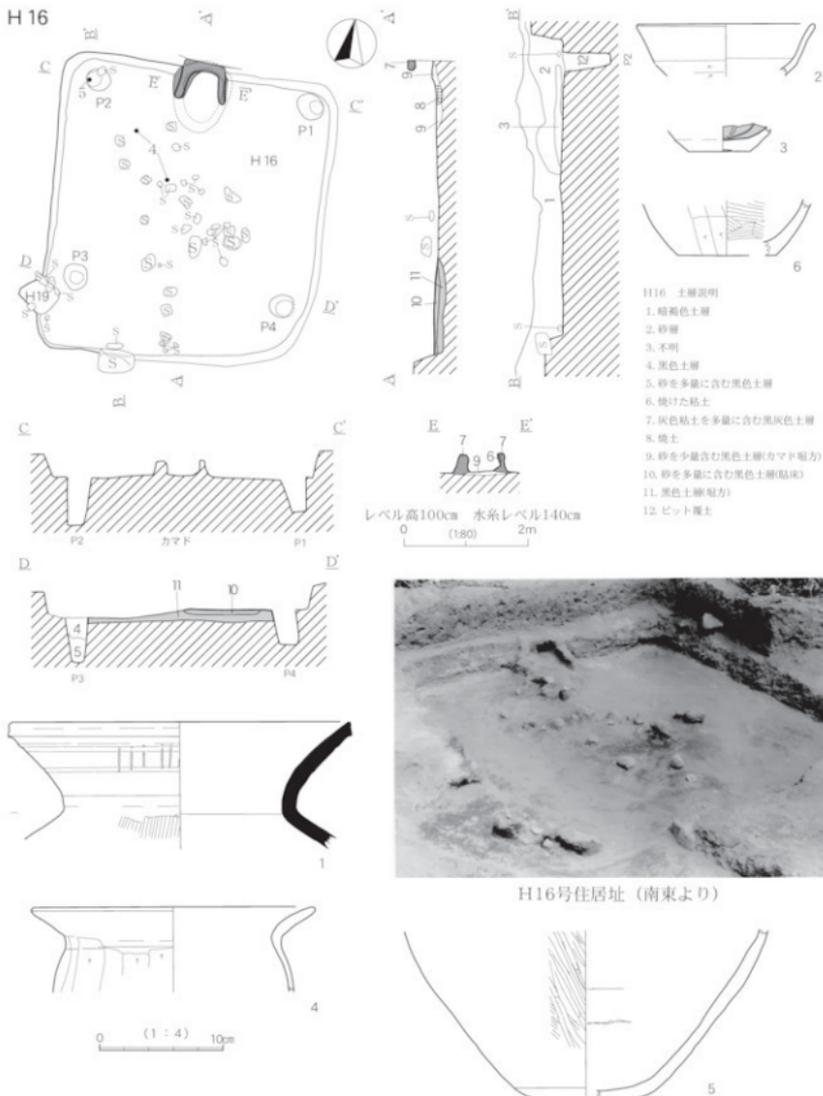


図24 H16号住居址

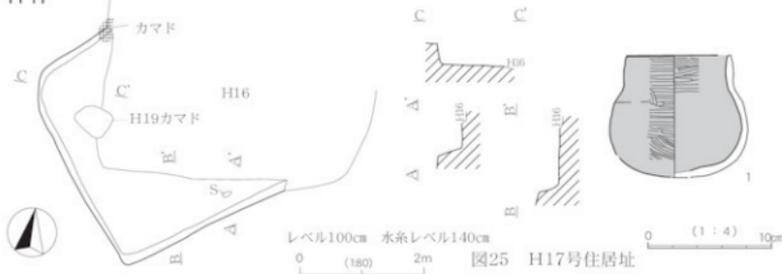
15. H17号住居址 (第II地区)

ハ14グリッドにあり、H16・H19号住居址に切れ、西壁側がわずかに残るが、大半を、H16号住居址に壊されている。規模は南北3.29mを測り、東西は2.36mが残っていた。壁高は43cmを測る。カマドは北壁にあり、わずかに西端の粘土の痕跡がある。柱穴は見つかっていない。

実測出土遺物は土師器壺がある。破片は土師器長胴甕と丸胴甕の破片が660gある。土師器壺の器形は口縁が直立し、胴部・底部が丸みを帯びる。外面全体と、内面口縁がミガキ調整される。塗の黒色処理がなされたとみられるが、薄くなっている。

これらにより本住居址は古墳時代後期であろう。

H 17



16. H18号住居址 (第I地区)

エ3グリッドにあり、F5～F7号掘立建物址、P55・P56・P58に切れ、P90を切る。規模は南北3.14m、東西3.53mを測り、形態は方形である。カマドは北壁中央にあり、柱穴は見つかっていない。礎は住居址の中央に2.4mほどの方形範囲に集中している。遺物は礫群の上から出土している。

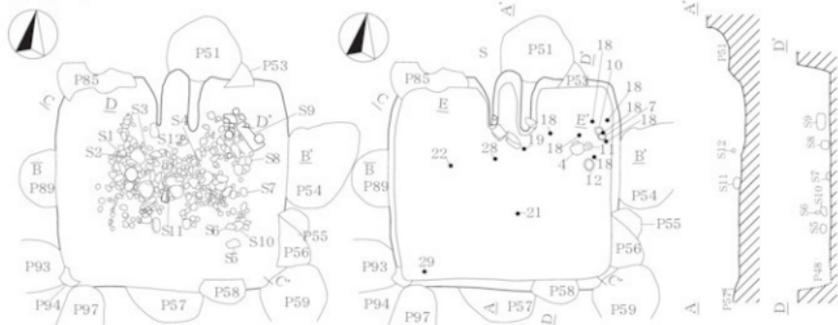
土器が多量に出土している、実測個体が3kg、破片6kgで合計9kgがある。出土遺物は須恵器・土師器、鉄製の刀子と混入品の寛永通宝がある。1の灰軸壺の口縁も重複する遺構の遺物とみられる。4の須恵器短頸壺はほぼ方形で、口縁の一部を欠く。胴下部にある長さ2cmほどの穴状の割れは調査時ではなく以前とみられる。器高11.2cm、丸底である。5の須恵器壺は丸底気味で後代とみられ、6の高台付杯は小片であり、混入品であろうか。7は土師器小壺で器高4.6cm、口径6.5cmを測る。底部は丸底、口縁は内外横ナデ、内面はナデ調整され黒色を帯びる。口縁に対になって径4mmの円孔がある。10・11の土師器杯は完形品で、10は丸底で口縁は外稜をもって外反する。内面には放射状の暗文が施される。内外にわずかに黒色処理の痕跡がある。11は器形のゆがみが著しい杯で、丸底、口縁は横ナデされ外反する。内面の口縁は横ナデされ、横ナデの甘い見込み部には2本平行の刻み沈線が風車状にのこっている。意図的か未調整なのか判断がつかない。12の鉢は赤褐色を呈し、薄手でゆがむ。底部はヘラ削りされ、口縁は内外横ナデされる。土師器甕は22・23が武蔵甕で、口縁部形態が「く」字形を呈する。18・21は長胴甕で、胴部の器内は薄く外面は縦方向にヘラ削りされる。胎土に荒い石英粒を含んでいる。19・20は器内の厚い長胴甕である。15は底部に6～7個の穿孔をした多孔の甕である。

本址と重複する掘立建物址の出土遺物とみられる混入品が多いが、7・10～12・18などから古墳時代後期の住居址とみられる。

17. H19号住居址 (II地区)

ハ13グリッドにおいて、昭和49年の概報の全体図にH16号住居と重なるH19号住居址が載っている。概報にはカマドと方形の住居址の一角の平面図が描かれている。原因には方位と位置を示すポイントの記録がなく、H19号住居址合わせることができない。ここではH16号住居址と重複するH19号住居址があったことを報告する。

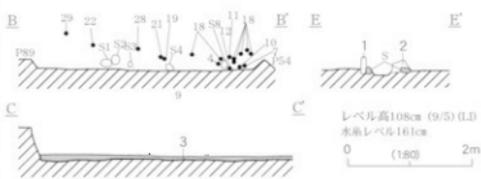
H 18-1



H18号住居址 (南より)



H18号住居址 遺物出土状況

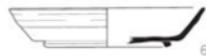
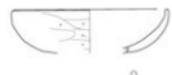
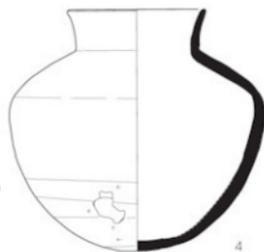
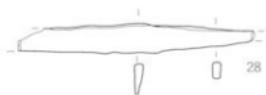


H18 土曜図

1. 砂礫を利用したカマド跡

2. 砂礫を利用したカマド

藁炭の土層 (黒色)



0 (1:4) 10cm

図26 H18号住居址 (1)

H 18-2

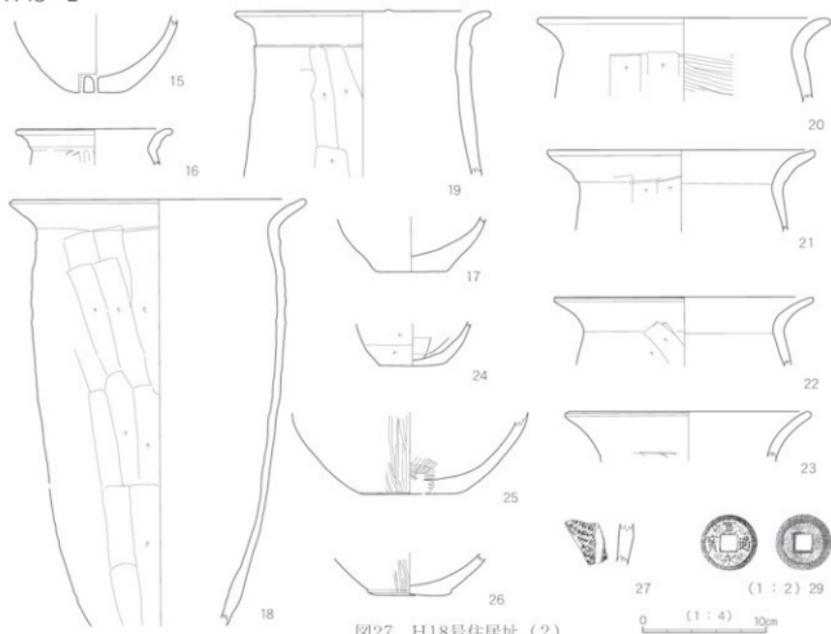


図27 H18号住居址 (2)

H21号住居址 (第Ⅱ地区)

フ14グリッドにあり、北側は調査区域外のため一部未調査である。南北は3.54mを調査し、東西は3.87mを測る。カマドの前壊土とみられる範囲が北にあるので、北側にカマドがあったものと推測される。形態は隅丸長方形を呈すのであろうか。壁高は66cmを測る。焼土・灰の範囲があり、東壁際は床より16cm、中央付近は床面近くに焼土・灰の範囲があり、また中央には炭化材が残っている。廃絶後時間があって家屋が焼失したとみられる。

出土遺物には須恵器・土師器がある。須恵器壺の肩片で外面に叩きが施される。須恵器の杯は丸底で回転ヘラ切りされ、底部に「×」が刻書される。土師器杯は丸底で、外稜をもって口縁が立ち上がる。内外ミガキ黒色処理される。4の鉢は平底であるが、手持ちヘラ削りされている。

これらより本住居址の時代を古墳時代後期7世紀とされようか。

H21-1



図28 H21号住居址 (1)

H21-2

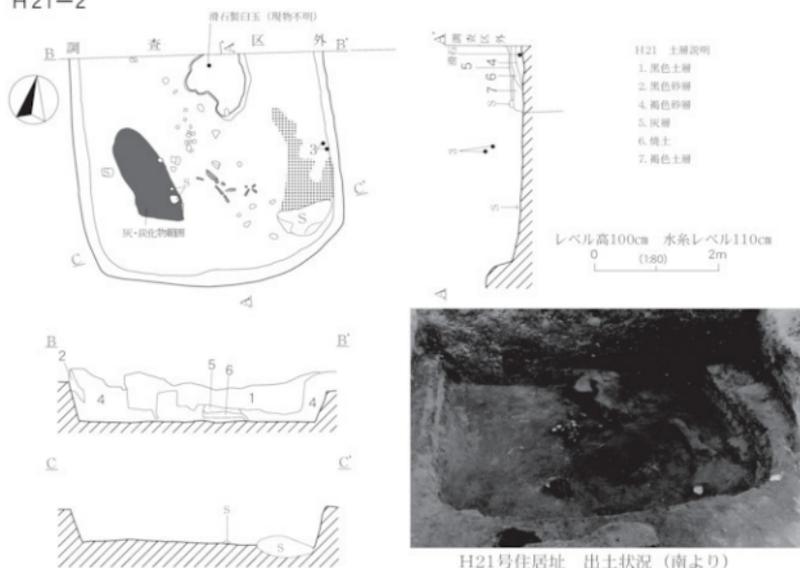


図29 H21号住居址 (2)

19. H22号住居址 (第Ⅱ地区)

H23グリッドにあり、F 8、P 200、P 202に切られる。規模は南北5.04m、東西5.16mを測り、方形を呈する。壁高は67cmを測る。カマドを北壁中央に持ち、わずかな袖と煙道が残っている。主柱穴は見つかっていない。床面は貼床である。住居址内のF 8掘立柱建物址は見落とされたようである。

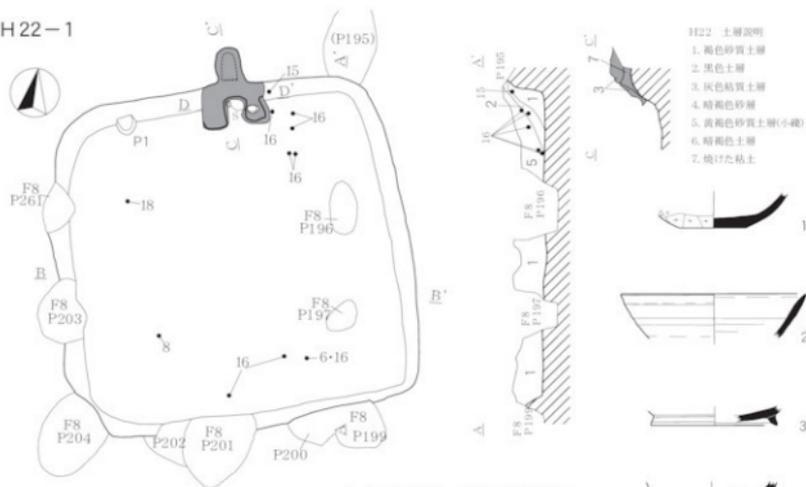
出土遺物には土師器・須恵器がある。須恵器壺5は小型品で、口縁が直立し、肩部がわずかに張る。口縁は内外横ナデ、内面はナデである。1は5の底部であろうか。平底で、底部・胴下部ヘラ削りされる。3・4は須恵器高台付杯の破片である。土師器は甗、杯、台付甕、長胴甕がある。6土師器甗は鉢形形の丸底部に多孔をあけたものである。口縁は内外横ナデされ、外面胴部はヘラ削りが施される。穿孔は内面からなされ、外面に粘土の縁がそのまま残る。内面はナデである。8の把手は甗であろうか。土師器杯9~11は薄手で丸底、器高が比較的低い。口縁の内傾部が短く横ナデされ、底部がヘラ削りされる。12の杯は丸底から外稜をもって短く外反する。器高が低いものである。15は小型の長胴甕である。口縁部が短く外反し、胴部はヘラ削り後、ミガキ調整される。16は長胴甕で、口縁部形態は「く」字形を呈する。胴部外面のヘラ削りはいくらか斜めに施される。底部は緩やかな稜を持つ丸底である。13の台付甕は脚の裾が強く外反している。胴部内面はナデ、裾部外面はヘラ削りされる。

これより本住居址は古墳時代後期の末葉7世紀後半といえようか。



H22号住居址 完掘 (南より)

H22-1



レベル高100cm 水系レベル120cm

0 (1.80) 2m

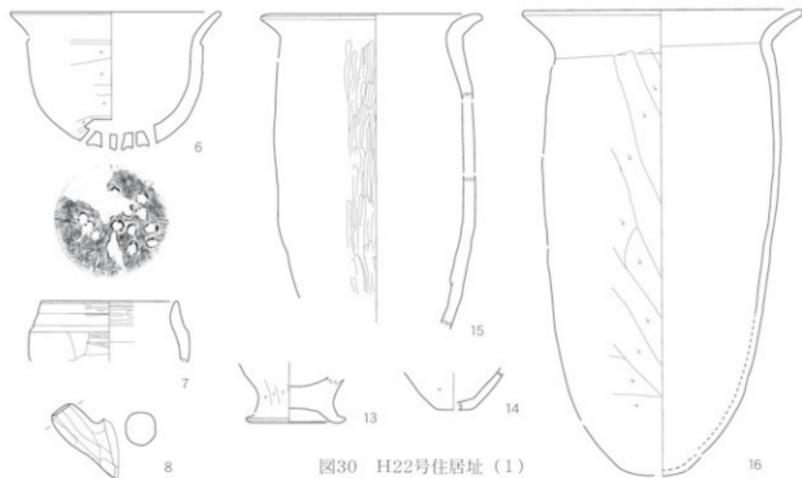


図30 H22号住居址(1)

0 (1:4) 10cm

H22-2



H22号住居址 カマド (南より)



図31 H22号住居址 (2)

20. H24号住居址 (I地区)

カ10グリッドにあり、H10号住居址を切る。規模は南北4.36m、東西3.24mを測る。形態は隅丸長方形を呈し、壁高は11cmと浅い。カマドが北壁中央より西に寄ってある。カマドの袖は礫を並べその間に粘土を補充している。西袖の礫は長さ32cm、高さ40cmを測る。カマドの規模は外幅88cm、内幅56cm、奥行きは66cmを測る。カマドからは土師器甕が出土する。主柱穴は見つかっていない。

出土遺物には須恵器、土師器、鉄製品、砥石がある。12の砥石は携帯用で、穿孔があり、使用され凹面となっている。鉄製品は刀子2点と角釘1点がある。須恵器は甕の胴部片と壺胴部片がある。土師器は3の杯が小型で底部回転糸切り、外面に墨書、内面はナデ調整後3本の暗文を放射状に施す。7の武蔵甕は口縁部が短く「コ」字形である。5・6の甕は武蔵甕で、口縁部形態が「く」字形を呈し、7の武蔵甕より時代が古相である。カマドから出土する。3の土師器杯・7の武蔵甕と、カマドから出土する5・6の武蔵甕とは時期が一致しない。3の土師器杯と7の武蔵甕からは平安時代10世紀代であり、5・6は奈良時代8世紀後半とみられる。3・7を混入品としたい。

21. H25号住居址・H26号住居址 (第I地区)

オ11グリッドにあり、H25とH26号住居址は重複しており、西側は調査区域外である。H25号住居址はH10・H26号住居址を切る。南北2.04mを測り、東西1.16mを調査している。形態は矩形で、カマドを東壁の南寄りに設けている。両袖と煙道を残しており、カマド幅60cm、カマド内幅48cm、燃焼部の奥行は46cmを測る。カマドの前には灰の範囲がみられる。柱穴は見つかっていない。

出土遺物には須恵器、土師器、鉄製品、鉄滓がある。鉄製品は角釘である。須恵器は甕と杯があり、甕の底部は丸底で、摩耗している。内面はあて具痕を強く残す。須恵器杯は軟質で、底径は小さく底部回転糸切りである。土師器は杯・碗・甕がある。土師器杯は5・7の底部回転糸切り、内面はミガキ調整をせずに暗文を施し、黒色処理される。10は碗で高台の畳付が平坦に整えられている。外面に墨書がある。土師器甕の12~14は武蔵甕で口縁部形態が「コ」字形である。11は口ロコ甕の底部であろうか、底部は回転糸切りである。15は羽釜である。

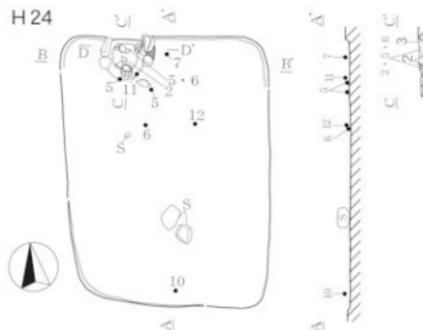
これらより本住居址は平安時代9世紀とされよう。

H26号住居址は、H25号住居址の北側にあり、南北1.56mを測り、東西1.3mを調査する。カマドはなく、調査者によれば床面がH25号住居址より5~7cm深い。北東に遺物が集中して出土している。

出土遺物は土師器、鉄製品がある。鉄製品はH25号住居址と同じ鉄釘である。19の須恵器は壺の胴部片で、外面は叩きが施され、内面横ナデされる。20の土師器甕は武蔵甕で、内側に「コ」字形の折れが見え、口縁は短く強く外反している。22は厚手で、外面は底部・胴部を含めてミガキ内面はナデ調整される。

本住居址は、武蔵甕に「コ」字形が窺えることから、奈良時代8世紀後半あたりであろうか。

H24



H24号住居址 完掘(南より)

H24 土層説明

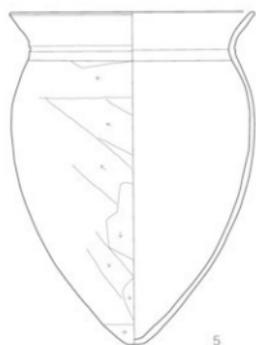
- 粘土
- 硬粘土
- 3.8cm

レベル高5.0cm 水準レベル195cm

0 (180) 2m



2



5



9



11 (1:2)



8



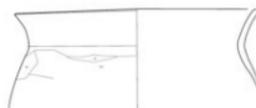
10-1 (1:2)



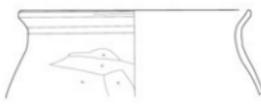
4



10-2 (1:2)



6



7



12

図32 H24号住居址

0 (1:4) 10cm

H25・H26

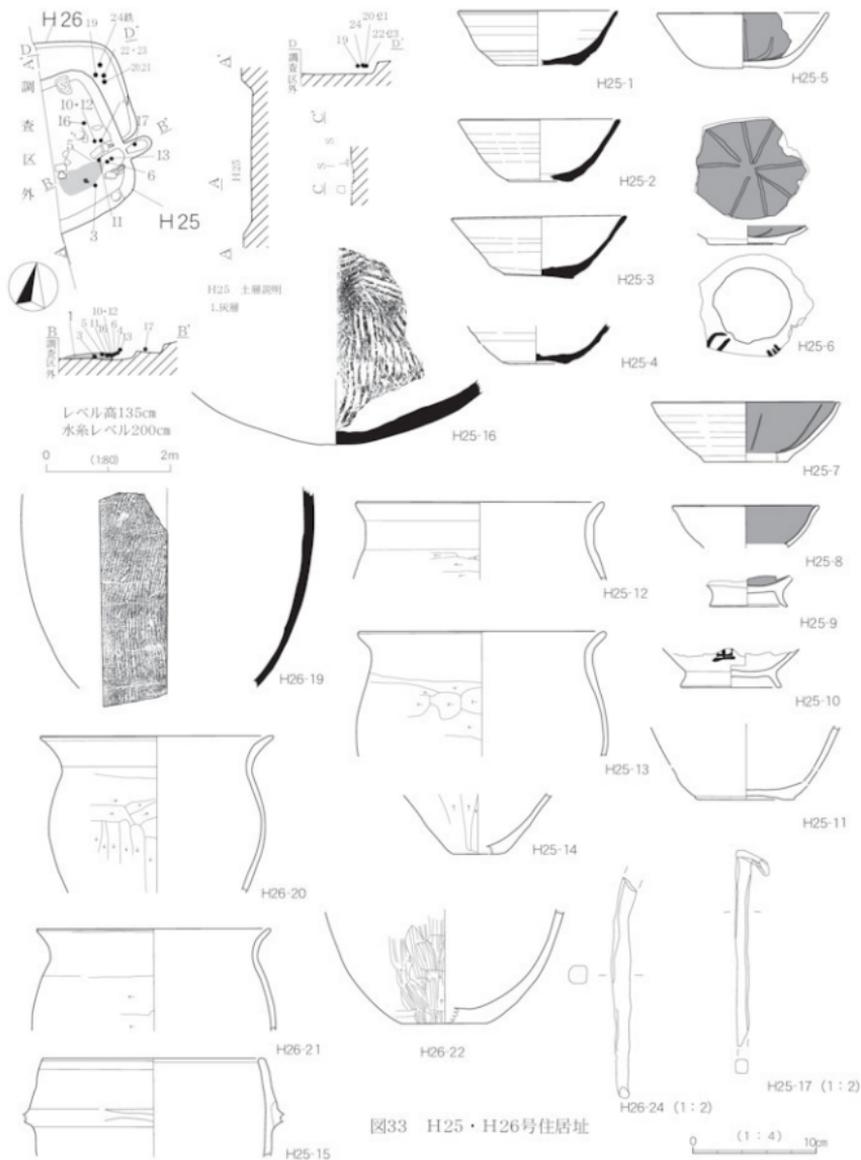
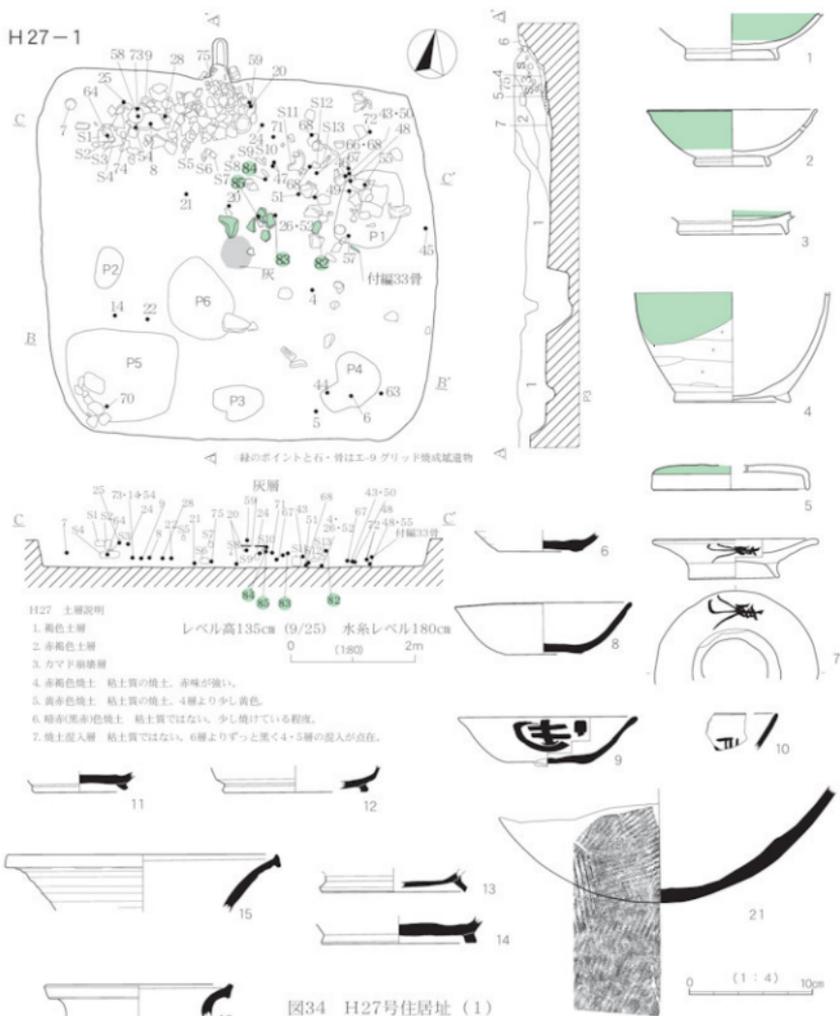


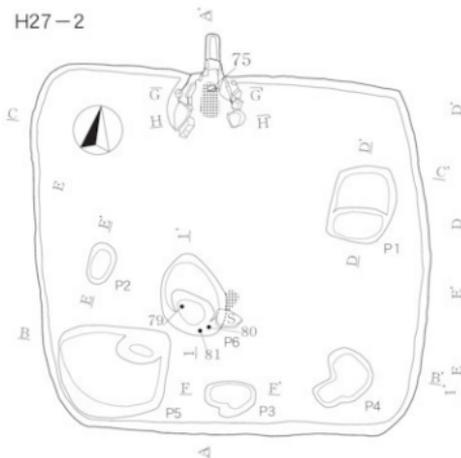
図33 H25・H26号住居址

22. H27号住居址 (第I地区)

オ8グリッドにあり、H10号住居址を切る。規模は南北5.62m、東西6.20mを測り、隅丸長方形を呈す。壁高は北で43cmを測る。カマドを北壁中央に設け、両袖と煙道を残している。煙道の形態はセクション図からの推測である。カマドの袖は礫を芯材にして構築している。住居址の北側は多量の礫と土器が出土するが床面からは浮いている。大量の遺物は北壁側から流入しているようである。



H27-2



H27号住居址P 1 上面の礫
(南東より)



H27号住居址P 5 南西礫 (西より)



78
(1:1)

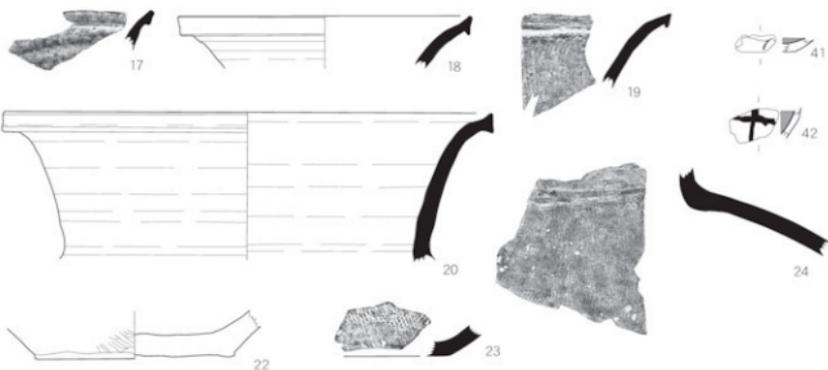
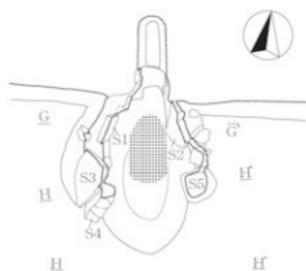


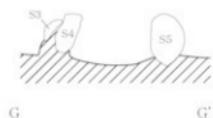
図35 H27号住居址 (2)

0 (1:4) 10m

H27-3



H27号住居址 完掘(南より)



G

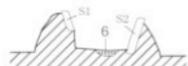
G'



H27号住居址 カマド



H27号住居址 カマド



レベル高135cm(9/25) 水糸レベル180cm

0 (t40) 2m
図36 H27号住居址
カマド

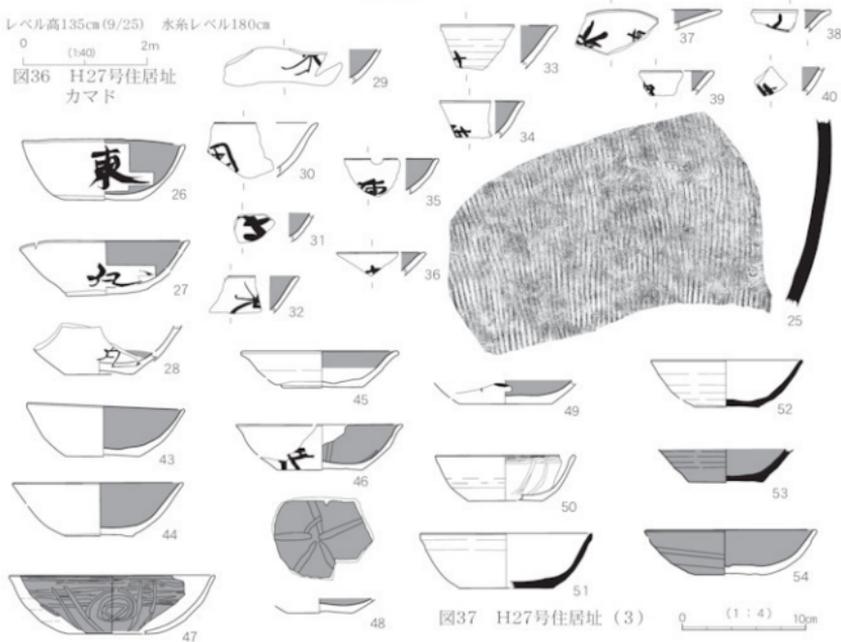


図37 H27号住居址 (3)

H27-4

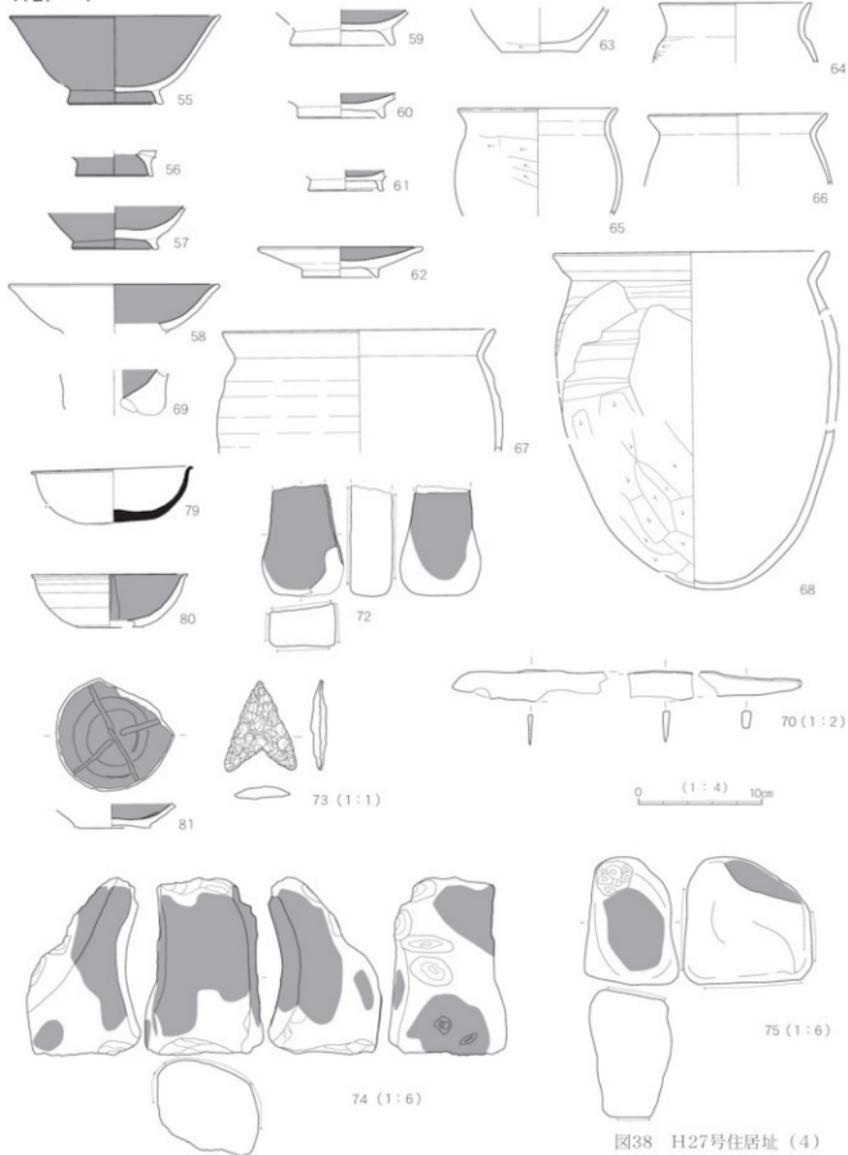


图38 H27号住居址(4)



図39 H27号住居址(5)

床面にはP1～P6ピットがある。主柱穴とみられるのはP1・P4・P5とみられる。P1は隅丸長方形を呈し、北側テラスは浅く深さ10cm、南は深さ30cmで柱穴とみられる。北の浅いテラスには礫が平坦に組み敷かれており、柱の建て直しにより礎石としたのであろうか。

P6は長径140cm、短径108cm、深さ52cmを測る。ピット周囲の床面に焼土があり、内部には炭化物・灰が含まれていた。

82～85はグリッド遺物から住居址に入れた。ともに記載された灰層は82～85の上面に当たる。別遺構の可能性もある。

出土した土器は多量であり、土器類の実測個体は灰釉陶器は皿・椀3・壺1・壺蓋1、須恵器は杯7・高台付杯2・壺と甕13、土師器は杯25・椀7・皿3・甕6個体である。このほかに破片が40.6kgあり、内訳は土師器杯・椀類が3.8kg、甕類が3.7kg、須恵器壺・甕類3.7kg、須恵器蓋・杯1.4kg、灰釉陶器28gがある。鉄製品では刀子、石製品は砥石・置き砥石・石鏃が出土している。鉄製品では斧が出土したとあるが、現物は不明である。特記すべき遺物としては皇朝十二銭の「神功開寶」が出土している。初鋳年は765年である。

灰釉陶器椀の外面の杯下部はヘラ削りされ、釉はハケ塗りである。高台は三日月高台である。胎土は1・2が灰白色で3は黒味がある。

須恵器杯は軟質で、底径は小さく糸切底で墨書されるものが2点ある。9は「用」に似る。P6から出土した79は須恵器としたが土師器の二次焼成であろうか。底部が厚く柱状高台作りのものであろうか。底部回転糸切後周辺部を1cmほど緩やかにヘラ削りしているため丸底気味である。体部も膨らみを持ち、口縁が短く強く外反している。他の土師器杯とは異なる。本址より新し様相がある。

土師器杯は底径が小さく、回転糸切り、内面ミガキ黒色処理される。杯部外面に墨書される点数は18点あり、「東」が7点、「丸」が2点ある。土師器皿の外面上にも「東」があり、「東」は合計9点ある。墨書の総数は21点ある。土師器椀の55は黒色土器で内外丁寧にミガキ調整されている。

土師器甕は武蔵甕とロクロ甕があり、武蔵甕は64・65小型品のみで口縁部「コ」字形態である。主体は67・68のロクロ甕である。

石製品では砥石が4点出土と多く出土し、ことに置き砥石が3点ある。

別遺構とみられる灰の範囲と周囲の礫、83～85の土器はエ9グリッドで記録されていたもの転載している。重複したため、D20号土城のようになる焼土城の範囲がつかめなかったようである。付編33の哺乳類の骨の破片1片が出土している。

これらより、平安時代9世紀後半の住居址であろうか。

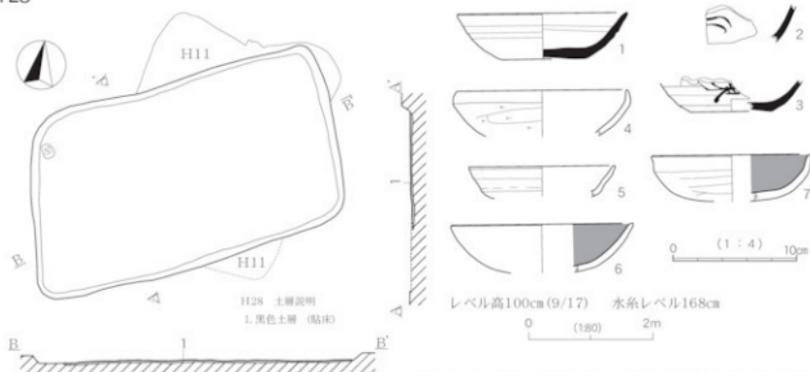
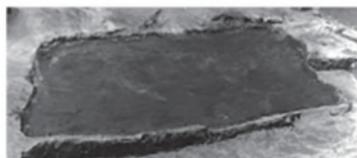
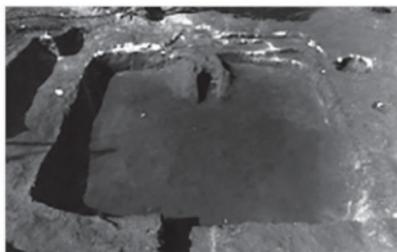


図40 H28号住居址



H28号住居址 完掘



H30号住居址 完掘

23. H28号住居址（第Ⅱ地区）（H30号住居址と同一か）

ネ23グリッドにあり、H11号住居址に切られ、H30号住居址を切る。南北2.84m、東西4.88mを測り、長方形を呈す。壁高は15cmを測る。カマド・ピットは検出されていない。

出土遺物には須恵器と土師器がある。須恵器杯の1・3は底部回転糸切で平底である。2の破片も同時期とみられ、2・3には外面に「東」の墨書がある。平安時代のものである。土師器杯の4～7の4点はいずれも丸底で古墳時代後期の土器群である。H11号住居址が平安時代9世紀後半とみられることから、その中間の時期ということになる。しかしカマドがなく、土師器の杯は古墳時代後期であり、須恵器杯はH11号住居址と同時期であることから、本址はH30号住居址の一部とみられる。

24. H30号住居址（第Ⅱ地区）

ネ23グリッドにあり、南北4.78m、東西5.32mの方形を呈す。壁高は最大で64cmを測る。カマドは北壁中央にあり、南壁下には炭化物範囲が床面にみられた。柱穴は検出されていない。

出土遺物は土師器と軽石製凹石がある。土師器は杯、把手付杯、甕がある。土師器杯は橙色で緻密な胎土で、底部外面はヘラ削りされ丸底である。把手付杯は断面ハの字の脚が付き、杯部はヘラ削り後ミガキが施されるが丁寧ではない。3・4は同個体で2と同じ器形になるようである。5は壺であるが、ミガキは摩耗している。長胴甕は厚手で口縁が全体に外反し、胴部は縦にヘラ削りされる。

H11・H28号住居址から出土する土器に本住居址のものと思われる土器が出土している。H11-5の須恵器杯蓋やH11-12～15の土師器杯・小壺、H28-4～7の土師器杯が該当するとみられる。これらより、本住居址の年代は古墳時代後期7世紀代であろうか。

H30

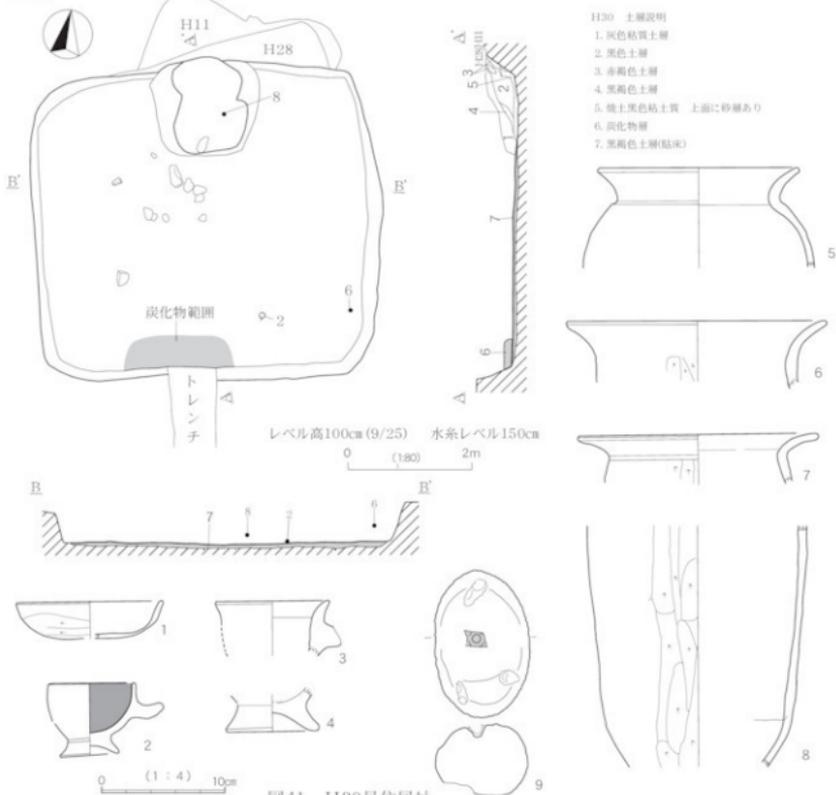


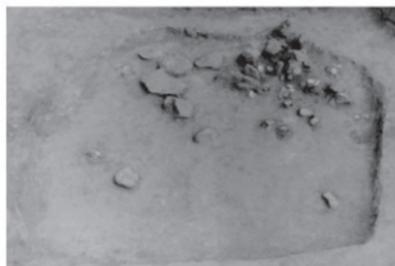
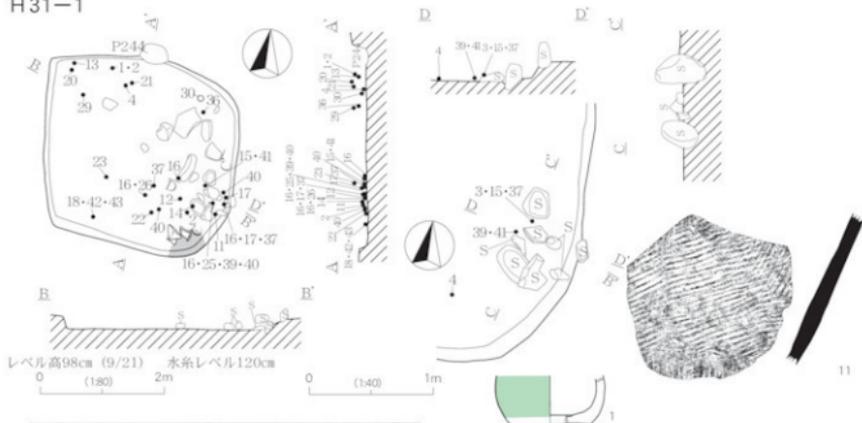
図41 H30号住居址

25. H31号住居址 (第Ⅱ地区)

H19グリッドにあり、P 244に切られる。南北2.96m、東西3.0m、壁高は最大21cmを測る。方形を呈し、カマドの位置は東壁にあり、南に寄っている。カマド袖と支脚石が残っていた。カマドの袖は礫を芯材にして構築している。柱穴は検出されていない。カマドの周囲で礫と土器が床面から出土している。南東隅には灰の堆積が床面にみられた。

出土遺物は土器類では灰軸陶器・須恵器・土師器、石製品では砥石がある。灰軸陶器は小瓶の下部がある。底部は回転糸切り、胴下部は回転ヘラ削りされる。外面は施軸されるが、ハケ塗かはわからない。須恵器は杯・高台付杯があり軟質、裏は武蔵甕がある。須恵器杯は6個体実測し、底部は回転糸切りされる。4は底径が小さく、口縁は直線で外に開き口縁は歪んでいる。内面は黒色処理される。2・3・5は口縁が内湾して外傾するもので、3の杯は内外面が黒色(2は一部内外)を呈する。

H31-1



H31号住居址 完掘



H31号住居址 カマド

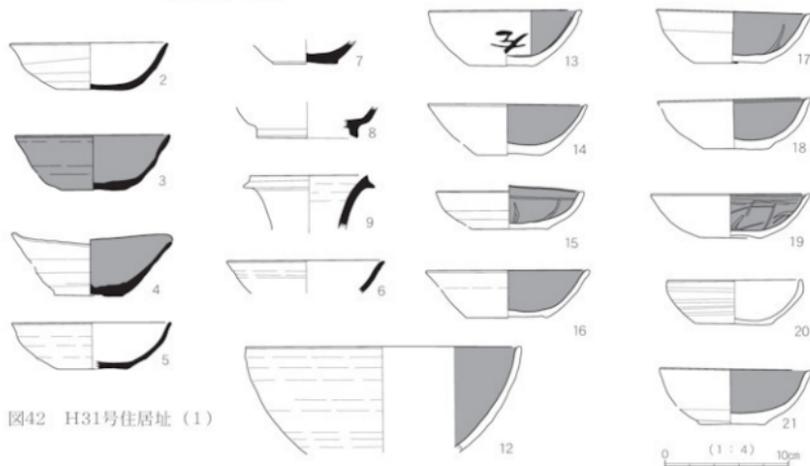


図42 H31号住居址 (1)

H31-2

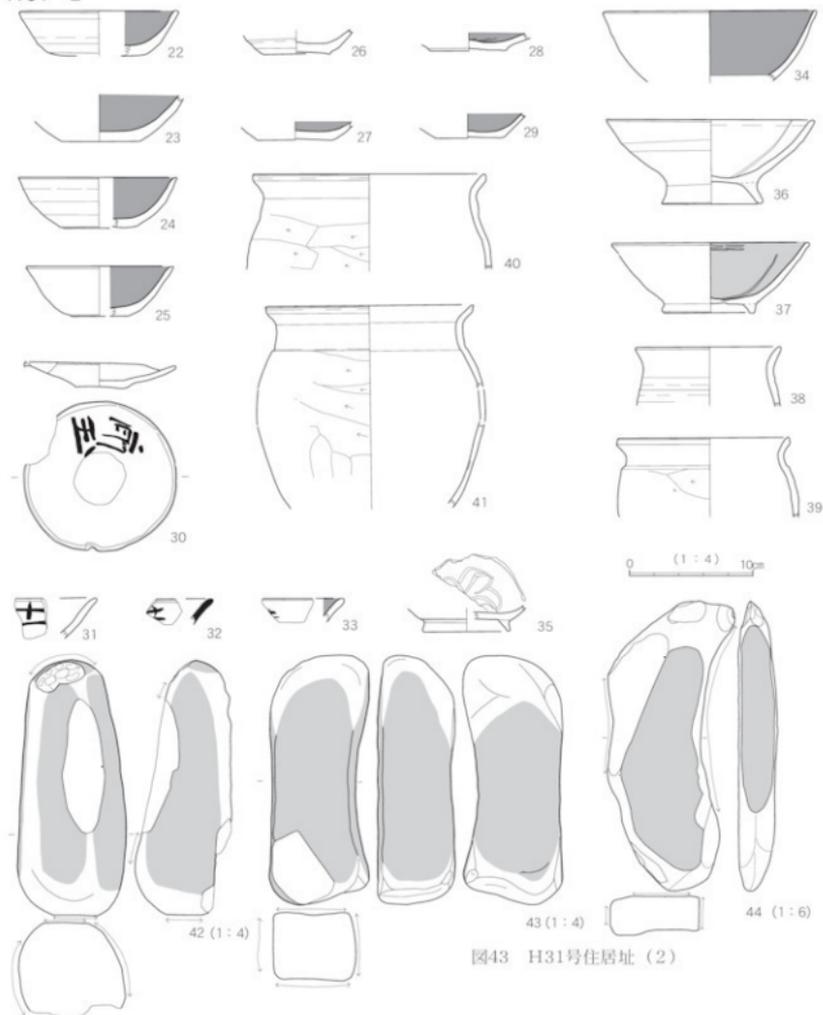


図43 H31号住居址(2)

土師器杯は17個体実測され、底部回転糸切りで、内面ミガキ黒色処理され、暗文のあるものが大半である。15・17・20・26の口唇部内面はミガキ調整がわずかにされるが、ミガキを全体に施してい17・20は暗文がある。30は土師器皿で、歪みが著しい。底部は小さく回転糸切りされる。内面は見込み部にわずかにミガキがあるが、ナデ調整のままである。内面に記号のような刻書がある。外面に2文字の墨書がなされる。「○玉」で一文字の読みがあまりはつきりしない。土師器椀はミガキ・黒色処理しない36がある。35は内面ミガキ後暗文を施している。

土師器武蔵甕は口縁部形態が「コ」の字形を呈す。38は横ナデ調整の甕である。これらより、平安時代の10世紀代で、H27号住址より後出する住居址であろう。

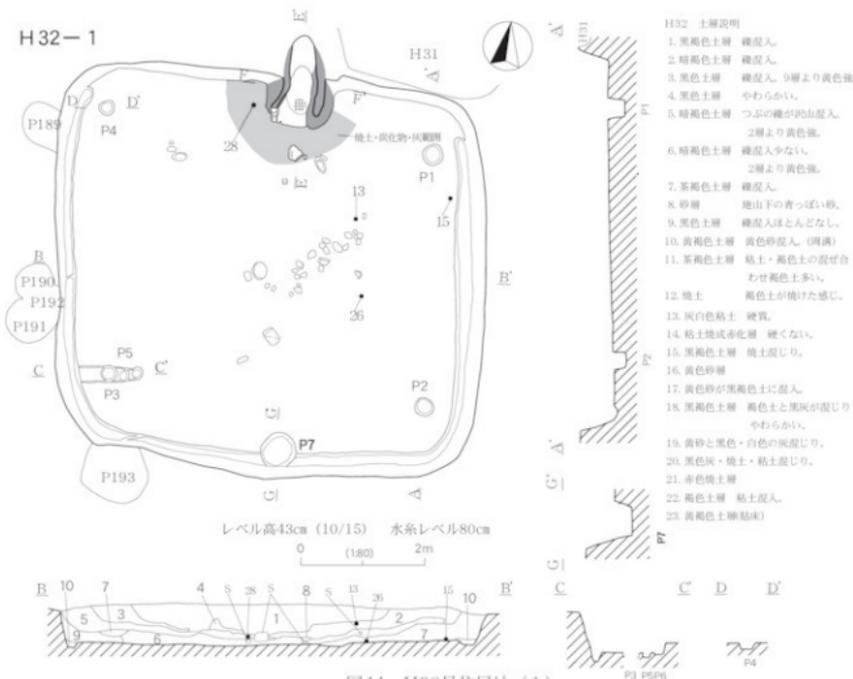
26. H32号住居址 (第Ⅱ地区)

ハ20グリッドにあり、H40号住居址と単独ピットP181~184、189・191~193の8個のピットに切られている。H40号住居址は、南の覆土上部に重なっている。南北6.15m、東西6.44m、最大壁高は65cmを測る。カマドは北壁中央より東に寄ってある。東西幅1.1m、長さ1.5mを測る。火床幅は40cmである。袖は粘土を混在して用い、西の袖口には礫を置いている。カマドの火床の上面には灰が厚く堆積している。

主柱穴は住居址の隅にあり、P1~P4がある。円形で径24・32cmを測る。南西のP3と重なって長さ104cm、幅28cmの間仕切り溝がある。南壁中央には円形の出入り口のピットがあり、径56cm、床から30cm下がっている。

出土物には須恵器・土師器ある。須恵器は重複するH40号住居址及び単独ピットの遺物である。土師器は、杯・高杯・鉢・甕・丸胴甕・長胴甕がある。杯はいずれも丸底で19は内面ナデ調整のみで摩耗して滑らかになっている。20の杯は菊花びら様に放射状暗文が不規則に施される。22~23の杯は小型の杯で浅い。

33・34の甕の口縁は「く」形態を呈する。H40号住居址の遺物であろうか。36の土師器甕底部は薄手である。31の甕は厚手で、ひびに粘土を貼って補修している。31・32の甕の口縁は外反している。これらより、本住居址は古墳時代後期7世紀後半であろうか。



H32-2

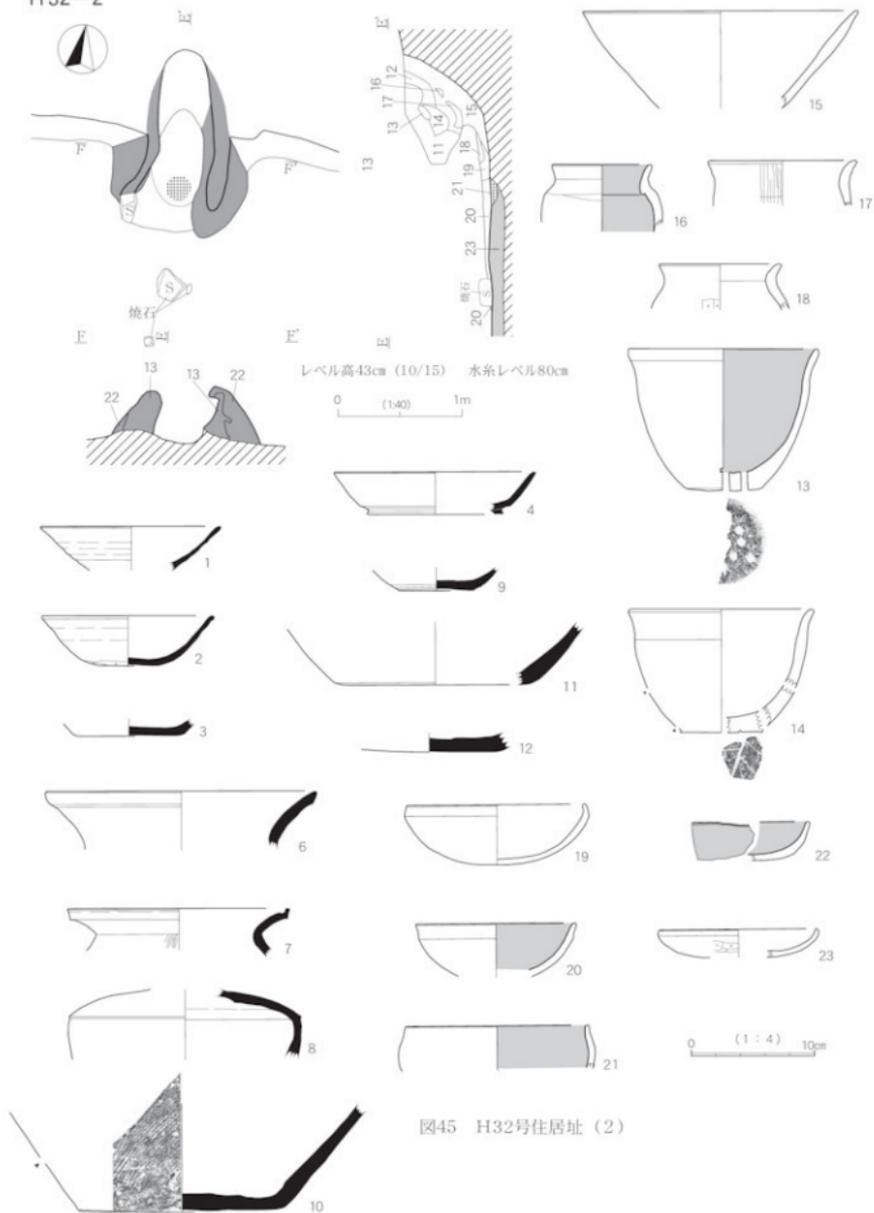
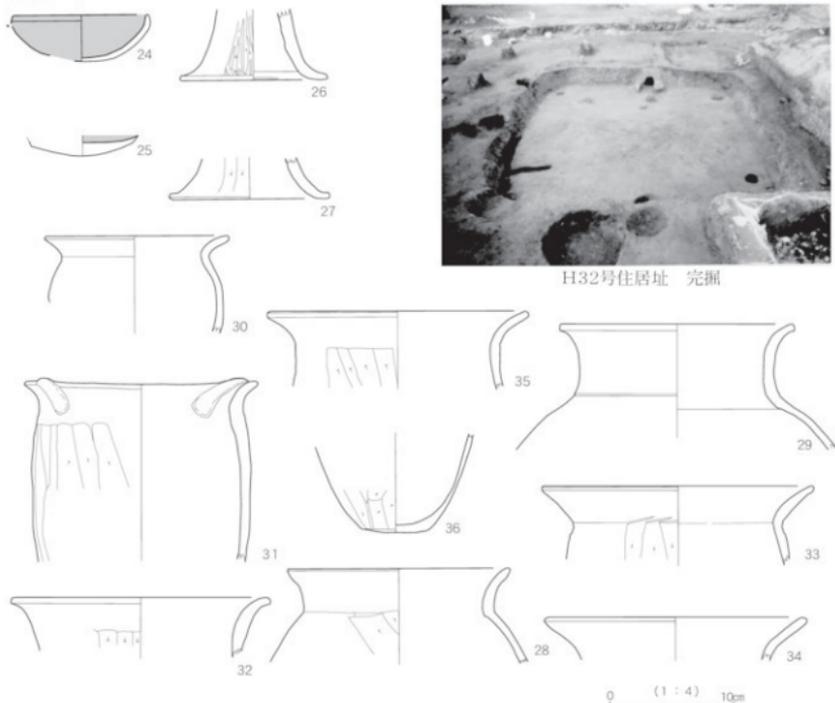


図45 H32号住居址(2)

H32-3



H32号住居址 完掘

図46 H32号住居址(3)

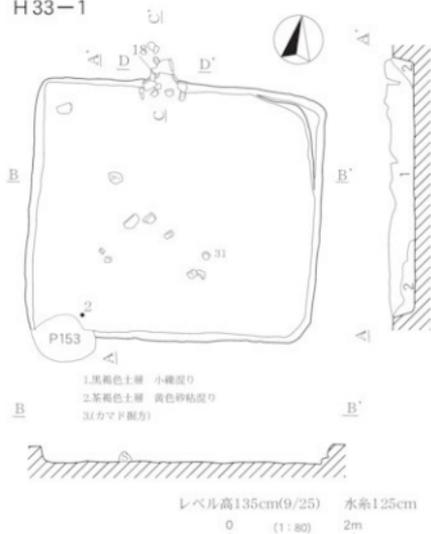
27. H33号住居址(第I地区)

タ12グリッドにあり、P153に切られ、P131・151を切る。規模は南北3.92m、東西4.48mで東西に少し長い長方形を呈している。壁高最大値は36cmを測る。カマドは北壁にあり、中央よりやや西に寄っている。カマドの袖幅は78cm、奥行きは76cmを測る。竈を煙道・袖の芯材に使っている。柱穴は見つかっていない。

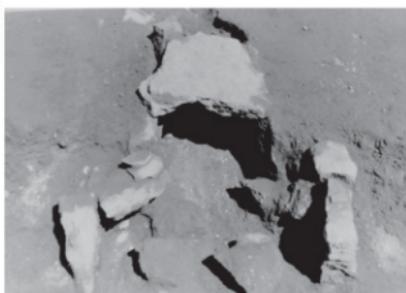
出土遺物は灰釉陶器・須恵器・土師器がある。灰釉陶器碗は破片で、内外面施釉される。須恵器はいずれも混入品とみられる。土師器杯・碗は内面ロクロ調整が中心となる。実測した以外に16kgの土師器杯・碗の破片があり、杯類の量が多い。15の杯は小型の柱状高台杯で、口縁が開いて皿に近い。28の杯底部は柱状高台作りのため、柱状部の上と下の糸切り痕が残っている。12・14・20は口径12cmほどで、口縁下部に膨らみを持ち、口縁上部は外反する器形で、胎土が精製されて、器肌は滑らかである。17は杯下部にロクロ痕が顕著にのこる。ロクロ調整のみの碗も多く、脚長の高台が付いている。内面ミガキ黒色処理された碗は混入品で36・37は転用されて使用されたとみられる。

これらより本住居址は平安時代10世紀代とみられる。

H33-1



H33号住居址 完掘



H33号住居址 カマド

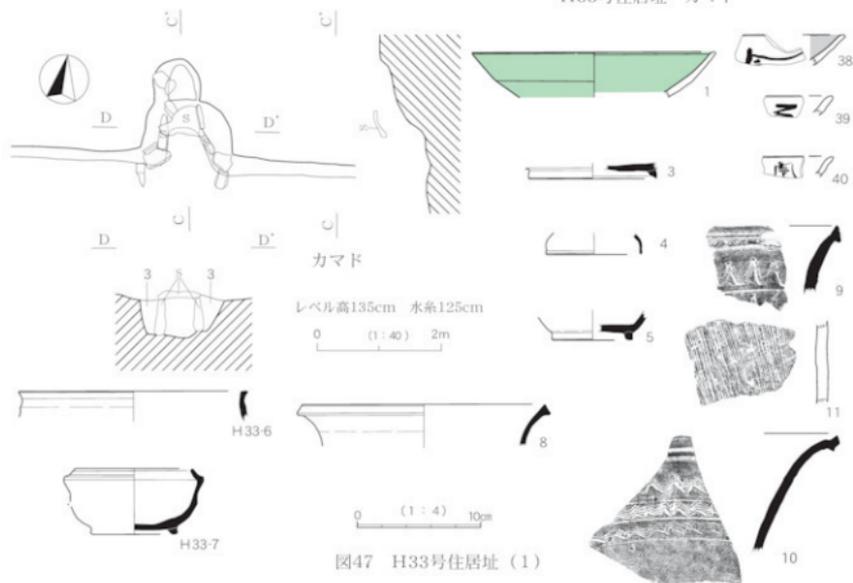


図47 H33号住居址 (1)

H33-2

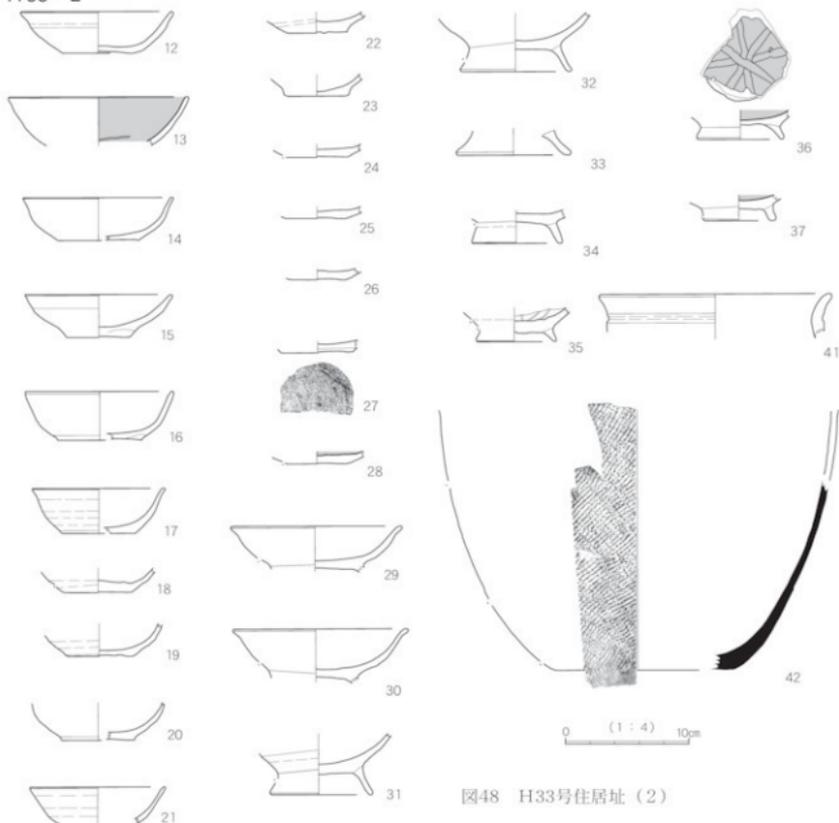


図48 H33号住居址（2）

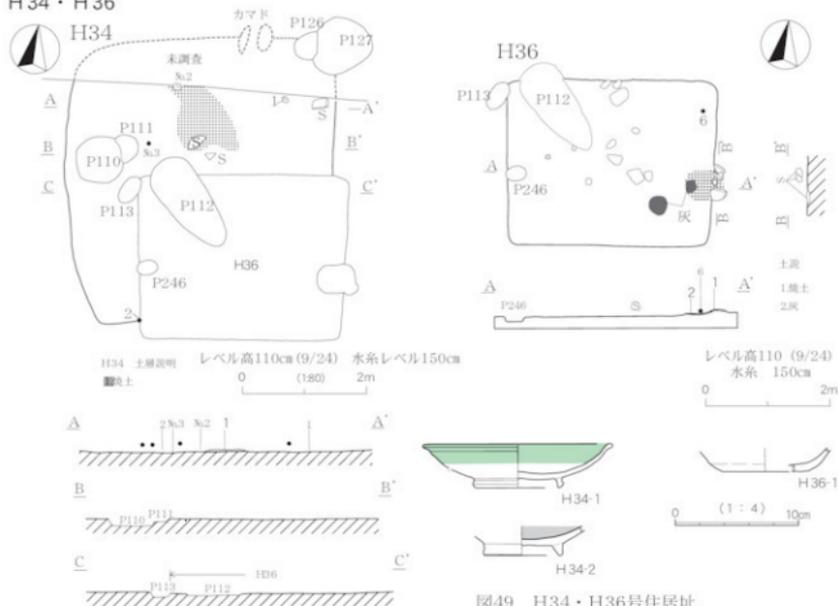
28. H34号住居址（第I地区）

ク10グリッドにあり、北壁のプランは概報の全体図からあわせている。プランからは東に寄ってカマドが位置している。未調査城が70cmほどあり、北中央付近には焼土範囲がみられるので、北にカマドがあったようである。H10号住居址を切り、南東側でH36号住居址、また単独ピットP110～P113・P126・P127・P246に切られている。南北は推定で4.5m、東西4.33mの長方形を呈している。壁はほとんど残っていない。P111とP246などは本址に伴う柱穴の可能性もある。

出土遺物には灰軸陶器皿と土師器碗がある。No.3地点からは鉄器の出土の記録があるが、現物は行方不明である。灰軸陶器皿は口縁端部が外反し、口縁外面下部が回転ヘラ削りされている。肌はやや黒味を帯びる。施軸はハケ塗である。2の土師器碗は、内面ミガキ黒色処理され、高台の径は小さく、断面形が三角形である。H36号住居址との境から出土しており、H36号住居址のものとも考えられる。

灰軸陶器皿より平安時代9世紀後半の住居址であろうか。

H34・H36



29. H35・42号住居址 (第I地区)

H35号住居址はシ15グリッドにあり、西と南側は調査区域外で住居址の北東部のみ調査している。南でH42号住居址に切られるようである。また床下に他の住居址が窺える。重複関係は明確ではなく、「焼土(カマド)」の文字と焼土範囲の線が原図にあるが、レベルとセクションに焼土層が記録されていないため、この「焼土(カマド)」がH42号住居址と同レベルか、他の住居址ものであるか明確ではない。P160～P162を切っている。礎群1・P257に切られる。H35号住居址は調査域で南北4.64m・東西2.34m、最大壁高は35cmを測る。柱穴は14個検出された。P8は楕円形で、40×32cm、深さ32cmを測り、支柱穴とみられる。他P1・P2・P3・P4は浅く、堀方または重複したピットの可能性もある。

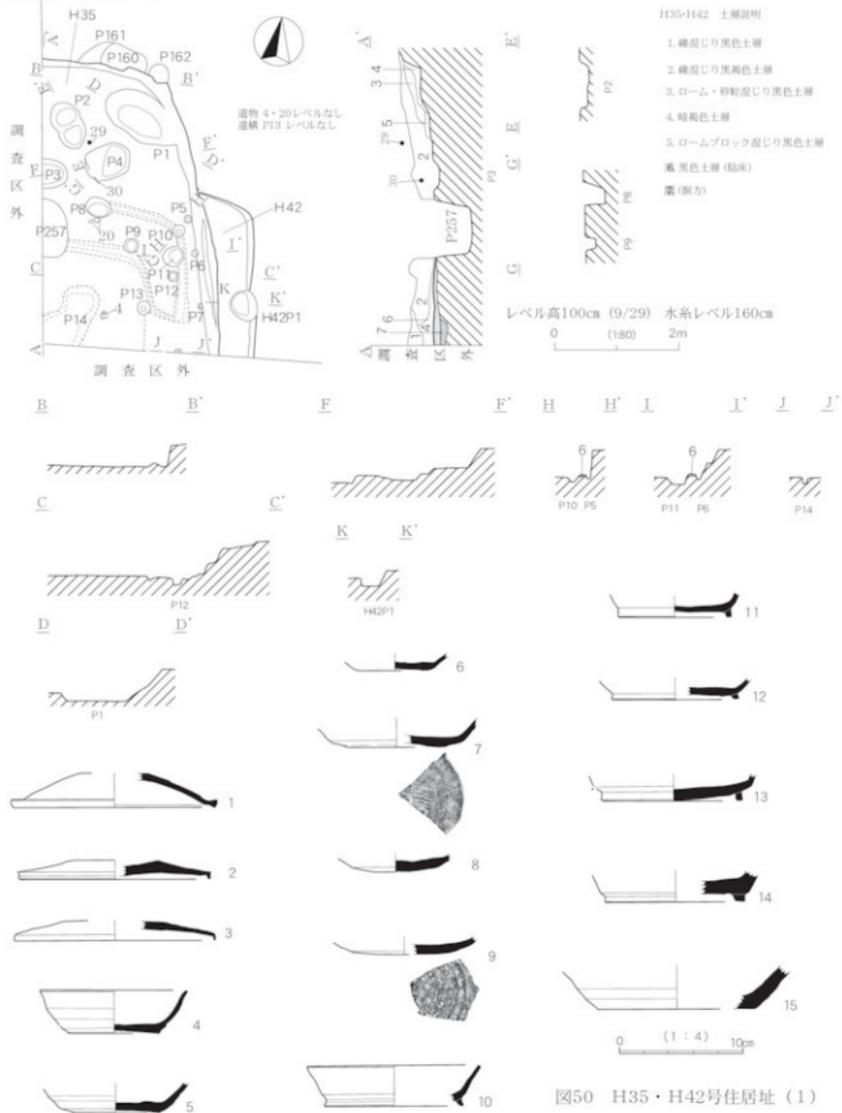
H35号住居址の南半は北より掘方が深くなっており、P14の上面と付近は顕著な張り床が認められ、張り床の下に床下住居が存在したようである。

また東にH42号住居址があり、東西62cm、南北262cmを調査した。東壁に円形で径46cm深さ12cmのピットがある。壁高は12cmを測る。調査時のH42号住居址とH35号住居址との切り合いははっきりしないがH42号住居址が切っているとみられる。

今回報告にあたって原図は不明瞭で、掲載図のように解釈した。ナンバー遺物は出土地点はあるがレベルの記載はなく帰属は明らかではない。20土師器杯は内面ミガキ黒色処理され、剥離がある。外面は底部回転系切り後、杯下部手持ちヘラ削りされている。4は須恵器杯で、底部回転系切りされ、内外に火擦痕がある。

H42号住居址として実測した2点は「H42カマド」と注記される。H42号住居址にカマドはない「焼土(カマド)」の焼土地点から出たようである。H42-1の杯は内面ミガキ黒色処理、底部手持ちヘラ削りされている。H42-2は内面ミガキ黒色処理ではあるが底径が小さく、H35-33の杯と近いようである。H35-28の武蔵甕は口縁部形態「く」字形を呈している。H35-28の甕からは、奈良時代の住居址とみられる。H42-2土師器杯は平安時代の所産とみられる。推測の域を出ない状況である。

H35・H42-1



H35・H42-2



図51 H35・42号住居址(2)

30, H36号住居址(第I地区)(図49)

キ10グリッドにあり、P112・P113・P246に切られ、H10・H34・P247を切る。カマドを東壁中央より南に持っている。南北2.7m、東西3.34mの長方形を呈す。壁高は最大で6cmのみである。カマドは火床とみられる焼土範囲と煙道の天井石が残っていた。柱穴は検出されていない。

出土遺物は全量50gあるのみで、実測個体は土師器杯である。内面ナデ、底部回転糸切りである。これらより平安時代10世紀代の住居址とみられる。

31, H37号住居址(第I地区)

タ10グリッドにあり、D2号土坑・単独ピットP136・P137に切られ、P118・P133・P135・P248・P250・P251を切る。カマドは北壁中央より東に寄ってある。住居址の規模は南北6.4m、東西7.01m、胴張りの隅丸長方形を呈し、壁最大高は92cmを測る。

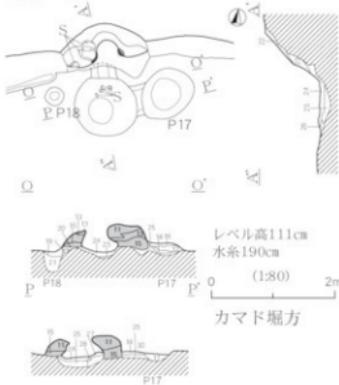
カマドは北壁にあり、灰色粘土で構築され、外幅144cm・内幅60cm、長さ192cmを測る。西袖側には円形で径30cm、深さ34cmのピットP18がある。東脇には灰を含む浅いピットP17が設けられている。

主柱穴は3本検出され、P2は位置・深さから主柱穴ではなく貯蔵穴であろうか。P2をのぞくP1～P4はほぼ円形で径60cm前後、深さ70cm前後を測る。P7・P8の出入り口ピットを除くP5～P15までは壁柱穴とみられ、径20～30cmの円形で深さ12・14cmである。P16は住居址の掘方一部を掘下げたとみられる。北と西壁、南壁下には周溝がめぐる。東壁は40cmほど内側に周溝があり、住居址の拡張が行われたようである。間仕切り溝が東壁中央にあり、長さ136cm、幅36cm、深さ16cmを測る。焼土範囲はレベルの記載がないため、高さはわからないが、床面は8.炭化物層が覆っている。



図52 H37号住居址 (1)

H37-2



土層説明

10. 黄土層 (間仕切面)
11. 灰色土層 粒子細かく、粘性 焼土を若干含む。(カマド天井面)
12. 黒色土層 粘性あり。(ススと思われる)
13. 茶褐色土層 粘性少ない。焼土、粘土含む。
14. 焼けた石
15. 明褐色土層 粒子粗にて、粘性あり。焼土、灰、粘土を含む。
16. 褐色成層 灰、粘土を少量含む。粘性なし。
17. 明褐色土層 灰層
18. 灰褐色土層 粘性少なく、粘土と砂を含む。
19. 黄褐色土層 砂礫を多く含む。
20. 明褐色土層 砂を多く含む。
21. 0'18 フク土
22. 黄褐色土層 砂粘土を含む。
23. 2層よりやや暗い。
24. 暗黄褐色土層 粒子粗く、粘性なし。砂を含む。
25. 暗褐色土層 粒子粗く、粘性なし。
26. 黄褐色土層 粒子粗にして、粘性なし。小礫を含む。砂礫とススの混入土。
27. 黄褐色土層 砂質。粒子粗、粘性なし。若干のスス、灰を含む。
28. 暗茶褐色土層 粒子やや細かく、粘性ややあり。

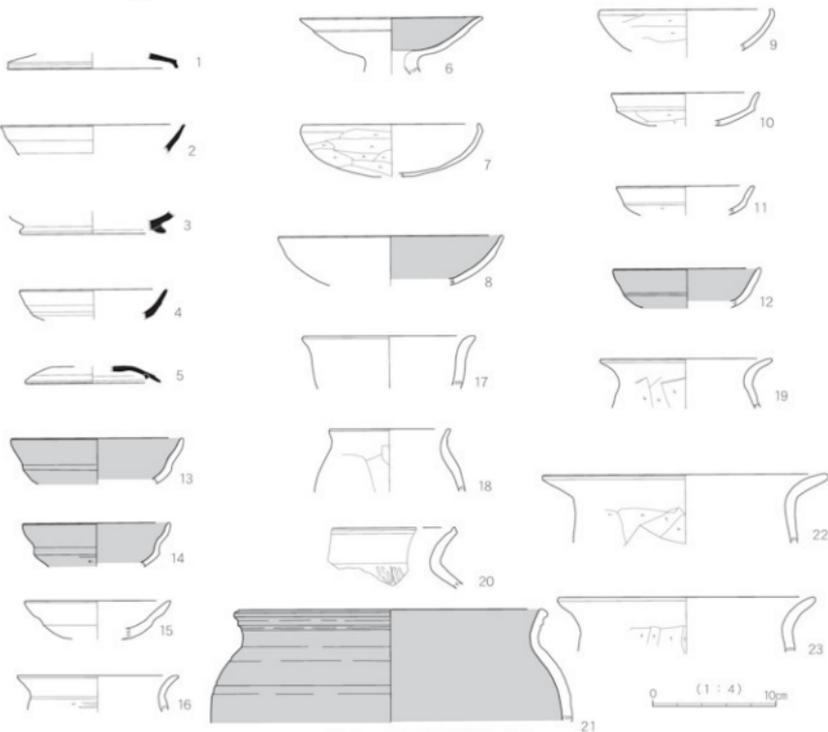


図53 H37号住居址(2)

H37-3

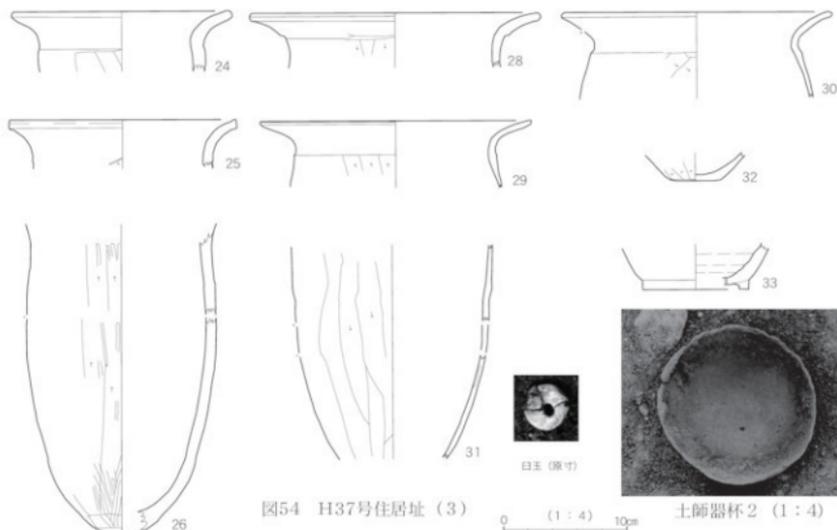


図54 H37号住居址 (3)

0 (1:4) 10cm

土師器杯 2 (1:4)



H37号住居址 完掘



(写真遺物は現在所在不明)

出土遺物には須恵器、土師器、手捏、鉄製刀子、滑石製白玉がある。このうち平面図に示したNo.遺物の所在が不明であるため、実測はできていない。

須恵器は蓋・杯・高台付杯が実測された。蓋は口縁端部が折れるものとかえりのあるものとする。杯は丸底になる。高台付杯は底径が大きく、脚端部は外に開く。いずれも破片で少数である。33の蓋はグリッド出土で、灰軸陶器とみられ須恵器も混入品である。

土師器は杯、高杯、丸胴甕、小型甕、長胴甕がある。杯はいずれも丸底で、内面ミガキ黒色処理するものとししないものがある。7・9は内面はナデ調整で、外面口縁が横ナデされて短く内傾し、底部はヘラ削りで丸底である。器肉は薄く、にぶい橙色を呈する。胎土は緻密である。21の土師器甕は黒色処理がなされている。30の土師器甕は武蔵甕で口縁部形態が「く」字形である。重複する単独ピットの出土品かも知れない。22・23・27の甕は器肉が厚く、口縁が外反する器形である。

これらより古墳時代後期7世紀後半の住居址であろうか。

32. H38号住居址 (I地区)

シ10グリッドにあり、H45号住居址、P142切れ、P119切る。南北7.34m、東西7.4mを測り、隅丸方形を呈す。カマドは北壁中央よりやや西に寄ってある。カマド袖下と住居址中央に崩壊したカマドの土が広がっていた。カマドは幅100cm、北に50cm四角に張り出している。カマドは袖の一部、燃焼部が残り、袖幅94cmである。袖端方は窪む。柱穴は10個ある。主柱穴とみられるP1~P3は径28cm前後の円形で、P4は長軸120cm測る楕円形を呈している。

D1の落ち込みはH45号住居址のカマドの堀方位置にあたり、本住居址に伴うものではない可能性がある。

H38-1

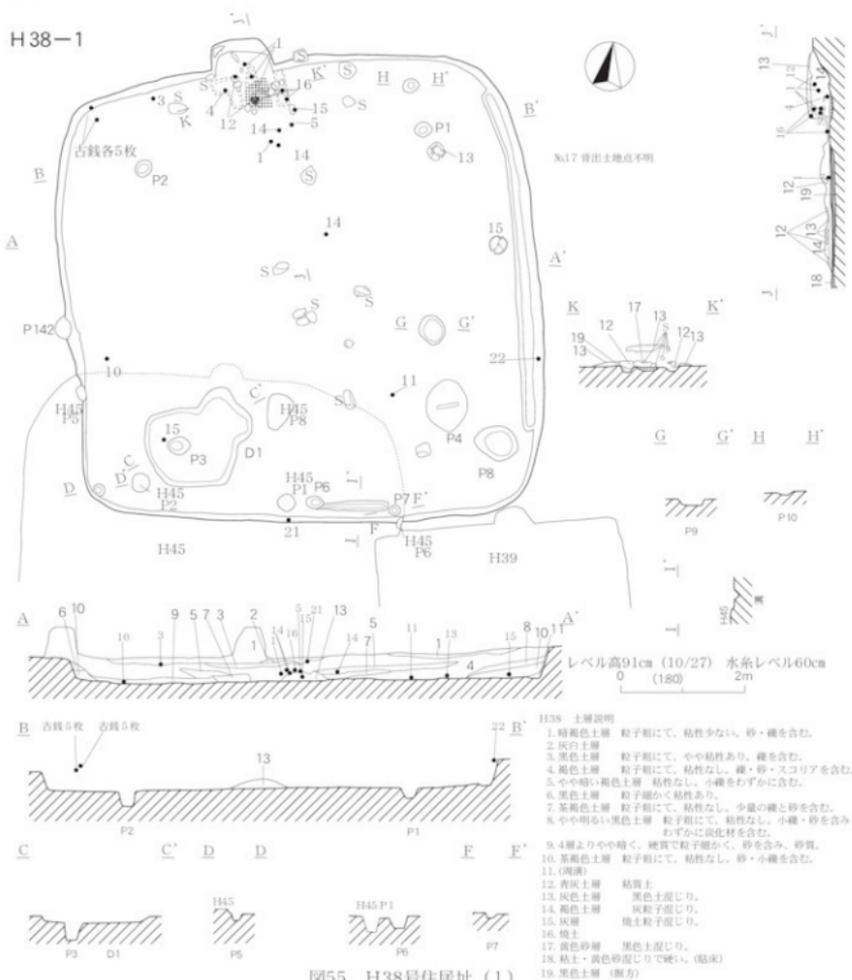


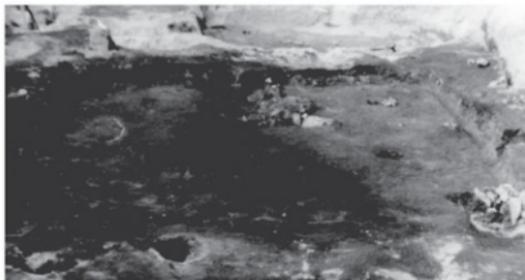
図55 H38号住居址 (1)

H38-2

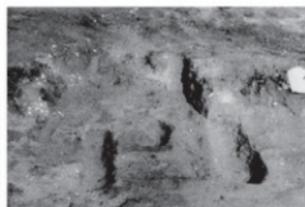


図56 H38号住居址 (2)

出土遺物には須恵器・灰釉陶器・土師器、鉄製鎌・刀子、古銭、軽石製凹石・安山岩製磨り石がある。灰釉陶器、須恵器、土師器は平安時代の土器の混入とみられる。22の「太平通寶」（初鑄年976年）と住居址北東から出土したという「五銖銭」（初鑄年24・581年）（現在所在不明）を含む古銭10枚は後代の混入品とみられる。本址に伴う土器は、1の須恵器杯蓋で、丸底である。土師器杯はいずれも丸底で、底部へラ削りされている。土師器甕は胴部に膨らみを持ち、へラ削りされる。これらより古墳時代後期の7世紀代の住居址とみられる。



H38号住居址 完掘



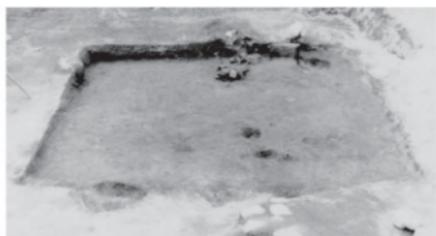
H38号住居址 カマド堀方

33. H39号住居址 (第I地区)

コ9グリッドにあり、P123・P124に切られ、H45・P259を切る。南北4.14m、東西4.04mの方形を呈する。壁最大長は26cmである。カマドを北壁中央にもち、火床と煙道を残している。カマド東脇と南東に灰の範囲が見られた。ピットは3個検出され、南壁中央下に小ピット、P2は中央より南に長径32cm、深さ12cm、P3は北東隅にあり、円形で径46cm、深さ16cmを測る。

出土遺物には灰釉陶器・須恵器・土師器、鉄製品がある。灰釉陶器は碗の破片で、口縁端部は外反し、灰釉はハケ塗りである。色調は黒味を帯びる。2の須恵器杯は軟質で、口縁が長く底径が5cmと小さい。土師器は杯・碗・皿・甕がある。14の皿の見込みには径4mmあまりの焼成前穿孔された小孔がある。甕はロクロ甕で、胴上部にロクロ痕が残る。

これらより本址は9世紀後半あたりとみられる。



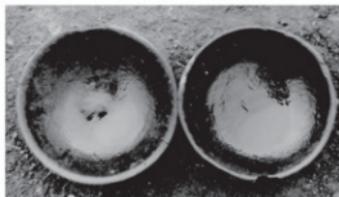
H39号住居址 完掘



H39号住居址 カマド



H38・H39・H45・H46号住居址 完掘 (西より)



(右側が9の土師器杯である。左側の土師器杯は現在所在不明である。P3の南縁出土。) (約1:4)

H39

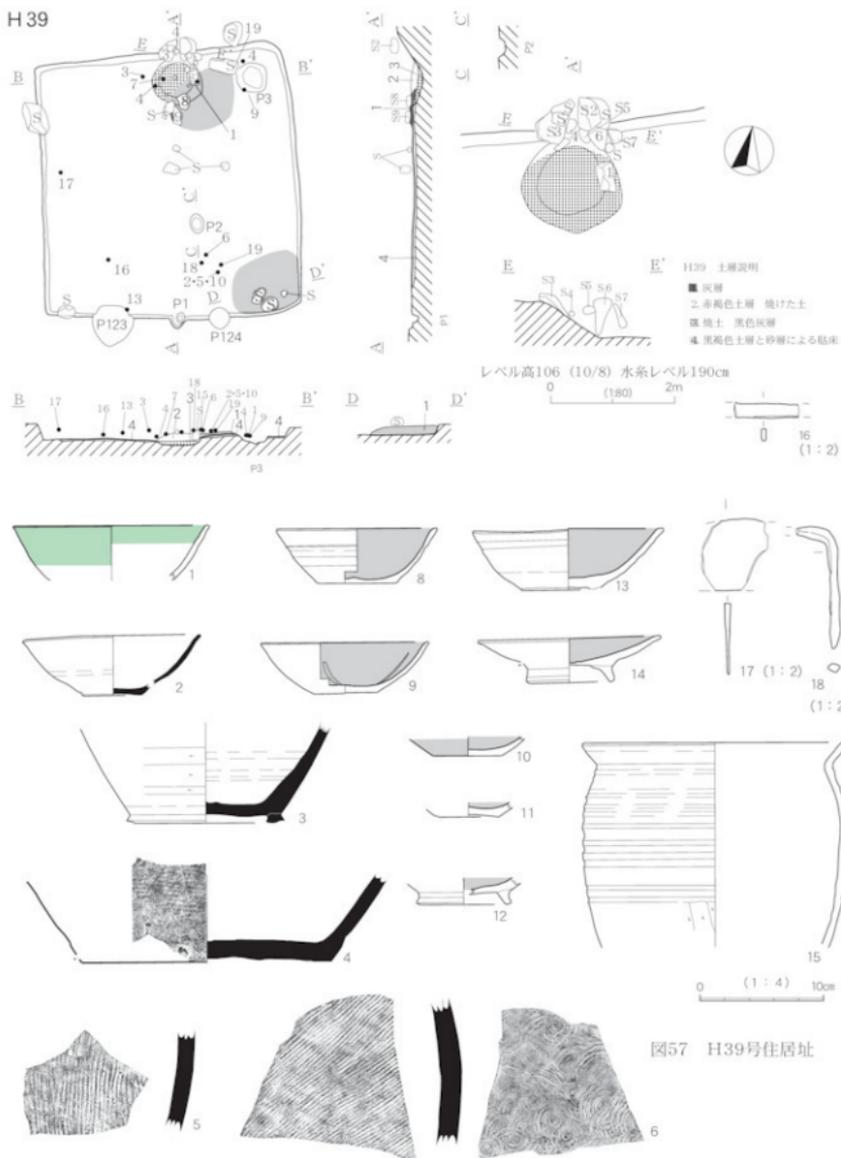


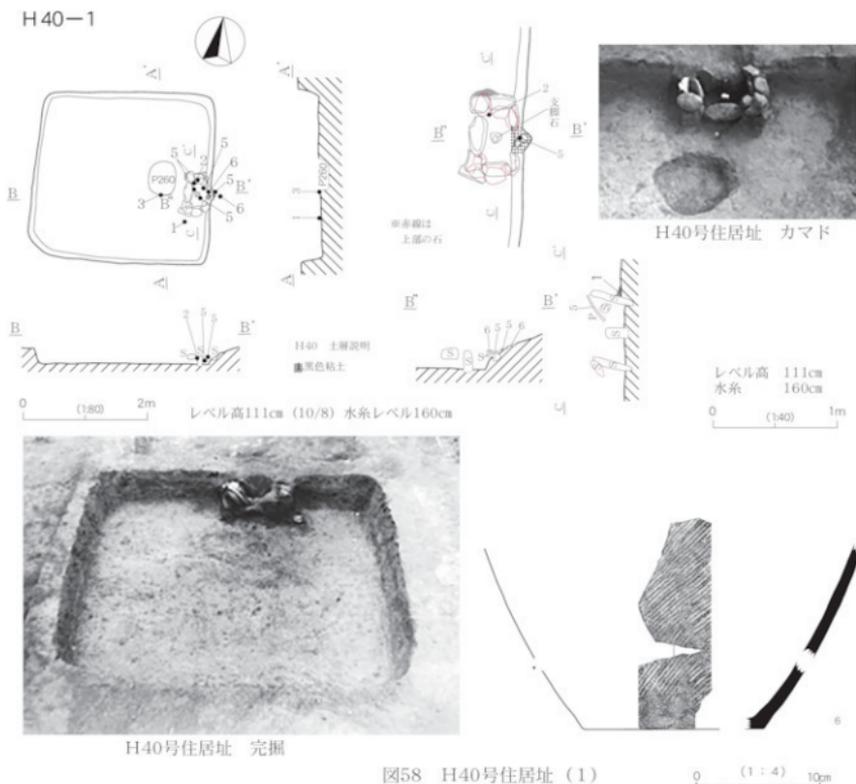
図57 H39号住居址

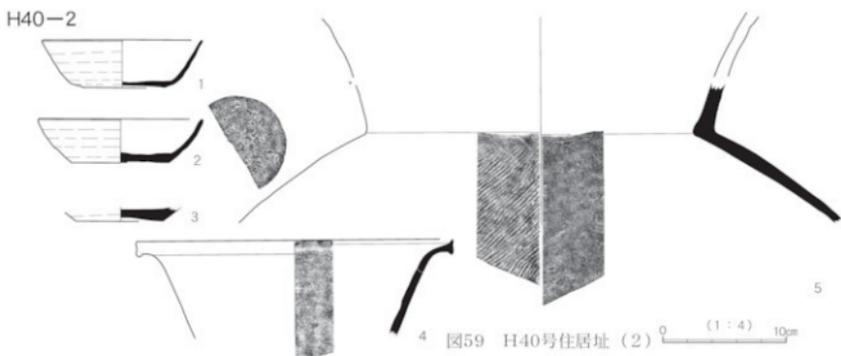
34. H40号住居址 (第Ⅱ地区)

ノ20グリッドにあり、P260に切れられ、H32号住居址を切る。規模は南北2.62m、東西2.74mを測る。壁最大残高は36cmである。カマドは東壁中央に設けている。幅56cm、奥行き40cmで、割石を組んでカマドを構築し、粘土を貼っている。カマド焚口の天井石は軽石である。中央に幅8cmの支脚が立ったまま検出された。火床より15cm出ている。煙道部は焼けているが、火床には焼土はなかった。柱穴は見られない。

出土遺物には須恵器がある。1の須恵器杯は薄手で、底径が大きく深い。焼きは縮まり、底部は回転糸切りされている。壺は3個体実測した。4の口縁は口縁上部の外反りが強く、口縁帯を持っている。5の壺は大型で、口縁が大きく外反し、胴肩部は膨らみを持つ。

これらより、本住居址は奈良時代の8世紀代とみられる。





35. H43号住居址 (第I地区)

コ11グリッドにあり、H45・H46号住居址、P 256を切る。南北2.96m、東西2.54mを測り、壁高は最大で21cmを測る。隅丸長方形を呈し、北壁中央にカマドとみられると飛び出しがある。西壁下の中央には80×36×43cmの大きな石があり、住居の壁となっている。カマドは径68cmの円形範囲に窺む。カマド中央に礫(32×23cm)が浮いてあり、カマドの東には36×28cm、45×18cm、50×31cmの割石がほぼ一列に並んでいる。カマドの構築材であろうか。柱穴はない。

出土遺物には須恵器・土師器・石皿(台石)がある。2棟の住居址と重複しているため混入品があり、該当する土器は9・10の土師器椀であろうか。内面がナデ調整のみである。

これらより、平安時代の10世紀代の住居址とみられる。

H43

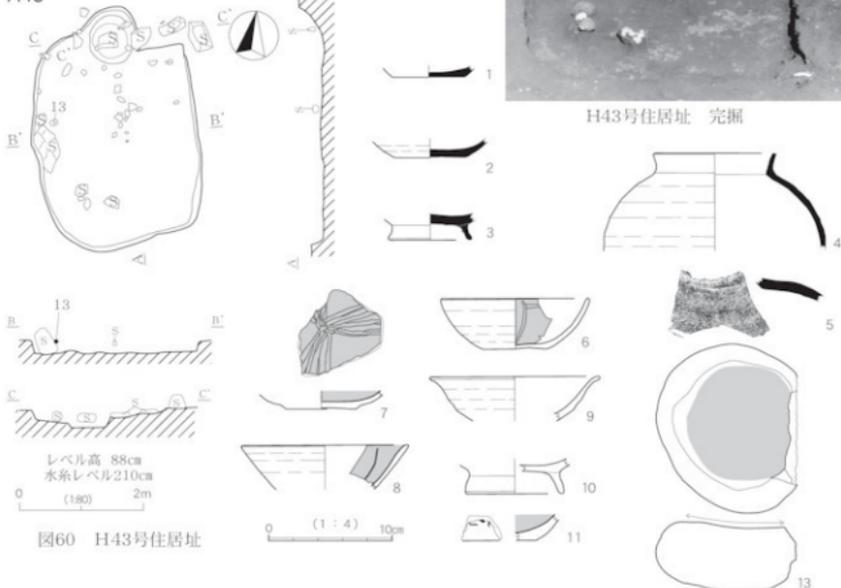
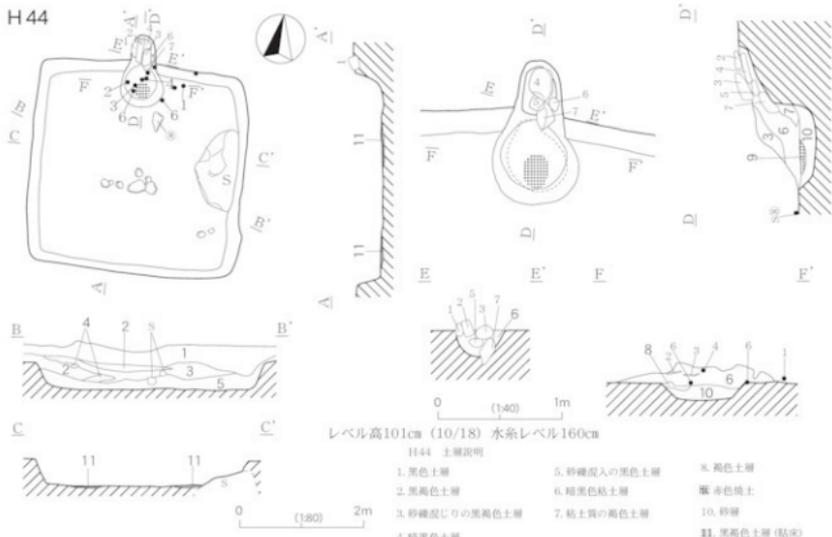


図60 H43号住居址

H44



H44号住居址 完掘



H44号住居址 カマド煙道



36. H44号住居址（第Ⅲ地区）

ラ46グリッドにあり、P215を切る。南北3.16m、東西3.17mの方形を呈し、壁最大残高は42cmを測る。カマドは北壁中央にあり、煙道の天井石がそのまま下に崩落した状態で検出された。カマド袖は残っており、火床幅70cmを測り、焼土が残っていた。東壁中央には132×58cmの巨石があり、壁となしている。柱穴はない。

出土遺物には須恵器と土師器、黒曜石製石鏃がある。須恵器には蓋・杯・甕か壺がある。3の須恵器は底部回転ヘラ削りである。土師器甕は武蔵甕で、口縁部形態が「く」字形を呈している。

これらより、本住居址は奈良時代8世紀前半の住居址とみられる。

37. H45号住居址（第Ⅰ地区）

サ11グリッドにあり、H39・H43号住居址に切られ、H38・H46号住居址を切る。南北4.62m、東西5.90mを測り、隅丸長方形を呈す。壁高は最大で、19cmある。カマドは北壁中央にあり、カマドの煙道と天井石が崩壊した状態で検出された。カマド袖は残っており、火床の幅は東西114cmを測る。焼土が10cmほど厚く堆積していた。4の須恵器四耳壺の破片がカマドの西脇と焼土上面から少し浮いて出土している。

主柱穴とみられるP1～P3があり、径28cm、深さ36～48cmの円形ピットである。東壁と北西隅には壁柱穴とみられるP4～P7の壁柱穴がある。

出土遺物には灰軸陶器、須恵器、土師器、鉄製の角釘と紐、安山岩製の磨り石がある。

灰軸陶器皿の1は、軸は漬け掛けされ、高台の断面は三日月形である。須恵器は壺と四耳壺がある。土師器は杯と椀がある。土師器杯は薄手で作りがよい。12は口径11.8cmと小さく、内面は横ナデ後わずかにミガキが施される。黒色処理はされていない。7・8・9の杯は黒色処理が色変しているもので、12も色変しているのかもしれない。底部は回転糸切りで、10・11の底部は手持ちヘラ削りされている。土師器椀の内面はミガキ黒色処理され、長脚の高台が貼付される。土師器杯または椀には墨書土師器が5点あり、14は「午」、11はおそらく「午」、22は「東」が判読される。

これらより本住居址は平安時代10世紀代とみられる。

38. H46号住居址（第Ⅰ地区）

コ11グリッドにあり、H43・H45号住居址に切られる。南北4.3m、東西4.46mを測り、隅丸方形を呈する。壁高は最大で21cmを測る。北壁中央より、西寄りの床面に焼土範囲があり、カマドとみられる。ピットは4個検出される。P1・P4が主柱穴であろうか。P2は116×98cmの楕円形で深さ28cmである。上面にH43号住居址のカマドが位置する。P3は径64cmの不製円形で、径28cmの円形プランがさらに深くなっている。

出土遺物には灰軸陶器、須恵器、土師器がある。灰軸陶器椀は施釉され、高台は断面三日月形である。須恵器は杯と壺か甕の胴部片があるのみである。3の土師器鉢は歪んでおり、外面の口縁部はロクロナデされ、下部はヘラ削りされている。4の土師器杯は内面を木目のヘラ小口でナデしており、ハケ目があり、底部回転糸切りされる。5の土師器杯は内面ナデ調整され、6本の暗文を放射状に施し、口縁付近のみ横方向にミガキを施す。底部回転糸切りであるが、軽いヘラナデが施されている。墨書があり判読不明だが「氏」に見える。また12・13の土師器杯または椀の口縁に墨書があり、12は「東」であろうか。土師器椀の内面はミガキ黒色処理され、8・9・11は断面三角形の高台が貼付されている。15・16の土師器甕の底部は15は回転糸切りで、胴部下部はヘラ削りされている。16は底部ヘラナデされ、胴下部はロク口痕である。

これらより本住居址は平安時代9世紀後半とされよう。

39. H47号住居址（第Ⅲ地区）

レ47グリッドにあり、F10に切られる。南北3.26m、東西3.24mを測り、方形を呈す。壁最大高は48cmを測る。北壁中央にカマドを持ち、燃焼部が北壁ラインより突出し、さらに煙道が伸びている。燃焼部の幅は下端80cm、カマドと煙道で長さは160cmを測る。カマドの天井石とみられる礫がカマドの前面に流れ出ている。9の須恵器壺は大型品で、崩壊したカマド上部を破片が覆うような状況で出土している。ピットは検出されていない。

H45-1

■ 灰・炭化物範囲



H45 土層説明

1. 灰層 しまりなし。
2. 炭化物層
3. 焼土層 やや粘性あり。
4. 赤褐色土層 焼土
5. 黒色土層 灰・焼土からなる層。
6. 黒褐色土層 焼土の影響を受けたため赤味を帯びている。砂粒子を包含、粘性は弱い。(カマド裏方)

レベル高91cm (10/18) 水系レベル100cm (180) 2m

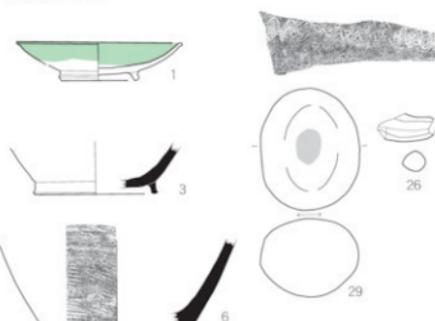
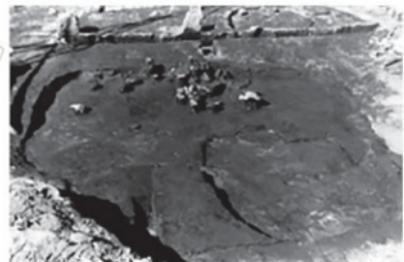


図62 H45号住居址 (1)



H45号住居址 カマド

0 (1:4) 10cm

H45-2

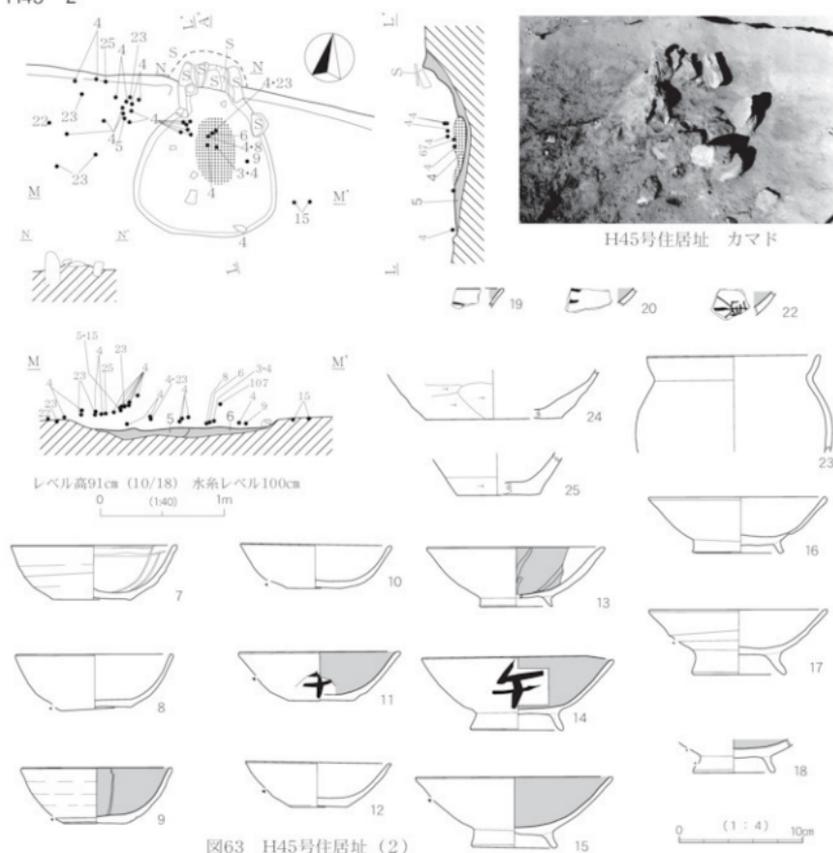
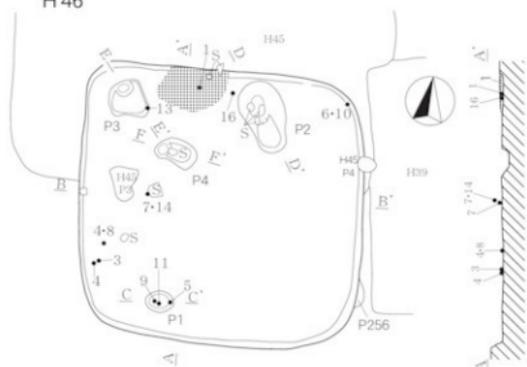
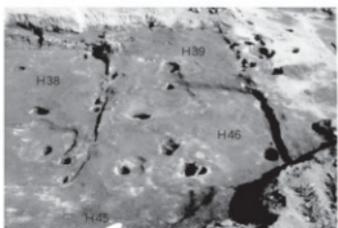


図63 H45号住居址 (2)

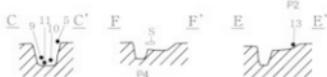
H46



H46号住居址 完掘



H46号住居址 (西より)



H46 土層説明
 1. 焼土・灰
 2. 黒褐色砂粒層
 覆土と地山の混合土。
 しまりなし。

レベル高91cm (10/25) 水糸レベル120cm (180) 2m

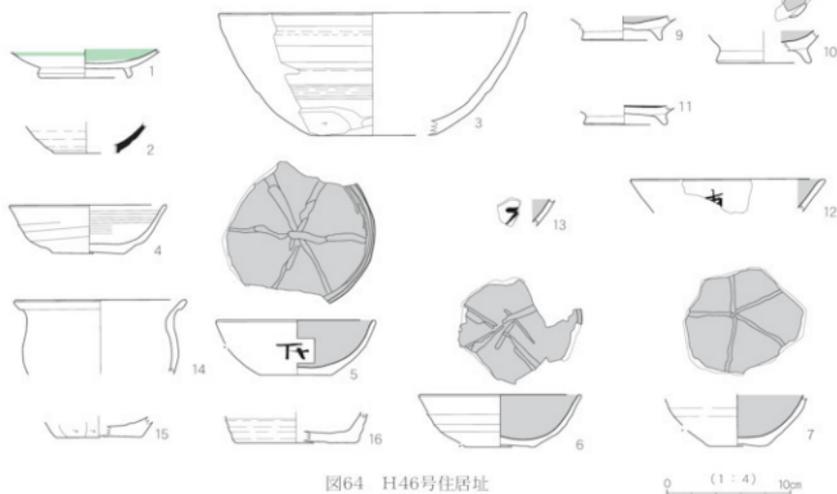


図64 H46号住居址

H47-2



図66 H47号住居址(2)

出土遺物には須恵器、土師器がある。須恵器は壺・蓋・杯・高台付杯が出土し、須恵器が大半を占めている。7の須恵器壺は小型品で、高台が貼付される。9の須恵器壺は大型品で、口縁上端と底部を欠いている。胴部外面は平行タタキ目である。5の高台付杯は杯部が深く、底部回転糸切り後、高台が貼付されている。6は口径18.5cmの大きいものである。底部回転ヘラ切り後高台が貼付され、内面見込み面は使用により摩耗している。土師器杯は内面ミガキ黒色処理され、底部は手持ちヘラ削りされる。外面に2文字の墨書があるが判読不明である。口縁を欠いて土板として再利用された可能性もある。土師器甕は口縁部を欠いているが武蔵甕である。

これらより本住居址は奈良時代8世紀後半とみられる。

40. H48号住居址(第三地区)

ラ43グリッドにあり、M6～M8の溝址に切られ、H50を切る。南北2.76m、東西2.47mを測り、隅丸長方形を呈す小型住居である。最大壁高は36cmである。カマドは北壁中央にあり、住居址内にカマドの構築材とみられる礫がある。カマド火床の幅は62cmで焼けた痕跡がある。ピットは検出されていない。

出土遺物には土師器・須恵器と212.8gの鉄滓がある。1の須恵器蓋を除いて、土器はいずれも破片である。1・2の須恵器蓋はつまみ・身部ともに扁平で、1の口縁端部が明確な口縁帯ではなく全体に内湾気味である。土師器杯7は、底部手持ちヘラ削りされ「X」の刻書がされる。8の土師器甕の口縁部形態はやや「コ」字形を呈している。

これらより、奈良時代8世紀後半とみられる。

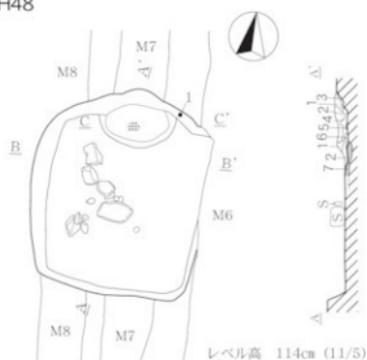
41. H49号住居址(第三地区)

リ41グリッドにあり、東は調査区域となり、M6号溝址・P242に切られる。南北3.48m、東西は2.58mを調査した。北東の壁に礫がみられ、カマドであろうか。南壁下に入り口とみられるピットが検出されている。

出土遺物には須恵器、土師器がある。須恵器は外面のロク口痕が顕著で、底部は糸切されている。須恵器高台付き杯は口縁部が直線的に開き、端部は外取気味である。底部回転糸切りを高台が貼付されている。土師器甕は武蔵甕で、口縁部形態が「コ」字形を呈している。

これらより、平安時代9世紀代とみられる。

H48



レベル高 114cm (11/5)

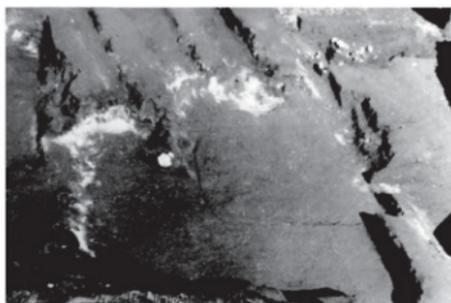
水系レベル 220cm

0 (180) 2m



H48 土層説明

1. 灰色土層
 2. 暗褐色土層
 3. 灰色混じり黒色土層
 4. 赤褐色境土層 (カマド跡層)
 5. 境域により赤色を呈する砂層
 6. 黒色土層を含む砂礫層
- 黒色土層(貼床)



H48号住居址 完掘 (南より、手前がH50)



H48号住居址 プラン (北より)



図67 H48号住居址

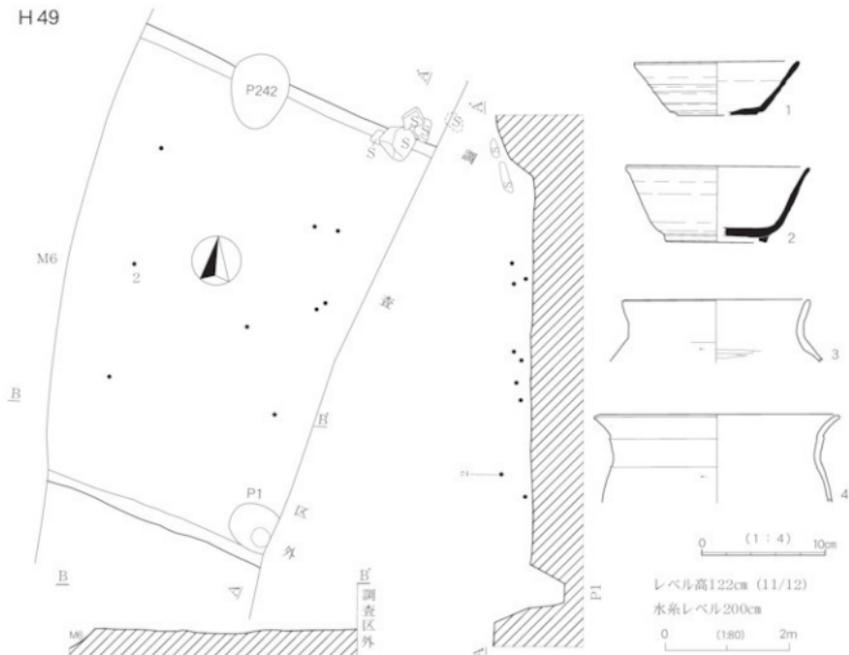


図68 H49号住居址

42. H50号住居址 (第Ⅲ地区)

ラ44グリッドにあり、H8・H48号住居址、M7～M9号溝址に切られる。南北2.98m、東西3.39mを測り、東西に長い長方形を呈す。壁高の最大は32cmを測る。カマドが北壁中央よりやや西寄りにあり、H48号住居址に東側を壊されている。灰色の粘土と炭化物・灰層が残っている。ピットは検出されていない。

出土遺物には須恵器の甕の胴部片と土師器小型壺がある。土師器小型壺は口縁が外反し、胴部は厚手で、外面は横方向にヘラ削り後ミガキが施される。

これら遺物で本住居址の年代は明らかにできないが、H8・H48号住居址(奈良・平安時代)との重複関係から2棟より古い古墳～奈良時代の住居址である。

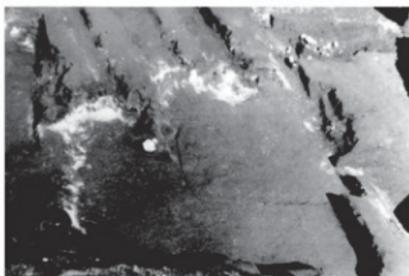
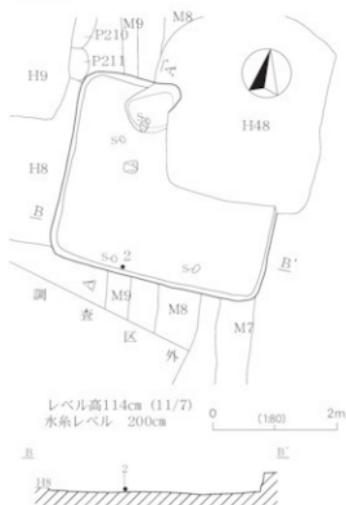
43. H51号住居址 (第Ⅲ地区)

レ43グリッドにあり、M7号溝址・P241に切られる。南北3.16m、東西2.14mを測り、隅丸長方形を呈する。最大壁残高は21cmである。カマドは東壁中央にあり、カマドの構築材が崩壊したとみられる礫が床面にみられ、焼土範囲が検出された。西壁下には長径76×短径60cmの楕円形の落ち込みがあり、深さは16cmを測る。貯蔵穴であろうか。

出土遺物には須恵器杯と土師器杯、流紋岩製の砥石がある。須恵器杯はロク口痕が残り、底部は回転糸切りである。2の土師器杯は内面に暗文様の放射状の雑なミガキが施され、黒色処理される。外面にヘラの小口によるロクロナデがなされている。底部は回転糸切りである。

これらより平安時代の9世紀代の住居址であろうか。

H50



H50号住居址 完掘（手前）

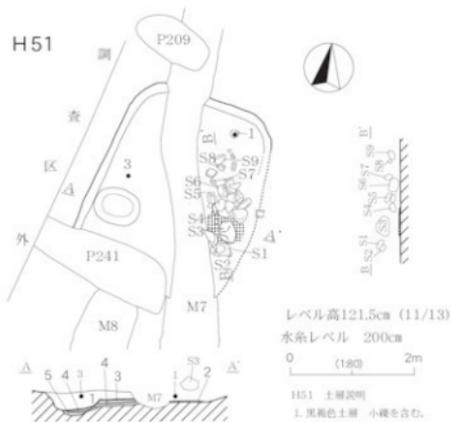
H50 土層説明

1. 灰色層
2. 黒色土層 砂を含む。
3. 炭化物層
4. 灰層
5. 黒褐色土層 (貼床)



図69 H50号住居址

H51



H51号住居址 カマド付近（西より）

H51 土層説明

1. 黒褐色土層 小礫を含む。
2. 焼土
3. 灰 (貼床)
4. 黄褐色土層
5. 黄色砂礫混黒褐色土層

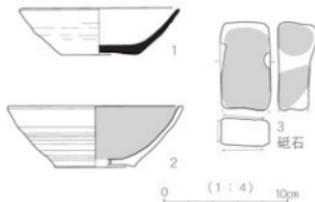


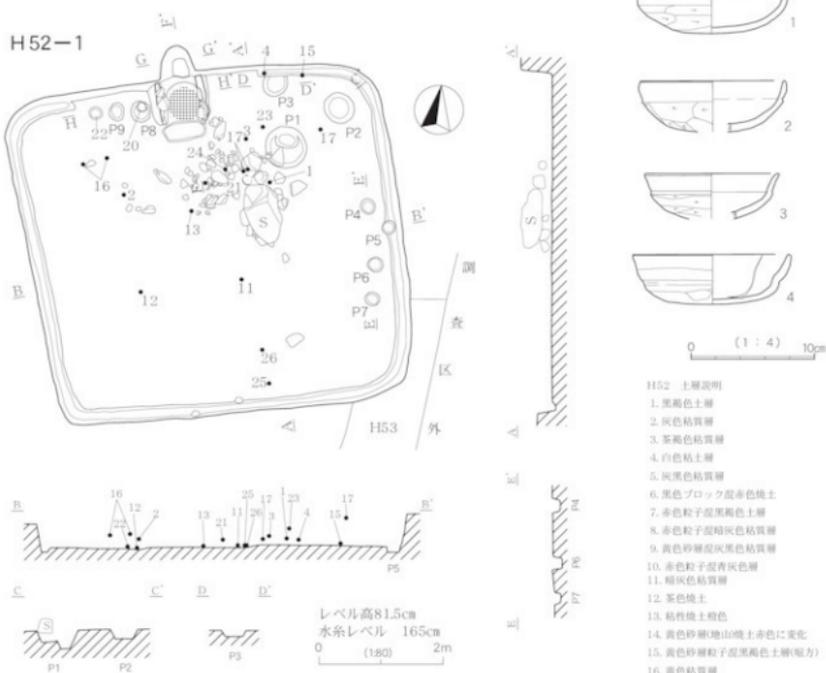
図70 H51号住居址

44. H52号住居址 (第Ⅱ地区)

×18グリッドにあり、H53号住居址に切られる。南北5.38m、東西5.75mを測り方形呈す。壁最大高は46cmを測る。カマドは北壁中央にあり、焚き口の天井石は前に落下し、両袖石は残っていた。カマドの袖幅94cm、内幅で62cm、燃焼部の奥行き70cmを測る。周溝がカマド付近を除いて壁下にめぐっている。柱穴はP1が主柱穴とみられ、ほかには3本あったと推測される。カマドの西には2個の浅いピットP8・P9と22の土器が並んでいる。すぐ脇のP8(円形、径34cm、深さ12cm)内には20の長胴甕が正位に立った状態、P9の西には22の甕がやはり正位に置かれている。20・22ともに底部が欠けており、器台として利用したようである。P9は円形で径28cm、深さ12cmと浅いピットで、いずれも甕などを置くためのものとみられる。北東には円形で径16cmの浅いピットがある。P3・P2も同様の穴であろうか。

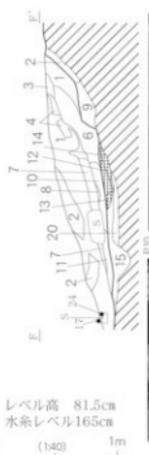
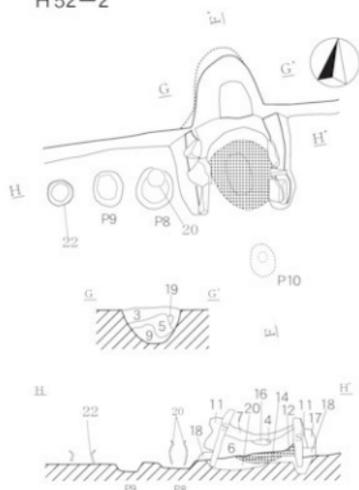
出土遺物には土師器、鉄製品がある。鉄製品は鎌と刀子の破片である。土師器杯はいずれも丸底で底部はヘラ削りされる。1は口縁が内傾、内面ミガキ、2・3は丸底の底部から外稜をもって屈曲して口縁は直立し、内面ナデ調整のみである。1~3は薄手で橙色である。4は丸底から口縁が立つが、稜は明確ではなく、底部の丸みが少なく扁平である。内面の暗文は放射状に施文される。甲斐系であろうか。6~10は内面黒色処理され、7・10は内外黒色処理される。11の高杯杯部内面も黒色処理されている。20~22は長胴甕で、20と22は器台としてカマド脇で再利用されていた。16・17は丸胴甕である。15・19は頸部がくびれ、口縁が外反する壺とみられる。内面雑なミガキ、外面はミガキ調整される。14の小型甕または鉢は内面ナデ、外面はミガキ調整される。甕・壺類はいずれも厚手である。

これらより本住居址は古墳時代後期7世紀代の住居址であろう。



- H52 土層説明
1. 紫褐色土層
 2. 灰色粘質層
 3. 茶褐色粘質層
 4. 白色粘土層
 5. 灰黑色粘質層
 6. 黑色ブロック層赤色焼土
 7. 赤色粒子混赤褐色土層
 8. 赤色粒子混暗灰色粘質層
 9. 黄色砂層混灰黑色粘質層
 10. 赤色粒子混赤灰色層
 11. 暗灰色粘質層
 12. 茶色焼土
 13. 粘性焼土褐色
 14. 黄色砂層地山焼土赤色に変化
 15. 黄色砂層粒子混紫褐色土層(堀方)
 16. 灰色粘質層
 17. 黄土色粘質層
 18. こげ紫色粘質層
 19. 赤色焼土ブロック
 20. (堀方)

H52-2



H52号住居址 カマド (東より)



H52号住居址 完掘 (西より)

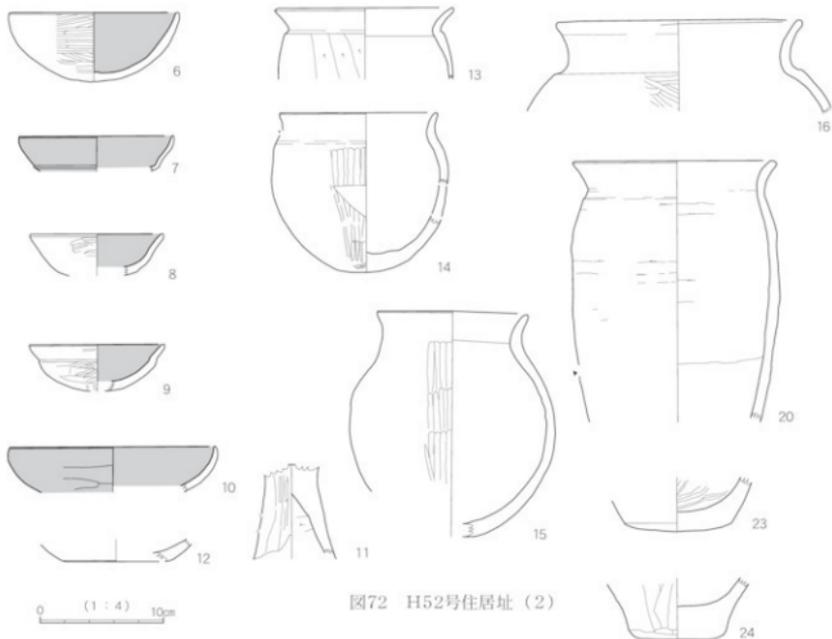


図72 H52号住居址 (2)

H52-3

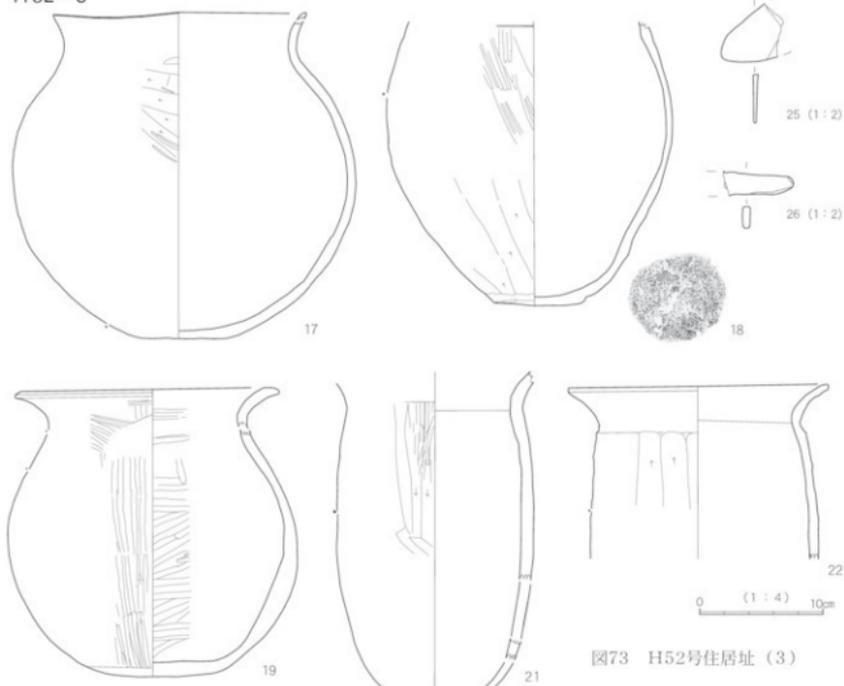


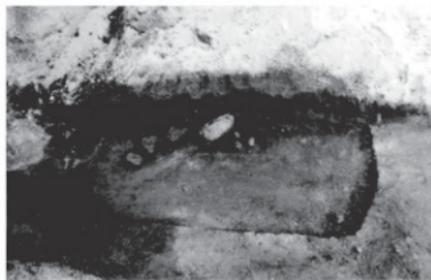
図73 H52号住居址(3)

45. H53号住居址(第II地区)

ニ17グリッドにあり、東側は調査区域外のため住居址の西端のみを調査している。H52号住居址を切る。南北3.56mを測る。東西は1.12mを調査した。調査区域内にカマドは検出されていない。柱穴はない。

出土遺物には土師器と緑釉陶器がある。緑釉陶器皿は破片で高台が欠損している。土師器は杯、碗、甕がある。1の土師器杯は内面ミガキ黒色処理され、底部は回転糸切りされる。口縁端部に2cmほど欠けて口縁外面に煤が付着している。灯明皿として使用されている。2の碗は内面に暗文を施し、黒色処理される。「ハ」の字に高台が貼付されている。5の小型甕の外面はハケによる横ナデである。6の甕はロクロ甕である。

これらより本住居址は平安時代10世紀代の住居址であろう。



H53号住居跡 完掘(西より)

H53

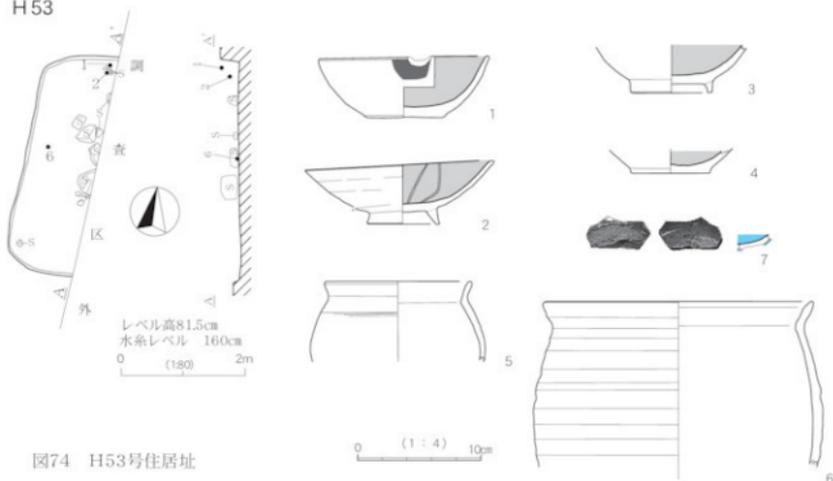


図74 H53号住居址

第2節 掘立柱建物址

1. F1号掘立柱建物址 (第I地区) (「高床式遺構」と概報で報告)

ソ13グリッドにあり、単独ピットと重複するがF1掘立柱建物址内は遺構名を別に付けていない。溝持ちの3間×3間の桁行6.96m、梁間4.92mの総柱の掘立柱建物址である。桁行柱間2.32m、梁間柱間1.64mの東西棟である。溝は幅72~108cm、深さは40cm前後で、人為埋土される。柱穴はP1~P12が溝に沿い、ピットの形態は隅丸方形・長方形を基調とする。最大径88~180cmと大きな堀方である。深さは64~127cmを測る。P15・P16・P19・P20も中の柱とみられ、円形基調で径80~112cm、深さ26~65cmを測る。このほかのピットP14・P13・P18・P21は大きく、深いピットであり、他の掘立柱建物址も考えられる。柱痕は意識されていないため検出していない。

出土遺物には須恵器と土師器がある。8の壺は「高床P13」の注記があり、7はこの地区の「第4」、他は「高床」の注記で上がっている。須恵器は杯蓋が2点あり、小型品で天井部は回転ヘラ削りされ丸味を持ち、口縁は内湾する。土師器杯はいずれも丸底を呈し、底部はヘラ削りされる。7・8は土師器壺である。9の土師器甕は厚手で、外面ヘラ削りされ、口縁が外反する。

これらより、本址は古墳時代後期7世紀代の掘立柱建物址であろう。

2. F2掘立柱建物址 (第I地区)

ク2グリッドにあり、H1号住居址を切る。報告書段階で組んだ掘立柱建物址で、2間×2間の総柱とみられる。H1号住居址と重複するピットは意識されておらず住居址と一緒に掘り下げている。H1号住居址は古墳時代であり、4の底部回転糸切の須恵器杯がH4の注記になっている。4は平安時代の土器であり、F2号掘立柱建物址に帰属するとした。桁行3.6m、梁間3.2mで柱間は桁行1.8m、梁行き1.6mである。柱穴の短径60~100cm、深さ36~48cmを測る。

出土遺物には須恵器・土師器がある。2~5の須恵器杯いずれも軟質で底部回転糸切である。4の須恵器杯はH1住居址から出土したもので、F2号掘立柱建物址が総柱とすれば、中央のピットに当たる。外面には墨書があり、則天文字の「天」の下部をとったような字である。土師器杯は内面黒色処理され、底部は回転糸切である。

これらより本址は平安時代9世紀代であろう。

3. F 3号掘立柱建物址 (第I地区)

ク1グリッドにあり、H1を切る。総柱で2間×2間で桁行4.8m、梁間4.72mを測る。報告書段階で組んでいる。桁行柱間2.4m、梁間柱間2.375mを測る。柱穴は隅丸方形ないし隅丸長方形を呈し、短径で76~126cmを測り、深さは22~48cmを測る。

出土遺物には須恵器蓋と壺がある。須恵器蓋は扁平で、口縁は短く膨らみを持っておられる。これらより、奈良・平安時代の掘立柱建物址とみられる。

4. F 4号掘立柱建物址 (第I地区)

ケ3グリッドにあり、側柱の掘立柱建物址で、5間×1間で、桁行8.1m×梁間3.2mを測る。東側柱穴は溝が連結する。南北棟で、桁行柱間1.62m、梁間柱間3.2mを測る。柱穴は小型のP33は長径64×短径44cmであるが、最大の柱穴は径158cmを測る。深さは最大で63cmを測る。東側にある溝は幅68~100cmを測り、深さは不明である。

出土遺物は須恵器と土師器がある。須恵器杯は厚手で、底部回転糸切りである。2は土師杯はにぶい赤褐色を呈し、口径10.8cmと小振りである。外面は横ナデ後中位から下部に手持ちヘラ削りされ、底部手持ちヘラ削りされる。ヘラ削りはナデに近いものである。また内面は横ナデ後かすかではっきりしないが放射状に暗文が施される。甲斐型土器とみられる。

これらより本址は平安時代9世紀代であろうか。

5. F 5号掘立柱建物址 (第I地区)

カ3グリッドにあり、H3号住居址(平安時代)に切られ、H18号住居址(古墳後期)・F6号掘立柱建物址を切る。2間×2間で3.6m四方である。柱間は1.8mを測る。柱穴の規模は短径92~167cmを測り、深さは高さのわかるもので最大で70cmを測る大型柱穴である。柱痕は意識されていない。

出土遺物には須恵器がある。須恵器壺または甕・蓋・高台付杯がある。須恵器蓋の口縁は短く三角形に近い。須恵器杯底部糸切りである。

これらより奈良、または平安時代の初頭の掘立柱建物址であろう。

6. F 6号掘立柱建物址 (第I地区)

カ3グリッドにあり、H3号住居址・F5号掘立柱建物址に切られ、H18を切る。3間×1間、桁行4.8m、梁間2.64mを測り、桁行柱間1.6mを測る。南北棟である。F5号掘立柱建物址に切られるため、やや不明瞭である。

出土遺物には須恵器杯の口縁部があり、高台付杯で下部は緩い外稜をもって丸底気味になっている。硬質である。

これらより、奈良または平安時代初頭とみられる。

7. F 7号掘立柱建物址 (第I地区)

エ2グリッドあり、H18号住居址を切る。南は調査区域外であり、南に連続する可能性がある。3間×1間で、桁行5.04m、梁間2.96mである。桁行柱間は1.68mである。南北を溝が連結する溝持ちの南北棟の掘立柱建物址である。溝幅は60~96cmを測る。深さは不明。柱穴は短径で86~132cm、深さは40~54cmを測る規模の大きい柱穴である。

出土遺物にはP92から須恵器杯がある。底部は回転糸切りされるが底径7.6cmと大きい。外面に「真」と外面下部に墨書が横書きされる。もう一字あるようだが明確ではない。平安時代初頭か。

8. F 8号掘立柱建物址 (第II地区)

フ23グリッドにあり、P198に切られ、H22号住居址・P200・P202を切る。2間×2間の桁行4.52m、梁間3.84mを測る東西棟である。H22号住居址と重複するため、中央と北中央のビットを意識して検出していないため、側柱か総柱かはわからない。桁行柱間2.26m、梁間柱間1.92mを測る。柱穴は短径76~108cm、深さ68~82cmを測る。

出土遺物はない。

9. F 9号掘立柱建物址 (第III地区)

ル45グリッドにあり、P219に切られる。2間×2間の側柱で、桁行3.2m、梁行3mを測る。桁行柱間2.04m、梁間柱間1.8mの南北棟である。短径53~131cm、深さ41~110cmを測る。これも報告書段階で組んだ掘立柱建物址である。

出土遺物には須恵器と土師器がある。須恵器壺の口縁帯は明瞭で屈曲した端面である。土師器甕は武蔵襲の底部、底径の大きい器形である。

これらより、奈良時代の掘立柱建物址であろうか。

F 1

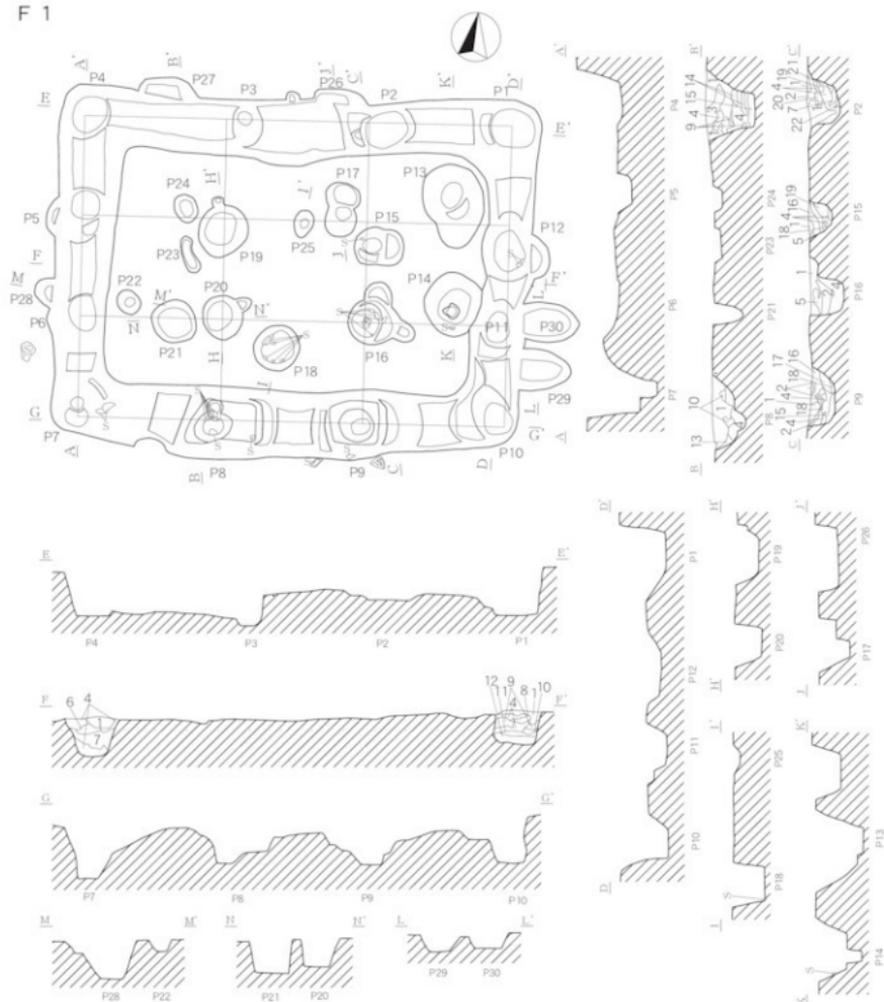


図75 F 1号掘立柱建物址 (1)

レベル高108cm 水糸レベル190cm

0 (180) 2m

F 1-2



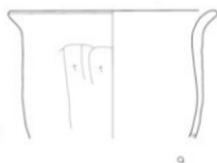
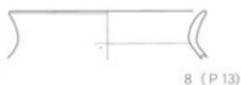
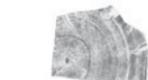
F 1号掘立柱建物址 (東より)



F 1号掘立柱建物址 (西より)



F 1号掘立柱建物址 (南より)



F 1 土層説明

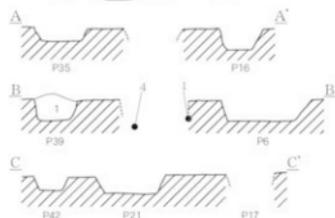
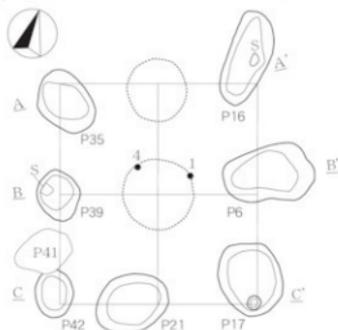
1. 茶褐色土層
2. 黄色砂粒底茶褐色土層
3. 砂礫皮
4. 黒色土層
5. ローム砂粒底黒色土層
6. ロームブロック底茶褐色土層
7. 黄色ブロック砂礫層
8. 黄色砂粒砂質土層
9. 茶色結核土層
10. 雜底茶色土層
11. 黄色砂層

12. 砂粒黒色土層
13. 黄色砂粒黄色土層
14. 黄色ブロック底茶褐色土層
15. 黒色土底黄色砂層
16. 暗茶褐色土層
17. 黄色土層
18. 黄色砂粒底黒色土層
19. ロームブロック・ローム土底黄色土層
20. 雜底黒色土層
21. 茶色土層
22. ロームブロック層

図76 F 1号掘立柱建物址 (2)

0 (1:4) 10m

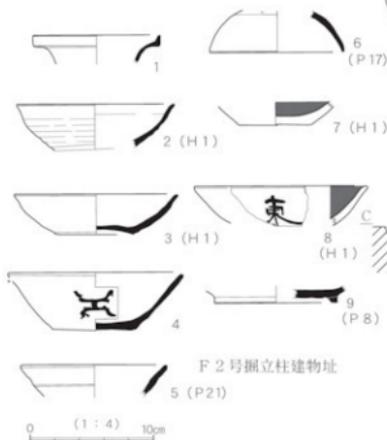
F 2 (P6・16・17・21・35・39・42)



レベル高80cm (8/8) 水糸は ϕ 130cm
0 (180) 2m

F 2 土層説明

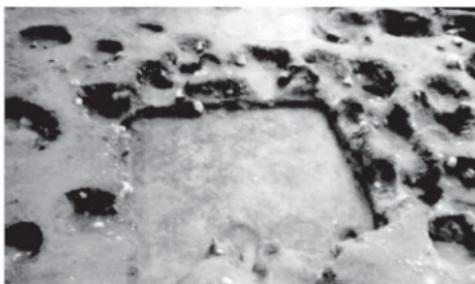
1. 黒褐色土層 灰炭の混入。



F 2号掘立柱建物址

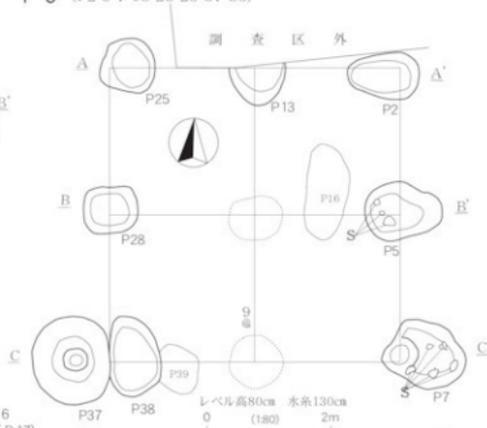
5 (P21)

0 (1:4) 10cm

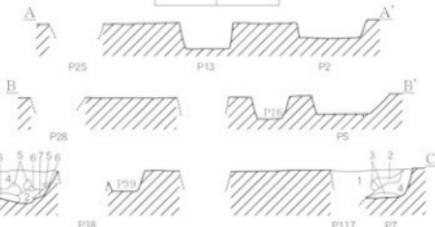


F 2・3号掘立柱建物址 (北より)

F 3 (P2・5・7・13・25・28・37・38)



レベル高80cm 水糸130cm
0 (180) 2m



F 3 土層説明

1. 黒褐色土と褐色土の中間土層
2. 黒褐色土層
3. 黒色土層
4. 褐色土層
5. 黄褐色砂質土層
6. 木炭まじりの黒色土層
7. 茶褐色土層



1 (P13)



2 (P7)

F 3号掘立柱建物址

図77 F 2・F 3号掘立柱建物址

F 4 (P27・29・30・33・38・67・68・70・72・74)

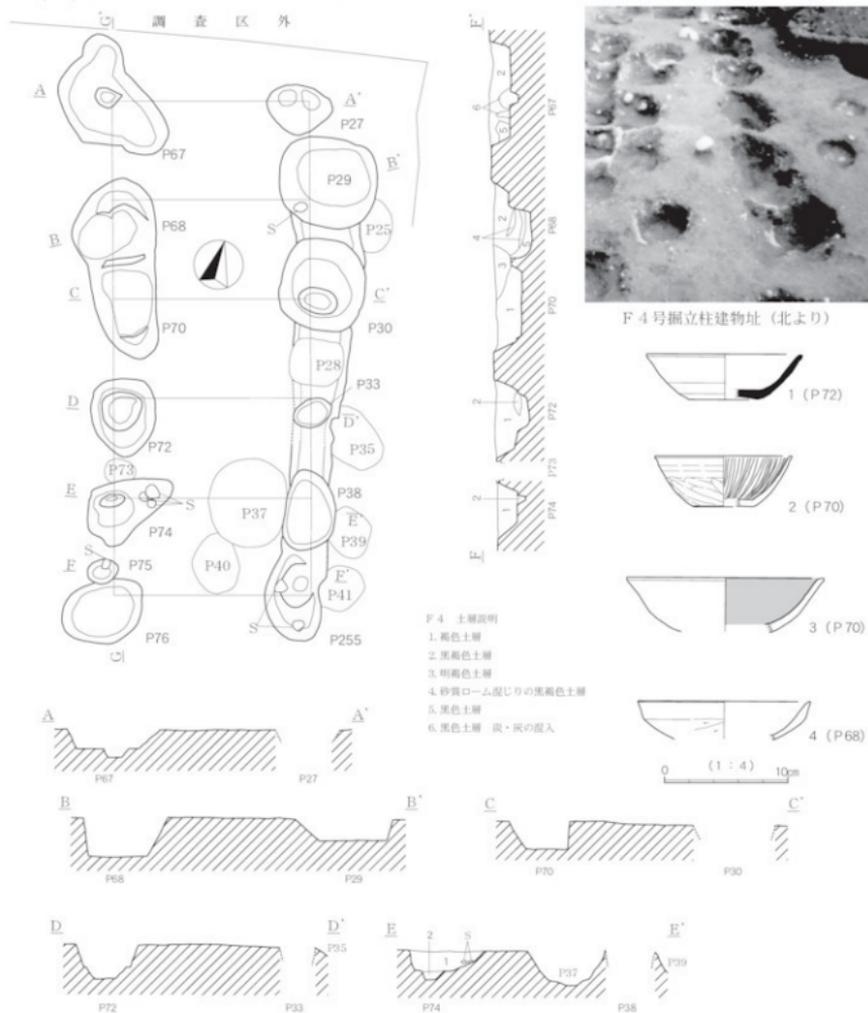
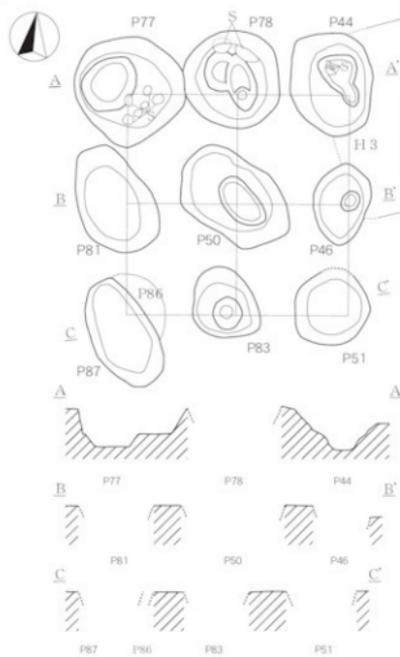


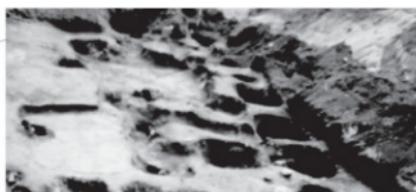
図78 F 4号掘立柱建物址

レベル高80cm (R/7) 水承レベル110cm
 0 (1:60) 2m

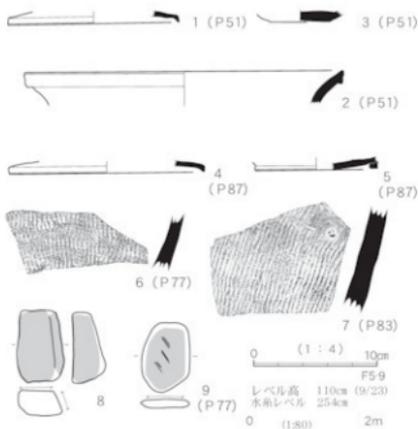
F 5 (P44-46-50-51-77-78-81-83-87)



F 5号掘立柱建物址



F 5号掘立柱建物址 (P44-46-50-51-77-78-81-83-87)



F 6 (P43-49-53-79-82-85-245)

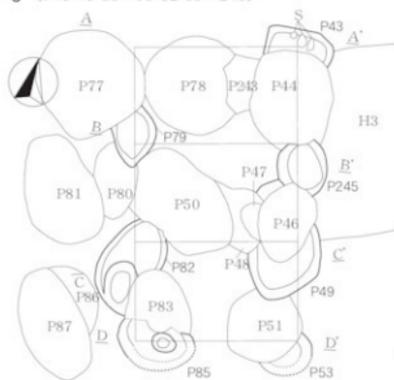
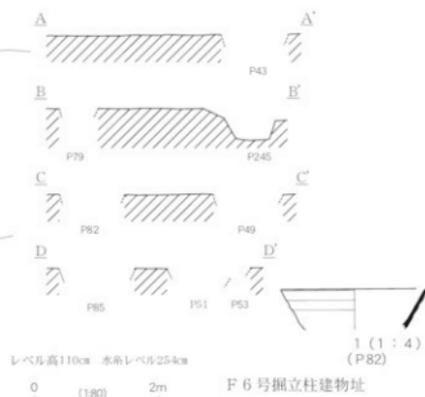


図79 F 5・F6号掘立柱建物址



F 6号掘立柱建物址

F 9 (P 212-214・218-220-222-225-226-227)

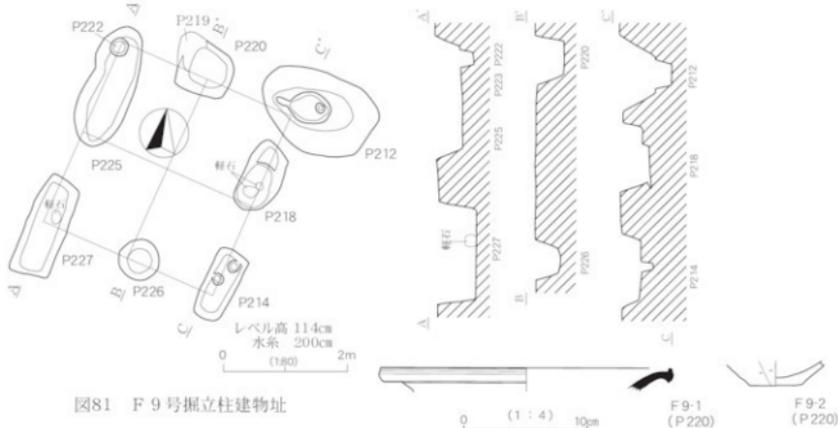


図81 F 9号掘立柱建物址

第3節 単独ピット

単独ピットは199個を数える。現場の調査の時は、F 1号掘立柱建物址が記載されるのみで、F 2～F 9号掘立柱建物址の8棟を新たに加えた。まだ掘立柱建物址に組めるものとみられる。

また柱穴というより、墓などの墓壇または土坑になるものも含まれている。しかし、深さや土層の記載がなく性格の判断ができないため、調査の時のまま単独ピットとして報告しておく。ここで遺物を出土するか特徴のあるピットについてみておきたい。

P 107は第I地区ウ9グリッドにあり、長軸91×短軸76×深さ17cmの隅丸長方形を呈す。礫が四角に壁際に配置されている。土層説明がないのでわからないが特別な用途が考えられる。

P 112は第I地区のキ11グリッドにあり、隅丸長方形に近い楕円形を呈する。長軸167×短軸75×深さ11cmを測り、土坑としての規模を持つ。実測したものに土師器杯3点と土師器椀1点がある。1の杯は口縁に煤が付着し、灯明皿として利用されたようである。底部は回転糸切される。1・3の杯内面はミガキ・黒色処理されている。2の杯は厚手・小振りの杯で、内面は横ナデ後わずかに放射状にミガキが施され、外面下部にわずかにヘラナデ(削り)がされている。1/5ほどで明らかではないが甲斐型杯または模倣とみられる。重複するH34号住居址は平安時代であり、それより新しい時期の資料である。10世紀代であろうか。

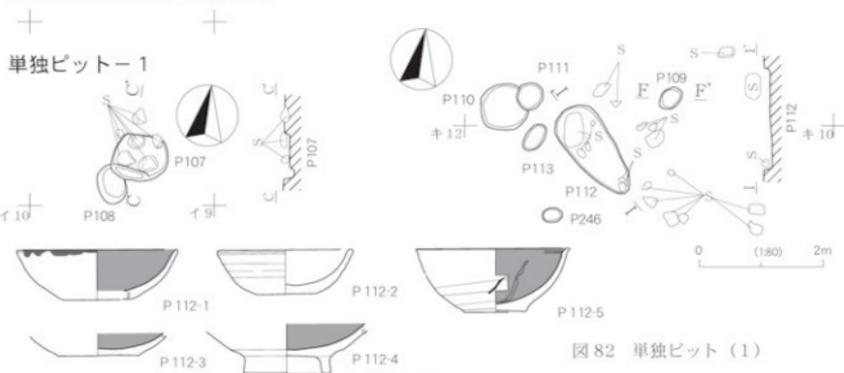


図82 単独ピット(1)

単独ピットー2

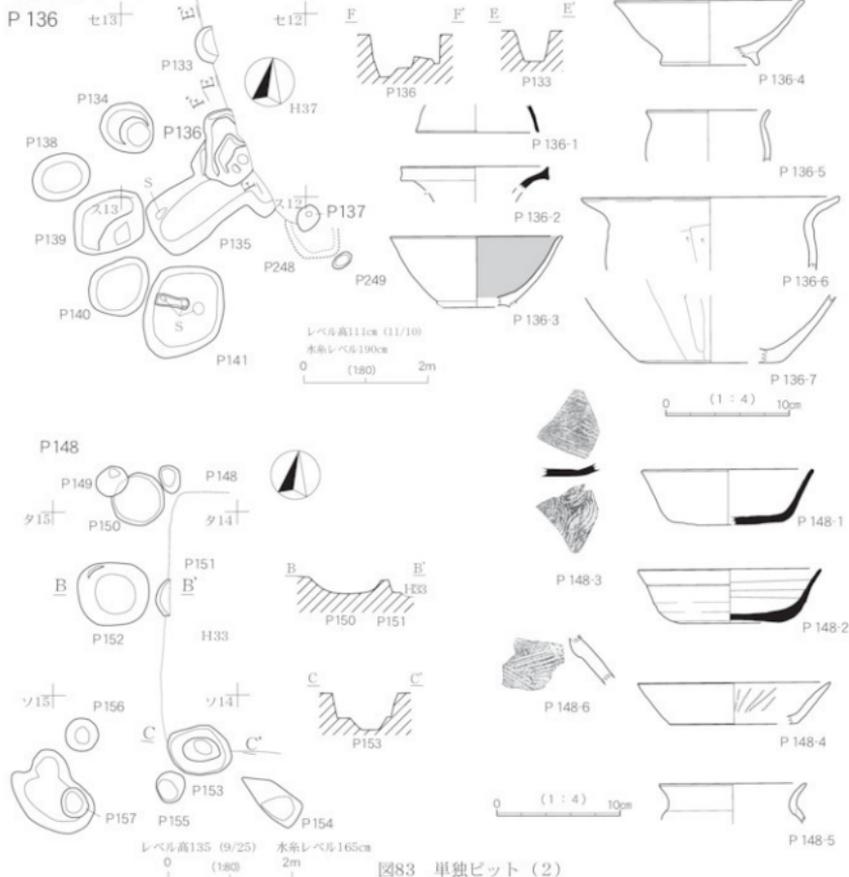


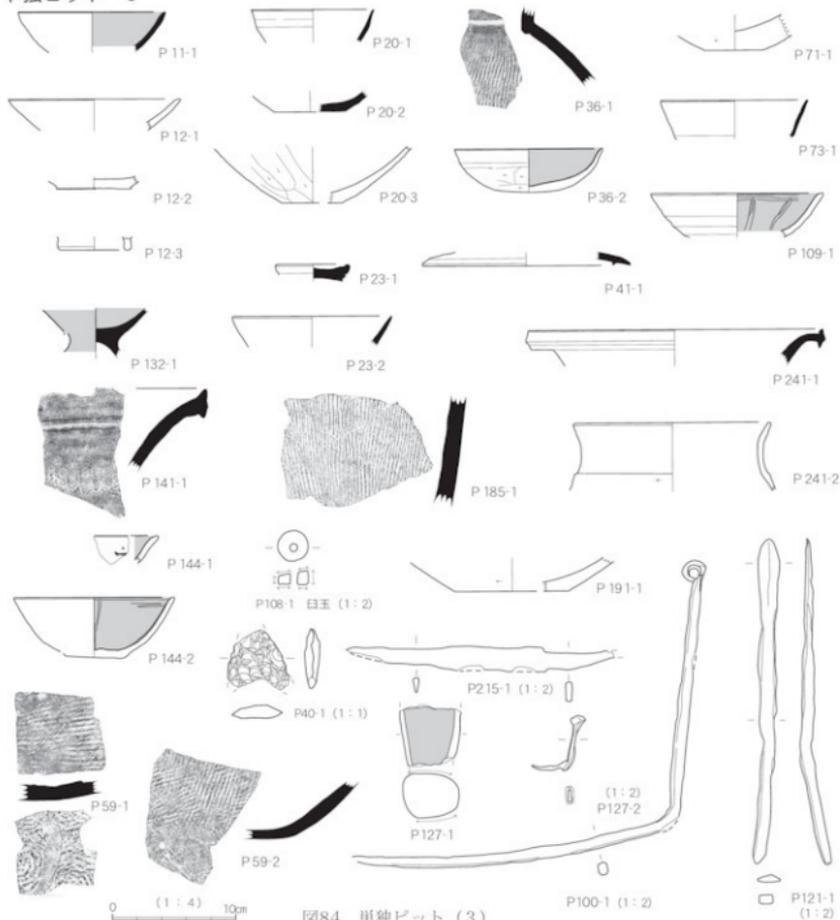
図83 単独ピット (2)

P136は第I地区のセ12グリッドにあり、H37号住居址、P135を切る。周囲にピットがあり、掘立柱建物址の可能性がある長径125×短径69×深さ71cmを測る。出土遺物は須恵器・土師器がある。136-3・4が該当する遺物で、他は重複する遺構のものとみられる。3・4は土師器碗で、杯部内面はミガキ黒色処理されている。これらより平安時代のピットである。

P148は第I地区子14グリッドにあり、長軸46×短軸34の楕円形で、深さはわからない。原因では北東にかけて焼土範囲の斜線が重なってかかっているが、これも高さの記録がなく厚さと上・下の位置がわからない。出土遺物には須恵器と土師器があり、1・2の須恵器杯は底径が大きく、丸底気味である。底部はヘラ切離し後回転ヘラ削りヘラナデされている。4の土師器杯は丸みのある平底で、内面口縁に暗文がある。

これらより奈良時代8世紀前半の土器である。周囲の焼土範囲と関係する遺物とみられるが、詳細はわからない。

単独ピット-3



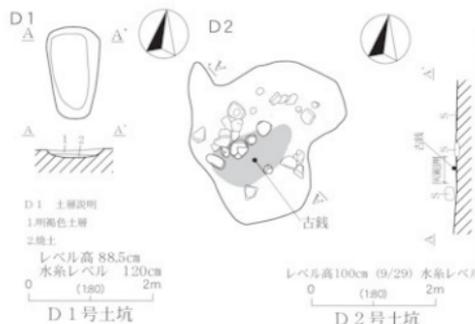
第4節 土坑

1. D1号土坑 (第I地区)

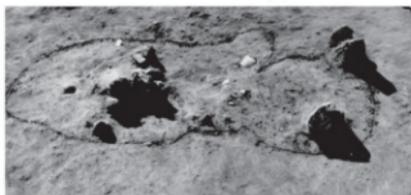
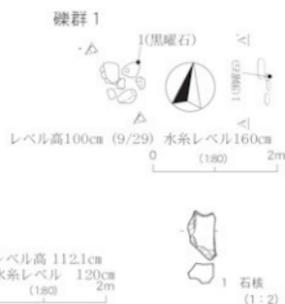
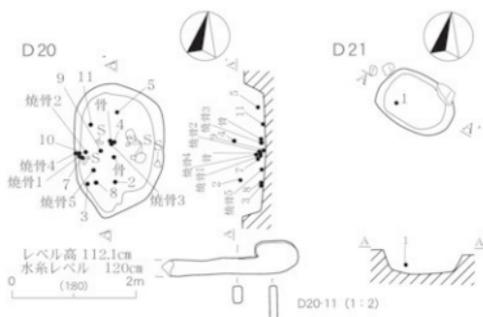
ク8グリッドにあり、H5号住居址を切っている。長軸1.52m、短軸88cm、深さ12cmで、隅丸長方形を呈す。焼土を含んでおり、特定の用途が推定される。遺物は出土していない。

2. D2号土坑 (第I地区)

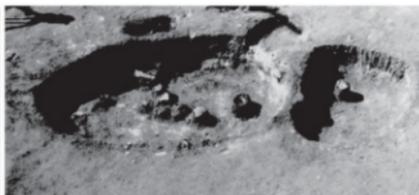
ソ10グリッドにあり、H37号住居址を切る。検出した形態は不整形であるが、長さは最大で2.5mを測る。底面で検出されたため本来の形態がつかめていない。中央に焼土範囲があり、銭が出土している。この出土銭の所在が不明になっており、銭種・時代はわからない。また焼土の周りに礫があり、中世にみられる火葬墓と近似している。遺体を焼いてそのまま墓とする場合、焼いた骨を再葬する場があったようである。骨の出土は確認されていない。



D2号土坑 (北より)



D20・D21号土坑 プラン (東より)



D20・D21号土坑 完掘 (東より)

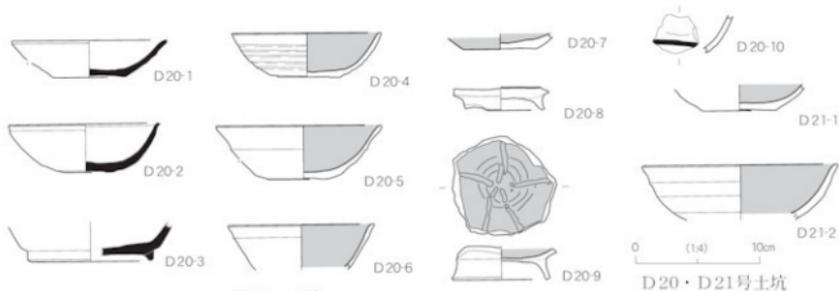


図85 土坑

D20・D21号土坑

3. D20号土坑（第Ⅰ地区）

シ13グリッドにあり、長径2.21m、短径1.47m、深さ48cmを測り、隅丸長方形を呈す。土層説明を欠いており、土坑の性格の詳細はわからない。焼骨片を底面から、須恵器・土師器の杯碗類、鉄製品を出土している。骨は哺乳類とされ、ヒトとは判明できなかった（付編 植月）が平安時代の墓塚と考えられる。

土器は須恵器と土師器がある。1・2の須恵器杯は小型で軟質、1は底部が同一方向へラ削り、2は底部が4.2cmと小さく糸切される。3の高台付杯は角のある高台で、焼成は比較的よい。土師器杯は内面ミガキ・黒色処理され、底部回転糸切で小型である。4の口縁は内湾し、5は口縁端部が外反する異なった器形である。2の須恵器杯と4の土師器杯の2点は出土地点が上面である。7は底部のみで黒色を内外呈し、底は糸切される。8・9の碗は口縁を欠き転用されたようである。10の外面には墨書があるが判読不明である。また鉄製品の用途はわかっていない。

これらより、平安時代10世紀前後とみられる。

4. D21号土坑（第Ⅰ地区）

シ13グリッドにあり、長軸1.29、短軸0.91m、深さ37cmを測る。上面の北東に礫を1個、西に礫2個を置いている。土坑が柱穴か土層説明を欠くのでわからないが、土師器杯・碗を出土していることからそのまま土坑とした。土師器杯は内面がミガキ・黒色処理で、底部は回転糸切され、底径が小さい。

これらより平安時代10世紀前後の土坑とみられる。

5. 礫群Ⅰ（第Ⅰ地区）

シ15グリッドにあり、H35号住居址を切る。礫を埋める堀方の範囲があるはずであるが、礫の記録のみであるため礫群とした。80×70cmの楕円形の範囲に礫が収まっている。黒曜石の石核が出土している。

根拠となる遺物が無いのでわからないが奈良時代の住居址を切っているので、奈良以降である。

第5節 溝址

1. M5号溝址（第Ⅱ地区）

テ10～ナ10グリッドにあり、南北方向の溝で4.92mを調査している。単独ビットP166・P169・P170を切る。幅68～90cm、深さ15～17cmを測り、断面形は箱形を呈する。覆土には小礫層があり、水の流れの痕跡とみられる。

出土遺物には須恵器と土師器がある。須恵器杯は底部の破片で、底部回転へラ切り離しをされた杯である。土師器は丸胴甕の底部である。外面ミガキ、内面ナゲ調整される。

これらより、奈良時代以降の溝址であろう。

2. M6号溝址（第Ⅲ地区）

レ41～ヤ43グリッドにある南北の溝で、19.24mを調査している。H48・H49号住居址を切っている。幅は3.64～4.36mと広く、深さは1.8から～2.2mを測る。断面形は緩やかな傾斜から中位で急に深くなっていく箱形である。Bセクションあたりが一番深いようである。この溝と類似した溝が上の城跡跡Ⅰ（岩村田小学校の児童館地点）で検出されている。

出土遺物には須恵器・陶器・金属製品と骨がある。須恵器は重複する竪穴住居址のものであろう。本溝に伴うものとしては、10の中世とみられる櫛描文のある褐釉瓶子の破片である。また、溝上面からは礫群と共に馬の骨が出土している。植月氏の考察によれば、最低でも2個体分あり、若齢（約5歳）と壮齢（約13歳）が含まれ、体高が小型（約118cm）の個体が1個体含まれるとしている。礫群は最上と中位にみられる。石積みが崩壊した痕跡であろうか。

中・近世-10陶器片で決定するのは根拠に欠くが、「溝状遺構」と注記された中世・近世-82があり、M6とは限らない遺物であるが中世としてもよいと考察される。

3. M7～M9号溝址（第Ⅲ地区）（平面は図7第Ⅲ地区全体図参照）

レ41～ヨ44グリッドにある南北の溝で、M6と並行して西に3本が並列している。

M7は幅52～96cm、深さ23～41cmを測る。M7の上面から獣骨が出土している。出土した須恵器杯と土師器甕は重複する竪穴住居址のものとみられる。

M8は調査区から始まる溝で、南は調査区域外、幅64～96cm、深さ7～15cmである。破片では土師甕・杯があるが実測遺物には須恵器があり、比較的底径のある大型品である。奈良時代とみられ、重複するH48号住居址の遺物であろう。

M9は幅20～48cm、深さは2～17cmと浅い。破片では土師器・須恵器があるが、実測個体はない。

M5~M8

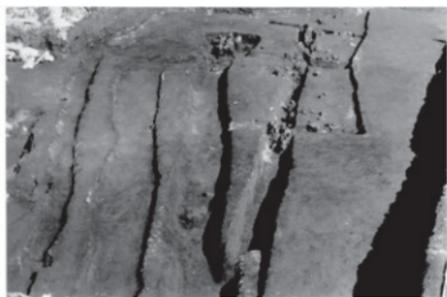
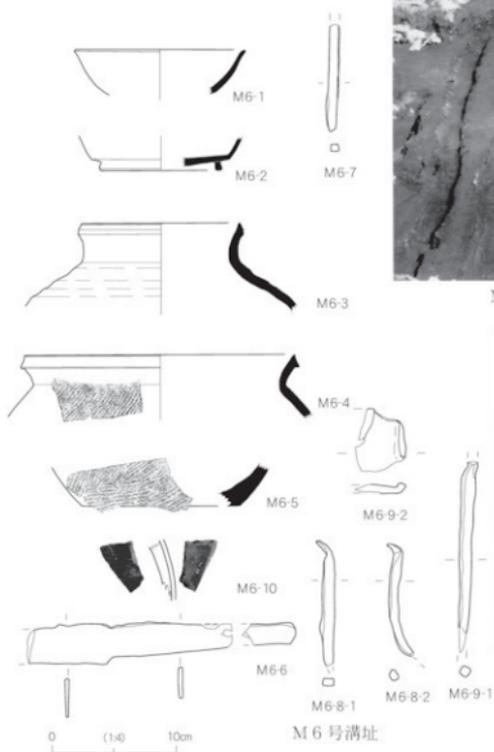
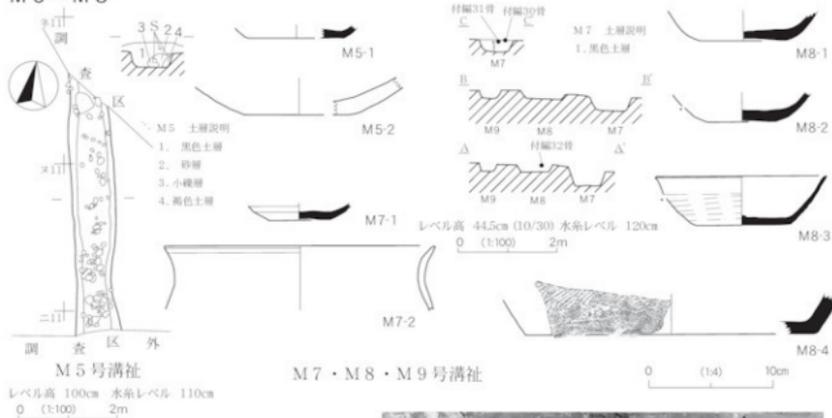


図86 溝址 (M5~M8)

第6節 グリッド出土遺物

1. 第I地区

2・3の土師甕・杯→H18号住居址、9須恵蓋→F2号掘立柱建物址、19須恵杯・20須恵杯(墨書)・25~28・34土師杯類(墨書)→H27号住居址、49須恵杯・52土師杯・54土師杯(墨書)→H24号住居址、66須恵器杯→H34号住居址。

サ15には金属製品が集中し、内面黒色処理された杯・椀類の平安時代の土器が共存する。128鉄製刀子・129青銅製巡方・130鉄製角釘付止め金具・131鉄製紡錘車・72土師杯・73と74土師椀・71須恵壺・78灰釉陶器壺→H42号住居址・P257。考察するに、「焼土(カマド)」と原因に記録があり、この高さがわからないがここにD20号土坑と同じ性格のものがあつたであろうか。北のシ15グリッドにも132の8の字形の鉄製品がある。129の巡方は平安時代とみられる。80と83~85土師器杯→D20号土坑。

2. 第II地区

ヌ・ネ12・13に平安時代の163灰釉皿、160・161(墨書)・162土師杯・202鉄製刀子→H14・H20号住居址、古墳時代の住居址上面に、平安時代遺構があつたと思われる。172・173ハ13須恵器杯・壺→H17号住居址、杯は丸底を呈し、受け部に立ち上がりを持つ。ヒ15・16には177土師杯・178土師台付き甕・217凹石(軽石)が、未調査のH56号住居址は古墳時代後期の住居址であろうか。187・188須恵高杯・205鉄製紡錘車→H32号住居址、189須恵器杯→P188、丸底の底部に「×」のヘラ記号があり、7世紀代とみられる。ニ20・21から182~184須恵器杯・180須恵器杯身(受け部

グリッド1

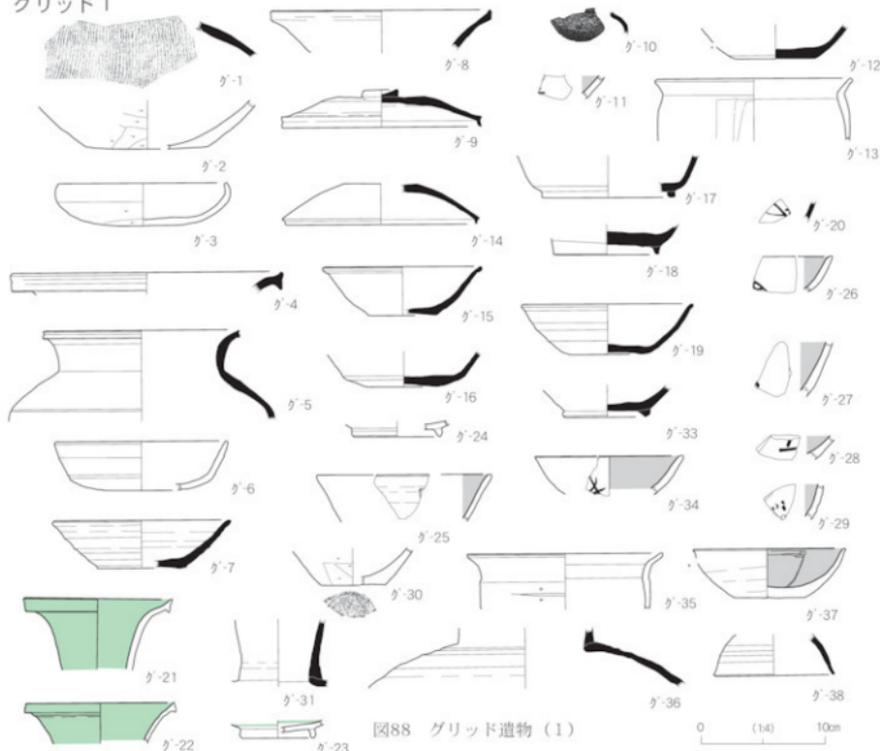


図88 グリッド遺物(1)

あり）・181須恵器蓋（かえり付き）・土師器転用の土板がある。二20・21地点は遺構がないがここにも奈良時代の遺構が窺える。ハ23から196須恵器蓋・197須恵器杯蓋・199須恵器壺→H22号住居址、ヌ・ネ23・24からは213・214碁石が出土する。

3. 第Ⅲ地区

リ41の221・222鉄製鏃、ル41の224鉄製止め金具→H49号住居址、ル43の225・226角釘・青銅製鈴→H51号住居址で、鈴は平安時代のものとみられる。ヨ44の245土製紡錘車→H50号住居址で古墳時代であろうか。

グリッド2

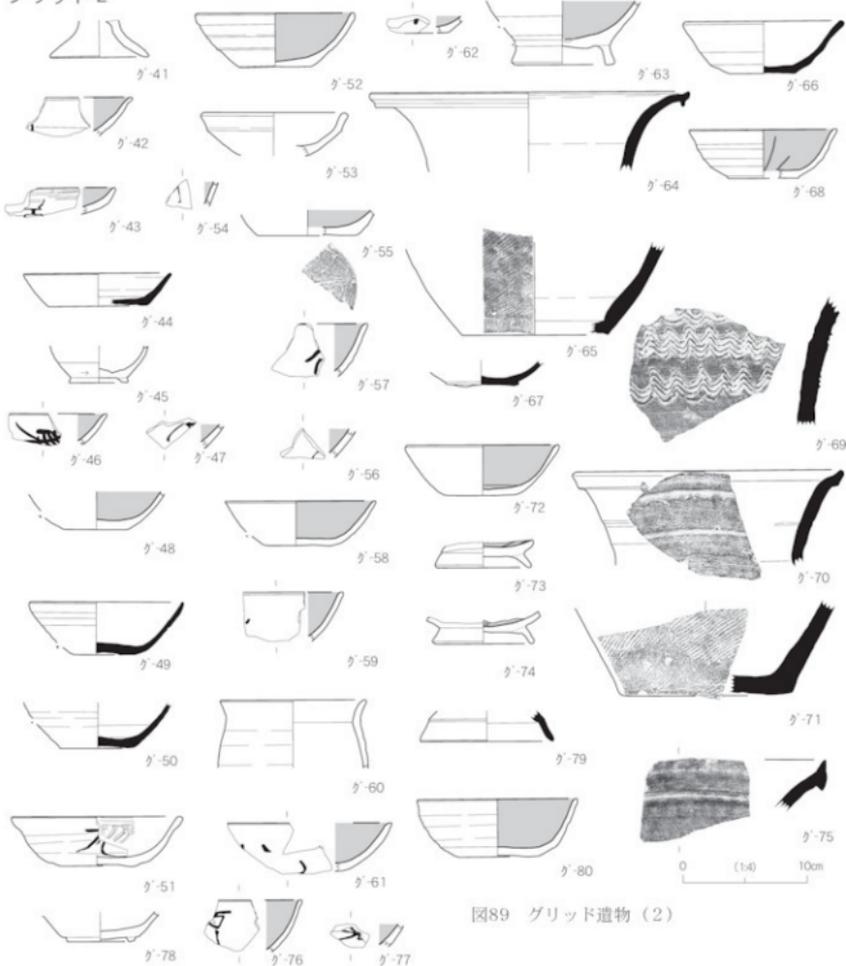


図89 グリッド遺物（2）

グリッド3

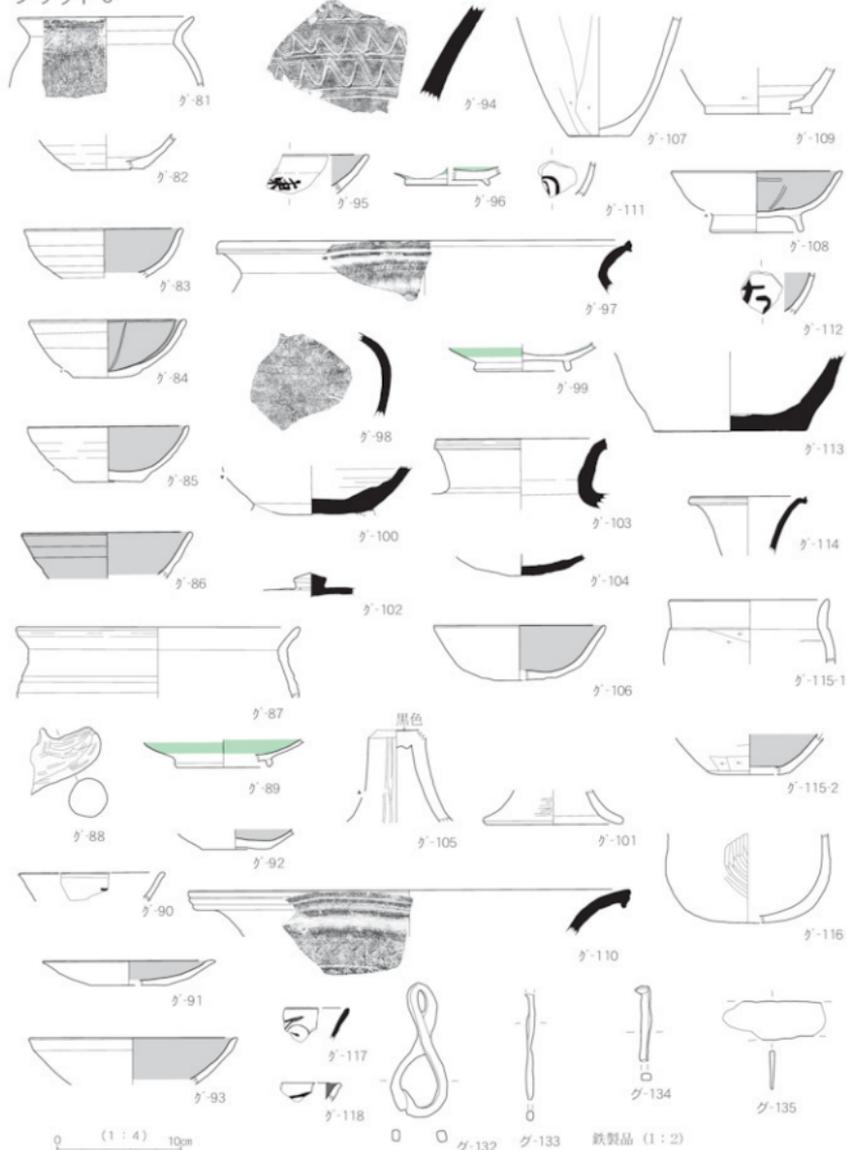


図90 グリッド遺物(3)

グリッド4

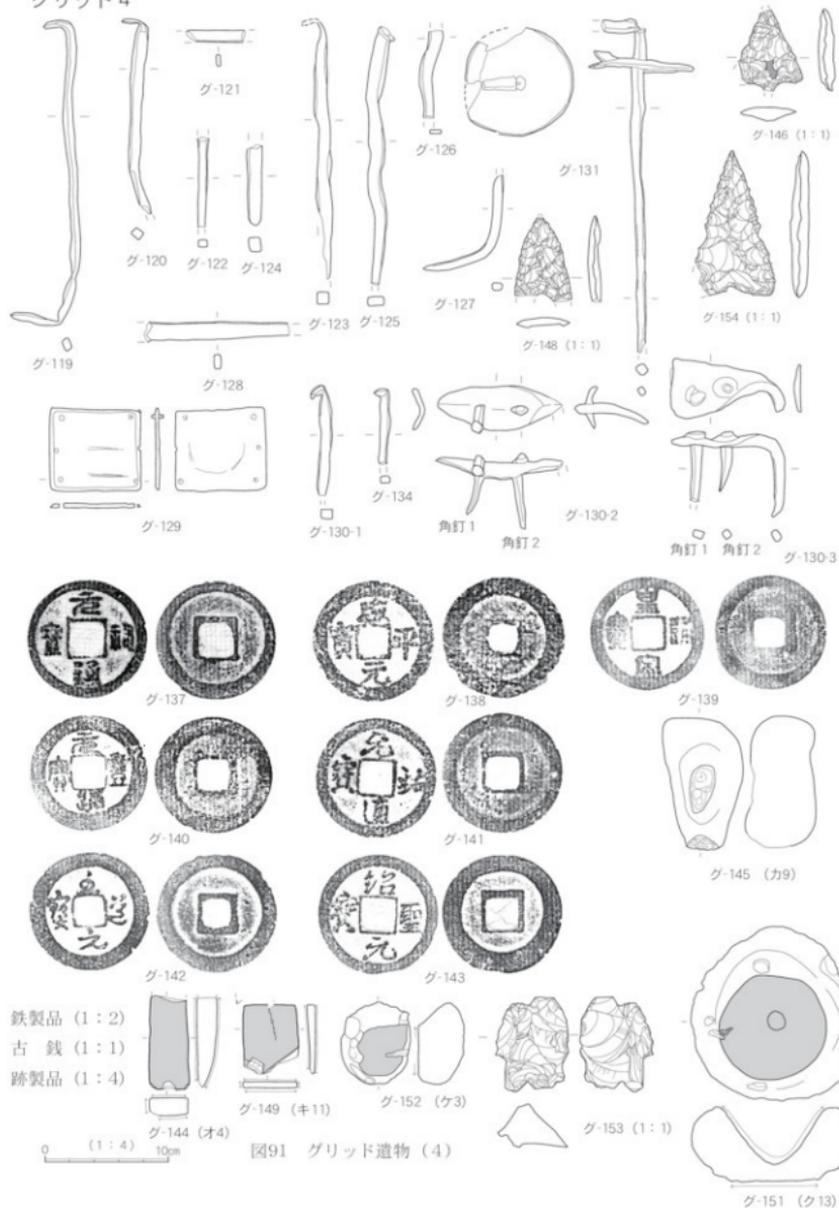
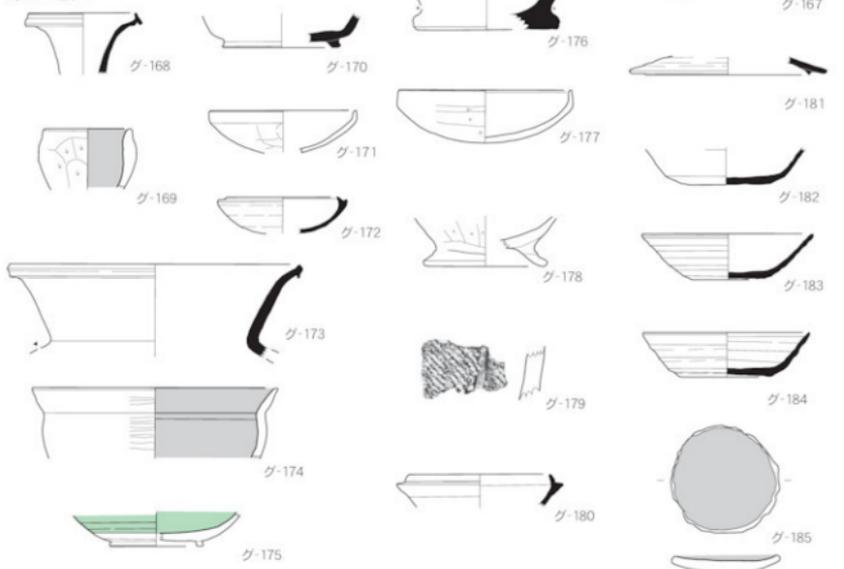


図91 グリッド遺物 (4)

グリッド5



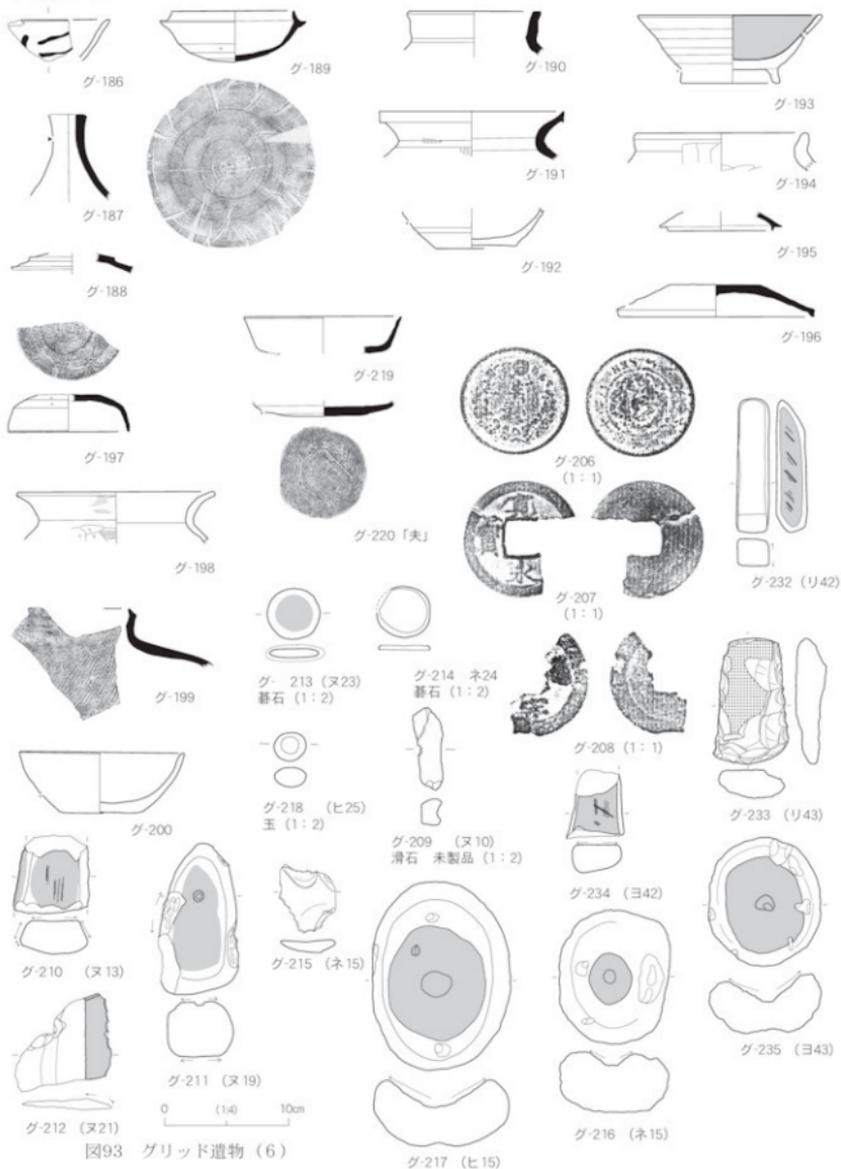
第II地区



0 (1:4) 10cm

図92 グリッド遺物 (5)

グリッド6



グリッド7

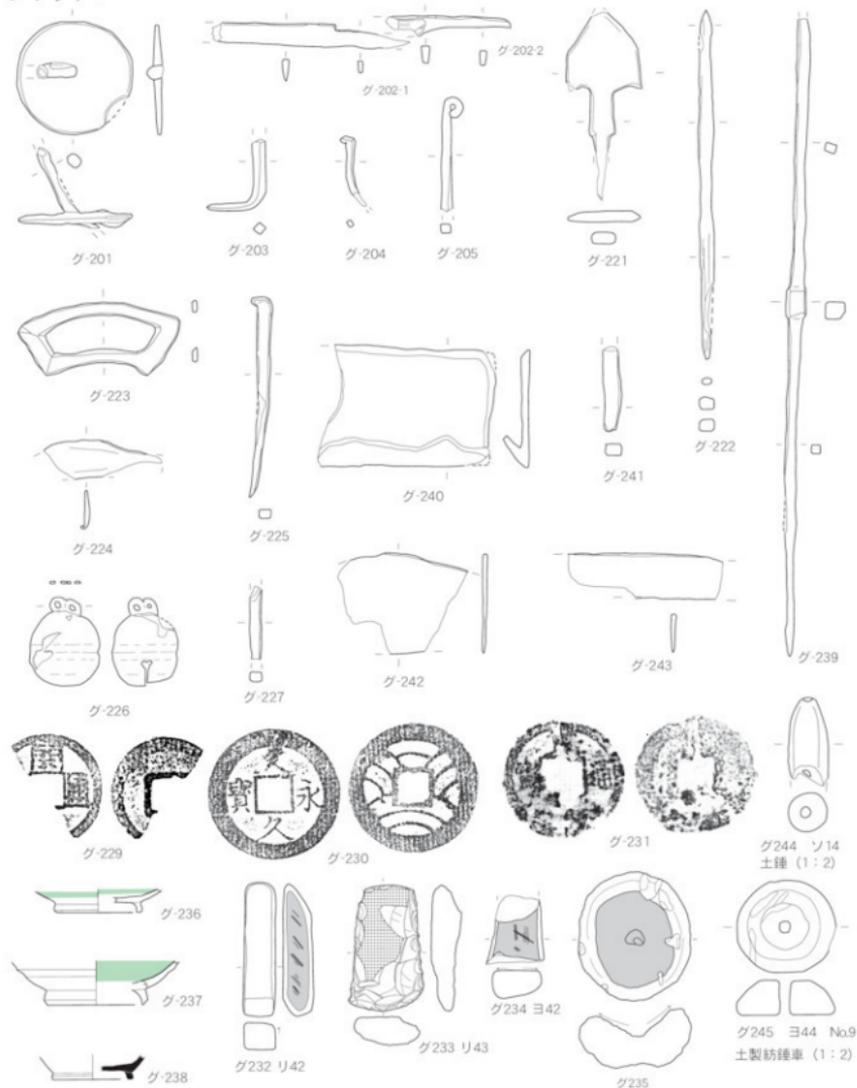


図94 グリッド遺物 (7)

鉄製品 (1:2)
古銭 (1:1)

0 (1:4) 10cm

第7節 中世・近世遺物

本調査で中世とみられる遺構は第Ⅰ地区ではD2号土坑、第Ⅲ地区ではM6～M8溝址、単独ピットがある。グリッド遺物から中世遺構について補足を述べる。本調査地点において握ね鉢などがあり、中世の生活の痕跡がある。

近世遺物は瀬戸・美濃産の灰釉灯明具・錆釉鉢・腰錆椀（近世）、鉄袖段天目・鉄袖椀・黄瀬戸鉢・灰釉椀（17C）、志野丸皿（18C前半）、灰釉椀（幕末）がある。唐津が3点、近世末19世紀の錆釉描鉢、灰釉握ね鉢、錆釉灯明皿など川越石（前山）焼製品が多い。伊万里・肥前が少数ある。

第Ⅰ地区

D2号土坑は礫と灰の範囲を伴う遺体の焼成土坑とみられ、そのまま墓としたものであろうとした。古銭の所在が不明であるが、同じソ10グリッドから「紹聖元寶」（初鑄年1094）が出土していることからこの不明銭に該当する可能性も含め、D2は中世遺構とされよう。シ・サー11・12グリッドからは、13世紀代の25青磁瓶・26青磁碗、29・30のかわらけが出土している。H38号住居址で述べた北西上面に古銭10枚（渡来銭？）が出土した記録から、中世遺構があったと想定される。

サ15グリッドからは「元佑通宝」（1086）・「元豊通宝」（1078）の古銭と青磁蓮弁文碗が出土している。ウーオー10・11グリッドには常滑甕・青磁碗・山茶碗系握ね鉢（13C）、「元佑通宝」・「咸平元寶」（998）の古銭と遺物が集中している。集中地点には何らかの中世遺構が想定される。

第Ⅱ地区

点々と中世遺物がある。遺構との関連をうかがえるものはないが、ネの13～15グリッドに46古瀬戸平椀（13C後半）・47古瀬戸縁釉小皿（15C後半）・52常滑の甕（13C後半）が出土する。ヌ・ネー23・24では45山茶碗系握ね鉢（13C）、48内耳鍋（15・16C）ある。13・15世紀の遺物がみられる。

第Ⅲ地区

M6・M7のあるラ43グリッドから60のかわらけ、71の溝状遺構のかわらけがある。これらは15世紀後半とされる。M6として13瀬戸灰釉瓶子（14C）が出土し、ラ42からは「開元通宝」（621）、リ42からは内耳鍋が出土している。M6を中世としたが、これらの遺物より、M6は15世紀後半の溝址とされようか。

中世・近世遺物 1

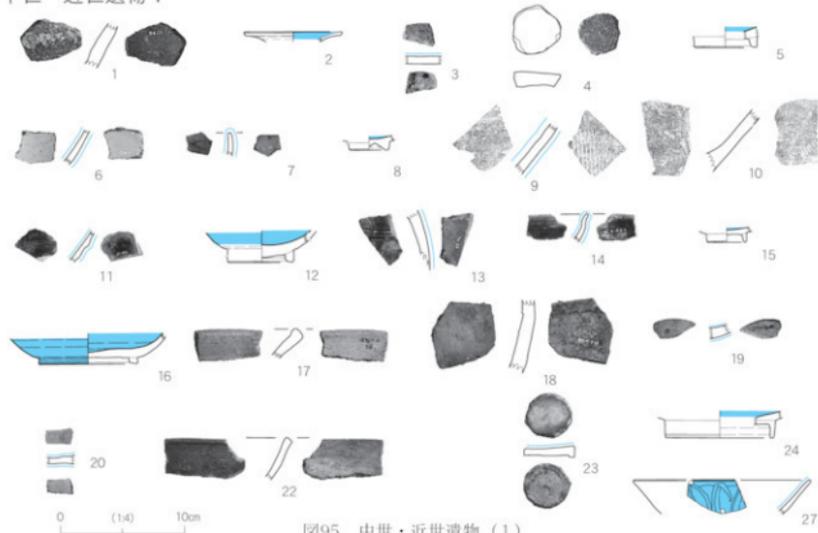


図95 中世・近世遺物 (1)

中世・近世遺物 2

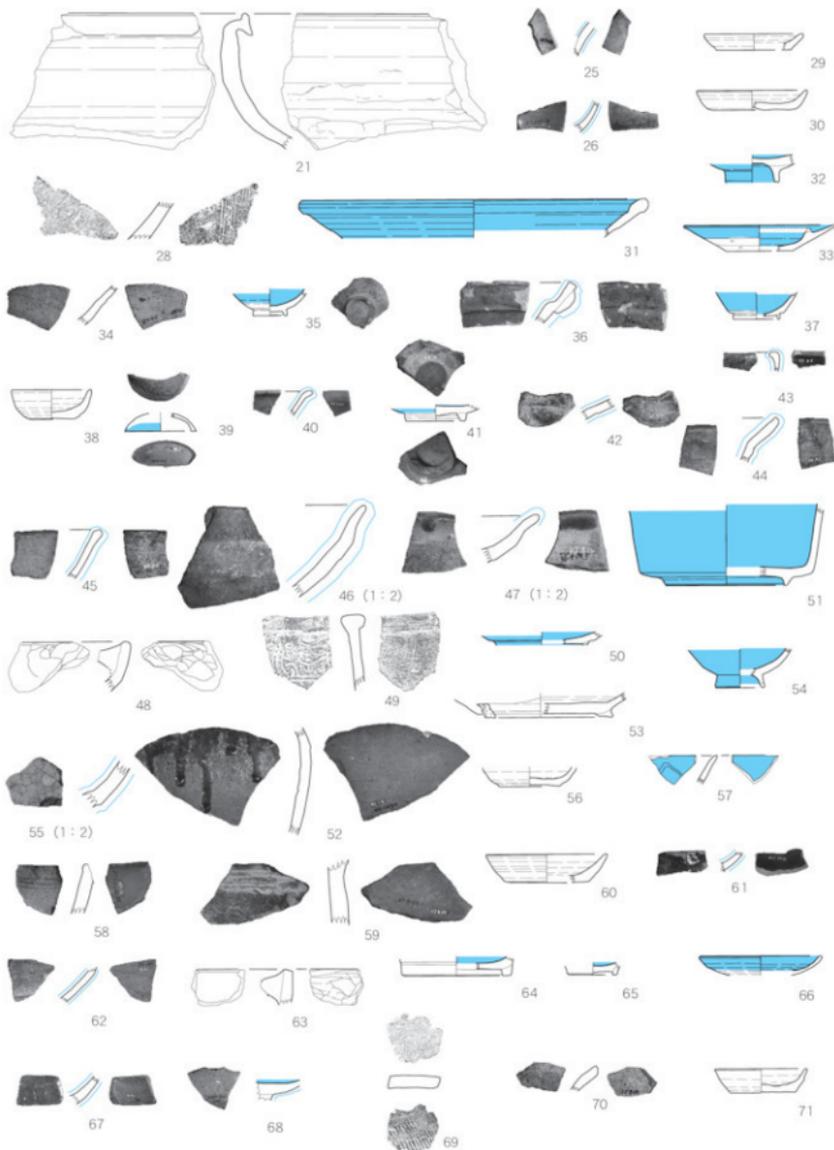


図96 中世・近世遺物(2)

第IV章 まとめ

調査面積	約2,000㎡
検出遺構	竪穴住居址 47棟 (古墳～平安時代)
	掘立柱建物址 9棟 (奈良～平安時代)
	土坑 5基 (平安時代・中世)
	溝址 5本 (中世)
	単独ピット 199個

本報告書では上記の遺構について報告している。竪穴住居址は48棟があるが、H28号住居址のプランは、本文で記したように重複住居址と同一として、47棟とする。

他にプランのみを確認し、発掘調査できなかった竪穴住居址が6棟あり、調査区域内には53棟を数えることができる。

昭和48年の発掘調査においては、十分な精査がなされていない遺構や記録が不十分なものがある。また掘方がほとんど意識されていないため、床下の構造は不明である。柱穴や土坑についても未検出に終わった住居址があるように看取された。カマドは崩壊土と遺構とが同一に記録され、カマドの構造が理解できないものも多く、またカマドの掘方も曖昧で十分に掘り下げられていないようである。中世の遺構については報告した土坑や溝以外からも中世遺物が出土しており、中世の竪穴状遺構など他に遺構があった可能性もある。中世・近世遺物の節を参照されたい。

これら資料的に不備なことがある調査であるが、昭和48年ころにあって広域にわたる調査の草分けとして、大きな成果を残している。岩村田上の城地籍に古代の集落が展開していたことを記録し、それから40年にわたる佐久市の行政による埋蔵文化財発掘調査の起点となった調査である。調査体制・器材・期間・予算などいずれも整わない中で、佐久考古学会をはじめとする地域の研究者と考古学専攻生の熱意の賜物のような発掘調査であったと思われる。

第1節 竪穴住居址

1. 土器様相

遺跡の時代様相を見るために土師器杯、須恵器杯の分類に、土師器甕の分類を加味して、竪穴住居址の時代を決定してみる。

2000.1 長野県埋蔵文化財センター『上信越自動車道26更埴市内その5 古代1 屋代遺跡群』

2005.2 小林真寿『佐久市埋蔵文化財報告書第126集 聖原 第5分冊』

2010.3 佐久市教育委員会『第175集 西八日町遺跡Ⅲ』

など照合した結果

竪穴住居址46棟の時代は

古墳時代後期 (7C代) 17棟

奈良時代 (8C代) 10棟

平安時代 (9・10C代) 20棟

本遺跡では古墳時代後期の7世紀代から集落が形成され、平安時代10世紀代まで集落が継続したとみられる。上の城地籍の台地の端部へは、古墳時代後期の7世紀代に9m四方の大型住居H10号住居址が作られ、古墳時代末または奈良時代の初頭とみられる竪穴住居址が数量的には多い。

西隣の西八日町遺跡Ⅲ～Vでは古墳後期61棟のうち、6世紀代が18棟、7世紀代17棟とほぼ同数である。岩村田児童館上の城遺跡Ⅰでは6棟のうち、5棟が6世紀代であり、南にある本遺跡の古墳時代の集落は、新しい集落として開けたようである。

また奈良時代においては、西八日町遺跡Ⅲ～Vでは26棟のうち8世紀後半が16棟あり、本遺跡に近い所の西八日町Ⅳ・V地点に多い。また上の城遺跡Ⅰでは8世紀後半が5棟となっている。

平安時代は西八日町遺跡Ⅲ～Vにおいて、9世紀前半とされるものが30棟と数量が多い。本遺跡の集落変遷の中では最も希薄な時期であり、西八日町遺跡に中心があったようである。9世紀後半には2棟と減ってしまう。本遺跡では9C後半が8棟を数え、10世紀代まで、集落が営まれたとみられる。奈良・平安時代は平安時代の始まりをのぞいて5棟平均に集落が継続しているといえようか。

(1) 古墳時代後期 (7世紀代)

H1・H10・H12・H20・H30

H14・H15・H16・H17・H18・H21・H22・H32・H37・H38・H50・H52

古墳時代後期 (7世紀代) の中では、H10号住居址にみるように、土師器杯が非ロクロ成形で、杯蓋の模倣のいわゆる「有段口縁杯」が主体である。下ってH52号住居址になると「有段口縁杯」が残存するが、「北武蔵型杯」(橙色で、外面底部にヘラケズリ調整が施されるほかはナデ調整) のものが主体となる。

須恵器杯にヘラ切り離しの平底形杯Aがなく、武蔵費がないことなどから古墳時代後期とした。H52号住居址などの一帯はいずれ奈良1期に近い要素があり、7世紀末～8世紀初頭といった方がいいかもしれない。

(2) 奈良時代 (8世紀代)

奈良1期 (8世紀前半) H5(?)・H8・H9・H35・H40

土師器

杯:A1で、底部がヘラ削りされ平底で、底が厚い。

費:武蔵費口縁部形態「く」字形ではあるが、奈良頭初より口縁の外反が短くなる。口径と胴部形が近くなる。

須恵器

杯:A1(底部の切り離しが、ヘラ切り離しで、回転ヘラ削り、手持ちヘラ削りを施すものが主体。)

奈良2期 (8世紀後半) H24・H26・H44・H47・H48

土師器

杯:A1はいくらも薄手になる。

費:武蔵費は口縁部形態が「く」から「コ」の字形態になり、最大径は胴部にもつ。

須恵器

杯:すべて回転系切りの杯A3になり、火輝痕が顕著で、焼成は良好である。

高台付杯:高台底に凹線状の窪みを持つ。

H5号住居址は遺物が少なくおおよそ破片からの推定である。奈良時代を二つに分けてみたが、土師器と須恵器両方伴う住居址が少ないので、分類に明確さを欠く。奈良時代と古墳時代後期末の住居址の時期の判断は平底杯Aと武蔵費のあるなしで分けている。

(3) 平安時代 (9～10世紀)

H3・H4・H7・H11・H13・H19・H25・H27・H31・H33・H34・H36・H39・H42(重複住居の遺物から類推)・H43・H45・H46・H49・H51・H53

平安1期 (9世紀前半) H25・H49・H51

土師器

杯:A3(ロクロ成形で、底部回転系切り痕、ミガキ後黒色処理)

柄・皿:高台が貼付される。新しく加わる。

費:武蔵費は口縁部形態「コ」字形を呈す。体部に最大径を持つ。

ロクロ費がある。

須恵器

杯:底部が回転系切り離しの杯で、前代との変化が見当たらず、須恵器杯の数量が多い。

平安2期 (9世紀後半) H3・H4・H7・H11・H27・H34・H39・H46

土師器

杯:A3が主体で、数量が増してくる。外面に墨書、刻書が多い。

費:武蔵費、

ロクロ費がある。

須恵器

杯:須恵器杯(底部回転系切)の数が減ってくる。

灰釉陶器

壺・皿・柄があり、ハケ塗りの光が丘1号壺式を出土する。

新たに土師器の食膳具が登場し、須恵器がわずかに残る。

平安3期 (10世紀前半) H13・H31・H45・H53

土師器

杯:A3が主体で、杯A2もある。杯額は全般に小振りとなる。土師器杯の内面のミガキが全面ではなくナデのみで、文様調に暗文がなされ黒色処理される。

平安4期 (10世紀後半) H33・H36・H43

土師器

杯D:杯D(ロクロ成形、底部系切のみで、黒色処理をしない)内面ナデが主体。杯C(ロクロ成形、底部系切、内面黒色処理)

内面ミガキ・暗文・ナデ類もわずかにある。底部処理にヘラを使用。

皿B:柱状高台皿の初現。

費:短い口縁が外反。ナデ調整。ロクロ費も少量存在

羽釜:A(跨が全周)・B(跨が部分的)の両形態。Bは初現。

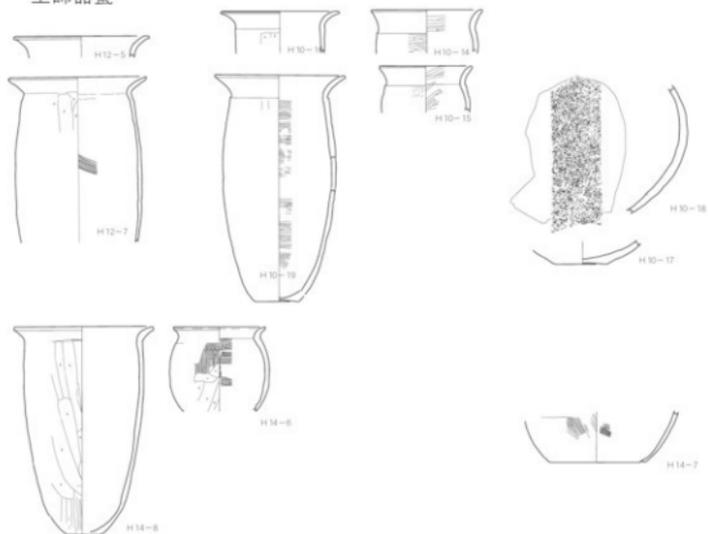
土師器壺・鉢、須恵器杯はない。

古墳時代後期（7世紀代）

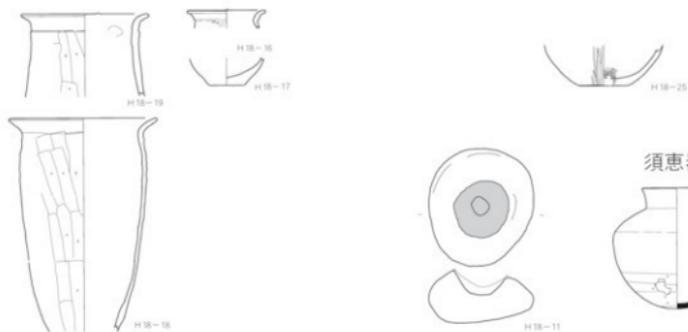


図97 古墳時代後期（7世紀代）編年

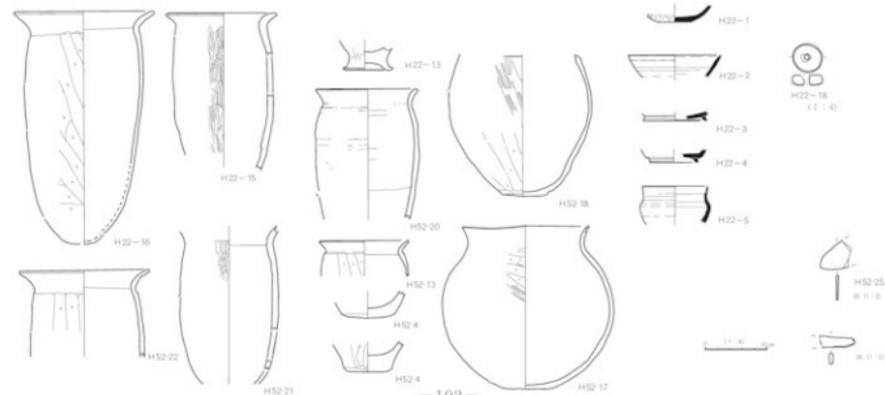
土師器壺



その他

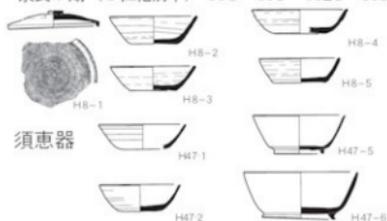


須恵器



奈良・平安時代（8～10世紀代）

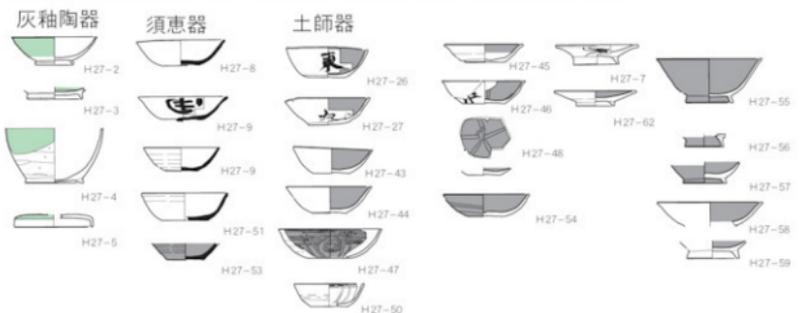
奈良1期（8世紀前半）H8・H9・H26・H35・H40



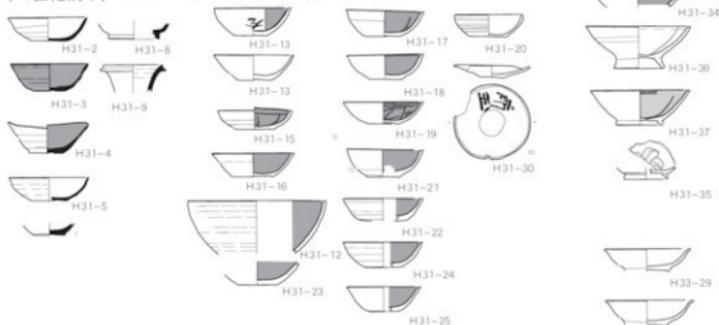
奈良2期（8世紀後半）H24・H26・H44・H47・H48

平安1期（9世紀前半）H25・H49・H51

平安2期（9世紀後半）H3・H4・H7・H11・H27・H34・H39・H46



平安3期（10世紀前半）H13・H31・H45・H53



平安4期（10世紀後半）H33・H36・H43

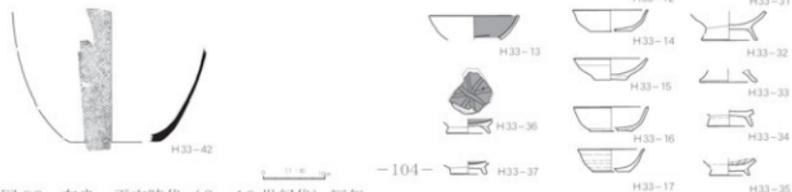
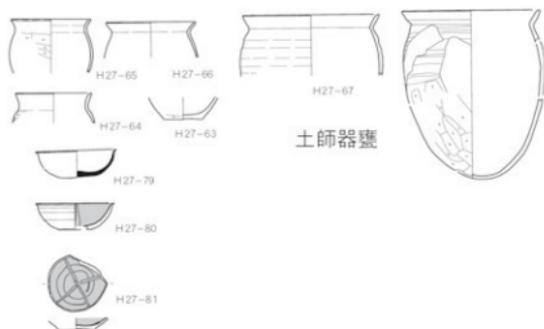
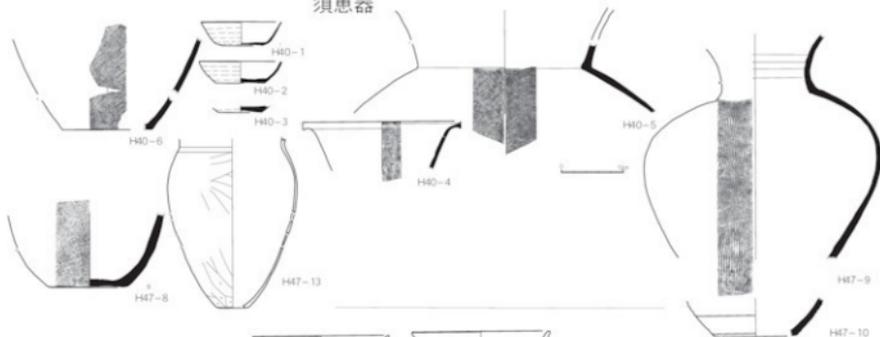


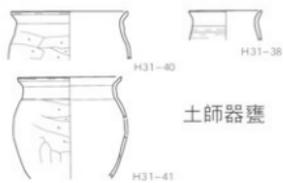
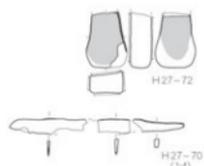
図98 奈良・平安時代（8～10世紀代）編年

須恵器

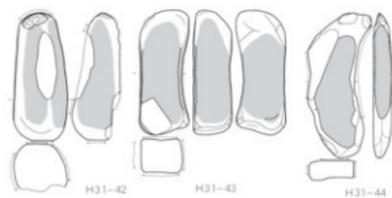


土師器

その他



土師器



上の城遺跡Ⅱ 墨書一覽

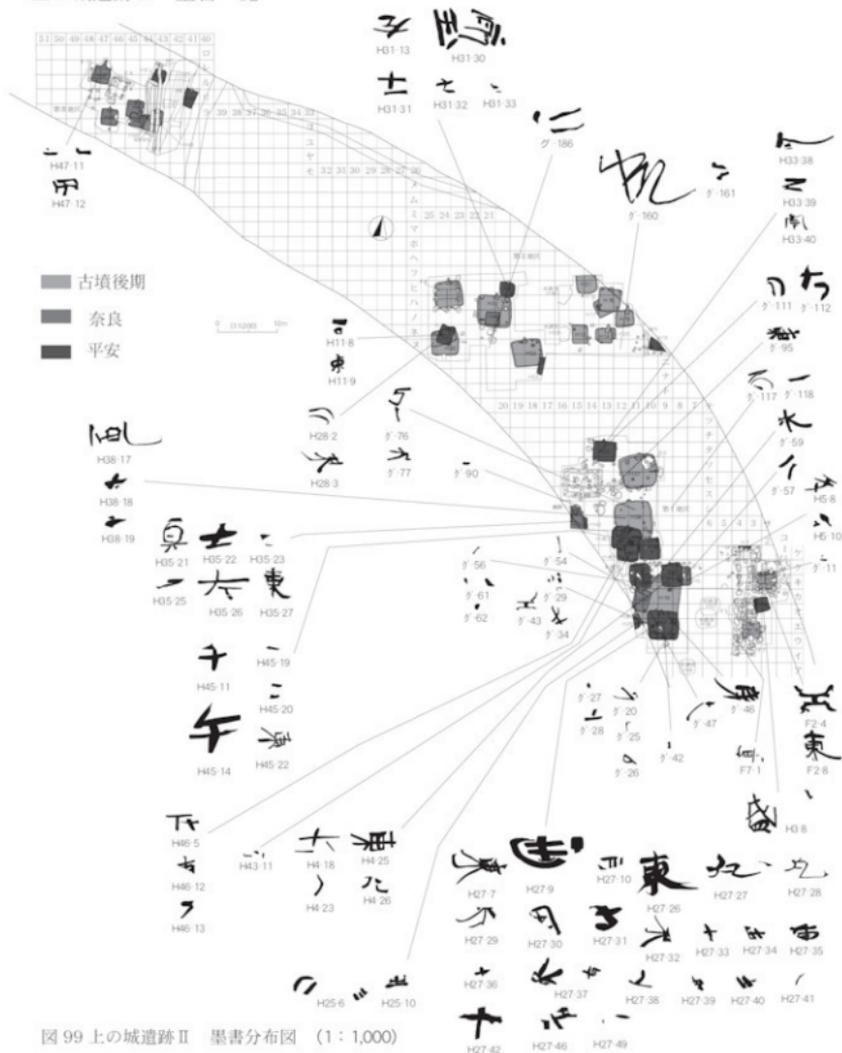


図 99 上の城遺跡Ⅱ 墨書分布図 (1:1,000)

2. 竪穴住居址の規模形態

(1) 平面形

竪穴住居址の平面形は、方形と長方形に大別される。

古墳時代後期の数値のある13棟は方形ないし、長方形で方形に近い形態である。西にカマドがあるH12号住居址のみが長方形である。規模は一辺3～9mまであり、一辺3～4mに6棟があり、約半数に近い。

奈良時代は7棟計測した。H24号住は形態が確実に思えないので除外すると、一辺が2.5～3.5m規模である。方形は4棟と2/3を占める。

平安時代の計測できるものは10棟あり、最小は3m弱、最大は一辺6m前後である。方形は4棟と半数近い。西八日町遺跡Ⅲより規模の大きい一辺5～6m規模の竪穴住居址があり、その最大のH27号住居址は9世紀後半の住居址である。H27号住居址は土師器杯類が多量で、墨書土器が多く集落の中心となる家であろう。西八日町遺跡Ⅲには少なかった時期であり、「東」の村の中心、さらには地域でも中心的役割を持った家であったろうか。

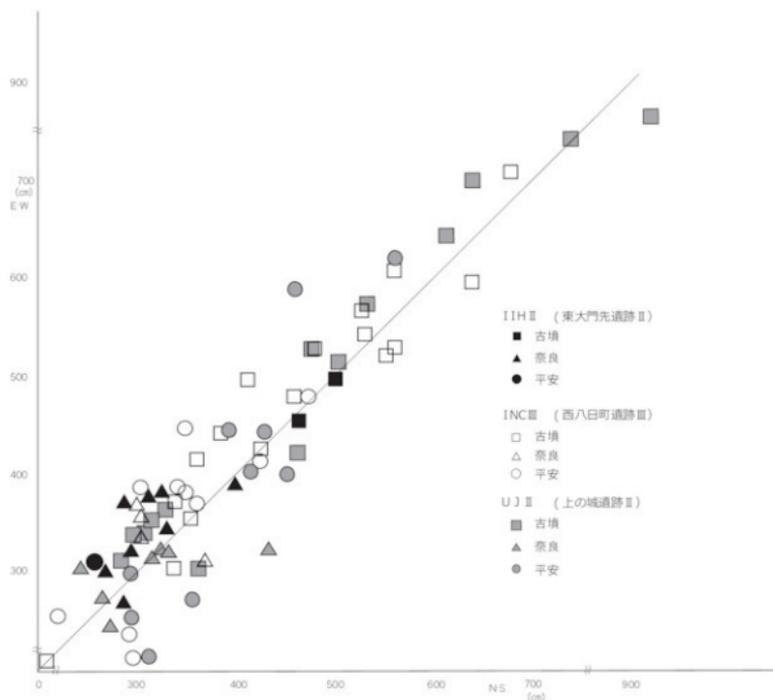


図 100 上の城遺跡Ⅱ 住居址規模・形態図

第2節 掘立柱建物址

本遺跡では9棟の掘立柱建物址を掲載した。調査時に掘立柱建物址として記録されたのはF1号掘立柱建物址のみで、他は報告書の作成時に組んだものである。またさらに単独ピットから組めるとみられるが、深さや土層の記録がないピットが多いため、ピットとして報告することとする。

F1号掘立柱建物址は溝持ちで、3間×3間の総柱、桁と梁は7×5m規模を測る高床の倉庫とみられる。出土遺物は古墳時代後期末で、須恵器杯は小型で丸底である。

F2・F3・F5は2間×2間の総柱で、高床の倉庫とみられる。F2は平安時代の軟質須恵器杯、土師器杯などを含むことから平安時代、F3・F5は須恵器の破片を多く含むことなどから、奈良～平安時代とみられる。

F4は5間×1間の側柱建物である。P70からは平安時代の甲斐型土器の78-2土師器杯が出土している。佐久地域において甲斐型土器は数量の少ないもので、本遺跡の西にある東大門先遺跡H2号住居址(10C前半)では、甲斐型土器の甕が1点出土している。長土呂の聖原遺跡では暗文の書かれた土師器の仏鉢(9C前半)が出土する。

本掘立柱建物址の注目されることは、9C代に大規模柱穴の高床の倉庫と側柱の建物が集中することである。

第3節 土坑

平安時代のD20号土坑があり、分析では哺乳類の焼骨とされており、おそらく人骨で、隅丸長方形の墓塚とみられる。軟質の須恵器・杯と土師器杯を多出するもので、平安時代9世紀後半頃とみられる。P112の形態は隅丸長方形を呈し、やはり墓塚とみられる。平安時代の焼成城はグリッドに少なくとも他にエ9・サ15にあり、金属製品や土器と灰を伴う礫範囲がある。D20号土坑と同様とみられる。

またD2土坑は、礫を底面に置くもので、中央が空いて焼土がみられる。出土した古銭が行方不明なので時期は不確定できないが、中世にみられる火葬墓とみられる。焼いた骨を拾って蔵骨器に収めて埋葬するための焼成土坑といえる。焼けた骨が出土していない点は疑問が残る。

第4節 溝址

第Ⅲ地区の東に溝が集中している。ことにM6号溝址は幅広く深い溝である。幅は最大で、4.36m、深さ2.2mを測る。断面形は上部は広く緩やかな傾斜で、下部は幅が狭く急傾斜になる箱菜研堀である。東側が高くなっている。これと類似する堀が北の上の城遺跡I(岩村田児童館)にある。東西に延びる溝は幅3m、深さ3mをはかり、断面形は同じで、南側が高い。中世の青磁盤を出土している。平成27年度の藤ヶ城跡発掘調査地に南北の同様な深い溝が検出されていることから、一辺200m、二町四方に囲む中世溝となる可能性がある。

第5節 墨書土器

平安時代のH27号住居址からは須恵器杯(軟質)2点、土師器杯・碗・皿20点、上面のグリッドから11点をあわせると33点の墨書がある。中でも「東」は推測も含むが9点ある。「東」は他のH28・H35・H45・F2からも出土している。

土器に書かれた文字について「集落遺跡出土の墨書土器の多くが集落内におけるある種の集団の標識文字であったと考えられる。あるいは祭祀・儀礼行為の際の招福除災のための呪術的・魔力的な記号として利用した」(高島英之、2000.9)「九」の中に横線があるものや「𠄎」の則天文字の篆書体の一部を強調したものとみられるものがあるが該当する字はわからない。西八日町遺跡Ⅲのグリッドから「西家」と同時期の須恵器杯の外面に墨書がされており、本遺跡が東にあって「東」、西にある西八日町遺跡が「西家」といわれていたのであろうか。

引用・参考文献

- 1990.4 中村浩 『研究入門須恵器』柏書房
- 2000.1 長野県埋蔵文化財センター 『上信越自動車道26更埴市内その5古代1 屋代遺跡Ⅲ』
- 2000.9 高島英之 『古代出土文字資料の研究』東京堂出版
- 2000.11 平川南 『墨書土器の研究』吉川弘文館
- 2005.2 小林真寿 『佐久市埋蔵文化財報告書126集 聖原 第5分冊』
- 2010.3 佐久市教育委員会 『第175集 西八日町遺跡Ⅲ』
- 2003.3 佐久市教育委員会 『第111集 上ノ城遺跡』

第2-1表 遺構一覧表 竪穴住居址

() は推定値 () は残存植

遺構名	地区	検出位置	時代	形態	規模		面積 ㎡	主軸方位	カマド 位置	ピット	備考	
					(南北×東西×壁高) cm							
H1	I	ク2	古墳後期	方形	330×366×60~66	12.00	N-14°-W	北	1		F2・F3・P15・P22・P41に切られる。	
H2	欠											
H3	I	カ2	平安	方形	281×<264>×14	—	N-68°-E	東	なし		F5・F6を切る。	
H4	I	ク8	平安	長方形	455×400×17~29	18.20	N-13°-W	北	竪穴1	その他11	H5・H10を切る。	
H5	I	ク7	奈良	—	351×<175>×25~29	—	N-11°-W	北	主柱2		H4、D1に切られ、H10を切る。	
H6	欠											
H7	I	ケ3	平安	—	<70>×242×28~33	—	N-13°-W	—	なし		北側調査区外 P65・P66に切られる。	
H8	Ⅲ	ラ44	奈良	長方形	245×306×30~34	7.50	N-12°-E	北	なし		H9・H50、P211を切る。	
H9	Ⅲ	リ44	奈良	方形	333×321×10~50	10.69	N-1°-E	北	なし		H8、P210・P211に切られる。	
H10	I	キ8	古墳後期	方形	920×868×21~65	—	N-4°-W	北	主柱4	竪穴1	その他1	H4・H5・H24~H27・H34・H36、P112に切られ、P247を切る。
H11	Ⅱ	ネ23	平安	長方形	357×276×10~20	9.85	N-12°-E	北	なし		H28・H30を切る。	
H12	Ⅱ	ネ14	古墳後期	長方形	363×307×20~36	11.14	N-80°-E	東	2		P180を切る。	
H13	Ⅱ	ヌ9	平安	—	<240>×330×21~22	—	N-1°-E	—	主柱2		北側調査区外 両溝あり	
H14	Ⅱ	ネ13	古墳後期	隅丸方形	284×313×36~50	8.76	N-13°-W	北	主柱2		H20と新旧不明。	
H15	Ⅱ	ノ11	古墳後期	長方形	308×340×50~59	10.47	N-9°-W	北	なし		H16に切られる。	
H16	Ⅱ	ヒ12	古墳後期	隅丸方形	457×424×37~57	19.38	N-0°	北	主柱4		H19に切られ、H15・H17を切る。	
H17	Ⅱ	ハ14	古墳後期	—	329×<236>×21~43	—	N-35°-W	—	なし		H16・H19に切られる。	
H18	I	エ3	古墳後期	方形	314×353×50~64	—	N-7°-W	北	なし		F5~F7、P55・P56・P58・P89・P93・P94・P97に切られ、P90を切る。	
H19	Ⅱ	ハ13	平安	—	—	—	—	—	なし		H16・H17を切る。	
H20	Ⅱ	ネ12	古墳後期	—	216×92×38~49	—	N-10°-W	—	なし		H14と新旧不明。	
H21	Ⅱ	フ14	古墳後期	(隅丸長方形)	<354>×387×42~66	—	N-16°-W	北	なし		北側調査区外	
H22	Ⅱ	ヒ23	古墳後期	方形	504×516×54~67	26.01	N-15°-W	北	1		F8、P200・P202に切られる。	
H23	欠											
H24	I	カ10	奈良	隅丸長方形	436×324×3~11	—	N-7°-E	北	なし		H10を切る。	
H25	I	オ11	平安	—	204×<116>×13~14	—	N-33°-W	東	なし		西側調査区外 H10・H26を切る。	
H26	I	オ11	奈良	—	156×<130>×20~23	—	N-25°-W	東	なし		西側調査区外 H25に切られ、H10を切る。	
H27	I	オ8	平安	隅丸方形	562×620×22~43	34.72	N-9°-W	北	主柱1	竪穴1	その他3	P258に切られ、H10を切る。
H28	Ⅱ	ネ23	—	長方形	284×488×12~15	13.86	N-14°-W	—	—		H11に切られ、H30を切る。H30と同一か	
H29	欠											
H30	Ⅱ	ネ23	古墳後期	方形	478×532×48~64	25.43	N-9°-W	北	なし		H11・H28、トレンチに切られる。	
H31	Ⅱ	ヒ19	平安	方形	296×300×12~21	8.88	N-85°-W	東	なし		P244に切られる。	

() は推定値 () は残存値

遺構名	地区	検出位置	時代	形地	規模		面積 ㎡	主軸方位	カマド 位置	ピット	備考
					(南北×東西×壁高) cm						
H32	Ⅱ	ハ20	古墳後期	隅丸方形	615×644×50~65	39.61	N-7°-W	北	主柱4 その他2	H40、P181~P184・P189・P191~P193に切られる。周溝・間仕切り溝あり	
H33	Ⅰ	タ12	平安	長方形	392×448×23~36	17.56	N-4°-W	北	なし	P153に切られ、P131・P151を切る。	
H34	Ⅰ	ク10	平安	長方形	(450)×433×—	—	N-6°-W	北	なし	H36、P109~P113・P126・P127・P246に切られ、H10を切る。	
H35	Ⅰ	シ15	奈良	—	<64>×<234>×28~35	—	N-16°-W	—	注1 壁付 敷石 石敷 瓦葺	西側・南側調査区外 礎部1・P257に切られ、H42・床下住居・P160~P162を切る。	
H36	Ⅰ	キ10	平安	長方形	(270)×(334)×0~6	—	N-83°-E	東	なし	P112・P113・P246に切られ、H10・H34、P247を切る。	
H37	Ⅰ	タ10	古墳後期	隅丸方形	640×701×60~92	44.86	N-13°-W	北	注4 礎石1 形蔵穴2 その他1	D2、P36・P37に切られ、P18・P33・P35・P248・P250・P251を切る。周溝あり	
H38	Ⅰ	シ10	古墳後期	隅丸方形	734×740×3~48	54.32	N-12°-W	北	主柱4 礎石4 その他2 土壇1	H45、P142に切られ、P119を切る。周溝一部あり	
H39	Ⅰ	コ9	平安	方形	414×404×6~26	16.73	N-12°-W	北	出入口1 貯蔵穴1 その他1	P123・P124に切られ、H45、P259を切る。	
H40	Ⅱ	ノ20	奈良	方形	262×274×22~36	7.18	N-87°-E	東	なし	P260に切られ、H32を切る。	
H41	欠										
H42	Ⅰ	サ15	平安	—	<245>×(6.2)×6~12	—	N-6°-W	—	1	西側・南側調査区外 H35に切られる。	
H43	Ⅰ	コ11	平安	隅丸長方形	296×254×12~21	—	N-16°-W	なし	1	H45・H46、P256を切る。	
H44	Ⅲ	ラ46	奈良	方形	316×317×36~42	10.02	N-5°-W	北	なし	P215を切る。	
H45	Ⅰ	サ11	平安	隅丸長方形	462×590×7~19	27.26	N-3°-W	北	主柱3 礎柱4 貯蔵穴1	H39・H43に切られ、H38・H46を切る。	
H46	Ⅰ	コ11	平安	隅丸方形	430×446×3~21	19.18	N-7°-W	北	主柱3 その他1	H43・H45、P256に切られる。	
H47	Ⅲ	レ47	奈良	方形	326×324×45~48	10.56	N-6°-E	北	なし		
H48	Ⅲ	ラ43	奈良?	隅丸長方形	276×247×28~36	6.82	N-3°-E	北	なし	M6~M8に切られ、H50を切る。	
H49	Ⅲ	リ41	平安	—	348×<258>×15~28	—	N-5°-E	—	1	東側調査区外 M6、P242に切られる。	
H50	Ⅲ	ラ44	古墳~奈良	長方形	298×339×4~32	10.10	N-4°-E	北	なし	H8・H48、M7~M9に切られる。	
H51	Ⅲ	レ43	平安	隅丸長方形	316×214×14~21	—	N-75°-W	東	なし	M7、P241に切られる。	
H52	Ⅱ	ヌ18	古墳後期	方形	538×575×27~46	30.94	N-18°-W	北	注1 壁付 敷石 瓦葺 その他1	H53に切られる。周溝あり	
H53	Ⅱ	ニ17	平安	—	356×<112>×8~31	—	N-4°-E	—	なし	東側調査区外 H52を切る。	
H54	Ⅰ	ク12	未調査		285×<155>						
H55	Ⅱ	ネ15	未調査		280×<210>			北			
H56	Ⅱ	ヒ15	未調査		<400>×<300>			北			
H57	Ⅰ	カ5	未調査		350×390					H58と重複	
H58	Ⅰ	オ6	未調査		390×420					H57と重複	
H59	Ⅰ	イ7	未調査		300×320						

第2-2表 遺構一覧表 掘立柱竪穴住居址

〈残〉(推定)

遺構名	地区	検出位置	様式	桁行×梁間 (間)	桁行×梁間 (m)	桁行柱間 (m)	梁間柱間 (m)	主軸方位	柱穴規模		備考
									矩径(cm)	深さ(cm)	
F1	I	ソ13	竪柱	3×3	0.96×4.92	2.32	1.64	N83°-E	60~120	36~118	
F2	I	ク2	竪柱	2×2	3.6×3.2	1.80	1.60	N-16°-W	60~112	22~48	H1を切る。(P6・16・17・21・35・39・42使用)
F3	I	ク1	竪柱	2×2	4.8×4.75	2.40	2.375	N-2°-W	76~126	29~54	H1を切る。(P2・5・7・13・25・28・37・38使用)
F4	I	ケ3	倒柱	5×1	8.1×3.2	1.62	3.20	N-14°-W	44~148	35~63	(P27・29・30・33・37・38・67・68・70・72・74~76・255使用)
F5	I	カ3	竪柱	2×2	3.6×3.6	1.80	1.80	N-5°-W	92~167	65~70	H3に切られ、H18をきる。(P4・46・50・51・77・78・81・83・87使用)
F6	I	カ3	倒柱	3×1	4.8×2.64	1.20	2.64	N-13°-W	73~118	34	H3に切られ、H18をきる。(P43・49・53・79・82・85・245使用)
F7	I	エ2	竪柱	3×1	5.04×2.96	1.68	2.96	N-9°-E	79~132	36~72	H18を切る。(P57・61・63・64・88・92・96・98使用)
F8	II	フ23	竪柱?	2×2	4.52×3.84	2.26	1.92	N-80°-E	76~108	68~82	P198に切られ、H22P200・202を切る。(P195・196・197・199・201・203・204・261・262使用)
F9	III	ル45	倒柱	2×2	3.2×3	1.60	1.50	N-15°-E	53~131	41~110	P219に切られる。(P212・241・218・220・222・225・226・227使用)

第2-3表 遺構一覧表 土坑

〈残〉(推定)

遺構名	地区	検出位置	平面形	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	長軸方位	備考
D1	I	ク8	楕円長方形	152	88	12	N-11°-W	H5を切る。
D2	I	ソ10	不整形	250	238	10	N-58°-W	H37を切る。
D20	I	シ13	楕円長方形	221	147	48	N-7°-W	P144を切る。縄骨・骨出土
D21	I	シ13	楕円形	129	91	37	N-68°-W	
横溝1	I	シ15	-	80	70	-	N-35°-E	H35を切る。

第2-4表 遺構一覧表 溝址

〈残〉(推定)

遺構名	地区	検出位置	全長(m)	幅(cm)	深さ(cm)	備考
M5	II	テ10~ナ10	<4.92>	68~90	15~17	北側・南側調査区外 P166・169・170を切る。
M6	III	レ41~ヤ43	<19.24>	364~436	180~220	北側・南側調査区外 H48・49を切る。
M7	III	レ41~ヤ44	<18.5>	52~96	23~41	北側・南側調査区外 P208に切られ、H48・50.51、P209を切る。
M8	III	ル44~ユ44	<10.6>	64~96	7~15	北側・南側調査区外 H48・50、P241を切る。
M9	III	ル44~ユ44	<10.54>	20~48	2~17	北側・南側調査区外 H50を切る。

第2-5表 遺構一覧表 単独ピット

() は推定・() 残存値

遺構名	出土位置	規模 (cm)			平面形	覆土	備考
		長径	短径	深さ			
P1	ク1	(112)	(82)	38	-	-	北側・東側調査区外
P2	ク1	116	76	29	楕円形	-	(F3)
P3	ク1	56	48	36	長方形	-	
P4	ク1	56	54	21	円形	-	
P5	ク1	122	96	32	楕円形	-	(F3) H1を切る。
P6	キ2	148	98	34	楕円形	-	(F2) H1を切る。須恵高台杯 土師厚手・武藏窯
P7	キ1	126	146	47	楕円形	1.黒色土層 2.黒褐色土層 3.黒色土層 4.褐色土層	(F3) H1, P17を切る。 須恵壺1 土師内黒丸底杯・丸割罌
P8	キ1	130	68	36	楕円形	-	須恵壺か壺3・小片1 土師武藏窯4
P9	キ1	(88)	64	43	-	-	東側調査区外
P10	カ1	44	42	15	円形	-	
P11	カ1	44	35	27	楕円形	-	須恵 土師糸切杯1
P12	カ2	68	62	17	円形	-	須恵糸切杯 土師糸切杯・ 宇子段武藏窯
P13	ク2	92	(65)	45	-	-	(F3) 東側調査区外 須 恵壺 土師厚手
P14	ク2	192	110	-	楕円形	-	H1,P15を切る。
P15	ク2	68	62	-	円形	-	P14に切り入れ、H1を切る。
P16	ク2	158	68	35	楕円形	-	(F2) H1を切る。土師 厚手・丸割罌1・長割罌
P17	ク2	121	102	-	楕円形	-	(F2) H1, P19を切る。 須恵壺・糸切杯 土師丸 底杯・丸割罌
P18	カ2	83	(68)	-	-	-	P19・20に切られる。
P19	カ2	85	(72)	-	-	-	P17に切り入れ、P18・20を切る。
P20	カ2	92	(58)	24	-	-	P19に切り入れ、P18を切る 須恵中底杯1・壺・罌 土師厚手・丸割罌1・長割罌 1・武藏窯1・内黒杯1
P21	カ2	120	96	32	楕円形	-	(F2) P22を切る。土師 厚手・丸割罌1・長割罌 1・武藏窯1・内黒杯1
P22	カ2	154	93	-	楕円形	-	P21に切られる。
P23	ク3	(134)	116	-	楕円形	-	東側調査区外 P24に切り 入れ、P26を切る。須恵高 台・壺 土師丸割罌
P24	ク3	70	(46)	-	楕円形	-	東側調査区外 P23を切る。
P25	ク3	89	86	-	円形	-	(F3) P25・29を切る。 土師厚手・武藏窯3
P26	ク3	(196)	66	-	-	-	P23・P25に切り入れ、P29 を切る。須恵杯6 土師杯 ・武藏窯
P27	ク3	108	80	-	楕円形	-	(F4)
P28	ク3	88	76	-	長方形	-	(F4) P25・26に切り入 れる土師厚手・武藏窯2
P29	ク3	158	148	35	円形	-	(F4) P31を切る。
P30	ク3	148	137	-	円形	-	(F4) P31を切る。
P31	ク3	118	94	-	長方形	-	P30に切り入れ、土師厚手 罌1・武藏窯1
P32	キ3	(112)	106	-	楕円形	-	P33・34に切り入れ、P36を 切る。須恵タタキ罌1 武 藏窯3
P33	キ3	64	44	-	楕円形	-	(F4) P32・34を切る。
P34	キ3	64	(40)	-	-	-	P33・35に切り入れ、P32を切る。
P35	キ3	107	80	25	楕円形	-	(F2) P34を切る。須恵 杯1 土師杯2
P36	キ3	38	(23)	34	楕円形	-	P32に切り入れ、須恵タタ キ罌 土師厚手罌1・丸底 杯1
P37	キ3	145	126	54	楕円形	1.黒色土層 2.黒褐色土層 3.黒色土層 4.黒褐色土層 5.茶褐色土層	(F3) P38・40を切る。 土師丸割罌・武藏窯2
P38	キ3	130	80	-	楕円形	-	(F3) (F4) P37・39に切 り入れ、P255を切る。
P39	キ3	72	68	33	円形	黒褐色土層	(F2) H1, P38を切る。

遺構名	出土位置	規模 (cm)			平面形	覆土	備考
		長径	短径	深さ			
P40	キ3	(98)	76	27	楕円形	-	P37に切られる。
P41	キ3	95	72	34	楕円形	-	H1, P42・255を切る。須 恵壺1・タタキ罌1 土師丸 底杯1・鉢3
P42	カ3	78	60	23	楕円形	-	(F2) P41に切られる。 土師丸底杯1
P43	カ3	112	(44)	-	-	-	(F6) H3, P44に切られる。
P44	カ3	568	134	70	楕円形	-	(F5) H3に切り入れ、P43 ・45・243を切る。
P45	オ3	(86)	80	34	楕円形	-	H3, P44・46に切り入れ、 P49を切る。
P46	オ3	134	92	-	楕円形	-	(F5) H3に切り入れ、P45 ・47・49を切る。
P47	オ3	102	(64)	-	-	-	P46・50に切り入れ、P49を切る。
P48	オ3	-	-	-	-	-	
P49	オ3	190	118	-	長方形	-	(F6) H3, P46~48・51 に切られる。
P50	オ3	200	123	-	楕円形	-	(F5) P48・82を切る。
P51	エ3	127	122	-	円形	-	(F5) H18, P49・52・ 53を切る。須恵壺1・杯5 ・蓋1 土師武藏窯
P52	オ3	80	(58)	-	楕円形	-	P51に切り入れ、P84を切る。
P53	エ3	(84)	(34)	-	-	-	(F6) P61に切り入れ、 H18を切る。
P54	エ2	164	118	72	不整形	-	H18を切る。須恵丸底杯1 ・厚手罌1 土師厚手罌・ 長割罌
P55	エ3	56	(32)	-	-	-	H18を切る。P56と範囲不明
P56	ウ3	66	(62)	-	楕円形	-	P59に切り入れ、H18を切る。 P55と範囲不明
P57	ウ3	(136)	132	40	円形	-	(F7) P58に切り入れ、H18を切る。
P58	ウ3	76	(44)	-	楕円形	-	H18, P57を切る。
P59	ウ3	122	108	-	楕円形	-	(F7) H18, P56・60を 切る。須恵タタキ罌1 土 師丸割罌
P60	ウ3	84	(59)	-	-	-	P59に切り入れ。
P61	ウ3	92	64	-	楕円形	-	P62・63を切る。
P62	ウ3	56	(42)	-	楕円形	-	P61に切られる。
P63	ウ3	78	(66)	54	楕円形	-	(F7) P61に切り入れ。
P64	エ3	176	114	-	楕円形	-	(F7)
P65	エ4	66	62	-	円形	-	H7を切る。
P66	エ4	267	100	-	不整形	-	P67に切り入れ、H7を切る。
P67	エ4	200	132	46	不整形	1.黒褐色土層 2.黒色土層 3.黒色土層	(F4) P66を切る。須恵 タタキ罌5 土師厚手罌・ 丸底杯
P68	エ4	140	136	63	円形	1.黒褐色土層 2.黒色土層 3.黒色土層	(F4) 土師厚手罌・丸底 杯1
P69	エ4	88	80	40	円形	-	土師厚手罌・丸底杯
P70	エ4	(160)	104	48	-	1.黒色土層 2.黒褐色土層	(F4)須恵糸切杯1 土師糸 切杯・椀1
P71	エ4	70	40	-	楕円形	-	土師厚手罌2
P72	キ3	128	102	56	楕円形	1.黒色土層 2.黒褐色土層	(F4)須恵糸切杯1 土師丸 底黒色杯・武藏窯5
P73	キ4	50	42	-	円形	-	P74を切る。須恵丸底杯1 ・土師厚手罌
P74	キ3	153	95	49	不整形	1.黒色土層 2.黒褐色土層	(F4) P73に切り入れ。 土師丸底杯・武藏厚手罌1・壺
P75	カ3	50	38	26	楕円形	-	(F4)
P76	エ4	140	102	-	楕円形	-	(F4) P75に切られる。
P77	エ4	182	167	65	円形	-	(F5) P79を切る。須恵 タタキ罌2 土師厚手罌
P78	カ3	160	154	-	円形	-	(F5) P243を切る。
P79	エ4	73	(68)	-	-	-	(F6) P77に切り入れ、P82を切る。
P80	エ4	125	(72)	-	楕円形	-	P50・79・81に切られる。
P81	エ4	188	121	-	楕円形	-	(F5) P82を切る。
P82	エ4	(154)	94	-	楕円形	-	(F6) P50・83に切り入 れる。須恵高台杯1 土師長 割罌・丸底杯2

遺構名	出土位置	規模 (cm)			平面形	覆土	備考
		長径	短径	深さ			
P 83	E4	118	106	-	楕円形	(F5) H18、P82・84・85を切る。須恵寺夕小甕1・土師丸底杯2・武藏厚葉1	
P 84	E3	58	(48)	-	-	P52・H33に切られる。	
P 85	E4	124	(56)	-	-	(F6) P83に5丸、H18を切る。	
P 86	E4	124	(51)	-	-	P87と新旧不明	
P 87	E4	186	102	-	楕円形	(F5) P86と新旧不明 須恵高台杯1 土師丸底杯1・武藏厚葉1	
P 88	E4	95	79	-	楕円形	(F7) 土師内里丸底杯2	
P 89	E4	89	70	36	-	H18、P90を切る。	
P 90	E4	(64)	(30)	-	-	H18、P89に切られる。	
P 91	E4	72	(56)	-	-	P92に切られる。	
P 92	E4	140	86	-	楕円形	(F7) P91・93・95を切る。須恵糸切杯 土師丸底杯	
P 93	E4	87	(76)	-	楕円形	P92・93に5丸、H18、P94を切る。	
P 94	E4	32	(26)	-	-	P93に切られ、H18を切る。	
P 95	E4	96	(45)	-	-	P92に切られ、P93を切る。	
P 96	E4	126	92	-	楕円形	(F7) P245を切る。須恵蓋・杯・甕・土師丸底杯・甕	
P 97	E4	192	80	-	楕円形	H18、P245を切る。土師丸底杯1・武藏厚葉1	
P 98	E4	126	117	-	楕円形	(F7)	
P 99	E5	100	(50)	15	-	北朝調査区外 土師糸切杯1	
P100	E5	30	27	36	方形		
P101	E5	72	68	-	円形		
P102	E5	80	50	-	楕円形		
P103	E5	126	(82)	-	-	南朝調査区外 鏡片2 須恵小甕 土師内里杯 灰柄陶器皿 近現代陶器・瓦	
P104	E7	44	40	17	方形		
P105	E7	48	42	14	楕円形		
P106	E8	88	52	34	楕円形		
P107	E9	91	76	17	楕円形	P108を切る。	
P108	E9	63	48	46	楕円形	P107に切られる。	
P109	E10	42	32	21	楕円形	H34を切る。須恵杯1 土師内里杯1・ロコ口小甕1	
P110	E11	46	43	7	円形	P111に切られ、H34を切る。須恵杯1 土師内里杯6・武藏厚葉2	
P111	E11	76	75	12	円形	H34、P110を切る。	
P112	E11	167	75	11	楕円形	H10・34・36を切る。須恵蓋1 土師杯5・輪1	
P113	E11	49	29	10	楕円形	H34・36を切る。	
P114	E11	133	84	9	楕円形		
P115	E11	31	29	20	円形		
P116	E10	32	26	17	楕円形		
P117	欠						
P118	E9	220	(129)	48	不整形	H37に切られる。	
P119	E10	(59)	59	24	-	南朝調査区外 H38に切られる。	
P120	欠						
P121	E9	81	80	37	円形	P122を切る。須恵小甕 土師厚手裏1・内里陶	
P122	E9	41	(25)	25	-	P121に切られる。	
P123	E10	72	67	26	円形	H39を切る。	
P124	E10	35	33	27	円形	H39を切る。	
P125	E10	51	40	30	楕円形	須恵杯 土師厚手丸形甕1・武藏厚葉1	
P126	E10	46	(38)	16	-	P127に切られる。	
P127	E10	96	87	35	円形	P126を切る。須恵杯3 土師内里杯3・武藏厚葉1	
P128	E10	60	39	13	楕円形		
P129	E10	42	30	1	楕円形		
P130	E10	47	40	28	楕円形		
P131	E12	51	(30)	20	-	H33に切られる。	
P132	E12	76	63	-	楕円形		
P133	E12	61	(33)	52	-	H37に切られる。	

遺構名	出土位置	規模 (cm)			平面形	覆土	備考
		長径	短径	深さ			
P134	E12	92	82	43	楕円形	須恵1 土師高台杯1・丸底杯10・武藏厚葉2	
P135	E12	(196)	158	32	-	H37と通観P136に切られる。	
P136	E12	125	(69)	71	楕円形	H37・P135を切る。須恵杯5・甕1 灰柄陶器皿1 土師丸底杯4・武藏厚葉17・厚手甕1	
P137	E11	44	36	94	楕円形	H37、P248を切る。	
P138	E13	96	74	55	楕円形	須恵杯1 土師丸底杯3・甕1・武藏厚葉1	
P139	E13	116	98	34	長方形	土師丸底杯3・小甕・甕	
P140	E12	110	88	29	楕円形		
P141	E12	166	128	30	長方形	須恵糸切杯・杯1・高杯3・夕小甕3 土師内里杯1・厚手甕3・武藏厚葉1	
P142	E12	37	34	28	円形	H38を切る。	
P143	欠						
P144	E14	54	(48)	23	-	D20Cに切られる。須恵杯 土師杯内里・墨甕	
P145	欠						
P146	E14	83	51	15	楕円形		
P147	E14	50	33	17	楕円形		
P148	E14	46	34	-	楕円形		
P149	E14	52	45	-	楕円形	P150を切る。	
P150	E14	87	(80)	-	円形	P149に切られる。	
P151	E14	60	(22)	21	-	H33に切られる。	
P152	E14	116	102	27	楕円形		
P153	E14	109	84	61	楕円形	H33を切る。	
P154	E13	111	49	-	楕円形		
P155	E14	51	48	-	円形		
P156	E14	55	54	-	円形		
P157	E14	49	42	-	楕円形	P158を切る。	
P158	E14	140	100	-	不整形	P157に切られる。	
P159	E15	62	58	47	円形		
P160	E15	76	48	41	楕円形	H35、P161を切る。	
P161	E15	(35)	(32)	29	-	H35、P160に切られる。	
P162	E15	39	33	31	楕円形	H35を切る。	
P163	E15	32	26	11	楕円形		
P164	E9	51	45	23	楕円形		
P165	E10	62	49	30	楕円形		
P166	E10	65	(59)	50	楕円形	M5に切られる。	
P167	E11	48	47	64	円形		
P168	E11	45	37	13	楕円形	黒色土層	
P169	E10	(66)	(60)	43	円形	M5に切られる。	
P170	E10	(50)	47	30	楕円形	M5に切られる。	
P171	E11	59	50	40	楕円形		
P172	E11	59	57	56	円形		
P173	E11	57	50	51	楕円形		
P174	E14	82	59	20	楕円形		
P175	欠						
P176	欠						
P177	E14	33	33	33	円形		
P178	E15	85	55	24	不整形		
P179	E15	42	41	-	方形		
P180	E15	(40)	28	17	-	H12Cに切られる。	
P181	E21	78	77	46	円形	H32を切る。	
P182	E20	96	48	14	楕円形	H32を切る。	
P183	E20	91	72	16	楕円形	H32を切る。	
P184	E20	66	65	13	円形	H32を切る。	
P185	欠						
P186	E21	73	58	40	楕円形		
P187	E21	148	127	53	楕円形		
P188	E21	146	136	64	円形		
P189	E22	78	54	29	楕円形	H32を切る。	
P190	E22	64	62	46	円形	P191・192を切る。	

遺構名	出土位置	規模 (cm)			平面形	覆土	備考	遺構名	出土位置	規模 (cm)			平面形	覆土	備考	
		長径	短径	深さ						長径	短径	深さ				
P191	/22	76	(64)	41	-		P190Cに切られ、H32を切る。P192と新旧不明 須恵杯・壺1 土師内黒杯4・壺・武蔵甕1	P246	キ11	33	25	10	楕円形		H10・34・36Cに切られる。	
P192	/22	62	(40)	53	楕円形		P190Cに切られ、H32を切る。P191と新旧不明	P247	キ10	78	(34)	29	-		H10・36Cに切られる。	
P193	/21	110	110	35	円形		H32を切る。	P248	ス11	78	(52)	30	-		H37、P137Cに切られる。	
P194	/21	58	45	40	楕円形			P249	ス11	34	22	23	楕円形			
P195	/23	(24)	83	-	楕円形		定例調査区外 H22を切る。	P250	ス11	81	(39)	41	-		H37Cに切られる。	
P196	ヒ23	122	98	68	楕円形		(F8) H22を切る。	P251	ス10	108	(62)	39	-		H37Cに切られる。	
P197	/23	100	76	69	楕円形		(F8) H22を切る。	P252	ス10	31	14	15	楕円形			
P198	/23	108	82	34	楕円形		P199・200を切る。	P253	ス10	37	22	20	楕円形			
P199	/23	(92)	78	32	楕円形		(F8) P198Cに切られ、H22、P200を切る。	P254	ス11	42	32	34	楕円形			
P200	/23	(80)	79	12	楕円形		P198・199C95枚、H22を切る。	P255	キ3	(160)	92	-	-		伊4 伊8・41Cに切られる。	
P201	/24	130	108	82	楕円形		(F8) H22、P202を切る。	P256	キ11	36	(24)	-	-		H43Cに切られ、H46を切る。	
P202	/24	90	(64)	-	-		P201Cに切られ、H22を切る。	P257	サ15	94	(40)	107	-		1層色土層 2層色土層 3層色ローム層	西側調査区外 H35を切る。
P203	/24	104	100	70	円形		(F8) H22を切る。	P258	欠							
P204	/24	144	98	-	楕円形		(F8) H22を切る。	P259	ケ10	60	59	38	円形		H39Cに切られる。	
P205	キ23	91	71	-	楕円形		須恵タタキ目薬か壺1	P260	/20	55	44	41	楕円形		H40を切る。	
P206	キ23	33	32	10	円形			P261	ヒ25	(80)	(72)	-	円形		(F8) H22を切る。	
P207	キ23	38	35	15	円形			F1-P1	ソ13	128	108	79	楕円形			
P208	キ44	74	53	58	楕円形		M7を切る。	F1-P2	ソ14	120	82	57	楕円形			
P209	キ43	(128)	65	73	楕円形		M7に切られる。	F1-P3	ソ15	94	45	92	楕円形			
P210	キ44	108	56	35	楕円形		H9、P211を切る。	F1-P4	ソ16	88	80	71	円形			
P211	キ44	(54)	45	17	楕円形		H8、P210Cに切られ、H9を切る。	F1-P5	セ16	116	92	86	楕円形			
P212	キ45	197	131	110	楕円形		(F9)	F1-P6	セ16	96	96	64	円形			
P213	キ45	37	37	11	円形			F1-P7	ス16	164	100	127	楕円形			
P214	キ46	120	53	52	長方形		(F9) タタキ壺1	F1-P8	ス15	158	120	76	楕円形			
P215	キ46	(31)	28	13	-		H44Cに切られる。	F1-P9	ス14	180	156	76	楕円形			
P216	キ47	67	34	41	楕円形			F1-P10	ス14	112	112	78	円形			
P217	欠							F1-P11	ス13	98	88	75	円形			
P218	キ46	118	63	52	楕円形		(F9)	F1-P12	セ13	114	112	66	円形			
P219	キ46	72	52	19	楕円形		P220を切る。	F1-P13	セ14	136	100	77	楕円形			
P220	キ46	90	84	48	方形		(F9) P219Cに切られる。須恵壺3 土師壺2	F1-P14	セ14	100	90	73	円形			
P221	キ46	52	42	23	楕円形			F1-P15	セ14	80	62	26	楕円形			
P222	キ46	30	30	63	円形		(F9) P223・225と同一セット	F1-P16	セ14	112	104	65	不整形			
P223	欠							F1-P17	セ14	88	56	32	楕円形			
P224	キ46	124	104	46	楕円形		P223・225に切られる。	F1-P18	ス15	74	74	54	円形			
P225	キ46	(204)	74	42	楕円形		(F9) P222と同一セット 須恵杯・壺 土師厚子壺	F1-P19	セ15	98	80	39	不整形			
P226	キ46	66	65	41	円形		(F9) 須恵杯1	F1-P20	ス15	86	70	45	不整形			
P227	キ47	170	66	65	長方形		(F9)	F1-P21	ス15	68	68	56	円形			
P228	キ46	120	66	48	長方形		P229を切る。	F1-P22	セ15	40	32	19	円形			
P229	キ46	174	110	30	楕円形		P228Cに切られ、P230を切る。	F1-P23	セ15	60	22	10	楕円形			
P230	キ46	56	(52)	32	楕円形		P229Cに切られる。	F1-P24	セ15	46	32	15	円形			
P231	キ46	54	38	-	楕円形		H47を切る。	F1-P25	セ15	46	30	11	楕円形			
P232	キ47	62	56	30	楕円形			F1-P26	ソ13	84	(26)	34	-			
P233	キ47	73	55	45	楕円形			F1-P27	ソ15	96	(32)	51	-			
P234	キ47	54	53	21	円形			F1-P28	セ16	48	(30)	18	-			
P235	キ48	67	66	31	円形			F1-P29	ス13	(100)	68	24	-			
P236	キ48	60	60	30	円形			F1-P30	ス13	(92)	64	19	-			
P237	キ48	60	60	32	円形											
P238	キ48	222	80	72	楕円形		P239を切る。									
P239	キ48	(69)	54	35	楕円形		P238Cに切られる。									
P240	キ48	60	44	23	楕円形											
P241	キ43	(228)	(84)	61	楕円形		西側調査区外 MSに切られ、H51を切る。須恵杯2・壺1・壺壺3 土師杯2									
P242	キ41	61	47	48	楕円形		H49を切る。須恵杯6・壺壺3 土師内黒杯2 武蔵壺1									
P243	キ3	94	(42)	-	-		P44・78に切られる。									
P244	ヒ20	46	44	25	円形		H31を切る。									
P245	ウ4	80	(54)	-	-		(F6) P96・97Cに切られる。									

第3-1表 上の城遺跡Ⅱ 古代遺物一覧表

()は推定値 ()は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			内面	成形・調整		備考	出土位置
				口径(径)	底径(底)	器高(高)		重量(g)	外面		
H1	1	土師器	杯	口縁	(1.40)	丸底	(2.7)	ナデ→黒色処理	ナデ→わずかにミガキ→黒色処理	回転実測	
	2	土師器	杯	口～底	(12.0)	(11.0)	(4.1)	横ナデ→放射状暗文	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ	回転実測	No.6
	3	土師器	杯	口～底	(12.6)	丸底	6.3	ミガキ→黒色処理	ミガキ→黒色処理	完全実測	No.7
	4	土師器	把手付杯	完形	11.4	6.5	8.0	底部ヘラナデ→ナデ→口縁横ナデ	底部側部ヘラケズリ→口縁横ナデ→側部ミガキ	完全実測	丸底気味 No.10
	5	土師器	小甕	口～底	13.8	丸底	13.2	横ナデ	口縁横ナデ→側部ヘラケズリ	完全実測	
	6	土師器	甕	底	-	4.4	(3.2)	ナデ	ヘラケズリ	完全実測	
	7	土師器	甕	底	-	7.8	(5.5)	ナデ 磨耗	ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	
	8	土師器	鉢	1/2	12.3	丸底	8.7	ざつな暗文→黒色処理	ミガキ→黒色処理	完全実測	P6No.8
付属1	骨	ウマノウシ	四肢骨	(7.0)	(2.7)	(0.7)	他9片			No.1	
H3	1	須恵器	杯	底	-	5.2	(1.9)	ナデ 火だすき	底部回転系切り 坯部ナデ 火だすき	回転実測	
	2	須恵器	杯	底	-	9.4	(3.4)	横ナデ	底部回転ヘラケズリ 口縁ロクロナデ	回転実測	混入品
	3	須恵器	高台付杯	底	-	14.4	(1.3)	ナデ	自然輪付着	回転実測	高台貼付 混入品
	4	土師器	杯	口縁	16.4	-	(4.8)	口縁上部斜線 ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	完全実測	煤付着 No.2・床面
	5	土師器	杯	口～底	(13.1)	5.8	4.2	ミガキ→黒色処理	底部回転系切り 口縁ロクロナデ	回転実測	床面
	6	土師器	杯	口縁	(13.2)	-	(3.0)	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測	
	7	土師器	椀	口～底	(17.6)	(8.6)	(7.8)	ミガキ→黒色処理	底部回転系切り→高台貼付 杯部雑なミガキ→黒色処理	回転実測	H1・P16・ネ3
	8	土師器	皿	口～底	14.0	7.0	3.2	皿部ミガキ→黒色処理 高台部横ナデ	底部回転系切り→高台貼付 横ナデ	完全実測	底に墨書「録」 No.1
	9	土師器	杯	口～底	(12.4)	(8.4)	4.7	放射状暗文 磨耗	ヘラケズリ 磨耗	回転実測	
	10	土師器	甕	胴	(16.2)	-	(6.8)	側部ナデ→口縁横ナデ	口縁横ナデ→側部ヘラケズリ	回転実測	武蔵甕 カマド付近
	11	須恵器	甕	胴	-	-	-	当て真直→横ナデ	タタキ目 自然輪付着	断面実測	拓本 床面
	12	須恵器	土板	胴	6.2	5.2	1.1	ナデ	ナデ ハケ目わずかにあり	完全実測	端部に磨面あり
H4	1	灰陶器	皿	口～底	(15.8)	(7.2)	2.9	施釉	高台貼付 ロクロナデ 口縁灰釉液けかけ	回転実測	口縁ゆがむ
	2	灰陶器	椀	口縁	(14.0)	-	(2.9)	施釉 みこみ部重ね発痕あり	ロクロナデ→施釉	回転実測	カ・キ10Ⅱ層
	3	灰陶器	皿	口縁	(14.0)	-	(1.4)	施釉	ロクロナデ→施釉	回転実測	
	4	灰陶器	壺	底	-	(6.4)	(3.2)	ロクロナデ	回転ヘラケズリ 高台欠損	回転実測	
	5	須恵器	杯	底	-	(5.4)	(1.5)	横ナデ	底部回転系切り 横ナデ	回転実測	
	6	須恵器	椀	底	-	6.8	(3.9)	横ナデ みこみ部磨耗	底部回転系切り→高台貼付 口縁ロクロナデ	完全実測	
	7	須恵器	椀	底	-	7.4	(2.0)	横ナデ みこみ部磨耗	底部回転系切り→高台貼付 黒色を帯びる	完全実測	
	8	須恵器	椀	底	-	(6.6)	(2.0)	横ナデ みこみ部磨耗	底部回転系切り→高台貼付	回転実測	カマド
	9	須恵器	壺	口	(14.8)	-	(3.0)	自然輪付着	自然輪付着	回転実測	
	10	須恵器	壺	底	-	(8.2)	(4.6)	ロクロナデ	底部回転系切り→高台貼付 側下部回転ヘラケズリ	回転実測	
	11	須恵器	壺	底	-	(13.8)	(6.7)	自然輪付着	ロクロナデ 底部ヘラナデ	回転実測	キ10
	12	須恵器	壺	底	-	(10.6)	(8.5)	ロクロナデ	ロクロナデ→下部回転ヘラケズリ 高台貼付	回転実測	
	13	須恵器	四耳壺	肩	-	-	-	当て真直→ナデ	タタキ目 肩に紐	断面実測	拓本
	14	土師器	杯	口～底	(13.0)	5.8	3.9	ミガキ→黒色処理	口縁横ナデ 底部口縁下端手持ちヘラケズリ	完全実測	キ9
15	土師器	杯	口～底	(12.6)	6.2	(3.8)	ミガキ→黒色処理	底部回転系切り 口縁横ナデ	完全実測		
16	土師器	杯	口～底	(13.4)	(5.8)	4.9	ミガキ→黒色処理	底部回転系切り 口縁横ナデ	完全実測	カマド	
17	土師器	杯	口縁	(12.0)	-	(2.8)	一部ミガキ→暗文→黒色処理	ロクロナデ	回転実測		
18	土師器	杯	口～底	(12.8)	(4.2)	(1.1)	口縁部のみミガキ→黒色処理	ロクロナデ 底部回転系切り	回転実測	柱状高台作りか	

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			重量 (g)	成形・調整		備考	出土位置		
				口径(径)	底径(径)	器高(深)		内面	外面				
H4	19	須恵器	杯	底	-	(6.2)	(1.6)	ロクロナデ→黒色処理	底部回転系切り 黒色処理	完全実測			
	20	土師器	椀	底	-	(6.8)	(2.8)	ミガキ→黒色処理	高台貼付	回転実測			
	21	土師器	椀	口縁	(14.8)	5.0	(4.7)	ミガキ→黒色処理 色変	高台部欠損 底部回転系切り 杯部横ナデ	回転実測			
	22	土師器	椀	底	-	(11.0)	(2.2)	ミガキ→黒色処理	底部ヘラケズリ→高台貼付 横ナデ	回転実測			
	23	須恵器	椀	口縁	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ 墨書「東」か	破片実測			
	24 欠倉												
	25	土師器	杯	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 墨書「東」	破片実測			
	26	土師器	杯	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 墨書(判読不明)	破片実測			
	27	土師器	杯	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 墨書(判読不明)	破片実測			
	28	土師器	甕	底	-	(7.2)	(4.8)	横ナデ	底部糸切り 胴部横ナデ	回転実測			
	29	土師器	甕	底	-	(9.0)	(4.3)	横ナデ	ヘラケズリ→ミガキ	回転実測			
	30	土師器	甕	胴	-	-	(8.7)	ハケ目	ヘラケズリ→ミガキ	回転実測			
	31	土師器	高杯	脚	-	-	(5.7)	杯部ミガキ→黒色処理 脚部ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測			
	32	灰陶器	椀	底	-	(6.4)	(1.7)	灰釉 みこみ磨耗 未付着	高台貼付 口縁部施釉 底部磨耗	回転実測	内面転用朱染硯 外面底部転用硯		
	33	鉄器	角釘	ほぼ完成	(10.1)	0.6	0.5	10.6			先端欠損	Ro10	
	34	鉄器	角釘	完成	10.0	0.6	0.5	14.5			先端曲り	Ro11	
	35	石器	凹石		11.6	9.0	4.5	132.6		凹面磨り	軽石		
	36	須恵器	壺	底	-	(16.6)	(3.5)		ロクナデ 自然釉付着	ロクロナデ→底部ナデ→高台貼付 少量の自然釉付着	回転実測	オ・カ10 ヒ22	
	H5	1	灰陶器	皿	口縁	(16.6)	-	(2.9)	施釉	施釉 高台貼付	回転実測	混入品	
		2	須恵器	杯	口→底	(14.6)	5.4	5.0	横ナデ	底部回転系切り ロクロナデ→横ナデ	完全実測	混入品	
		3	須恵器	高台付杯	底	-	(9.4)	(1.3)	磨耗	高台貼付	回転実測		
		4	須恵器	杯	底	-	-	-	磨耗	ナデ(ハケ目)	断面実測 拓本		
		5	須恵器	高台付杯	底	-	-	-	横ナデ	底部回転ヘラケズリ 高台欠損	拓本 断面実測		
		6	須恵器	高杯	脚	-	-	(5.4)	杯部磨耗 脚部横ナデ	横ナデ	完全実測		
		7	土師器	椀	底	-	7.8	(2.4)	ミガキ→黒色処理	底部回転系切り→高台貼付	完全実測	混入品	
		8	土師器	杯	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)	破片実測	混入品	
		9 欠倉											
		10	土師器	杯	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)	破片実測	混入品	
	11	土師器	甕	口縁	(14.2)	-	(5.3)		口縁横ナデ 胴部ハケ目→ナデ	口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ	回転実測 武蔵羹	混入品	
	12	土師質	かわらけ	口→底	(9.2)	(6.8)	1.4	8.7	横ナデ	底部回転系切り 口縁横ナデ	回転実測	混入品	
	13	鉄器	角釘	ほぼ完成	(8.1)	0.6	0.5			底部欠損	先端欠損	Ro12	
	H7	1	灰陶器	皿	口縁	(15.0)	-	(2.5)	施釉	ロクロナデ→下部回転ヘラケズリ→施釉	回転実測	床面	
		2	須恵器	杯	口縁	(14.4)	-	(3.6)	ロクロナデ 磨耗	ロクロナデ	回転実測	ケ4	
		3	須恵器	土板	底	4.6	2.4	0.7		ロクロナデ	底部ヘラケズリ→磨書	断面実測 拓本	
		4	土師器	杯	口→底	(13.7)	5.8	3.5	ミガキ→黒色処理	底部回転系切り 口縁横ナデ 煤付着	完全実測		
		5	土師器	土板	-	9.4	5.8	2.4	ミガキ→黒色処理	底部回転系切り→高台欠損→高台接合面研磨	完全実測 転用して使用か 二次焼成をうける 灰付着		
6		土師器	杯	底	-	(6.2)	(1.2)		底部回転系切り	ナデ	回転実測		
7		土師器	杯	底	-	(5.6)			ナデ	底部回転系切り	回転実測		

() は推定値 () は現存値

造構番号	種類	器種	部位	法 量 (cm)			重量 (g)	成 形・調 整		備考	出土位置				
				口径(内)	底径(内)	器高(内)		内 面	外 面						
H17	8	土師器	土板 底	5.1	4.8	0.7		ミガキ→黒色処理	底部回転系切り	完全実測	杯転用				
	9	土師器	甕 口～底	13.0	4.8	14.3		横ナデ 口縁横ナデ	口縁横ナデ 胴部底部ヘラケズリ	完全実測					
	10	土師器	椀 口～底	(16.0)	(7.2)	4.5		ミガキ→黒色処理	底部回転系切り→高台欠損 高台接合面研磨	回転実測	灰付着				
H18	1	須恵器	蓋 口～底	(14.7)	2.8×2.8	2.4		クロコナデ 刻書「X」 磨耗	つまみ貼付 天井部 ヘラケズリ→横ナデ			No.9			
	2	須恵器	杯 口～底	14.2	7.4	4.5		クロコナデ	クロコナデ 底部回転系切り			完全実測	No.5		
	3	須恵器	杯 口～底	(13.8)	7.5	4.0		クロコナデ	底部回転系切り	クロコナデ			回転実測	No.1	
	4	須恵器	杯 口～底	(15.6)	(8.0)	4.0		ナデ みこみ部磨耗	クロコナデ 杯下部磨耗				回転実測	No.2	
	5	須恵器	杯 口～底	(13.0)	8.2	4.0		ナデ	クロコナデ 底部回転系切り				回転実測	カマド	
	6	土師器	甕 口～胴	(20.6)	-	(8.2)		ハケ目→横ナデ	横ナデ 胴部ヘラケズリ				回転実測	武蔵甕	カマド
	7	鉄器	角釘 先端	(3.4)	0.4	0.3	0.7								No.2
	8	須恵器	杯 口～底	(13.4)	(7.2)	3.5		ナデ	クロコナデ 底部系切り				写真のみ		
	9	須恵器	高台付杯 底	-	(7.2)	(1.7)		クロコナデ	高台貼付 自然輪付着				写真のみ		
	10	須恵器	短須恵 口縁	(8.8)	-	(2.5)		横ナデ	横ナデ 自然輪付着				写真のみ	H18?	
	11	須恵器	長須恵 口縁	(6.2)	-	(3.1)		横ナデ	横ナデ 自然輪付着				写真のみ		
	12	須恵器	壺 底	-	(10.8)	(2.5)		ナデ	高台貼付				断面に赤色顔料付着	写真のみ	
	13	須恵器	甕小壺 口縁	(25.0)	-	(2.0)		横ナデ	横ナデ				写真のみ		
	14	須恵器	甕小壺 胴	-	-	-		当て具横→ナデ	タタキ目				写真のみ	No.6	
	15	土師器	甕 口縁	(20.2)	-	(4.7)		横ナデ	横ナデ				写真のみ		
	16	土師器	甕 口縁	(16.2)	-	(4.5)		横ナデ	横ナデ				写真のみ		
	17	土師器	甕 底	-	(5.0)	(4.7)		ナデ	ヘラケズリ				写真のみ		
付属2	骨	哺乳類 不可	(3.0)	(3.0)	(2.3)		他8片							No.4	
付属3	骨	ウマ 上顎骨	(3.2)	(3.2)	(1.9)		他14片							No.7	
付属4	骨	ウマ 上顎骨	(3.6)	(3.2)	(2.6)		他6片								
H19	1	須恵器	高台付杯 底	-	(12.0)	(1.4)		ナデ	高台貼付					回転実測	
	2	須恵器	壺 胴	-	-	-		ナデ	タタキ→ナデ→沈殿					断面実測	拓本
	3	土師器	甕 口縁	(26.0)	-	(2.5)		横ナデ	横ナデ					回転実測	武蔵甕
	4	土師器	甕 口縁	(21.0)	-	(4.8)		横ナデ	横ナデ					回転実測	
	5	土師器	甕 底	-	(5.6)	(1.7)		ナデ	胴部底部ヘラケズリ					回転実測	カマド・No.2
	6	鉄器	角釘 先端	(1.8)	0.4	0.35	0.5								No.3
	7	石器	砥石	5.6	4.6	2.3	103.8		砥面4						流紋岩
H10	1	土師器	杯 口～底	13.8	11.5	4.6		横ナデ→ミガキ 磨耗	口縁横ナデ 底部ヘラケズリ 磨耗	完全実測	口縁に煤付着			No.10	
	2	土師器	杯 口～底	14.2	12.8	4.3		横ナデ→みこみ部ミガキ 磨耗	口縁横ナデ 底部ヘラケズリ 磨耗	完全実測				キ-9	
	3	土師器	杯 口～底	(14.0)	(12.0)	3.6		磨耗	口縁横ナデ 底部ヘラケズリ 磨耗	回転実測				No.36・37	
	4	土師器	杯 口～底	(15.0)	(13.8)	4.0		横ナデ→黒色処理	口縁横ナデ 底部ヘラケズリ→黒色処理	回転実測				カ・キ-8・9	
	5	土師器	杯 口～底	(12.0)	(10.0)	2.3		剥離	口縁横ナデ 底部ヘラケズリ	回転実測				オ・カ-9	
	6	土師器	杯 口～底	(9.0)	(10.6)	(4.7)		ミガキ→黒色処理	口縁ミガキ→黒色処理	回転実測				カ-9	
	7	土師器	杯 口～底	(15.0)	(9.6)	3.5		雑なミガキ→黒色処理	口縁横ナデ 底部ヘラケズリ 磨耗跡 黒色処理とれたか	回転実測				オ-9	
	8	土師器	杯 口～底	(13.0)	丸底	5.3		ミガキ→黒色処理	口縁横ナデ 底部ヘラケズリ→ミガキ 全体に磨耗	回転実測				底面に刻書「X」	

()は推定値 ()は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法 量 (cm)				成 形・調 整		備考	出土位置		
				口径(内)	底径(内)	器高(内)	重量(g)	内 面	外 面				
H10	9	土師器	杯	口～底	(12.6)	丸底	4.8		ミガキ	口縁横ナデ→底部ヘラケズリー→ミガキ	回転実測	カマド付近	
	10	土師器	杯	口～底	(11.4)	6.8	4.7		ミガキ→黒色処理	口縁ミガキ 底部ヘラケズリ	回転実測	1孔 オ9	
	11	土師器	瓶	底	-	11.0	(8.0)		ミガキ	ミガキ	回転実測	No.42	
	12	土師器	鉢	口縁	(23.4)	-	(8.7)		ミガキ→黒色処理 磨耗	口縁横ナデ 胴部ヘラケズリー→ミガキ	回転実測	No.14	
	13	土師器	鉢	口～胴	(24.8)	-	(12.6)		ハケ目→ミガキ→黒色処理色変	底部ヘラケズリー→ミガキ→口縁横ナデ	回転実測	No.20・28・11 オキ8・9	
	14	土師器	鉢	口縁	(18.0)	-	(7.1)		胴部ナデ	口縁横ナデ→胴部ミガキ	回転実測	No.21 仮層・NW	
	15	土師器	小甕	口～胴	(15.0)	-	(7.6)		胴部ナデ	口縁横ナデ→わずかにミガキ	回転実測	貼付部 No.34 No.32	
	16	土師器	長胴甕	口縁	(19.4)	-	(7.8)		口縁横ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	No.24	
	17	土師器	丸胴甕	底	-	8.8	(3.8)		ミガキ	ミガキ 磨耗	完全実測	No.19	
	18	土師器	丸胴甕	胴	-	-	-		ハケ目	ハケ目	断面実測	拓本 No.22	
	19	土師器	長胴甕	口～胴	(21.2)	(7.2)	37.2		ハケ目→口縁横ナデ	胴部ヘラナデ→口縁横ナデ 付着物により調整不明	完全実測	P6 No.15・11	
	20	鉄	るつぼ	-	15.1	11.5	3.4	432.0				写真のみ	No.13
	21	鉄	るつぼ	-	7.1	6.3	2.6	89.5				写真のみ	No.28
	22	石器	紡錘車	-	5.3	5.0	1.6	19.0				硬石	No.1
	H11	1	須恵器	蓋	口縁	-	-	-		ナデ	ロクロナデ→天井部回転ヘラケズリ	破片実測	
		2	須恵器	杯	口～底	(14.0)	(4.8)	4.0		ロクロナデ	ロクロナデ 底部糸切り	回転実測	
		3	須恵器	杯	口縁	(13.8)	-	(3.2)		ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	
		4	欠番										
		5	須恵器	杯	口縁	(15.0)	-	(4.2)		磨耗	ロクロナデ 磨耗	回転実測	
		6	土師器	杯	口縁	14.2	5.7	5.2		横ナデ→暗文 2本×3→黒色処理	口縁ロクロナデ 底部回転糸切り→ナデ	完全実測	No.1
		7	土師器	杯	口縁	12.1	5.5	3.9		横ナデ→十字に暗文→黒色処理	口縁横ナデ 底部回転糸切り	完全実測	No.2
		8	土師器	杯	口～底	(13.3)	5.7	4.1		横ナデ→十字に暗文→黒色処理	口縁横ナデ 底部回転糸切り 墨書(判読不明)	完全実測	
9		土師器	杯	口～底	(14.4)	4.9	4.0		ミガキ→黒色処理	口縁横ナデ 底部回転糸切り 底部に墨書(判読不明)	完全実測		
10		土師器	杯(小輪)	口縁	(15.3)	-	(3.8)		横ナデ→暗文→黒色処理	口縁横ナデ 煤付着	回転実測		
11		土師器	桶	底	-	6.2	(3.2)		ナデ→暗文→黒色処理色変	口縁ロクロナデ 高台部欠損	完全実測	カマド	
12		土師器	杯	1/2	13.5	丸底	4.0		ミガキ→黒色処理	底部ヘラケズリー→口縁横ナデ	完全実測	混入品	
13		土師器	杯	1/2	(12.7)	丸底	4.3		横ナデ→放射状暗文	底部ヘラケズリー→口縁横ナデ	完全実測	カマド付近・混入品	
14		欠番											
15		土師器	鉢	1/3	(9.7)	-	(4.2)		ミガキ→黒色処理	ミガキ→黒色処理	回転実測	≠24	
16		土師器	甕	口～胴	(18.2)	-	(13.6)		ナデ→口縁横ナデ	胴部ヘラケズリー→口縁横ナデ	回転実測	カマド	
17		欠番											
18	土師器	円板	破片	(5.7)	-	1.5		ミガキ	ミガキ	破片実測			
H12	1	土師器	手柄	口縁	(3.6)	3.0	4.2		指頭ナデ	ヘラケズリー→ミガキ	完全実測	No.75	
	2	土師器	把手	破片	(4.5)	-	1.4		ナデ	ナデ	完全実測	No.78	
	3	土師器	壺	口縁	14.2	丸底	14.6		胴部ナデ→口縁横ナデ	胴部ヘラケズリー→ミガキ 口縁横ナデ 全体に磨耗	完全実測	No.104・108 H52	
	4	土師器	壺	口縁	13.7	丸底	14.0		胴部ヘラナデ→ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ 黒色処理?	完全実測	915 No.20・21・81・84・86	
	5	土師器	甕	口縁	(22.2)	-	(3.5)		口縁横ナデ	口縁横ナデ	回転実測		
	6	土師器	壺	口～底	(12.6)	-	(11.1)		胴部ナデ→口縁横ナデ	胴部ヘラケズリー→口縁横ナデ→ミガキ 全体に磨耗	回転実測	No.85・87・42	

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			重量 (g)	成形・調整		備考	出土位置
				口径(実)	底径(実)	器高(実)		内面	外面		
H12	7	土師器	長脚製 口~胴	(22.4)	-	(27.1)		胴部ハケナデ→ナデ→口縁横ナデ	口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ	回転実測	No.3・4・41
	8	土師器	椀 口~底	12.6	丸底	6.5		ミガキ→黒色処理	底部ヘラケズリ→ミガキ 全体に磨耗	完全実測	No.10
	9	石器	スクレーパー	5.8	10.7	1.7	82.5				No.74
H13	1	須恵器	蓋 つまみ	-	-	(1.7)		ナデ	回転ヘラケズリ つまみ貼付	完全実測	
	2	須恵器	口~胴	(21.0)	-	(12.8)		ナデ→口縁横ナデ	胴部タタキ目→口縁横ナデ	完全実測	No.1・3
	3	須恵器	蓋 口縁	(8.6)	-	(2.4)		横ナデ	横ナデ	回転実測	
	4	須恵器	蓋 1/4	(9.6)	-	3.2		口縁ナデ	ナデ→つまみ貼付	回転実測	
	5	須恵器	蓋	-	-	-		口縁ナデ	横ナデ	写真のみ	No.2
	6	土師器	杯 底	-	5.3	(3.7)		ナデ	口縁ナデ→底部回転系切り	完全実測	No.10
	7	土師器	杯 底	-	5.2	(1.7)		口縁ナデ→ナデ→黒色処理	口縁ナデ→底部回転系切り	完全実測	No.6
	8	土師器	椀 口~底	14.0	7.6	6.2		ナデ ミガキあり?	底部回転系切り→高台貼付→横ナデ 墨書ありか?	完全実測	No.9
	9	土師器	椀 口縁	(17.0)	-	(6.1)		ミガキ→黒色処理	口縁ナデ 高台欠損	回転実測	t-9
	10	土師器	椀 底	-	7.0	(4.2)		ミガキ→黒色処理	口縁ナデ 高台貼付	完全実測	高台端部欠損磨加工 No.14
	11	土師器	杯 口~底	(12.8)	丸底	3.6		横ナデ	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ	回転実測	
	12	土師器	甕 口~胴	(25.3)	-	(12.0)		胴部ナデ 口縁横ナデ	胴部口縁ナデ→胴下部ヘラケズリ→口縁横ナデ	完全実測	No.11
	13	土師器	甕 底	-	9.0	(2.8)		口縁ナデ	口縁ナデ 底部回転系切り	完全実測	No.7
	14	鉄器	紡錘車 円板	内径径5.4	0.2	-	11.8			軸欠損	No.4
H14	1	須恵器	壺 口縁	-	-	-		横ナデ	横ナデ	断面実測	拓本
	2	土師器	杯 口~底	(13.2)	丸底	3.5		ナデ	底部ヘラケズリ→口縁横ナデ	回転実測	※14
	3	土師器	杯 口~底	(11.8)	丸底	3.6		ナデ	底部ヘラケズリ→口縁横ナデ	回転実測	3層・No.2
	4	土師器	杯 口~底	(10.2)	丸底	3.6		ナデ	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ	回転実測	
	5	土師器	鉢 口~底	19.8	丸底	6.6		放射状暗文	ヘラケズリ→ミガキ	完全実測	※14・No.10・11
	6	土師器	甕 口~胴	(14.8)	-	(13.8)		胴部ハケ目 口縁横ナデ	胴部ハケ目→口縁横ナデ・胴部ヘラケズリ	回転実測	3層・No.8
	7	土師器	甕 胴	-	-	(8.5)		胴部ハケ目 黒色	ハケ目	回転実測	器台転用か No.8
	8	土師器	長脚製 口~底	(22.6)	(5.6)	34.0		胴部ナデ 口縁横ナデ	口縁横ナデ→胴部底部ヘラケズリ	回転実測	No.10
	9	土師器	甕 底	-	(5.0)	(2.8)		ナデ	胴部底部ヘラケズリ	回転実測	No.6
	10-1	鉄器	鎌 基	(3.5)	2.1	0.1	3.2				
	10-2	鉄器	板	(3.4)	(2.7)	0.4	13.9			刃部欠損	
11	石器	凹石	19.1	17.0	8.6	2410		凹面すり		安山岩 No.5	
H15	1	土師器	杯 口~底	(11.4)	丸底	4.3		ナデ	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ	回転実測	
	2	土師器	杯 口~底	(14.0)	丸底	3.5		ミガキ	ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	
	3	土師器	鉢 口縁	(20.0)	-	(4.8)		ミガキ→黒色処理	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	
	4	鉄器	角釘 先端	(2.2)	(0.4)	(0.3)	0.9				No.1
H16	1	須恵器	壺 口縁	(27.4)	-	(10.4)		胴部ナデ 口縁横ナデ	口縁横ナデ 胴部タタキ	回転実測	
	2	土師器	杯 口縁	(14.4)	丸底	(4.2)		横ナデ	口縁横ナデ 底部ヘラケズリ	回転実測	
	3	土師器	杯 底	-	5.0	(2.3)		口縁ナデ	口縁ナデ 底部回転系切り	完全実測	P2・産入品
	4	土師器	甕 口縁	(22.8)	-	(7.0)		横ナデ	口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ	回転実測	No.2・3

()は推定値 ()は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			重量 (g)	成形・調整		備考	出土位置
				口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		内面	外面		
H16	5	土師器	甕	底	-	(8.0)	(13.7)	ナデ	ミガキ	回転実測	No.1
	6	土師器	甕	底	-	(8.0)	(4.6)	ハケ目	ヘラケズリ	回転実測	ハ-14
	7	土師器	甕	胴	-	-	-	ハケ目	ヘラケズリ	写真のみ	
H17	1	土師器	壺	口縁(実)	(8.4)	丸底	10.0	胴部ナデ→口縁ミガキ 黒色処理	ミガキ→黒色処理	回転実測	精製品
	1	須恵器	壺	口縁	(10.8)	-	(2.8)	ロクロナデ 自然輪付着	ロクロナデ 自然輪付着	回転実測	
H18	2	須恵器	壺	口縁	-	-	-	ロクロナデ 自然輪付着	ロクロナデ	破片実測	
	3	須恵器	壺	口縁	-	-	-	ロクロナデ 自然輪付着	ロクロナデ	断面実測	拓本
	4	須恵器	短頸壺	口縁(実)	11.2	丸底	19.8	口縁横ナデ 胴部横ナデ	胴下部回転ヘラケズリ→口縁・胴上半横ナデ	定寸実測 胴下部に穴 3mm大の縦割	No.31
	5	須恵器	杯	底	-	丸底	(2.0)	ロクロナデ 磨耗 煤状の黒底あり	ロクロナデ 底部ヘラナデ 磨耗	完全実測	転用瓶小
	6	須恵器	高台付杯	口～底	(16.0)	(10.4)	3.2	横ナデ	ロクロナデ 底部ヘラケズリ 高台貼付	回転実測	
	7	土師器	小壺	口縁(実)	6.5	丸底	4.6	ナデ 黒色処理か	口縁横ナデ 底部ヘラケズリ 口縁に24孔ありφ4mm	完全実測	No.33
	8	土師器	杯	口縁	(13.4)	-	(3.0)	横ナデ	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ	回転実測	
	9	土師器	杯	口縁	(12.6)	丸底	(3.6)	横ナデ	口縁横ナデ 底部ヘラケズリ	回転実測	
	10	土師器	杯	完形	13.5	丸底	4.8	横ナデ→放射状暗文→黒色処理	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ→黒色処理	完全実測	No.34
	11	土師器	杯	完形	14.6	丸底	5.4	ヘラナデ→口縁横ナデ うちみ部平行刻み沈線2本	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ	完全実測	No.32
	12	土師器	鉢	完形	20.6	丸底	8.2	ナデ→口縁横ナデ	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ	完全実測	～3mm大砂粒含
	13	土師器	鉢	口縁	-	-	-	横ナデ	口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ→ミガキ	写真のみ	
	14	欠番									
	15	土師器	甌	底	-	丸底	(6.3)	ナデ	ヘラケズリ 磨耗	回転実測	底部に穿孔5
16	土師器	甕	口縁	(12.8)	-	(2.9)	口縁横ナデ	口縁横ナデ胴部ヘラケズリ→ミガキ	回転実測		
17	土師器	甕小壺	底	-	(5.6)	(4.5)	ナデ	磨耗	回転実測		
18	土師器	長胴甕	口～胴	(24.2)	-	(35.0)	口縁横ナデ 胴部ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	No.6・9・18・20・36・57・7	
19	土師器	長胴甕	口～胴	(20.8)	-	(13.5)	口縁横ナデ 胴部ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	No.39	
20	土師器	甕	口縁	(23.8)	-	(6.8)	ハケ目→口縁横ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測		
21	土師器	甕	口縁	(21.8)	-	(6.7)	横ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	No.25	
22	土師器	甕	口縁	(21.0)	-	(5.6)	横ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	No.5	
23	土師器	甕	口縁	(20.0)	-	(4.1)	横ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測		
24	土師器	甕	底	-	5.2	(3.6)	ヘラナデ	ヘラケズリ→底部ミガキ	完全実測		
25	土師器	甕	底	-	(8.6)	(6.7)	ハケ目	ミガキ	回転実測		
26	土師器	甕	底	-	(6.8)	(3.4)	ナデ	ミガキ 磨耗	回転実測		
27	縄文	鉢	胴	-	-	-	ミガキ	縄文 沈線	断面実測	拓本 排土	
28	鉄器	刀子	刃・基	(9.6)	1.3	0.3	12.4			両端欠損	No.10
29	銅	古銭	完形	2.3	2.3	0.1	2.2			寛永通宝 (初铸年 江戸時代)	No.1
H20	1	須恵器	甕	胴	-	-	-	横ナデ	タタキ目	断面実測	拓本
	2	須恵器	壺	胴	-	-	-	横ナデ	横ナデ 沈線	断面実測	拓本
	3	土師器	高杯	胴	-	-	(3.6)	杯部ミガキ→黒色処理 胴部横ナデ	ヘラケズリ→ミガキ	破片実測	
	4	土師器	杯	底	-	(10.6)	(2.0)	横ナデ	ヘラケズリ 磨耗	回転実測	
H21	1	須恵器	杯	底	-	丸底	(1.9)	横ナデ	口縁ロクロナデ→底部回転ヘラ切リ→刻書「X」	完全実測	拓本

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			重量 (g)	成形・調整		備考	出土位置
				口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		内面	外面		
H21	2	須恵器	壺	胴	-	-	-	ナデ	タタキ目→口縁横ナデ	断面実測	拓本
	3	土師器	杯	3/4	13.2	丸底	4.6	ミガキ→黒色処理	口縁横ナデ底部ヘラケズリ→ミガキ→黒色処理	完全実測	No.1
	4	土師器	鉢	底	-	(7.0)	(1.8)	ミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	回転実測	
	5	土師器	鉢	底	-	(5.0)	(2.0)	ミガキ→黒色処理	ミガキ	回転実測	
	1	須恵器	壺	底	-	5.6	(2.8)	横ナデ	ヘラケズリ	完全実測	ハ23
H22	2	須恵器	杯	口縁	(15.0)	-	(3.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	
	3	須恵器	高台付杯	底	-	(10.2)	(1.6)	ナデ	高台貼付	回転実測	
	4	須恵器	高台付杯	底	-	(8.0)	(2.2)	ナデ	ナデ→高台貼付	回転実測	
	5	須恵器	壺	口縁	(10.8)	-	(6.3)	ロクロナデ→ナデ	ロクロナデ→ナデ	回転実測	
	6	土師器	瓶	口~底	(17.1)	丸底	11.2	口縁横ナデ 胴部ナデ 磨耗	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ→底部穿孔15	完全実測	拓本 No.1
	7	土師器	鉢	口縁	(11.0)	-	(5.0)	胴部ナデ 口縁ミガキ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	
	8	土師器	瓶	把手	-	-	-	ミガキ	ヘラケズリ	破片実測	把手径2.7
	9	土師器	杯	口~底	(10.4)	丸底	3.8	剥離	底部ヘラケズリ 口縁ミガキ 磨耗	回転実測	
	10	土師器	杯	口~底	(13.2)	丸底	4.2	ナデ	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ	回転実測	
	11	土師器	杯	口~底	(13.2)	丸底	4.4	ナデ	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	
	12	土師器	杯	口~底	(11.3)	丸底	3.2	ミガキ 剥離	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ→ミガキ 全体に磨耗	完全実測	
	13	土師器	台付甕	脚	-	(8.1)	(4.8)	ナデ	ヘラケズリ→胴部横ナデ	完全実測	
	14	土師器	甕	底	-	(3.0)	(3.4)	ナデ	ヘラケズリ	回転実測	
	15	土師器	長脚甕	口~胴	(18.0)	-	(26.0)	口縁横ナデ→胴部ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ→胴部ミガキ	完全実測	No.20
	H23	16	土師器	長脚甕	口~底	22.9	丸底	38.2	口縁横ナデ 胴部ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	完全実測
17		石器	磨石		7.2	6.1	3.0	59.7	磨り面2		
18		土製品	紡錘車		5.0	4.8	1.6	37.6	片面われを再調査か 穴径0.8		No.6
H24	1	須恵器	壺	胴	-	-	-	横ナデ	横ナデ 肩部タタキ目	断面実測	拓本
	2	須恵器	壺小甕	胴	-	-	-	当て具痕	同心円弧文	断面実測	拓本
	3	欠番									
	4	土師器	鉢	底	-	6.6	(2.5)	ミガキ→黒色処理 色変	磨耗	完全実測	
	5	土師器	甕	口~底	(20.0)	(1.6)	27.2	ナデ→口縁横ナデ	口縁横ナデ→胴底部ヘラケズリ	回転実測	武蔵甕 No.6・8
	6	土師器	甕	口縁	19.8	-	(8.2)	口縁横ナデ	胴部ヘラケズリ→口縁横ナデ	完全実測	武蔵甕 No.8
	7	土師器	甕	口縁	(19.0)	-	(7.2)	口縁横ナデ	胴部ヘラケズリ→口縁横ナデ	回転実測	武蔵甕 No.3
	8	土師器	甕	底	-	4.3	(3.1)	ナデ	ヘラケズリ	完全実測	武蔵甕
	9	土師器	壺	口縁	(10.8)	-	(4.0)	横ナデ	横ナデ→ミガキ	回転実測	
	10-1	鉄器	刀子	刃	(8.4)	0.9	0.3	7.0		刃部先端・基部欠損	No.1
	10-2	鉄器	刀子	刃・基部	(10.0)	1.3	0.2	9.8		先端欠損	No.1
	11	鉄器	角釘	頭	(4.9)	(0.7)	(0.6)	8.0		先端欠損	No.5
	12	石器	砥石		12.0	8.8	4.0	610.0	砥面5 片側に1孔 2.1×1.7 標痕あり	流紋岩	No.2
H25	1	須恵器	杯	口~底	(13.0)	(6.8)	4.5	横ナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り	回転実測	
	2	須恵器	杯	口~底	(13.2)	(5.2)	5.1	横ナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り	回転実測	

()は推定値 ()は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法 量 (cm)				重量 (g)	成 形・調 整		備考	出土位置		
				口径(内)	底径(内)	器高(内)	口径(外)		内 面	外 面				
H25	3	須恵器	杯	3/4	14.3	5.6	5.2		横ナデ	ロクロナデ→底部回転系切り	完全実測	No.14		
	4	須恵器	杯	底	-	5.4	(3.1)		横ナデ	ロクロナデ→底部回転系切り	完全実測	棕色 No.6		
	5	土師器	杯	口～底	(14.0)	(5.0)	4.5		横ナデ→暗文→黒色処理	横ナデ→底部回転系切り	回転実測	No.13		
	6	土師器	杯	底	-	6.4	(1.6)		磨耗 放射状暗文 (8本)→黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り	墨書(判読不明)	完全実測	No.11	
	7	土師器	杯	口～底	(15.4)	(6.8)	4.9		雑なミガキ→放射状暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り	回転実測	エ・オ11		
	8	土師器	杯	口縁	(12.0)	-	(3.5)		ミガキ→黒色処理	横ナデ	回転実測			
	9	土師器	椀	底	-	6.3	(2.6)		杯部ミガキ→黒色処理 高台部横ナデ	高台貼付→ミガキ	完全実測	遊台として二次利用か		
	10	土師器	椀	底	-	(8.2)	(3.2)		横ナデ	底部回転系切り→高台貼付→横ナデ	墨書(判読不明)	回転実測	No.7	
	11	土師器	甕	底	-	7.9	(6.1)		横ナデ	ロクロナデ→ナデ 底部回転系切り	完全実測	ロクロ甕		
	12	土師器	甕	口縁	(20.2)	-	(6.4)		口縁横ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	武蔵甕 No.7		
	13	土師器	甕	口縁	(20.2)	-	(10.2)		口縁横ナデ 胴部ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	武蔵甕 No.10 カマド		
	14	土師器	甕	底	-	(4.4)	(4.0)		ナデ	ヘラケズリ	回転実測	カマド		
	15	土師器	羽釜	口縁	(18.1)	-	(8.1)		横ナデ	横ナデ	回転実測			
	16	須恵器	小豆	底	-	丸底	(5.3)			当て具取	回転実測	No.5 オ11		
	17	鉄器	角釘	印付部	(8.0)	0.6	0.5	11.7				先端欠損	No.9	
	18	鉄片	-	5.0	4.5	1.5	50.6					写真のみ		
	H26	19	須恵器	壺	胴	-	-	-		横ナデ			タタキ目 回転実測	拓本 No.2 カマド
		20	土師器	甕	口～胴	(19.0)	-	(12.8)		口縁横ナデ→胴部ヘラナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	武蔵甕 No.4	
21		土師器	甕	口～胴	(19.0)	-	(8.4)		口縁横ナデ→胴部ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	武蔵甕 No.4		
22		土師器	壺	底	-	(7.0)	(9.4)		ナデ	ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	No.3		
23		須恵器	杯	口～底	(12.5)	(5.2)	5.1		横ナデ	口縁ロクロナデ→底部回転系切り	写真のみ	No.3		
24		鉄器	角釘	印付部	(9.0)	0.8	0.7	11.1				頭部・先端欠損	No.1	
H27	1	灰釉陶器	椀	底	-	7.7	(3.8)		横ナデ→施軸 みこみ部磨耗	高台貼付→横ナデ→下半ヘラケズリ→上端のみ施軸	完全実測	ハケ塗り	ウ～ク10	
	2	灰釉陶器	椀	口～底	(13.8)	(5.8)	(4.7)		横ナデ→施軸 (範囲不明瞭)	横ナデ→下半ヘラケズリ→高台貼付→施軸	回転実測	ハケ塗り	ウ～ク10	
	3	灰釉陶器	椀	小豆	底	-	(8.6)	(1.8)	施軸 みこみ部磨耗 垂埴痕あり	高台貼付	回転実測	ウ～ク10		
	4	灰釉陶器	壺	胴～底	-	9.4	(9.0)		ロクロナデ みこみ部に自然軸付着	胴部ヘラケズリ→高台貼付→施軸	完全実測	ハケ塗り	No.9	
	5	灰釉陶器	壺	蓋	口～底	(12.6)	-	2.1		横ナデ	天井部施軸	回転実測	No.10	
	6	須恵器	杯	底	-	6.8	(1.7)		ロクロナデ→横ナデ 黒色処理?	ロクロナデ→底部回転系切り	完全実測	No.12		
	7	土師器	皿	完形	13.5	7.4	3.3		丁寧なミガキ→黒色処理	底部回転系切り→高台貼付→横ナデ	墨書「東」	完全実測	No.15	
	8	須恵器	杯	完形	14.4	6.2	4.2		横ナデ	ロクロナデ→底部回転系切り→横ナデ	完全実測	No.67		
	9	須恵器	杯	完形	14.5	6.2	4.1		横ナデ	底部回転系切り→横ナデ 墨書「用?」	完全実測	No.48		
	10	須恵器	杯	口	-	-	-		横ナデ	横ナデ 墨書「東」か	破片実測			
	11	須恵器	高台付杯	底	-	7.8	(1.7)		横ナデ	底部回転系切り→高台貼付 たたみ付磨耗	完全実測			
	12	須恵器	高台付杯	底	-	(11.6)	(2.2)		横ナデ	高台貼付→横ナデ	回転実測			
	13	須恵器	壺	底	-	(11.6)	(1.7)		自然軸付着	高台貼付 自然軸付着	回転実測			
	14	須恵器	壺	底	-	(12.6)	(2.3)		ナデ	高台貼付→横ナデ	回転実測	No.17		
	15	須恵器	壺	口縁	(22.0)	-	(4.7)		ロクロナデ→横ナデ	ロクロナデ	回転実測			
	16	須恵器	短頸壺	口縁	(15.4)	-	(2.8)		横ナデ 自然軸付着	横ナデ	回転実測			

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法 量 (cm)			重量 (g)	成 形・調 整		備考	出土位置	
				口径 (実)	底径 (実)	器高 (算)		内 面	外 面			
1127	17	須恵器	壺	口縁	-	-	-	自然輪付着	ロクロナデ	断面実測	拓本	
	18	須恵器	壺	口縁	(23.8)	-	(4.3)		ロクロナデ→横ナデ	回転実測		
	19	須恵器	壺	口縁	-	-	-	自然輪付着	横ナデ	断面実測	拓本	
	20	須恵器	壺	口縁	(39.8)	-	(12.2)		ロクロナデ→横ナデ	回転実測	No.4・58 オ・E10	
	21	須恵器	壺小壺	底	-	丸底	(9.4)		ナデ	完全実測	拓本 No.23	
	22	須恵器	壺小壺	底	-	(16.2)	(3.8)		ナデ	回転実測	No.16	
	23	須恵器	壺小壺	底	-	-	-		ナデ	断面実測	拓本	
	24	須恵器	壺	肩	-	-	-		口縁横ナデ 胴部ナデ	断面実測	拓本 No.40	
	25	須恵器	壺小壺	胴	-	-	-		ナデ	断面実測	拓本 No.43	
	26	土師器	杯	口縁部	13.3	6.0	5.0		ミガキ→黒色処理	横ナデ 底部回転系切り 墨書「東」(なぞりか) 底部周辺部杯下部回転ヘラケズリ	完全実測	No.19
	27	土師器	杯	口縁部	13.8	6.6	4.5		ミガキ→黒色処理	横ナデ 底部回転系切り 墨書「九」	完全実測	～2mm大砂粒含
	28	土師器	杯	底	-	5.6	(4.0)		ミガキ→黒色処理	横ナデ 底部回転系切り 墨書「九」	完全実測	～2mm大砂粒含
	29	土師器	杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書「東」か	破片実測	
	30	土師器	杯	口縁	-	-	-		横ナデ	ロクロナデ→横ナデ 墨書「用」か	破片実測	
	31	土師器	杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)	破片実測	
	32	土師器	杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書「東」	破片実測	
	33	土師器	杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 墨書(判読不明)	破片実測	
	34	土師器	杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書「東」	破片実測	
	35	土師器	杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書「東」か	破片実測	
	36	土師器	杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書「東」か	破片実測	
	37	土師器	皿	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書「東」が2つあり	破片実測	
	38	土師器	杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書「東」か	破片実測	
	39	土師器	杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)	破片実測	
	40	土師器	杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書「東」か	破片実測	
	41	土師器	杯	底	-	-	(1.1)		ミガキ→黒色処理	底部回転系切り 墨書「東」か	破片実測	
42	土師器	杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)	破片実測		
43	土師器	杯	口～底	12.9	5.9	4.4		横ナデ→ミガキ→黒色処理	横ナデ 底部回転系切り	完全実測	No.33・37	
44	土師器	杯	口～底	(13.9)	5.4	4.4		横ナデ→ミガキ→黒色処理	横ナデ 底部回転系切り	完全実測	No.24	
45	土師器	杯	口～底	(12.8)	6.8	3.0		ナデ 口縁上半黒色処理	横ナデ 底部回転系切り	完全実測	No.8	
46	土師器	杯	口～底	(13.6)	6.9	3.7		横ナデ→暗文→黒色処理	横ナデ 底部回転系切り 墨書(判読不明)	完全実測	No.36	
47	土師器	杯	口～底	(16.8)	(8.2)	4.8		横ナデ→暗文→黒色処理	横ナデ 底部回転系切り	回転実測	No.39	
48	土師器	杯	底	-	5.5	(1.2)		ミガキ→暗文→黒色処理	横ナデ 底部回転系切り	完全実測	No.32	
49	土師器	杯	底	-	7.5	(1.9)		ミガキ(放射状)→黒色処理	口縁横ナデ 底部手持ちヘラケズリ 墨書(判読不明)	完全実測	No.18	
50	土師器	杯	口～底	(11.4)	(6.0)	3.8		横ナデ→暗文	口縁ロクロナデ 底部回転系切り	回転実測	No.33	
51	須恵器	杯	口～底	(14.0)	(7.5)	4.5		横ナデ	横ナデ 底部回転系切り	回転実測	No.20	
52	須恵器	杯	口～底	(12.4)	5.2	4.8		横ナデ 一部黒色処理	横ナデ 底部回転系切り	完全実測	No.19	
53	須恵器	杯	底	-	(6.0)	(2.7)		ロクロナデ→黒色処理	口縁ロクロナデ 底部回転系切り→黒色処理	回転実測		

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法 量 (cm)				成 形・調 整		備考	出土位置
				口径(径)	底径(径)	器高(深)	重量(g)	内 面	外 面		
H27	54	土師器 埴	杯 口~底	(14.0)	5.8	3.7		ミガキ→黒色処理	口縁ロクロナデ 底部回転系切り→黒色処理	完全実測	No.53
	55	土師器 埴	杯 口~底	(17.2)	7.8	7.3		ミガキ→黒色処理 高台横ナデ	底部回転系切り後高台貼付→ミガキ→黒色処理	完全実測	No.6 エ9グリット
	56	土師器 埴	杯 底	-	(6.4)	(2.1)		杯部高台部ミガキ→黒色処理	高台貼付→ミガキ→黒色処理	回転実測	精製品
	57	土師器 埴	杯 底	-	7.1	(3.6)		ミガキ→黒色処理 高台内面ナデ→剥離	わずかにミガキ 底部回転系切り後高台貼付 黒色処理	完全実測	P6 No.79
	58	土師器 埴	口縁	(17.2)	-	(4.0)		ミガキ→黒色処理	高台貼付→横ナデ	回転実測	No.52
	59	土師器 埴	杯 底	-	8.6	(3.0)		ミガキ→黒色処理	高台貼付→横ナデ	完全実測	No.41
	60	土師器 埴	杯 底	-	7.1	(2.1)		ミガキ→黒色処理	底部回転系切り後高台貼付→横ナデ	完全実測	
	61	土師器 埴	杯 底	-	6.1	(1.7)		ミガキ→黒色処理	高台貼付→横ナデ	完全実測	キ・カ・オ8・9
	62	土師器 埴	口~底	(13.4)	(6.2)	2.5		ミガキ→黒色処理	高台貼付→横ナデ 剥離	回転実測	
	63	土師器 小甕	底	-	(6.1)	(3.7)		横ナデ	底部系切り→胴下部ヘラケズリ→ナデ	回転実測	No.13
	64	土師器 甕	口縁	(12.4)	-	(4.0)		胴部ナデ 口縁横ナデ	口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ	回転実測	武蔵養 No.63・カマド
	65	土師器 甕	口縁	(13.0)	-	(8.8)		口縁横ナデ 胴部ナデ	口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ	回転実測	武蔵養
	66	土師器 甕	口縁	(14.6)	-	(5.8)		横ナデ	横ナデ	回転実測	ウ→オ9 No.5
	67	土師器 甕	口縁	(22.2)	-	(10.0)		横ナデ	ロクロナデ	回転実測	ロクロ甕 No.34
	68	土師器 甕	口~底	22.6	丸底	27.7		口縁横ナデ 胴部ナデ	口縁胴上部ロクロナデ→胴下部ヘラケズリ	完全実測	ロクロ甕 No.2・45 カオ9 エ9
	69	土師器 不明	底	-	-	(3.7)		ミガキ→黒色処理	ナデ 脚剥離欠損	回転実測	
	70	鉄器	刀子 短切形	(14.3)	1.3	4.0				推定復元	No.26
71	鉄片	-	7.5	6.5	3.5	9.2			写真のみ	No.3	
72	石器	砥石	(9.0)	6.6	3.5	184.4		砥面4		流紋岩 No.29	
73	石器	石鏃	1.9	1.4	0.3	300.0		被熱なし		黒曜石 No.51	
74	石器	磨き砥石	<21.2>	14.0	13.5	0.42		砥面4		磨岩 No.46	
75	石器	磨き砥石	15.4	11.1	15.2	2.560		砥面4		黒曜石 (茂岡山) No.77 カマド内	
76	石器	磨き砥石	41.4	9.8	12.0	3.380		砥面1		流紋岩	
付編5	骨	哺乳類	不可	(1.3)	(1.2)	(0.9)	8,000	他1片			
78	銅	古銭	完形	2.5	2.5	0.2				神功問室(765)	エ・8
79	須恵器	杯	2/3	(13.0)	5.7	4.5	3.6	横ナデ	口縁横ナデ 底部回転系切り	完全実測	No.30
80	土師器	杯	1/4	(12.8)	(7.4)	(4.3)		暗文→黒色処理	口縁横ナデ 底部回転系切り	回転実測	No.28
81	土師器	杯	底	-	6.0	(2.0)		暗文→黒色処理	底部回転系切り	完全実測	土板に転用少 No.27
82	石器	凹石	17.2	(10.1)	5.3			凹面磨り 片側欠損		安山岩 エラグリット焼成	1地区No.2
83	須恵器	蓋	天井	-	-	(2.2)	1,039.7	横ナデ 磨耗	回転ヘラケズリ つまみ貼付	回転実測	* エ9No.7
84	須恵器	壺	底1/8	-	(16.0)	(7.0)		横ナデ	横ナデ 下部ヘラケズリ	回転実測	* エ9No.17
85	土師器	土板	7.4	7.4	2.1			杯部暗文→黒色処理 高台部横ナデ	底部回転系切り→高台貼付	完全実測	土師輪の転用 * エ9No.6
付編3	骨	哺乳類	不可	(2.6)	(1.0)	(0.8)			焼付		* エ9反層下部
H28	1	須恵器	杯	1/2	(13.8)	(6.6)	3.8	横ナデ	ロクロナデ→底部回転系切り	回転実測	
	2	須恵器	杯	口縁	-	-		横ナデ	横ナデ 墨書(判読不明)	破片実測	
	3	須恵器	杯	底	-	(6.6)	(2.5)	横ナデ	ロクロナデ→底部回転系切り 墨書「東」	回転実測	
	4	土師器	杯	口縁	(13.8)	丸底	(3.8)		横ナデ	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ	回転実測

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			重量 (g)	成形・調整		備考	出土位置	
				口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		内面	外面			
H28	5	土師器	杯	口縁	(12.0)	丸底	(2.6)	ミガキ	ミガキ 口縁横ナデ→底部ヘラケズリ	回転支脚		
	6	土師器	杯	口縁	(14.8)	丸底	(3.9)	ミガキ→黒色処理	ミガキ 磨耗	回転支脚		
	7	土師器	杯	口縁	(13.2)	丸底	3.8	ミガキ→黒色処理	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ	回転支脚		
H30	1	土師器	杯	口～底	(12.0)	丸底	3.0	ナデ	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ	回転支脚		
	2	土師器	把手付杯	口～底	(7.1)	4.9	6.1	ミガキ→黒色処理 脚部ヘラケズリ	ヘラケズリ→ミガキ	完全支脚 脚付	No.6	
	3	土師器	把手付杯	口縁	(9.2)	-	(4.5)	口縁横ナデ 脚部ナデ	口縁横ナデ→わずかにミガキ	回転支脚		
	4	土師器	脚付小鉢	脚	-	7.6	(3.5)	体部鈍縁 脚部ヘラケズリ 裾部ミガキ	ミガキ	完全支脚		
	5	土師器	壺	口縁	(16.4)	-	(8.2)	磨耗	磨耗	回転支脚	H28	
	6	土師器	壺	口縁	(21.2)	-	(5.6)	口縁横ナデ	口縁横ナデ→脚部ヘラケズリ	回転支脚	No.7	
	7	土師器	壺	口縁	(19.6)	-	(4.0)	口縁横ナデ	口縁横ナデ→脚部ヘラケズリ	回転支脚	カマド	
	8	土師器	長脚製	脚	-	-	(19.8)	ナデ 黒色	ヘラケズリ	回転支脚	カマド No.11	
	9	石器	凹石		12.0	7.7	5.9	261.5	中央に穿孔 径1.5 深0.9			
H31	1	灰釉陶器	小瓶	底	-	(6.4)	(41.0)	横ナデ みこみ部施釉	ロクロナデ→下端ヘラケズリ→底部回転系切り→施釉	回転支脚	No.3	
	2	須恵器	杯	口縁	12.8	5.8	4.9	横ナデ 一部黒色	ロクロナデ→ナデ 底部回転系切り 一部黒色	完全支脚	No.20・23	
	3	須恵器	杯	1/2	(12.6)	5.0	4.6	横ナデ→黒色処理	ロクロナデ 底部回転系切り→黒色処理	完全支脚	No.34	
	4	須恵器	杯	口縁	13.7	13.8	5.6	5.3	横ナデ→黒色処理	ロクロナデ 底部回転系切り	完全支脚 柄杓型	
	5	須恵器	杯	口～底	(13.0)	(5.5)	3.8	横ナデ	ロクロナデ 底部回転系切り	回転支脚	下層	
	6	須恵器	杯	口縁	(12.8)	-	(2.7)	横ナデ	ロクロナデ	回転支脚	下層	
	7	須恵器	杯	底	-	5.2	(1.8)	横ナデ	横ナデ 底部回転系切り	完全支脚	下層	
	8	須恵器	高台付杯	底	-	(8.2)	(2.5)	横ナデ	高台貼付→横ナデ	回転支脚	下層	
	9	須恵器	壺	口縁	(9.6)	-	(4.5)	横ナデ 自然輪付着	横ナデ 自然輪付着	回転支脚		
	10	須恵器	壺	底	-	-	(5.8)	ナデ	タタキ目	写真のみ		
	11	須恵器	壺小壺	胴	-	-	-	ハケ目→ナデ	タタキ目	断面実測 拓本	No.32	
	12	土師器	鉢	口縁	(22.4)	-	(8.7)	横ナデ→ミガキ→黒色処理 色変	ロクロナデ	回転支脚	23と同一個体か カマド No.17	
	13	土師器	杯	完整	12.5	5.4	4.6	横ナデ→十字に暗文→黒色処理	横ナデ→底部回転系切り 墨書「左」	完全支脚	No.2	
	14	土師器	杯	1/2	(13.0)	5.3	4.2	ミガキ→黒色処理	横ナデ→底部回転系切り	完全支脚	No.21	
	15	土師器	杯	3/4	(12.1)	6.2	3.6	ミガキ→暗文→黒色処理 色変か	横ナデ→底部回転系切り	完全支脚	No.18・34	
	16	土師器	杯	3/4	(13.3)	6.7	3.9	ミガキ→黒色処理 色変	横ナデ 底部回転系切り	完全支脚	No.12・15・25	
	17	土師器	杯	完整	12.6	5.6	4.3	横ナデ→十字に暗文→黒色処理 色変か	横ナデ→底部回転系切り	完全支脚	No.12・23	
	18	土師器	杯	2/3	(12.4)	5.4	4.1	横ナデ→ミガキ 十字に暗文→黒色処理	横ナデ→底部回転系切り	完全支脚	No.10	
	19	土師器	杯	2/3	(13.0)	5.2	3.7	横ナデ→口唇部ミガキ→暗文→黒色処理	横ナデ→底部回転系切り	回転支脚		
	20	土師器	杯	2/3	10.9	6.1	3.7	横ナデ→放射状暗文(不明瞭)	ロクロナデ→底部回転系切り	完全支脚	No.1	
	21	土師器	杯	1/2	(12.4)	5.4	4.8	ミガキ→黒色処理	横ナデ→底部回転系切り	完全支脚	No.5	
	22	土師器	杯	1/3	(13.0)	(7.0)	3.7	放射状にミガキ→黒色処理 色変	横ナデ→底部回転系切り	回転支脚	No.13	
	23	土師器	鉢	底	-	6.4	(3.7)	ミガキ→黒色処理 色変	底部回転系切り 磨耗	完全支脚	12と同一個体か No.8	
	24	土師器	杯	1/4	(12.8)	(6.2)	4.2	横ナデ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り	回転支脚	カマド	
	25	土師器	杯	1/4	(12.0)	(4.8)	4.1	ナデ→十字に暗文不明瞭→黒色処理	横ナデ→底部回転系切り	回転支脚	No.25	
	26	土師器	杯	底	-	5.3	(2.0)	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転系切り	完全支脚	No.27	

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			重量 (g)	成形・調整		備考	出土位置	
				口径(実)	底径(実)	器高(実)		内面	外面			
H31	27	土師器	杯	底	-	6.0	(1.5)	ミガキ→黒色処理 色変	横ナデ→底部回転系切り	完全実測	カマド	
	28	土師器	杯	底	-	6.1	(1.5)	ナデ→2本単位放射状暗文→黒色処理	横ナデ→底部回転系切り	完全実測		
	29	土師器	杯	底	-	5.7	(2.0)	ナデ→かすかに放射状暗文→黒色処理	横ナデ→底部回転系切り	完全実測	No.6	
	30	土師器	皿	口縁(実)	12.3	4.2	2.3	横ナデ 見込みにわずかなミガキ	横ナデ→底部回転系切り 墨書「〇五」(判読不明)	完全実測	No.9	
	31	土師器	杯	口縁	-	-	-	横ナデ	横ナデ 墨書「十一」か	破片実測		
	32	須恵器	杯	口縁	-	-	-	横ナデ	横ナデ 墨書「十一」か	破片実測		
	33	土師器	杯	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書「十一」か	破片実測		
	34	土師器	杯	口縁	(17.4)	-	(5.7)	ミガキ→黒色処理 色変	横ナデ	回転実測	カマド	
	35	土師器	椀	底	-	(7.2)	(2.1)	ミガキ→暗文→黒色処理 色変	高台貼付→横ナデ	回転実測		
	36	土師器	椀	口縁(実)	17.0	8.2	7.0	口縁横ナデ→十字に暗文 高台部横ナデ	底部回転系切り→高台貼付→横ナデ 墨書ありか	完全実測	No.14	
	37	土師器	椀	2/3	16.1	7.5	5.7	口縁横ナデ 口縁端部ミガキ 5本の放射状暗文→黒色処理一部色変	底部回転系切り→高台貼付→横ナデ	完全実測	No.24・34 カマド	
	38	土師器	甕	口縁	(11.8)	-	(4.9)	横ナデ	横ナデ 胴部クロコ壺	完全実測	クロコ壺	
	39	土師器	甕	口→胴	(13.8)	-	(6.5)	口縁横ナデ 胴部ナデ	口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ	回転実測	No.25・37 カマド	
	40	土師器	甕	口→胴	(19.0)	-	(7.8)	口縁横ナデ 胴部ナデ	口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ	回転実測	武蔵甕 No.14	
	41	土師器	甕	口→胴	(16.8)	-	(16.7)	口縁横ナデ 胴部ナデ	口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ	回転実測	武蔵甕 No.37 カマド	
	42	石器	磨石		20.9	8.7	7.8	1971.2	磨面5		安山岩	No.10
	43	石器	礫石		20.3	8.1	5.6	1751.3	磨面4		流紋岩	No.10
	44	石器	置硯石		36.0	12.4	4.9	3410	磨面3		安山岩	
	H32	1	須恵器	杯	口縁	(14.7)	-	(3.7)	横ナデ 火だすき	ロクロナデ 火だすき	回転実測	
2		須恵器	杯	2/3	(14.0)	(4.8)	4.1	横ナデ 火だすき	ロクロナデ 底部杯下部手持ちヘラケズリ	回転実測		
3		須恵器	杯	底	-	(9.0)	(1.4)	横ナデ 火だすき	底部横ナデ	回転実測		
4		須恵器	高台付杯	底	1/8	(16.4)	(11.0)	3.5	横ナデ	高台貼付→横ナデ	回転実測	
5		須恵器	壺	口縁	-	-	-	横ナデ	横ナデ	写真のみ		
6		須恵器	壺	口縁	(22.0)	-	(4.8)	横ナデ 自然釉付着	横ナデ	回転実測		
7		須恵器	壺	口縁	(18.0)	-	(3.9)	横ナデ 自然釉付着	口縁横ナデ 胴部タタキ目 自然釉付着	回転実測		
8		須恵器	壺	肩	-	-	(5.6)	ロクロナデ	横ナデ 肩に茂線1 自然釉付着	回転実測		
9		須恵器	壺小杯	底	-	(6.2)	(2.0)	横ナデ 自然釉付着	ロクロナデ 底部回転系切り	回転実測		
10		須恵器	壺	底	-	16.8	(8.9)	ナデ	胴部タタキ目 底部ヘラナデ	完全実測	拓本	
11		須恵器	壺小甕	底	-	(15.2)	(5.2)	ナデ 磨耗	磨耗	回転実測		
12		須恵器	壺小甕	底	-	(11.0)	(1.6)	ナデ	タタキ目 磨耗	完全実測	P1	
13		土師器	甕	1/2	(15.4)	(6.1)	11.6	ハケナデ ナデ→口縁横ナデ 黒色処理	口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ 磨耗 底部穿孔(多孔)	回転実測	拓本 16と18土・調整器	
14		土師器	鉢	1/3	(15.0)	(6.6)	10.1	横ナデ→口縁横ナデ	口縁横ナデ 口縁横ナデ 底部本業痕	回転実測	拓本	
15	土師器	鉢	口縁	(22.3)	-	(8.0)	ヘラケズリ→ミガキ→黒色処理?	口縁横ナデ→ミガキ	回転実測	No.1		
16	土師器	小壺	口→胴	(8.0)	-	(5.5)	胴部ナデ 口縁横ナデ 黒色処理	口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ 磨耗	回転実測	13と18土 調整器		
17	土師器	小甕	口縁	(12.0)	-	(3.7)	横ナデ	ミガキ	回転実測			
18	土師器	小甕	口縁	(10.0)	-	(3.7)	横ナデ	口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ	回転実測	H32付近		
19	土師器	杯	1/2	(14.6)	丸底	4.9	横ナデ	口縁横ナデ 底部ヘラケズリ 磨耗	回転実測	床直		

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法 量 (cm)				重量 (g)	成 形・調 整		備考	出土位置	
				口径(内)	底径(内)	器高(内)			内 面	外 面			
H32	20	土師器	杯	1/2	(13.0)	丸底	(4.4)		口縁横ナデ→放射状暗文→黒色処理	口縁横ナデ 底部ヘラケズリ 磨耗	回転実測		
	21	土師器	鉢	口縁	(14.8)	-	(3.6)		ミガキ→黒色処理	ミガキ	回転実測		
	22	土師器	杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	ミガキ→黒色処理	破片実測		
	23	土師器	杯	口縁	(12.8)	丸底	(2.3)		横ナデ	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ	回転実測	H32付近	
	24	土師器	杯	2/3	(11.0)	丸底	3.8		ミガキ→黒色処理	ミガキ→黒色処理	完全実測		
	25	土師器	鉢	底	9.0	丸底	1.1		ミガキ→黒色処理	ミガキ	完全実測	土版に再利用か	
	26	土師器	高坏	脚	-	(12.0)	(6.8)		ヘラナデ→底部横ナデ→ミガキ	ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	カマド	
	27	土師器	高坏	脚	-	(13.0)	(3.3)		ナデ→底部横ナデ	ヘラケズリ→底部横ナデ	回転実測	ハ・ヒ20	
	28	土師器	丸割壺	口縁	(18.0)	-	(7.8)		横ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	No.4	
	29	土師器	壺	口縁	(19.0)	-	(10.2)		口縁横ナデ→胴部ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ→ミガキ 磨耗	回転実測		
	30	土師器	小甕	口→胴	15.0	-	8.0		横ナデ	うすく割壺	完全実測	P1	
	31	土師器	甕	口→胴	(18.0)	-	(15.0)		横ナデ 口縁に粘土貼の補修痕	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ 口縁に粘土貼補修痕	回転実測	床	
	32	土師器	甕	口縁	(21.0)	-	(5.0)		口縁横ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測		
	33	土師器	甕	口縁	(22.0)	-	(6.5)		横ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	P1	
	34	土師器	甕	口縁	(21.3)	-	(3.6)		横ナデ	横ナデ	回転実測	床面	
	35	土師器	甕	口縁	(21.2)	-	(6.4)		横ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測		
	36	土師器	甕	底	-	5.5	(8.1)		ナデ	ヘラケズリ	完全実測	カマド	
	付編6	骨	哺乳類	不可	(2.1)	(1.9)	(1.3)		他10片				
	H33	1	灰陶器	椀	口縁	(19.8)	-	(3.7)		施釉	横ナデ→施釉	回転実測	輪花
		2	欠番										
		3	須恵器	高台付杯	底	-	(10.4)	(1.3)		横ナデ	高台貼付→横ナデ	回転実測	
		4	須恵器	蓋	口縁	(7.8)	-	(1.8)		横ナデ	横ナデ	回転実測	
		5	須恵器	壺	底	-	(6.6)	(2.5)		横ナデ	高台貼付→横ナデ	回転実測	
		6	須恵器	壺	口縁	(18.6)	-	(2.5)		横ナデ	横ナデ	回転実測	
		7	須恵器	壺	1/2	(9.6)	7.1	5.4		横ナデ	高台貼付→横ナデ	完全実測	
		8	須恵器	壺	口縁	(19.7)	-	(3.5)		横ナデ	横ナデ	回転実測	
		9	須恵器	壺	口縁	-	-	-		口縁横ナデ 口唇部沈線	横ナデ→柳掻波状文 沈線	断面実測	拓本
		10	須恵器	壺	口縁	-	-	-		口縁横ナデ 口唇部沈線	横ナデ→横掻波線 柳掻横線文	断面実測	拓本
		11	土師器	壺	胴	-	-	-		ミガキ 磨耗	ハケ目	断面実測	拓本
		12	土師器	杯	底	12.4	5.6	3.4		横ナデ→ミガキ	横ナデ 底部回転系切り	完全実測	夕-13
		13	土師器	杯	口縁	(14.6)	-	(4.0)		ミガキ→暗文→黒色処理	横ナデ	回転実測	
		14	土師器	杯	口→底	(12.2)	(6.6)	3.5		横ナデ	横ナデ 底部系切り	回転実測	
		15	土師器	杯	口→底	(12.0)	(5.2)	3.5		横ナデ	横ナデ 底部回転系切り	回転実測	柱状高台
		16	土師器	杯	口→底	(12.1)	(6.8)	4.0		横ナデ	横ナデ 底部回転系切り	回転実測	柱状高台
		17	土師器	杯	口→底	(10.8)	(6.0)	3.7		横ナデ	ロクロナデ 底部回転系切り	回転実測	
		18	土師器	杯	底	-	5.6	(2.0)		横ナデ	ロクロナデ 底部回転系切り	完全実測	No.1
19		土師器	杯	底	-	5.3	(2.7)		横ナデ	ロクロナデ 底部回転系切り	完全実測		
20		土師器	杯	底	-	(5.9)	(3.1)		横ナデ	横ナデ 底部回転系切り	回転実測		

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			重量 (g)	成形・調整		備考	出土位置	
				口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		内面	外面			
H433	21	土師器	杯	口縁	(1.10)	-	(3.0)	横ナデ	横ナデ	回転実測		
	22	土師器	杯	底	-	4.8	(2.8)	横ナデ	ロクロナデ 底部回転糸切り	完全実測		
	23	土師器	杯	底	-	(5.2)	(1.8)	横ナデ 磨耗	横ナデ 底部回転糸切り	回転実測	胎土精製	
	24	土師器	杯	底	-	5.1	(1.6)	横ナデ	横ナデ 底部回転糸切り	完全実測	細砂粒を多く含む	
	25	土師器	杯	底	-	4.8	(1.0)	横ナデ	横ナデ 底部回転糸切り	完全実測	細砂粒を多く含む	
	26	土師器	杯	底	-	4.7	(0.9)	横ナデ	横ナデ 底部回転糸切り	完全実測		
	27	土師器	椀	底	-	-	(1.0)	横ナデ	底部回転糸切り後高台貼付→横ナデ 高台欠損	完全実測	拓本 柱状高台	
	28	土師器	杯	底	-	5.2	(1.0)	横ナデ→黒色処理	横ナデ 底部回転糸切り	完全実測		
	29	土師器	椀	口～底	(1.39)	-	(3.8)	横ナデ	底部回転糸切り後高台貼付→横ナデ	完全実測	細砂粒を多く含む	
	30	土師器	椀	口～底	(1.43)	-	(4.4)	横ナデ	高台貼付→横ナデ	完全実測		
	31	土師器	椀	底	-	(8.4)	(5.0)	横ナデ	高台貼付→横ナデ	完全実測	No.3	
	32	土師器	椀	底	-	(9.1)	(4.8)	横ナデ	高台貼付→横ナデ	完全実測		
	33	土師器	椀	底	-	(9.3)	(2.0)	横ナデ	横ナデ 補修粘土貼付	回転実測		
	34	土師器	椀	底	-	(7.4)	(2.7)	横ナデ	高台貼付→横ナデ	完全実測		
	35	土師器	椀	底	-	(6.5)	(2.8)	横ナデ	高台貼付→横ナデ	完全実測		
	36	土師器	椀	底	-	(7.1)	(2.4)	横ナデ	ミガキ→暗文 一部割離	完全実測		
	37	土師器	椀	底	-	(6.0)	(2.1)	横ナデ	高台貼付→横ナデ	完全実測		
	38	土師器	杯	口縁	-	-	-	横ナデ→黒色処理	横ナデ→黒書「合」か	破片実測		
	39	土師器	杯	口縁	-	-	-	横ナデ	横ナデ→黒書 (判読不明)	破片実測		
	40	土師器	杯	口縁	-	-	-	横ナデ	横ナデ→黒書 (判読不明)	破片実測		
	41	土師器	甕	口縁	(18.9)	-	(3.7)	横ナデ	横ナデ	回転実測		
	42	須恵器	壺	胴～底	-	(1.4)	(21.3)	ナデ	タタキ目	完全実測	拓本 夕-15	
	付属7	骨	哺乳類	不可	(3.4)	(1.7)	(0.7)	他 11片				
	H434	1	灰釉陶器	皿	2/3	(15.4)	7.4	3.6	横ナデ→施種 ハケ塗	高台貼付→横ナデ→施種	完全実測	No.1
		2	土師器	椀	底	-	6.3	(2.4)	横ナデ→黒色処理	底部回転糸切り 高台貼付→横ナデ	完全実測	北西産No.4
	H435	1	須恵器	蓋	口縁	(16.4)	-	(2.8)	横ナデ	横ナデ	回転実測	
		2	須恵器	蓋	口縁	(15.6)	-	(1.6)	横ナデ	天井部回転ヘラケズリ 横ナデ	回転実測	
		3	須恵器	蓋	口縁	(16.3)	-	(1.7)	横ナデ	天井部回転ヘラケズリ 横ナデ	回転実測	夕-15
		4	須恵器	杯	2/3	(12.0)	7.3	3.6	横ナデ 火だすき	ロクロナデ 底部回転糸切り 火だすき	完全実測	夕-13 No.4
		5	須恵器	杯	底	-	7.0	(2.5)	横ナデ 火だすき	横ナデ 底部回転糸切り 火だすき	完全実測	
		6	須恵器	杯	底	-	5.8	(1.5)	横ナデ 火だすき	横ナデ 底部回転糸切り 火だすき	完全実測	
		7	須恵器	杯	底	-	(8.0)	(2.4)	横ナデ 磨耗	横ナデ 底部ヘラケズリ→ハケ目	回転実測	拓本
		8	須恵器	杯	底	-	(7.2)	(1.5)	横ナデ 磨耗	横ナデ 底部手持ちヘラケズリ	回転実測	
		9	須恵器	杯	底	-	(8.8)	(1.5)	横ナデ	横ナデ 底部ヘラケズリ→割書	回転実測	拓本
		10	須恵器	高台付杯	1/7	(14.0)	(11.3)	3.3	横ナデ	高台貼付→横ナデ	回転実測	
		11	須恵器	高台付杯	底	-	(9.2)	(2.1)	横ナデ	底部糸切り→周辺回転ヘラケズリ→高台貼付→横ナデ	回転実測	
		12	須恵器	高台付杯	底	-	(10.4)	(1.8)	横ナデ	高台貼付→横ナデ	回転実測	
		13	須恵器	高台付杯	底	-	11.5	(2.3)	横ナデ 磨耗	高台貼付→横ナデ	完全実測	

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法 量 (cm)			重量 (g)	成 形・調 整		備考	出土位置		
				口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		内 面	外 面				
H35	14	須恵器	壺	底	-	(11.4)	(2.6)	横ナデ	みこみ部に自然輪付着	高台貼付→横ナデ	回転実測		
	15	須恵器	壺	底	-	(12.8)	(3.6)	横ナデ	磨耗	横ナデ 剥離	回転実測		
	16	土師器	皿	1/4	(12.0)	(5.6)	2.3	横ナデ→黒色処理	横ナデ	横ナデ 底部系切り→黒色処理	回転実測		
	17	土師器	杯	口縁	(12.8)	-	(2.5)	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転実測	サ-15	
	18	土師器	杯	底	-	6.4	(1.6)	横ナデ→暗文→黒色処理	口縁横ナデ	底部回転系切り	完全実測		
	19	土師器	杯	底	-	(6.8)	(1.5)	横ナデ→暗文→黒色処理	口縁横ナデ	底部回転系切り	回転実測		
	20	土師器	杯	底	-	6.7	(2.0)	ミガキ→黒色処理	口縁横ナデ→下部手持ちヘラケズリ	底部回転系切り	完全実測	No.3	
	21	土師器	杯	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ→黒書「良」か		破片実測		
	22	土師器	杯	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ→黒書「十一」		破片実測		
	23	土師器	杯	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ→黒書(判読不明)		破片実測		
	24	須恵器	高台付杯	口縁	-	-	-	横ナデ	横ナデ	判読不明黒書あるか	写真のみ		
	25	土師器	杯	口縁	(12.0)	-	(2.8)	横ナデ→暗文→黒色処理	横ナデ→黒書(判読不明)		回転実測	シ-15	
	26	土師器	杯	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ→黒書「右」か		破片実測		
	27	土師器	杯	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ→黒書「東」		破片実測	シ-15	
	28	土師器	甕	口縁	(22.4)	-	(5.0)	横ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ		回転実測	武蔵養 貼床下部分マド	
	29	鉄器	鍔	身	(4.7)	(3.2)	0.3	8.7				柳刀	No.1
	30	鉄器	刀子	刃縁部	(14.4)	1.3	0.3	10.1					No.2
	31	石器	紡錘車?		7.9	5.8	3.6	42.0					
	32	欠番											
	33	土師器	杯	3/4	(11.7)	5.2	5.0		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→回転系切り 煤付着	完全実測	サ-15 H42に帰属か	
	H36	1	土師器	杯	底	-	(6.0)	(2.0)	横ナデ	横ナデ	底部回転系切り	回転実測	
		H37	1	須恵器	蓋	口縁	(13.9)	-	(1.3)	横ナデ	横ナデ	回転実測	床面
			2	須恵器	杯	口縁	(15.0)	-	(2.4)	横ナデ	横ナデ	床面	回転実測
		3	須恵器	高台付杯	底	-	(11.9)	(1.9)	横ナデ	高台貼付→横ナデ	高台底磨耗	回転実測	床面
		4	須恵器	杯	口縁	(12.0)	-	(2.5)	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転実測	床面
		5	須恵器	蓋	口縁	(11.0)	-	(1.4)	横ナデ	横ナデ	横ナデ	回転実測	回転実測
		6	土師器	高杯	口縁	(14.8)	-	(4.5)	ミガキ→黒色処理	剥離		回転実測	回転実測
		7	土師器	杯	1/3	(14.3)	丸底	4.3	横ナデ	ヘラケズリ→口縁横ナデ		回転実測	セ-11
		8	土師器	杯	口縁	(8.4)	丸底	(4.2)	ミガキ→黒色処理	ミガキ		回転実測	回転実測
		9	土師器	杯	口縁	(14.0)	丸底	(3.4)	横ナデ	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ		回転実測	P17
		10	土師器	杯	口縁	(12.0)	丸底	(2.7)	横ナデ	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ		回転実測	回転実測
11		土師器	杯	口縁	(11.2)	丸底	(2.4)	横ナデ	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ	磨耗	回転実測	回転実測	
12		土師器	杯	口縁	(12.0)	丸底	(3.2)	横ナデ→黒色処理	口縁横ナデ→底部剥離で不明→黒色処理		回転実測	回転実測	
13		土師器	杯	口縁	(14.0)	丸底	(3.8)	横ナデ→黒色処理	一部剥離	口縁横ナデ 底部剥離→黒色処理	回転実測	回転実測	
14		土師器	杯	口縁	(12.0)	丸底	(3.6)	横ナデ→黒色処理		口縁横ナデ 底部ヘラケズリ→黒色処理	回転実測	回転実測	
15		土師器	杯	口縁	(11.8)	丸底	(3.2)	剥離	剥離		回転実測	回転実測	
16		土師器	壺	口縁	(13.0)	-	(3.0)	口縁ミガキ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ→ミガキ		回転実測	回転実測	
17	土師器	鉢	口縁	(14.0)	-	(4.3)	ミガキ	剥離		回転実測	回転実測		

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			重量 (g)	成形・調整		備考	出土位置	
				口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		内面	外面			
H37	18	土師器	小壺	口縁	(9.8)	-	(5.2)	口縁横ナデ	胴部ミガキ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	
	19	土師器	小壺	口縁	(14.0)	-	(4.0)	ナデ		口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	ソ-11
	20	土師器	壺	口縁	-	-	-	横ナデ		口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ→ミガキ	破片実測	P17
	21	土師器	甕	口縁	(24.5)	-	(9.3)	横ナデ→黒色処理		横ナデ→黒色処理 剥離	回転実測	セ-12・シ-11
	22	土師器	長胴壺	口縁	(23.2)	-	(5.8)	横ナデ		口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ	回転実測	上層
	23	土師器	長胴壺	口縁	(21.0)	-	(4.7)	横ナデ		口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ	回転実測	上層
	24	土師器	甕	口縁	(18.0)	-	(5.0)	横ナデ		胴部ヘラケズリ→口縁横ナデ	回転実測	カマド
	25	土師器	甕	口縁	(18.4)	-	(4.0)	横ナデ		横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	
	26	土師器	甕	胴～底	-	(4.5)	(15.0)	ナデ		胴部ヘラケズリ→口縁横ナデ→胴部ミガキ	回転実測	床
	27	土師器	鉢	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理		ミガキ	写真	
	28	土師器	甕	口縁	(23.6)	-	(4.5)	横ナデ		口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	セ-12
	29	土師器	甕	口縁	(22.0)	-	(5.6)	横ナデ		胴部ヘラケズリ→口縁横ナデ	回転実測	
	30	土師器	甕	口縁	22.0	-	(7.1)	横ナデ		口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	完全実測	武蔵壺
	31	土師器	甕	胴	-	-	(17.6)	ナデ		ヘラケズリ	回転実測	
	32	土師器	甕	底	-	(4.2)	(2.3)	ナデ		ヘラケズリ	回転実測	武蔵壺
	33	灰陶器	壺	底	-	(8.6)	(3.8)	ロクロナデ		胴下部ヘラケズリ→高台貼付→横ナデ 自然輪付着	回転実測	セ-12
H38	1	須恵器	杯蓋	口径率	10.4	丸底	3.5	横ナデ		横ナデ→天井部回転ヘラケズリ	完全実測	No.27・36・40・42・54・64
	2	土師器	表つまみ	口縁	つまみ径 5.1	-	(1.5)	つまみ部内面ナデ	身部剥離	ナデ	完全実測	
	3	土師器	鉢	口縁	(16.4)	丸底	(4.6)	ミガキ		口縁横ナデ→底部ヘラケズリ	回転実測	No.11
	4	土師器	杯	口縁	(11.0)	丸底	2.5	横ナデ		口縁横ナデ 底部ヘラケズリ	回転実測	No.55
	5	土師器	杯	口縁	(14.0)	丸底	(2.4)	横ナデ		口縁横ナデ 底部ヘラケズリ	回転実測	No.22
	6	土師器	杯	口縁	(16.4)	丸底	(2.5)	横ナデ		口縁横ナデ 底部ヘラケズリ	回転実測	
	7	土師器	杯	口～底	(13.8)	丸底	(3.9)	口縁横ナデ	ミガキ→放射状筋文→黒色処理	口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ→ミガキ→黒色処理 剥離	回転実測	
	8	土師器	杯	口～底	(12.2)	丸底	(3.3)	横ナデ		口縁横ナデ 底部ヘラケズリ	回転実測	
	9	土師器	杯	口～底	(12.1)	丸底	(3.6)	口縁横ナデ→ミガキ		口縁横ナデ 底部ヘラケズリ 磨耗	回転実測	
	10	土師器	壺	口縁	(9.0)	-	(4.0)	口縁横ナデ	胴部ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	No.14
	11	土師器	甕	口縁	15.4	-	(5.8)	口縁横ナデ	胴部ハケ目 一部剥離	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ 剥離	完全実測	No.13
	12	土師器	甕	底	-	丸底	(5.7)	ナデ		ヘラケズリ	完全実測	No.42
	13	土師器	丸胴壺	口～胴	(20.5)	-	(12.6)	口縁横ナデ	胴部ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	完全実測	No.4
	14	土師器	丸胴壺	口～胴	23.1	-	(19.9)	口縁横ナデ	胴部ヘラナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	完全実測	No.5・6・24・灰層
15	土師器	丸胴壺	胴～底	-	丸底	(12.2)	ナデ		ヘラケズリ→ミガキ 磨耗	完全実測	～5mm大砂粒含む	
16	土師器	甕	底	-	(6.6)	(5.9)	ナデ		ヘラケズリ	回転実測		
17	土師器	杯	口縁	(11.1)	(6.6)	3.1	横ナデ		横ナデ 底部回転糸切り 墨書「九」	回転実測		
18	土師器	杯	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理		横ナデ 墨書 (判読不明)	破片実測		
19	土師器	杯	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理		横ナデ 墨書 (判読不明)	破片実測		
20	灰器	壺	身・頸	(8.8)	3.6	0.1	19.1			両端欠損 雁又	No.1	

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			重量 (g)	成形・調整		備考	出土位置			
				口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		内面	外面					
H38	21	鉄器	鏝	口径(推)	12.25	0.8	0.45	14.3			基端部欠損	No.3		
	22	銅	古鏡	完形	2.48	2.45	0.1	2.6			太平洋室(976年)	No.1		
	23	石器	凹石		12.6	10.7	6.1	426.6			裏・表面あり	軽石		
	24	石器	凹石		12.5	9.8	4.8	223.1				安山岩		
	25	石器	磨・砥石		13.0	7.8	4.5	688.1			すり面1 タタキ4	硬石		
付属8	骨	シカ	中足骨	(8.2)	(2.5)	(1.7)						No.17(位置不明)		
H39	1	須恵器	椀	口縁	(16.0)	-	(4.5)		横ナデ→施軸	横ナデ→施軸	回転実測	H38		
	2	須恵器	杯	1/2	(14.4)	4.8	5.0		横ナデ	横ナデ 底部回転系切り	完全実測	No.7		
	3	須恵器	壺	胴～底	-	(12.8)	(8.2)		口クロナデ 自然輪付着	胴下部ヘラクスリ 高台貼付→横ナデ	回転実測	No.4		
	4	須恵器	壺	底	-	(20.2)	(7.2)		横ナデ 磨耗	胴部タタキ目 底部ナデ	回転実測			
	5	須恵器	甕	胴	-	-	-		ナデ	タタキ目	断面実測	拓本	No.7	
	6	須恵器	甕	胴	-	-	-		当て具痕	タタキ目	断面実測	拓本	No.14	
	7	須恵器	甕	胴	-	-	-		ナデ	タタキ目	写真のみ	No.10		
	8	土師器	杯	1/2	(13.0)	6.4	4.5		ミガキ→黒色処理 色変	横ナデ 底部手持ちヘラクスリ	回転実測	床 カマド内		
	9	土師器	杯	完形	13.6	5.2	4.2		横ナデ→放射線伏磁文 (5本) →黒色処理	横ナデ 底部回転系切り	完全実測	No.2		
	10	土師器	杯	底	-	(5.6)	(1.6)		ミガキ→黒色処理	横ナデ 底部回転系切り→黒色処理	回転実測	No.7		
	11	土師器	杯	底	-	5.0	(1.2)		ミガキ→黒色処理	横ナデ 底部回転系切り	完全実測			
	12	土師器	椀	底	-	(7.6)	(2.2)		ミガキ→黒色処理 剥離	高台貼付→横ナデ	回転実測			
	13	土師器	椀	杯	15.5	6.5	5.0		横ナデ→黒色処理	底部回転系切り 高台欠損	完全実測	杯として転用か	No.15	
	14	土師器	皿	1/2	(14.9)	7.1	3.6		雑なミガキ→黒色処理	底部回転系切り→高台貼付	完全実測	床		
	15	土師器	甕	口～胴	(21.5)	-	(16.8)		口縁胴上部横ナデ 胴部ナデ	口～胴上半部口クロナデ→胴下部ヘラクスリ	回転実測	口クロ裏	No.3	
	16	鉄器	組		(2.6)	0.5	0.2	1.0				両端欠損	No.3	
	17	鉄器	鎌	刃	(2.6)	2.9	0.2	6.9				破片	No.6	
	18	鉄器	角釘	口径(推)	(6.0)	0.4	0.3	3.1				頭部欠損	No.16	
	19	鉄器	-	-	5.5	2.2	2.0	55.3				写真のみ	No.18	
H40	1	須恵器	杯	口径(推)	13.1	6.7	4.0		横ナデ 自然輪付着 火だすき	横ナデ 底部回転系切り 火だすき	完全実測	No.1		
	2	須恵器	杯	口～底	(13.4)	(8.0)	3.6		横ナデ 火だすき	底部回転ヘラクスリ 火だすき	回転実測	拓本	No.10	
	3	須恵器	杯	底	-	7.2	(1.2)		横ナデ 火だすき	横ナデ 底部ヘラナデ 火だすき	完全実測	No.2		
	4	須恵器	壺	口縁	(25.8)	-	(8.0)		輪積痕 指細圧痕 横ナデ	横ナデ	回転実測	拓本		
	5	須恵器	壺	口～胴	胴部径(推)	(28.5)	-	(17.4)		胴部当て具痕→ナデ→口縁横ナデ 自然輪付着	胴部タタキ目 口縁横ナデ	回転実測	拓本	No.3・5・7・9
	6	須恵器	壺	胴～底	-	(14.8)	(15.3)		ナデ	タタキ目 底部磨耗	回転実測	拓本	No.4・6	
H42	1	土師器	杯	底	-	(7.9)	(1.4)		ミガキ→黒色処理	横ナデ 底部ヘラナデ	完全実測	焼土 (カマド)		
	2	土師器	杯	底	-	(5.9)	(2.4)		横ナデ→黒色処理	横ナデ 底部系切り	回転実測	焼土 (カマド)		
H43	1	須恵器	杯	底	-	(6.0)	(1.0)		ナデ	底部ナデ	回転実測			
	2	須恵器	杯	底	-	(6.0)	(1.6)		横ナデ	口縁横ナデ 底部回転系切り 煤付着	回転実測			
	3	須恵器	高台付杯	底	-	(6.8)	(2.2)		横ナデ	高台貼付→横ナデ	回転実測			
	4	須恵器	壺	口縁	(10.0)	-	(8.0)		横ナデ	横ナデ	回転実測			
	5	須恵器	壺	胴	-	-	-		横ナデ	横ナデ	断面実測	拓本		

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法 量 (cm)			重量 (g)	成 形・調 整		備考	出土位置	
				口径(内)	底径(内)	器高(内)		内 面	外 面			
I143	6	土師器	杯	口~底	(12.1)	(5.2)	4.2	横ナデ→暗文→黒色処理	横ナデ 底部糸切り	回転実測	H45	
	7	土師器	杯	底	-	(5.7)	(1.5)	横ナデ→暗文→黒色処理	横ナデ 底部回転糸切り			
	8	土師器	杯	口縁	(13.6)	-	(3.6)	ミガキ→暗文→黒色処理	横ナデ	回転実測		
	9	土師器	杯	口縁	(13.8)	-	(3.7)	横ナデ	横ナデ	回転実測		
	10	土師器	椀	底	-	(8.0)	(2.9)	横ナデ	高台貼付→横ナデ	回転実測		
	11	土師器	杯	底	-	-	-	ミガキ→黒色処理	口縁横ナデ 底部ヘラケズリ	墨書(判読不明)	破片実測	
	12	鉄滓			5.0	4.0	2.5	35.4			写真のみ	
	13	石器	凹石		13.8	(11.4)	5.2	1426.8		表面1	安山岩	No.1
	I144	1	須恵器	蓋	口縁	(16.0)	-	(1.3)	横ナデ	横ナデ	回転実測	ラ-46
		2	須恵器	杯	口縁	(14.2)	-	(5.1)	横ナデ	横ナデ 自然釉付着	回転実測	
		3	須恵器	杯	底	-	(9.3)	(2.0)	横ナデ	横ナデ 底部回転ヘラケズリ	回転実測	
		4	須恵器	壺	胴	-	-	-	ナデ	タタキ目	断面実測	拓本 ラ-46
		5	土師器	甕	口縁	(24.2)	-	(6.7)	横ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	武蔵巻 カマド
6		土師器	甕	2/3	22.6	(2.5)	30.7	口縁横ナデ 胴部ナデ	口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ 剥離	完全実測	武蔵巻 No.1・2・3・5・6 カマド	
7		石器	磨り石		3.8	2.6	0.7	18.4		表面3	粘板岩	
8		石器	石鏃		2.8	1.6	0.5	13.8		被熱なし	黒曜石	
I145	1	灰陶器	皿	1/2	(13.4)	6.1	3.1	横ナデ→施釉 みこみ部磨耗	底部回転ヘラケズリ→高台貼付→横ナデ→口縁施釉(剥離)	完全実測	No.11	
	2	須恵器	壺	口縁	-	-	-	横ナデ 自然釉付着	横ナデ→柳橋波状文	断面実測	拓本 No.103	
	3	須恵器	壺	底	-	(10.0)	(4.2)	横ナデ 自然釉付着	高台貼付→横ナデ 自然釉付着	回転実測	No.101	
	4	須恵器	四耳壺	胴	-	-	<26.5>	ナデ	肩に横線・つまみ貼付 胴部タタキ目	完全実測	No.30・32・37・40・51・54・56 ~58・68・71・83・87・93・106	
	5	須恵器	四耳壺	底	-	(12.6)	(3.6)	ナデ	タタキ目 胴下端ヘラケズリ 底部疔痕	回転実測	拓本 No.38	
	6	須恵器	壺	底	-	(12.2)	(7.0)	ハケ目	口ロータタキ目 底部ヘラナデ	回転実測	拓本 No.105	
	7	土師器	杯	3/4	13.5	6.4	4.4	横ナデ→暗文(2本×4)	口縁横ナデ 底部回転糸切り	完全実測	No.21	
	8	土師器	杯	1/2	(12.8)	5.7	4.3	横ナデ→ミガキ	口縁横ナデ 底部回転糸切り	完全実測	No.99	
	9	土師器	杯	1/2	(12.2)	5.3	4.6	横ナデ→暗文(4本)→黒色処理	口縁横ナデ 底部回転糸切り	完全実測	No.59	
	10	土師器	杯	1/3	(12.2)	4.5	3.5	ナデ	口縁横ナデ 底部手持ちヘラケズリ	完全実測	二次焼成受けるか カマド	
	11	土師器	杯	1/2	(13.2)	5.3	4.0	ナデ→黒色処理	口縁横ナデ 底部手持ちヘラケズリ	墨書「午」か	回転実測 No.20 サ-12	
	12	土師器	杯	1/2	(11.8)	4.9	3.5	横ナデ→わずかにミガキ	口縁横ナデ 底部回転糸切り	完全実測		
	13	土師器	椀	1/3	(14.4)	5.9	4.9	ミガキ→暗文→黒色処理 色変	高台貼付→横ナデ	回転実測	No.8	
	14	土師器	椀	ほぼ完全	15.5	7.5	6.1	ミガキ→黒色処理 色変	高台貼付→横ナデ 墨書「午」	完全実測	H38・H43	
	15	土師器	椀	ほぼ完全	(15.9)	6.9	5.8	ミガキ→黒色処理	高台貼付→横ナデ	完全実測	No.13・74 H43	
	16	土師器	椀	1/2	14.4	7.4	4.5	横ナデ わずかにミガキ	底部手持ちヘラケズリ→高台貼付	完全実測	端部に角部を 作り直し No.7・17	
	17	土師器	椀	2/3	(14.5)	7.5	5.3	横ナデ 磨耗	杯部口ロナデ 高台部横ナデ	完全実測	高台長脚 No.19・23	
	18	土師器	椀	底	-	(6.6)	2.7	ミガキ 黒色処理	横ナデ	完全実測	No.25	
	19	土師器	杯	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ→墨書(判読不明)	破片実測		
	20	土師器	杯	口縁	-	-	-	黒色処理か	横ナデ→墨書(判読不明)	破片実測		
	21	土師器	杯	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ→墨書「午」	写真のみ		
	22	土師器	杯	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ→墨書「東」	破片実測	No.54	

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法 量 (cm)			重量 (g)	成 形・調 整		備考	出土位置	
				口径(内)	底径(内)	器高(内)		内 面	外 面			
I445	23	土師器	小壺	口→胴	(14.0)	-	<7.9>	横ナデ	横ナデ	回転実測	No.32・06・09・81・85・91・F	
	24	土師器	壺	底	-	(11.0)	(4.0)	ナデ	ヘラケズリ 底部ヘラナデ	回転実測	カマド	
	25	土師器	壺	底	-	(7.0)	(3.5)	ナデ	ヘラケズリ→ナデ 底部糸切り	回転実測	No.52	
	26	土師器	把手	把手	<4.9>	2.3	2.3		ミガキ	完全実測		
	27	鉄器	?	つまみ	<1.2>	0.6	0.2	1.1			No.4	
	28	鉄器	角釘	印成形	<3.2>	0.4	0.3	1.2			No.22	
	29	石器	磨石		9.9	8.0	6.4	638.4		磨面1	先隔欠損	No.63
	30	石器	支脚石		19.0	18.4	17.6				安山岩	No.22
											軽石 写真のみ	No.64
	I446	1	灰陶器	椀	底	-	(7.6)	(2.4)	横ナデ→施釉 みこみ磨耗	高台貼付→横ナデ→施釉	回転実測	No.6
2		須恵器	杯	底	-	(5.4)	(2.6)	横ナデ	横ナデ	回転実測	No.6	
3		土師器	鉢	口→底	(25.0)	(10.2)	(10.1)	横ナデ	横ナデ 側下部ヘラケズリ	回転実測 焼成前に緑釉結土あり	No.2	
4		土師器	杯	完形	12.8	5.9	4.0	横ナデ	横ナデ 底部回転糸切り	完全実測	No.1・3 F38 H43	
5		土師器	杯	2/3	(13.0)	5.8	4.5	横ナデ	横ナデ→暗文→黒色処理	横ナデ 底部回転糸切り 墨書「苳」	完全実測	No.4
6		土師器	杯	口→底	(13.2)	5.6	4.3	横ナデ	横ナデ→暗文→黒色処理	横ナデ 底部回転糸切り	完全実測	No.11
7		土師器	杯	底	-	5.0	(4.2)	横ナデ	横ナデ→ミガキ→暗文→黒色処理	横ナデ 底部回転糸切り	完全実測	No.14
8		土師器	椀	底	-	(7.4)	(2.0)	ミガキ→黒色処理	高台貼付→横ナデ	完全実測 土板に転用か	No.1	
9		土師器	椀	底	-	6.5	(2.0)	ミガキ→黒色処理 磨耗	高台貼付→横ナデ	完全実測 土板に転用か	No.8	
10		土師器	椀	底	-	(7.7)	(2.7)	ミガキ→暗文→黒色処理	高台貼付→横ナデ	回転実測	No.11	
11		土師器	椀	底	-	6.8	(1.6)	ミガキ→黒色処理 磨耗	高台貼付→横ナデ	完全実測 土板に転用か	No.9	
12		土師器	杯	口縁	(15.8)	-	(2.7)	ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書「東」	破片実測		
13		土師器	杯	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)	破片実測		
14		土師器	壺	口縁	(14.0)	-	(6.1)	横ナデ	横ナデ	回転実測	No.14	
15		土師器	壺	底	-	(6.9)	(1.7)	横ナデ	ヘラケズリ 底部回転糸切り	回転実測		
16		土師器	壺	底	-	(9.8)	(2.5)	横ナデ	横ナデ 底部回転糸切り	回転実測	No.5	
I447	1	須恵器	杯	2/3	14.2	7.7	4.0	横ナデ 磨耗	横ナデ 底部手持ちヘラケズリ	完全実測	No.29・31 カマド	
	2	須恵器	杯	1/3	(13.2)	(7.2)	4.4	横ナデ 磨耗	横ナデ 底部手持ちヘラケズリ	回転実測	No.28	
	3	須恵器	杯	口縁	14.8	-	(3.0)	横ナデ	横ナデ	回転実測	No.11 カマド	
	4	須恵器	高台付杯	底	-	(9.5)	(1.6)	横ナデ	底部回転ヘラケズリ→高台貼付	回転実測	No.31	
	5	須恵器	高台付杯	1/3	(15.0)	(8.2)	6.3	横ナデ	底部回転糸切り→高台貼付→横ナデ	回転実測	No.3	
	6	須恵器	鉢	2/3	18.5	12.0	7.8	横ナデ みこみ磨耗	底部回転ヘラケズリ→高台貼付→横ナデ	完全実測	No.21	
	7	須恵器	壺	底	-	4.9	(4.4)	横ナデ	側下部ヘラケズリ→高台貼付→横ナデ	完全実測	No.1	
	8	須恵器	壺	底	-	13.0	12.2	ナデ	ナデ 自然軸付着	完全実測 拓本	No.4・10	
	9	須恵器	壺	口→胴	-	-	(36.8)	口縁横ナデ	口縁横ナデ 側部タタキ目	完全実測 拓本	No.1・9・11・12・14・16・18・23・26・28 印 口 47	
	10	須恵器	壺	底	-	13.0	(6.3)	磨耗	割破	回転実測		
11	土師器	杯	底	-	7.2	(1.9)	ミガキ→黒色処理	口縁横ナデ 底部手持ちヘラケズリ 墨書(判読不明)	完全実測 再利用品か	No.5		
12	土師器	杯	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理	口縁横ナデ 墨書(判読不明)	破片実測	混入品か		
13	土師器	壺	胴→胴	-	5.0	(27.8)	ナデ	胴部・底部ヘラケズリ→口縁横ナデ	回転実測 武蔵窯	No.3・6・8・10・16・17・20		
I448	1	須恵器	蓋	印成形	14.4	-	3.0	口コロナデ	口コロナデ→天井部回転ヘラケズリ→つまみ貼付	完全実測	No.1	

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			重量 (g)	成形・調整		備考	出土位置				
				口径(内)	底径(内)	器高(内)		内面	外面						
H48	2	須恵器	蓋	天井	-	-	(2.8)	横ナデ	自然釉付着	横ナデ→天井部回転ヘラケズリ→つまみ貼付	回転実測				
	3	須恵器	杯	1/3	(14.4)	(7.8)	4.1		ロクロナデ		回転実測				
	4	須恵器	杯	底	-	(5.8)	(1.6)	横ナデ	横ナデ	底部回転糸切り	回転実測				
	5	須恵器	杯	底	-	(7.4)	(1.5)	横ナデ	横ナデ	底部回転糸切り	回転実測				
	6	須恵器	壺	肩	-	-	(7.2)	横ナデ	横ナデ→肩部に2本沈線	肩部に自然釉付着	回転実測				
	7	土師器	杯	底	-	6.6	(1.4)		ミガキ→黒色処理	口縁横ナデ→口縁下縁・底部手持ちヘラケズリ	削磨「X」	完全実測	拓本		
	8	土師器	甕	1/6	(14.0)	-	(4.0)	横ナデ	横ナデ	横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	武蔵巻			
	9	土師器	甕	口縁	(11.2)	-	(4.7)	横ナデ	横ナデ	横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	武蔵巻			
	10	土師器	甕	底	-	5.0	(2.9)	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	完全実測	武蔵巻			
	11	鉄滓	-	-	9.0	7.0	5.7	212.8				写真のみ			
	H49	1	須恵器	杯	1/5	(13.4)	(6.4)	4.4	横ナデ	横ナデ	ロクロナデ	底部回転糸切り	回転実測		
2		須恵器	高台付杯	1/4	(15.0)	(8.2)	6.3	横ナデ	横ナデ	底部回転糸切り→高台貼付→横ナデ		回転実測	No.7		
3		土師器	甕	口縁	(15.2)	-	(5.1)	横ナデ	胴部ヘラケズリ	口縁横ナデ	回転実測	武蔵巻			
4		土師器	甕	口縁	(19.8)	-	(7.2)	横ナデ	胴部ナデ	胴部ヘラケズリ→口縁横ナデ	回転実測	武蔵巻			
H50	1	須恵器	甕	胴	-	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	タタキ目	断面実測	拓本	床面		
	2	土師器	壺	口縁	(10.4)	-	(6.8)	ヘラナデ	口縁横ナデ→ミガキ	口縁横ナデ	胴部ヘラケズリ→ミガキ	回転実測			
	3	土師器	甕	胴	-	-	-					写真のみ			
H51	1	須恵器	杯	2/3	(13.0)	6.2	3.8	横ナデ	横ナデ	ロクロー横ナデ→底部回転糸切り	回転実測		No.2		
	2	土師器	杯	1/4	(14.2)	6.5	5.0	放射状に密にミガキ→黒色処理	放射状に密にミガキ→黒色処理	口縁横ナデ→中にカキ目	底部回転糸切り	回転実測			
	3	石皿	砥石	-	(7.2)	3.9	3.0	1,480		砥面4 片削欠損		流紋岩	No.1		
H52	1	土師器	杯	3/4	11.8	丸底	3.3	剥離	剥離	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ→ミガキ	剥離	完全実測	No.12		
	2	土師器	杯	1/2	(11.8)	丸底	4.2	横ナデ	横ナデ	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ		回転実測	No.3		
	3	土師器	杯	1/3	(10.9)	丸底	(3.7)	ミガキ	ミガキ	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ		回転実測	No.7		
	4	土師器	杯	定形	12.8	丸底	4.1	暗文	剥離	暗文	剥離	完全実測	甲斐型か	No.14	
	5	欠番	-	-	-	-	-								
	6	土師器	杯	1/4	(13.6)	丸底	5.6	ミガキ→暗な暗文→黒色処理	ミガキ	ミガキ		回転実測			
	7	土師器	杯	1/6	(12.5)	丸底	(2.8)	ミガキ→黒色処理	ミガキ→黒色処理	ミガキ→黒色処理		回転実測			
	8	土師器	杯	1/3	(10.8)	丸底	(3.4)	ミガキ→黒色処理	ミガキ→黒色処理	ミガキ		回転実測			
	9	土師器	杯	1/3	(11.0)	丸底	(3.8)	ミガキ→黒色処理	ミガキ→黒色処理	底部ヘラケズリ→ミガキ		回転実測			
	10	土師器	杯	1/5	(16.8)	丸底	(3.8)	ミガキ→黒色処理(塗)	ミガキ→黒色処理(塗)	ミガキ→黒色処理(塗)		回転実測			
	11	土師器	高杯	胴	-	-	(8.7)	杯	杯	ミガキ→黒色処理	胴	ヘラケズリ→ミガキ	完全実測		
	12	土師器	甕	底	-	(9.0)	(1.8)	ナデ	ナデ	ナデ		回転実測	No.6		
	13	土師器	甕	口縁	(14.5)	-	(5.7)	横ナデ	横ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ		回転実測	No.15		
	14	土師器	鉢	口～底	(12.8)	丸底	13.0	口縁横ナデ	胴部ナデ	口縁横ナデ	胴部ヘラケズリ→ミガキ	完全実測			
	15	土師器	壺	底部欠損	12.2	-	18.4	口縁横ナデ	胴部ナデ	口縁横ナデ	胴部ヘラケズリ→ミガキ	完全実測	No.13		
	16	土師器	丸割甕	口縁	(20.0)	-	(7.6)	剥離	剥離	口縁横ナデ	胴部ミガキ	剥離	回転実測	No.1	
	17	土師器	丸割甕	口～底	(20.6)	(8.0)	26.7	口縁横ナデ	胴部ナデ	剥離	口縁横ナデ	胴部ヘラケズリ→ミガキ	剥離	回転実測	No.5, H12No.46・52
	18	土師器	甕	胴～底	-	7.4	(23.3)	胴部ナデ	胴部ナデ	胴部ヘラケズリ→ミガキ	底部本葉煎	完全実測	拓本		

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法 量 (cm)			重量 (g)	成 形・調 整		備考	出土位置			
				口径(実)	底径(実)	器高(実)		内 面	外 面					
I452	19	土師器	壺	口~底	(21.4)	11.5	23.5		跡なミガキ		完全実測	北西		
	20	土師器	長胴甕	口~胴	16.6	-	(21.3)		口縁横ナデ 胴部ナデ		完全実測	No.20		
	21	土師器	長胴甕	口~胴	-	-	(25.7)		ナデ		口縁横ナデ ヘラケズリ	回転実測	No.16	
	22	土師器	長胴甕	口~胴	21.0	-	(14.3)		口縁横ナデ 胴部ナデ		胴部ヘラケズリ→口縁横ナデ わずかにミガキ	完全実測	No.18	
	23	土師器	甕	底	-	8.6	(4.5)		ナデ		剥離	完全実測	No.4	
	24	土師器	甕	底	-	(7.8)	(5.0)		ナデ		わずかにミガキ	回転実測	No.23	
	25	鉄器	鎌	刃	(3.0)	2.1	0.2	3.0				先鋒のみ	No.10	
26	鉄器	刀子	茎	(2.9)	1.0	0.3	2.2					片側欠損	No.11	
27	剥片	善石・黒曜石												
I453	1	土師器	杯	口径実測	13.8	6.3	5.0		ミガキ→黒色処理		横ナデ 底部回転系切り 口縁部一部欠損 煤付着	完全実測	灯明皿	No.9
	2	土師器	椀	1/3	(15.3)	5.9	5.3		暗文→黒色処理		高台貼付→横ナデ	完全実測		No.10
	3	土師器	椀	底	-	(6.6)	(3.0)		ミガキ→黒色処理		底部回転系切り→高台貼付→横ナデ	回転実測		
	4	土師器	杯	底	-	(6.3)	(2.1)		ミガキ→黒色処理		底部回転系切り	回転実測		
	5	土師器	甕	口縁	(1.9)	-	(6.5)		胴部ナデ 口縁横ナデ		胴部ヘラ小口横ナデ→口縁横ナデ	回転実測		
	6	土師器	甕	口~胴	(21.8)	-	(13.5)		胴部ナデ 口縁横ナデ 煤付着		胴部クロコナデ 口縁横ナデ 煤付着	回転実測	ロクロ甕	No.1
	7	緑釉陶器	皿	底	-	-	-		緑釉		緑釉	断面実測	写真	
F1	1	須恵器	蓋	1/3	(9.6)	丸底	3.6		横ナデ		横ナデ 天井部回転ヘラケズリ 刻書「X」	回転実測	拓本	No.2
	2	須恵器	蓋	1/3	(9.6)	丸底	(2.9)		横ナデ		横ナデ 天井部回転ヘラケズリ	回転実測		
	3	須恵器	蓋	少片	-	-	-		横ナデ		横ナデ	写真のみ		
	4	土師器	杯	1/4	(11.4)	丸底	(3.3)		横ナデ		口縁横ナデ→底部ヘラケズリ	回転実測		
	5	土師器	杯	1/4	(12.0)	丸底	(2.7)		横ナデ→暗文?		口縁横ナデ→底部ミガキ	回転実測		
	6	土師器	杯	1/4	(12.0)	丸底	(3.2)		横ナデ→ミガキ→黒色処理		口縁横ナデ→底部ミガキ	回転実測		
	7	土師器	壺	口縁	(12.0)	-	(4.8)		横ナデ		横ナデ 剥離	回転実測		
	8	土師器	甕	口縁	(16.0)	-	(4.0)		横ナデ		横ナデ 胴部ヘラケズリ 剥離	回転実測		P13
	9	土師器	甕	口縁	(17.0)	-	(10.4)		横ナデ		口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ	回転実測		
F2	1	須恵器	壺	口縁	(10.4)	-	(2.4)		横ナデ 自然輪付着		横ナデ 自然輪付着	回転実測		No.4
	2	須恵器	杯	1/2	(12.8)	(6.6)	3.6		横ナデ 煤付着		ロクロナデ 煤付着	完全実測		H1
	3	須恵器	杯	1/2	(13.4)	(6.0)	3.3		横ナデ→黒色処理		横ナデ 底部系切り	回転実測		H1
	4	須恵器	杯	口径実測	(14.4)	6.6	4.7		横ナデ		横ナデ 底部回転系切り 墨書「X」	完全実測		No.8・9
	5	須恵器	杯	口縁	(12.0)	-	(2.7)		横ナデ		横ナデ	回転実測		P21
	6	須恵器	蓋	1/4	(11.0)	丸底	(3.4)		横ナデ		横ナデ 天井部回転ヘラケズリ	回転実測		P17
	7	土師器	杯	底	-	(6.0)	(1.9)		ミガキ→黒色処理		底部回転系切り	回転実測		H1
	8	土師器	杯	口縁	(14.0)	-	(3.0)		ミガキ→黒色処理		横ナデ 墨書「東」	回転実測		H1
	9	須恵器	高台付杯	底	-	(10.0)	(1.4)		横ナデ		高台貼付	回転実測		P8
	10	石器	磨り石								磨面あり	写真のみ		
F3	1	須恵器	蓋	口縁	(14.0)	-	(1.2)		横ナデ		横ナデ	回転実測		P13
	2	須恵器	壺	胴	-	-	-		横ナデ		横ナデ	断面実測	拓本	P7
F4	1	須恵器	杯	1/4	(12.8)	(6.0)	3.7		横ナデ		横ナデ 底部系切り	回転実測		P72

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法 量 (cm)			重量 (g)	成 形・調 整		備考	出土位置		
				口径(実)	底径(実)	器高(実)		内 面	外 面				
F4	2	土師器	杯	1/2	(10.8)	(5.4)	4.1	横ナデ→暗文	口縁横ナデ 口縁下部・底部手持ちヘラケズリ	回転実測	甲斐型土器	P70	
	3	土師器	椀	口縁	(16.0)	-	(4.4)	ミガキ→黒色処理	横ナデ	回転実測		P70	
	4	土師器	杯	口縁	(14.0)	丸底	(3.1)	横ナデ	口縁横ナデ→底部ヘラケズリ	回転実測		P68	
F5	1	須恵器	蓋	口縁	(14.0)	-	(1.0)	横ナデ	横ナデ	回転実測		P51	
	2	須恵器	壺	口縁	(26.0)	-	(2.8)	横ナデ	横ナデ	回転実測		P51	
	3	須恵器	杯	底	-	(4.8)	(1.0)	横ナデ	底部糸切り	回転実測		P51	
	4	須恵器	蓋	口縁	(16.0)	-	(1.0)	横ナデ	横ナデ	回転実測		P87	
	5	須恵器	高台付杯	底	-	(10.0)	(1.0)	横ナデ	高台貼付→横ナデ	回転実測		P87	
	6	須恵器	壺小壺	胴	-	-	-	剥離	タタキ目	断面実測	拓本	P77	
	7	須恵器	壺小壺	胴	-	-	-	ナデ	タタキ目→布圧痕	断面実測	拓本	P83	
	8	石器	砥石	石	(5.8)	3.0	2.7	69.2	砥面2 片側欠損				
	9	石器	磨り石	石	5.8	4.0	0.7	33.2	磨面1				
F6	1	須恵器	杯	口縁	(12.0)	-	(3.3)	横ナデ	横ナデ	回転実測	高台付杯か	P82	
F7	1	須恵器	杯	底	-	(7.6)	(2.6)	横ナデ	横ナデ 底部回転糸切り 墨書「真〇」	回転実測		P92	
F9	1	須恵器	壺	口縁	(23.8)	-	(2.0)	横ナデ	自然釉付着	横ナデ	自然釉付着	P220	
	2	土師器	壺	底	-	(4.0)	(2.0)	ナデ	ヘラケズリ	回転実測		P220	
F11	1	須恵器	杯	口縁	(12.0)	-	(3.3)	横ナデ→黒色処理	横ナデ	回転実測			
P12	1	土師器	杯	口縁	(14.0)	-	(2.6)	横ナデ	横ナデ→ミガキ 磨耗	回転実測			
	2	土師器	杯	底	-	(6.0)	(1.0)	横ナデ	底部回転糸切り	回転実測			
	3	土師器	椀	高台	-	(6.0)	(1.1)	横ナデ	横ナデ	回転実測			
P20	1	須恵器	杯	口縁	(10.0)	-	(2.7)	横ナデ	横ナデ	回転実測			
	2	須恵器	杯	底	-	(6.0)	(1.7)	横ナデ	横ナデ 底部ヘラナデ	回転実測			
	3	土師器	壺	底	-	(5.0)	(4.5)	ナデ	ヘラケズリ	回転実測	武藏窯		
P23	1	須恵器	蓋	つまみ	(6.0)	-	(1.4)	横ナデ	横ナデ	回転実測			
	2	須恵器	杯	口縁	(13.0)	-	(2.5)	横ナデ	横ナデ	回転実測			
P26	付属9	骨	ウシ	臼面	(2.7)	(1.2)	(0.9)		他11片				
P36	1	須恵器	壺	胴	-	-	-	ナデ	タタキ目→頸部横ナデ	断面実測	拓本		
	2	土師器	杯	口~底	(12.0)	丸底	3.5		口縁横ナデ 底部ヘラケズリ	回転実測			
P40	1	石器	石鏝		(1.2)	(1.3)	(0.3)	0.38	両端両側先端欠損 被熱なし			黒曜石	
P41	1	須恵器	蓋	口縁	(17.0)	-	(1.1)	横ナデ	横ナデ	回転実測		かえり付き	
F59	1	須恵器	壺小壺	底	-	-	-		当て具他→ナデ	断面実測	拓本		
	2	須恵器	壺	底	-	(6.0)	(4.7)	ナデ	タタキ目 底部磨耗	断面実測	拓本		
P71	1	土師器	壺	底	-	(5.0)	(2.9)	ナデ	ヘラケズリ 剥離	回転実測			
P73	1	須恵器	高台付杯	口縁	(12.0)	-	(3.2)	横ナデ	横ナデ	回転実測			
P100	1	鉄器	紡錘車	輪	(23.6)	0.5	0.4	23.8	先端・円板欠損				
P108	1	石器	白玉		1.2	1.2	0.6	1.5	磨りあり			磨石	
P109	1	土師器	杯	口縁	(14.0)	-	(3.6)		ミガキ→暗文→黒色処理	横ナデ		回転実測	
P112	1	土師器	杯	1/3	(13.0)	(5.8)	4.1		放射状ミガキ→黒色処理	横ナデ	縁に煤付着	回転実測	
	2	土師器	杯	1/3	(11.0)	(5.0)	3.6		横ナデ→ミガキ	口ウロナデ 底部回転糸切り	回転実測		

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			重量 (g)	成形・調整		備考	出土位置
				口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		内面	外面		
P112	3	土師器	杯	底	-	(6.6)	(1.8)	ミガキ→黒色処理 色変	横ナデ 底部回転系切り	回転実測	
	4	土師器	椀	底	-	(7.0)	(4.1)	ミガキ→黒色処理	高台貼付	完全実測	
	5	土師器	杯	2/3	(12.5)	5.2	5.2	横ナデ→放射状暗文 (3本) →黒色処理	ロクロナデ→横ナデ 底部回転系切り 墨書	完全実測	キ-11 No.20
P121	1	鉄器	蓋	完形	13.3	0.9	0.3	11.2			
P127	1	石器	磨り石		(5.0)	5.0	3.6	131.9		両端欠損 磨面2 被熱あり	安山岩
	2	鉄器	角釘	ほぼ完形	(3.7)	(0.5)	(0.2)	1.1		表面割傷	
P132	1	須恵器	高杯	頸	-	-	(4.1)		赤黒ナデ→ミガキ→黒色処理 (塗) 磨面 ヘラナデ	ミガキ→黒色処理 (塗)	完全実測 器台に二次利用か
P136	1	須恵器	杯蓋	口縁	(10.0)	-	(2.9)		横ナデ	横ナデ	回転実測
	2	須恵器	壺	口縁	(12.0)	-	(2.9)		横ナデ 自然輪付着	横ナデ	回転実測
	3	土師器	椀	口縁	(14.0)	-	(5.8)		ミガキ→黒色処理 色変	横ナデ 高台欠損	回転実測
	4	土師器	椀	1/4	(15.4)	(8.0)	(5.3)		ミガキ→黒色処理 色変	高台貼付 横ナデ	回転実測
	5	土師器	小甕	口縁	(10.0)	-	(4.2)		横ナデ	横ナデ	回転実測
	6	土師器	甕	口縁	(20.8)	-	(6.0)		横ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測
	7	土師器	甕	底	-	(11.8)	(5.5)		ナデ	ヘラケズリ	回転実測
P141	1	須恵器	壺	口縁	-	-	-		横ナデ 自然輪付着	横ナデ→樹皮状文	断面実測 拓本
P144	1	土師器	杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書 (判読不明)	破片実測
	2	土師器	杯	2/3	(13.0)	4.7	5.0		ミガキ→暗文→黒色処理	口縁横ナデ 底部回転系切り	完全実測
P148	1	須恵器	杯	1/2	(14.0)	(9.0)	4.5		横ナデ	口縁横ナデ 底部回転ヘラ切り→ヘラナデ	回転実測
	2	須恵器	杯	1/2	(14.8)	(9.6)	4.4		横ナデ	口縁横ナデ 底部回転ヘラケズリ→ヘラナデ	回転実測
	3	須恵器	壺	底	-	-	-		当て具痕	タタキ目	断面実測 拓本
	4	土師器	杯	口~底	(15.6)	(10.2)	3.4		横ナデ 暗文 磨耗	口縁ミガキ 底部ヘラケズリ	回転実測
	5	土師器	壺	口縁	(12.0)	-	(2.9)		横ナデ	横ナデ	回転実測
	6	土師器	壺	胴	-	-	-		口縁横ナデ→胴部ハケ目	ハケ目	断面実測 拓本
P185	1	須恵器	甕小壺	胴	-	-	-		ナデ	タタキ目	断面実測 拓本
P191	1	土師器	甕	底	-	(9.4)	(2.8)		ナデ	ヘラケズリ	回転実測
	付属10	骨	シカ	新骨	(7.4)	(2.6)	(1.7)		他20片		
P215	1	鉄器	刀子	ほぼ完形	(10.8)	1.0	0.2	6.5		刃部・茎・端部欠損	
P241	1	須恵器	壺	口縁	(24.0)	-	(3.0)		横ナデ 自然輪付着		回転実測
	2	土師器	甕	口縁	(16.0)	-	(5.6)		横ナデ	口縁横ナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測
	1	須恵器	杯	1/3	(12.6)	5.8	3.0		横ナデ	横ナデ 底部手持ち重行ヘラケズリ	完全実測
D20	2	須恵器	杯	ほぼ完形	12.3	4.5	5.0		横ナデ	横ナデ 底部回転系切り	完全実測 底部径小さい
	3	須恵器	高台付杯	底	-	(10.2)	(3.2)		横ナデ 磨耗	高台貼付→横ナデ	回転実測 No.11
	4	土師器	杯	2/3	12.1	5.3	3.7		横ナデ→ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 底部回転系切り	完全実測 No.3 シ-13
	5	土師器	杯	2/3	(13.5)	5.2	4.4		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 底部回転系切り	完全実測 No.5
	6	土師器	杯	口縁	(15.8)	-	(3.7)		ミガキ→黒色処理	横ナデ	回転実測
	7	土師器	杯	底	-	5.8	(1.2)		ミガキ→黒色処理	横ナデ 底部回転系切り→黒色処理小椀ける	回転実測
	8	土師器	椀	底	7.7	6.6	(1.8)		杯部 ミガキ→黒色処理	底部回転系切り→高台貼付	完全実測 土板に転用 No.10
	9	土師器	椀	底	8.1	8.0	(2.8)		横ナデ→ミガキ→暗文→黒色処理	高台貼付→横ナデ	完全実測 土板に転用 No.8
	10	土師器	杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書 (判読不明)	破片実測

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			重量 (g)	成形・調整		備考	出土位置		
				口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		内面	外面				
D20	1.1	鉄器	?	(5.6)	1.4	0.3	8.2		片側欠損		No.12		
	付属品	焼骨	哺乳類	不可	(1.3)	(1.3)	(0.7)				焼骨1~5		
D21	1	土師器	杯	底	-	(6.0)	(2.1)		ミガキ→黒色処理	横ナデ→底部回転系切り	回転実測 二次焼成 灰付着	No.1	
	2	土師器	杯	口縁	(16.0)	-	(4.5)			横ナデ	黒曜石		
観測品	1	石器	石核		4.1	2.3	1.6	15.7				回転実測	
M5	1	須恵器	杯	底	-	(8.0)	(1.1)		ナデ	ヘラケズリ	回転実測		
	2	土師器	甕	底	-	(9.0)	(3.0)		ミガキ	ヘラケズリ→ミガキ磨耗	回転実測		
M6	1	須恵器	杯	口縁	(14.0)	-	(4.1)			横ナデ	回転実測		
	2	須恵器	高台付杯	底	-	(10.0)	(2.8)			横ナデ	底部回転ヘラケズリ→高台貼付	回転実測	
	3	須恵器	壺	口縁	(13.0)	-	(7.4)			横ナデ	胴部ロウ口痕 口縁横ナデ	回転実測 拓本	
	4	須恵器	甕	口縁	(22.0)	-	(5.0)			横ナデ	胴部タタキ目 口縁横ナデ	回転実測 拓本	
	5	須恵器	甕小甕	底	-	(13.0)	(3.5)			横ナデ→ナデ	タタキ 底部ヘラナデ 底部磨耗		
	6	鉄器	刀子	刃・茎	(10.5)	1.4	0.2	8.6			万部先端なし		No.1
	7	鉄器	角軸	端	(4.4)	0.4	0.3	1.9					No.9
	8-1	鉄器	角釘	頭部定形	(5.1)	0.5	0.3	3.9			先端なし		No.16
	8-2	鉄器	角釘	頭部定形	(4.6)	0.4	0.3	2.1			先端なし		No.16
	9-1	鉄器	角釘	頭部定形	(7.8)	0.4	0.4	8.8			頭・先端なし		No.15
	9-2	鉄器	鎌	基	(2.0)	2.6	0.3	4.0					No.15
	M7	1	陶器	古瀬戸磁子	胴	-	-	-		ナデ	磨擦文→捺輪 (灰輪)	断面実測 写真	
2		須恵器	杯	底	-	(5.0)	(1.4)		ナデ	底部回転系切り	回転実測		
M8	1	土師器	甕	口縁	(22.0)	-	(5.2)			横ナデ 胴部ヘラケズリ	回転実測 武蔵塗		
	2	須恵器	杯	底	-	(7.0)	(2.4)			横ナデ 底部回転系切り	回転実測 褐色		
	3	須恵器	杯	底	-	(5.6)	(2.4)			横ナデ 底部回転系切り後→ヘラナデ	完全実測		
	4	須恵器	杯	口→底	(14.0)	(7.6)	(4.0)			ロウ口痕 底部回転ヘラケズリ	完全実測		
グリッド	1	須恵器	甕小甕	底	-	(23.8)	(3.3)			ナデ	タタキ 底部ヘラナデ	回転実測 拓本	
	2	須恵器	甕小甕	胴	-	-	-			当て貝敷→ナデ	タタキ	断面実測 拓本	エ・オ 2
	3	土師器	甕	底	-	(10.0)	(4.0)			ナデ	ヘラケズリ	回転実測	エ・オ 4
	4	土師器	杯	1/3	(13.6)	丸底	3.5			ナデ	ヘラケズリ→口縁横ナデ	回転実測	エ・オ 4
	5	須恵器	壺	口1/5	(22.0)	-	(1.8)			横ナデ 自然輪付着	横ナデ 自然輪付着	回転実測	オ 2
	6	須恵器	壺	口→胴	(16.0)	-	(7.4)			横ナデ	肩部沈線 自然輪付着	回転実測	オ 1
	7	土師器	杯	1/4	(14.0)	丸底	4.0			横ナデ→ミガキ	口縁横ナデ 底部磨耗	回転実測	オ 1
	8	須恵器	杯	1/4	(14.6)	(7.2)	3.9			横ナデ	横ナデ 底部回転系切り	回転実測	オ 5
	9	須恵器	壺	口1/8	(18.0)	-	(3.3)			自然輪付着	自然輪付着	回転実測	オ 1
	10	須恵器	壺	1/3	(16.2)	-	3.1			横ナデ	口縁横ナデ 天井部回転ヘラケズリ→つまみ貼付	回転実測	オ 2
	11	須恵器	小甕	胴	-	-	-			横ナデ	断面実測	写真	オ 3
	12	土師器	杯	口縁	-	-	-			ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書 (判読不明)	破片実測	オ 3
12	須恵器	杯	底	-	(6.8)	(2.8)			横ナデ	口縁横ナデ 底部ヘラナデ	完全実測	オ 4	

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			重量 (g)	成形・調整		備考	出土位置	
				口径(実)	底径(実)	器高(実)		内面	外面			
グ リ ッ ド	13	土師器 甕	口縁	(16.0)	-	(5.0)		横ナデ	口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ	回転実測	ケ-2	
	14	須恵器 蓋	口縁	(15.4)	-	(3.3)		横ナデ 自然輪付着	口縁横ナデ 天井部ヘラケズリ	回転実測	ケ-3	
	15	須恵器 杯	1/5	(13.0)	(5.6)	4.0		横ナデ	横ナデ 底部回転糸切り	回転実測	ケ-3	
	16	須恵器 杯	底	-	7.0	(3.0)		横ナデ	口縁横ナデ 底部回転ヘラ切り→ナデ	完全実測	ケ-4	
	17	須恵器 高台付杯	底	-	(10.8)	(3.5)		横ナデ	高台貼付 横ナデ	回転実測	ケ-4	
	18	須恵器 壺	底	-	8.5	(2.5)		横ナデ	底部回転糸切り→高台貼付	完全実測	ウ-7	
	19	須恵器 杯	1/3	(14.0)	(7.0)	4.1		横ナデ	口縁横ナデ 底部回転糸切り	回転実測	ウ-オ-8・9	
	20	須恵器 杯	口縁	-	-	-		横ナデ	横ナデ 墨書「東」か	破片実測	ウ-オ-8・9	
	21	灰釉陶器 壺	口縁	(12.1)	-	(5.8)		横ナデ→施釉	横ナデ→施釉	回転実測	ウ-ヘ-8	
	22	灰釉陶器 壺	口縁	(12.2)	-	(3.2)		横ナデ→施釉	横ナデ→施釉	回転実測	ウ-キ-8・9	
	23	灰釉陶器 皿	底	-	(5.8)	(1.5)		横ナデ 口縁施釉 重ね焼き痕あり	高台貼付 横ナデ	回転実測	ウ-キ-8・9様土	
	24	灰釉陶器 皿	底	-	(7.0)	(1.3)		横ナデ 朱の痕跡あり	高台貼付 横ナデ	回転実測	ウ-エ-8・9	
	25	土師器 杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)	破片実測	ウ-オ-8・9	
	26	土師器 杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)	破片実測	ウ-エ-8・9	
	27	土師器 杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)	破片実測	ウ-オ-8・9	
	28	土師器 杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)	破片実測	ウ-オ-8・9	
	29	土師器 杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)	破片実測	ウ-オ-10	
	30	土師器 甕	底	-	(5.3)	(3.0)		ヘラナデ→ナデ	ヘラケズリ 底部木炭痕	回転実測	ウ-オ-11	
	31	須恵器 壺	口縁	-	-	(5.5)		横ナデ 自然輪付着	横ナデ 自然輪付着	回転実測	ウ-エ-8・9	
	32	欠番										
	33	須恵器 壺	底	-	(7.0)	(2.7)		横ナデ 磨耗	底部回転糸切り→高台貼付→横ナデ 磨耗	回転実測	ウ-オ-10	
	34	土師器 杯	口縁	(12.0)	-	(3.1)		ミガキ→黒色処理	横ナデ→口縁上部ミガキ 墨書(判読不明)	回転実測	エ-オ-10	
	35	土師器 甕	口縁	(16.0)	-	(4.5)		胴部ナデ 口縁横ナデ	胴部ヘラケズリ 口縁横ナデ	回転実測	武蔵窯	
	36	須恵器 壺	胴	-	-	(5.0)		横ナデ	横ナデ 自然輪付着	回転実測	ウ-オ-11	
	37	土師器 杯	1/3	(12.4)	5.6	4.0		横ナデ 暗文→黒色処理	横ナデ 底部手持ちヘラナデ	完全実測	ウ-9	
	38	須恵器 蓋	1/3	(9.9)	-	(3.5)		横ナデ	横ナデ	回転実測	キ-10・11	
	39	欠番										
	40	欠番										
	41	土師器 台付甕	脚	-	(8.0)	(3.0)		横ナデ	横ナデ	回転実測	エ-9	
	42	土師器 杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)	破片実測	エ-9	
43	土師器 皿	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ→ミガキ 墨書「G」	破片実測	エ-10		
44	須恵器 杯	1/4	(12.0)	(8.0)	2.7		横ナデ	底部回転ヘラケズリ 自然輪付着	回転実測	ウ-7・10		
45	灰釉陶器 小壺	底	-	(4.8)	(3.0)		横ナデ	下部ヘラケズリ→高台貼付	回転実測	オ-カ-9		
46	土師器 杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書「東」	破片実測	オ-9		
47	土師器 杯	口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書「東」か	破片実測	オ-10		
48	土師器 杯	底	-	5.4	(3.1)		横ナデ	横ナデ 底部回転糸切り	完全実測	オ-11		
49	須恵器 杯	1/3	(12.6)	5.4	4.3		横ナデ	横ナデ 底部回転糸切り	完全実測	柄杓型小		
50	須恵器 杯	底	-	6.0	(3.7)		横ナデ 一部黒色を帯びる	横ナデ 底部回転糸切り	完全実測	カ・キ-11		

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法 量 (cm)				重量 (g)	内 面		外 面		備考	出土位置
				口径(径)	底径(径)	器高(深)	口径(径)							
グリ ド	51	土師器	杯	1/3	(1.40)	6.0	4.0	-	ミガキ→黒色処理 色変小	横ナデ 底部回転系切り	墨書(判読不明)	回転実測	カ・キ-11	
	52	土師器	杯	1/3	(1.30)	5.8	4.5	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ 底部回転系切り		回転実測	カ-11	
	53	土師器	杯	口縁	(12.0)	-	(3.5)	-	横ナデ わずかにミガキ	横ナデ 底部系切りか		回転実測	カ-11	
	54	土師器	杯	口縁	-	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書「東」か		破片実測	カ-11	
	55	土師器	杯	底	-	(8.0)	(2.0)	-	ミガキ→黒色処理	底部ヘラナデ 磨耗 へら記号あり		回転実測	拓本 カ・キ-11	
	56	土師器	杯	口縁	-	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)		破片実測	キ-7	
	57	土師器	杯	口縁	-	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)		破片実測	キ-8	
	58	土師器	杯	2/3	(12.2)	5.7	3.7	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ 底部回転系切り		完全実測	キ-9	
	59	土師器	杯	口縁	-	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書「木」		破片実測	キ-9	
	60	土師器	甕	口1/3	(11.9)	-	(5.6)	-	横ナデ	横ナデ		回転実測	カ・キ-10	
	61	土師器	杯	口縁	-	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)		破片実測	キ-11	
	62	土師器	杯	底	-	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)		破片実測	キ-11	
	63	土師器	椀	底	-	8.3	(5.2)	-	ミガキ→黒色処理	底部回転系切り→高台貼付→横ナデ		回転実測	キ-11	
	64	須恵器	壺	口縁	(26.0)	-	(6.5)	-	横ナデ	横ナデ		回転実測	キ-11	
	65	須恵器	壺	底	-	(12.0)	(7.5)	-	横ナデ 自然輪付着	タタキ		回転実測	拓本 カ・キ-11	
	66	須恵器	杯	口縁	13.1	5.4	4.3	-	横ナデ	横ナデ 底部回転系切り		完全実測	キ-11No.1	
	67	須恵器	杯	底	-	5.9	(2.2)	-	横ナデ 一部黒色	横ナデ 底部回転系切り		完全実測	柱状高台 キ-11	
	68	土師器	杯	1/4	(12.0)	(5.8)	4.0	-	横ナデ→暗文→黒色処理	横ナデ 底部回転系切り		回転実測	キ-11	
	69	須恵器	壺	口縁	-	-	-	-	横ナデ	横ナデ→樹橋波状文(4本=単位)		断面実測	拓本 サ-11	
	70	須恵器	壺	口縁	(22.0)	-	(7.8)	-	横ナデ	横ナデ→横波線→樹橋波状文 自然輪付着		断面実測	拓本 サ-12	
	71	須恵器	壺	底	-	(14.0)	(7.7)	-	横ナデ 木葉痕	タタキ 下部ヘラナデ		回転実測	拓本 サ-15	
	72	土師器	杯	2/3	12.5	6.0	4.1	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ 底部回転系切り		完全実測	サ-15	
	73	土師器	椀	底	7.0	7.7	2.3	-	ミガキ→暗文→黒色処理	高台貼付→横ナデ		完全実測	端部欠いて土板に転用 サ-15	
	74	土師器	椀	底	9.2	8.0	2.6	-	ミガキ→暗文→黒色処理	高台貼付→横ナデ		完全実測	端部欠いて土板に転用 サ-15	
	75	須恵器	壺	口縁	-	-	-	-	横ナデ 自然輪付着	横ナデ		断面実測	拓本 シ-11	
	76	土師器	杯	口縁	-	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)		破片実測	シ-11	
	77	土師器	杯	口縁	-	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書「東」か		破片実測	シ-11	
	78	須恵器	壺	底	-	(5.6)	(2.4)	-	横ナデ	底部回転系切り→高台貼付		回転実測	サ-13	
79	須恵器	蓋	口縁	(11.0)	-	(2.5)	-	横ナデ	天井部ヘラケズリ 口縁横ナデ		回転実測	シ-13		
80	土師器	杯	口縁	13.0	6.2	4.7	-	ミガキ→黒色処理	口縁横ナデ 底部回転系切り		完全実測	シ-13		
81	土師器	甕	口縁	(14.3)	-	(5.7)	-	口縁ハケ目 横ナデ 胴部ナデ	口縁横ナデ 胴部ハケ目 割離		回転実測	シ-13		
82	土師器	甕小杯	底	-	(5.9)	(2.8)	-	ナデ	ナデ 底部回転系切り		回転実測	シ-14		
83	土師器	杯	口縁	(12.8)	-	(4.0)	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ		回転実測	シ-14		
84	土師器	杯	1/2	12.8	(5.5)	4.7	-	ミガキ→暗文→黒色処理	横ナデ 底部回転系切り		完全実測	柱状高台 シ-14		
85	土師器	杯	2/3	(13.1)	5.6	4.5	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ 底部回転系切り		完全実測	柱状高台か シ-14		
86	土師器	杯	口縁	(14.0)	-	(3.7)	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ 黒色処理		回転実測	シ-14		
87	土師器	甕	口縁	(23.0)	-	(5.8)	-	横ナデ	口縁横ナデ 胴部口ロナデ		回転実測	シ-14・15		
88	土師器	甕?	把手	(5.6)	3.1	3.1	-	横ナデ	ヘラケズリ→ミガキ		完全実測	シ-14・15		

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法量 (cm)				成形・調整		備考	出土位置
				口径(実)	底径(実)	器高(実)	重量(g)	内面	外面		
グ リ フ ト	89	灰釉陶器	皿 底	-	(7.6)	(2.2)		横ナデ→施釉	高台貼付→横ナデ 施釉	回転実測	シ-15
	90	土師器	杯 口縁	(12.0)	-	(2.3)		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)	回転実測	シ-15
	91	土師器	皿 1/4	(14.0)	(6.0)	2.0		ミガキ→黒色処理	横ナデ 底部ヘラケズリ	回転実測	シ-15
	92	土師器	杯 底	-	5.4	(1.7)		ミガキ→黒色処理	横ナデ 底部回転糸切り	完全実測	シ-15
	93	土師器	杯 口縁	(17.0)	-	(3.8)		ミガキ→黒色処理	横ナデ	回転実測	シ-15
	94	須恵器	壺小壺	口縁	-	-		横ナデ 自然輪付着	横ナデ→横穴部2本→聯綿波状文(5本)	断面実測	拓本 ス-12
	95	土師器	杯 口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書「東」	破片実測	ス-13
	96	灰釉陶器	陶小皿	底	(6.8)	(1.5)		横ナデ→施釉	高台貼付 施釉	回転実測	ソ-13
	97	須恵器	壺 口縁	(33.4)	-	(4.5)		横ナデ	タタキ→横ナデ	回転実測	ス-16
	98	須恵器	壺 胴	-	-	-		横ナデ	横ナデ 自然輪付着	断面実測	拓本 ス・セ-16
	99	灰釉陶器	樽 底	(7.8)	(2.2)			横ナデ→施釉 みこみ磨耗	高台貼付→横ナデ 施釉	回転実測	ス・セ-16
	100	須恵器	壺 底	-	-	(4.1)		横ナデ みこみに自然輪付着	底部回転ヘラナデ→高台貼付 高台欠損	完全実測	二次利用か セ-12
	101	土師器	高杯 脚	-	(11.4)	(2.8)		ヘラケズリ→裾部横ナデ ミガキ	横ナデ	回転実測	グ-105と同一か セ-12
	102	須恵器	壺 天井	-	-	(2.0)		横ナデ	天井部ヘラケズリ→つまみ貼付	完全実測	セ-13
	103	須恵器	壺 口縁	(13.8)	-	(5.8)		横ナデ	横ナデ	回転実測	ソ-12
	104	須恵器	杯 底	-	丸底	(1.8)		横ナデ	底部回転ヘラ切り 底部線状の刻書	回転実測	ソ-13
	105	土師器	高杯 脚	-	-	(7.5)		杯部ミガキ→黒色処理 脚部ヘラケズリ	ヘラケズリ→ミガキ	完全実測	グ-101と同一か ソ-13
	106	土師器	杯 1/5	(14.0)	丸底	(4.5)		ミガキ→黒色処理	ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	ソ-14
	107	土師器	壺 底1/4	-	(5.0)	(9.7)		ナデ	ヘラケズリ	回転実測	タ-11
	108	土師器	樽 1/4	(14.0)	7.7	5.0		ミガキ→暗文→黒色処理 高台部横ナデ	底部回転糸切り→高台貼付 横ナデ	完全実測	タ-11
	109	灰釉陶器	壺 底	(8.8)	(3.8)			横ナデ	高台貼付	回転実測	タ-12
	110	須恵器	壺 口縁	(35.6)	-	(3.7)		横ナデ	横ナデ→聯綿波状文	回転実測	拓本 タ-13
	111	土師器	杯 口縁	-	-	-		横ナデ	横ナデ 墨書(判読不明)	破片実測	タ-13・14
	112	土師器	杯 口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)	破片実測	タ-13・14
	113	須恵器	壺 底	(12.4)	(6.5)			横ナデ 自然輪付着	横ナデ 自然輪付着	回転実測	タ-13・14
	114	須恵器	壺 口縁	(9.4)	-	(4.9)		横ナデ 自然輪付着	横ナデ	回転実測	II地区表採
	115-1	土師器	鉢 口縁	(12.8)	-	(5.2)		口縁横ナデ 胴部ナデ	口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ	回転実測	グ-115は同個体か I地区NW表採
	115-2	土師器	鉢 底	-	(6.6)	(3.3)		ミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	回転実測	I地区NW表採
	116	土師器	鉢 底	-	丸底	(7.3)		ナデ 磨耗	ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	I地区NW表採
	117	須恵器	杯 口縁	-	-	-		横ナデ	横ナデ 墨書「百」か	破片実測	I地区NW表採
	118	土師器	杯 口縁	-	-	-		ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)	破片実測	I地区NW表採
	119	鉄器	角釘	角形	15.0	0.4	0.3	10.1		先端尖る	オ-9
	120	鉄器	角釘	ほぼ正角形	(8.0)	0.4	0.3	9.1		先端欠損	カ-9
	121	鉄器	刀子	茎	(2.4)	0.5	0.2	0.8		先端欠損	キ-3
	122	鉄器	角釘	ほぼ正角形	(3.6)	0.4	0.3	2.6		頭・先端欠損	キ-7
	123	鉄器	角釘	ほぼ正角形	(10.5)	0.5	0.5	11.8		頭先・先端欠損	キ-11
	124	鉄器	角釘	先細	(3.2)	0.6	0.5	4.5			ク-8
	125	鉄器	角釘	ほぼ正角形	(10.5)	0.7	0.4	14.1		頭・先端欠損	ケ-4

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			重量 (g)	成形・調整		備考	出土位置
				口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)		内面	外面		
126	鉄器	組		(3.6)	0.5	0.2	1.7		両端欠損		サ-13
127	鉄器	角釘		(5.8)	0.4	0.3	4.5		両端欠損		サ-15
128	鉄器	刀子	茎	(5.9)	0.6	0.3	5.5		両端欠損		サ-15
129	青銅	遠方	完形	3.7	3.4	0.15	12.9				サ-15No.7
130-1	鉄器	角釘	ほぼ完形	(4.5)	0.4	0.3	3.0		先端欠損		サ-15No.3
130-2	鉄器	止金具	ほぼ完形	(5.1)	1.8	0.2	9.3		角釘2本刺さる		サ-15No.3
			角釘1	3.1	0.4	0.3					
			角釘2	3.1	0.4	0.3					
130-3	鉄器	止金具	完形	7.2	2.4	0.2	11.3		角釘2本刺さる		サ-15No.3
			角釘	0.5	0.3						
			角釘1	(2.9)	0.4	0.3			先端なし		
			角釘2	2.4	0.35	0.3					
131	鉄器	紡錘車	ほぼ完形	(14.6)	0.5	0.4	19.2		木板 径4.5 厚さ0.3 両端欠損		サ-15No.5
132	鉄器	8字リソ	完形	5.5	0.5	0.4	10.3				シ-15
133	鉄器	角釘	ほぼ完形	(4.3)	0.4	0.3	1.1		両端なし		ス-12
134	鉄器	角釘	ほぼ完形	(3.1)	0.4	0.3	1.8		先端なし		セ-11
135	鉄器	刀子	刃	(4.2)	1.6	0.2	3.2		両端なし		ソ-12
136	欠番										
137	銅	古銭	完形	2.45	2.45	0.1	2.9			元朝通宝 (1086)	エ-11
138	銅	古銭	完形	2.5	2.5	0.1	2.5			咸平元宝 (998)	カ-10
139	銅	古銭	完形	2.35	2.3	0.1	3.0			皇宋通宝 (1038)	サ-13
140	銅	古銭	完形	2.4	2.4	0.1	2.5			元豊通宝 (1078)	サ-15
141	銅	古銭	完形	2.45	2.45	0.15	3.8			元祐通宝 (1086)	サ-15No.1
142	銅	古銭	完形	2.45	2.45	0.1	3.2			至道元宝 (995)	セ-11
143	銅	古銭	完形	2.45	2.45	0.1	3.4			紹聖元宝 (1094)	ソ-10
144	石器	砥石		(7.7)	3.3	1.6	54.4		砥面3 片側欠損	流紋岩	オ-4
145	石器	砥石		10.7	6.6	5.7	438.3		タタキ2	安山岩	カ-9
146	石器	石磨		(1.6)	(1.3)	(0.30)	0.54		先端・左側・茎部欠損 正裏に装着痕あり 被熱なし	黒曜石	キ-2
147	石器	砥石		13.1	6.2	6.6	846.6		砥面3 磨痕あり	流紋岩	キ-4
148	石器	石磨		(1.7)	(1.1)	(0.2)	0.42		先端・両脚欠損 片面に欠損あり 被熱なし	黒曜石	キ-5
149	石器	砥石		(5.7)	4.6	0.7	27.8		砥面4 片側欠損	流紋岩	キ-11
150	石器	磨り石		11.4	8.8	3.3	341.5		磨面2	安山岩	ク-10
151	石器	凹石		14.3	13.8	6.2	477.1		凹面磨り	軽石	ク-13
152	石器	磨り石		(6.7)	5.7	3.7	51.6		磨面1	軽石	ケ-3
153	石器	剥片		3.9	3.0	1.7	14.15		被熱なし	黒曜石	シ-11
154	石器	石磨		(3.0)	(1.6)	0.35	1.43		左側欠損 被熱なし	黒曜石	シ-13
155	石器	軽石製品		13.8	10.1	9.9	536.6		穴内磨り 孔径1.0 深さ1.8	軽石	ス-13
156	石器	凹石		9.4	6.7	4.8	78.2		凹面磨り 全体に磨面あり	軽石	セ-11

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法 量 (cm)			重量 (g)	成 形・調 整		備考	出土位置
				口径(実)	底径(実)	器高(実)		内 面	外 面		
157	欠品										
グ	158	石磨	門石				194.0		凹面磨り 片側欠損	軽石	I地区排土
リ	159	須恵器	壺	口縁	(25.8)	-	(4.9)	横ナデ	横ナデ	回転実測	Ⅱ-21
ッ	160	土師器	杯	口縁	(16.0)	-	(5.7)	ミガキ→黒色処理	横ナデ 口縁下部ヘラケズリ 墨書「物」?	回転実測	Ⅱ-12
ド	161	土師器	杯	底	-	(6.6)	(3.0)	横ナデ→黒色処理	横ナデ 底部手持ちヘラケズリ 墨書「𠄎」	回転実測	Ⅱ-12
	162	土師器	杯	1/4	(12.0)	-	(3.4)	横ナデ 暗文	口縁横ナデ 底部ヘラケズリ	回転実測	Ⅱ-13
	163	灰釉陶器	椀小皿	底	-	(7.0)	(1.6)	横ナデ 施釉	高台貼付 横ナデ 施釉	回転実測	Ⅱ-14
	164	須恵器	高台付杯	底	-	(10.4)	(1.5)	横ナデ	高台貼付 横ナデ	回転実測	Ⅱ-14
	165	須恵器	杯	底	-	7.8	(1.3)	横ナデ	底部回転ヘラケズリ	完全実測	Ⅱ-14
	166	縄文	鉢	口縁	-	-	-	ミガキ	ミガキ	断面実測 5本 加群形式(縄文中期)	Ⅱ-14
	167	縄文	鉢	胴	-	-	-	上部ミガキ 下部ナデ	渦巻き突帯 刺突文 縄文	断面実測 5本 加群形式(縄文中期)	Ⅱ-14
	168	須恵器	壺	口縁	(8.8)	-	(5.0)	横ナデ 自然輪付着	横ナデ 自然輪付着	回転実測	Ⅱ-16
	169	土師器	鉢	口縁	(7.0)	-	(5.0)	口縁横ナデ 胴部ナデ→ミガキ→黒色処理	口縁横ナデ ヘラケズリ	回転実測	Ⅱ-13
	170	須恵器	高台付杯	底	-	(9.6)	(2.8)	横ナデ	高台貼付 横ナデ	回転実測	Ⅱ-13
	171	土師器	杯	1/6	(11.8)	丸底	(3.4)	横ナデ	底部ヘラケズリ→口縁横ナデ	回転実測	Ⅱ-25
	172	須恵器	杯身	1/5	(9.0)	丸底	(2.9)	横ナデ	底部ヘラケズリ→横ナデ	回転実測	Ⅱ-13
	173	須恵器	壺	口縁	(23.6)	-	(7.5)	横ナデ 自然輪付着	横ナデ	回転実測	Ⅱ-13
	174	土師器	鉢	口縁	(20.0)	-	(5.8)	ミガキ→黒色処理	口縁横ナデ→ミガキ	回転実測	Ⅱ-13
	175	灰釉陶器	椀	底	-	(7.6)	(2.7)	横ナデ→施釉	高台貼付 横ナデ 施釉	回転実測	Ⅱ-13
	176	須恵器	鉢	底	-	(12.0)	(5.1)	横ナデ	横ナデ 底部ヘラナデ 自然輪付着	回転実測	Ⅱ-14
	177	土師器	杯	1/3	(14.0)	丸底	4.3	横ナデ→ミガキ	横ナデ 底部ヘラケズリ	回転実測	Ⅱ-16
	178	土師器	台付壺	底1/4	-	(10.0)	(4.0)	ナデ→ミガキ	脚貼付 ヘラケズリ	回転実測	Ⅱ-16
	179	縄文	深鉢	胴	-	-	-	ミガキ	沈線 縄文 (RL)	断面実測 拓本	Ⅱ-14
	180	須恵器	杯身	口縁	(11.4)	-	(2.7)	横ナデ	横ナデ 自然輪付着	回転実測	Ⅱ-20・21
	181	須恵器	杯蓋	口縁	(16.0)	-	(1.4)	横ナデ	横ナデ	回転実測 かえりあり	Ⅱ-20・21
	182	須恵器	杯	底	-	(7.6)	(3.0)	横ナデ	横ナデ 底部回転ヘラ切り→ヘラナデ	回転実測	Ⅱ-20・21
	183	須恵器	杯	1/3	(14.0)	6.3	3.7	横ナデ	ロクロナデ 底部回転糸切り	回転実測 火摩あり	Ⅱ-20・21
	184	須恵器	杯	3/4	13.6	7.5	3.6	横ナデ	横ナデ 底部回転糸切り	完全実測 火摩あり	Ⅱ-20・21
	185	土師器	土板	完整	8.7	8.4	1.0	ミガキ→黒色処理	ミガキ	完全実測 土師鉢の転用品	Ⅱ-20・21
	186	土師器	杯	口縁	-	-	-	ミガキ→黒色処理	横ナデ 墨書(判読不明)	破片実測	Ⅱ-21
	187	須恵器	高杯	脚	-	-	(7.1)	横ナデ	横ナデ 磨耗	完全実測	Ⅱ-17・20、Ⅱ-19
	188	須恵器	高杯	脚か	-	-	(1.8)	横ナデ	横ナデ	回転実測	Ⅱ-17・20
	189	須恵器	杯身	口縁	9.9	丸底	4.2	横ナデ	横ナデ 底部回転ヘラケズリ ヘラ記号(平行線2本)	完全実測	Ⅱ-20
	190	須恵器	壺	口縁	(10.8)	-	(3.7)	横ナデ	横ナデ 自然輪付着	回転実測	Ⅱ-23
	191	須恵器	壺	口縁	(15.0)	-	(4.0)	横ナデ	横ナデ 胴部タキ目→口縁横ナデ	回転実測	Ⅱ-24
	192	土師器	杯	底	-	6.6	(3.3)	横ナデ	横ナデ 底部回転糸切り	完全実測	Ⅱ-24
	193	土師器	椀	1/2	(15.0)	(8.0)	5.5	ミガキ→黒色処理	底部回転糸切り→高台貼付	完全実測	Ⅱ-24
	194	土師器	壺	口縁	(13.8)	-	(3.1)	口縁ヘラケズリ→ミガキ 胴部ヘラケズリ	口縁横ナデ ヘラケズリ	回転実測	Ⅱ-19・20

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			重量 (g)	成形・調整		備考	出土位置	
				口径(内)	底径(内)	器高(内)		内面	外面			
195	須恵器	蓋	1/4	(10.0)	-	(1.5)		横ナデ	横ナデ 自然釉付着	回転実測	ノ-23	
196	須恵器	蓋	3/4	(16.0)	7.4	2.5		横ナデ	天井部回転ヘラケズリ 口縁横ナデ	完全実測	ハ-23	
197	須恵器	蓋	1/2	(9.8)	(5.0)	3.1		横ナデ	天井部回転ヘラケズリ 口縁横ナデ ヘラ記号「」	回転実測 拓本	ハ-23	
198	土師器	甕	口縁	(16.0)	-	(3.9)		横ナデ	ヘラケズリ+ミガキ	回転実測	ハ〜フ 22	
199	須恵器	壺	口縁	-	-	-		横ナデ	口縁横ナデ 胴部タタキ	断面実測 拓本	ヒ-23	
200	土師器	杯	1/2	(13.4)	6.6	4.8		横ナデ	口縁横ナデ 底部回転糸切りナデ	完全実測	フ-21	
201	鉄器	紡錘車	円板付足	(4.0)	0.6	0.5	16.1		円板 径4.6 厚さ0.3 軸両端欠損		シ-14	
202-1	鉄器	刀子	刃・茎	(8.0)	0.9	0.2	6.8		両端欠損		ネ-13	
202-2	鉄器	刀子	茎	(5.0)	0.7	0.2	2.6		刃部欠損		ネ-13	
203	鉄器	角釘	身	(4.6)	0.4	0.4	2.6		頭部欠損		ヌ-21	
204	鉄器	角釘	臼形冠部	(2.9)	0.3	0.2	0.8		先端欠損		ネ-24	
205	鉄器	紡錘車	軸先	(4.6)	0.5	0.4	3.5		端部環状		ハ・ヒ 20	
206	銅	古銭	完形	2.2	2.2	0.1	3.3			古銭(明治十四年)	ネ-14	
207	銅	古銭	3/4	2.4	(2.2)	0.1	1.6			寛永通宝(江戸時代)	ネ-23	
208	銅	古銭	1/2	(2.1)	(1.5)	0.1	1.5			○宋通○「崇寧通宝」(1038)	ヒ-23	
209	石器	磨石未成品		3.0	1.2	1.1	4.9			滑石	ヌ-10	
210	石器	砥石		(6.4)	(5.5)	(2.7)	116.7		砥面4 両端・片面欠損		ヌ-13	
211	石器	磨・砥石		12.2	6.5	4.5	554.2		磨面4 タタキ3 1孔径0.9 深さ0.3		ヌ-19	
212	石器	砥石片		(7.1)	(7.6)	(0.9)	46.5		砥面1		ヌ-21	
213	石器	碁石		2.1	2.1	0.4	3.1		全面に磨り		ヌ-23	
214	石器	碁石		2.1	2.1	0.2	1.6		両面割れ		ネ-24	
215	石器	割片		5.6	4.5	1.1	24.5			黒色緻密安山岩	ネ-15	
216	石器	凹石		10.9	8.9	5.0	271.6		凹面磨り		軽石	ネ-15
217	石器	凹石		15.3	11.2	5.4	683.8		裏面タタキ1 凹面磨り		軽石	ヒ-15
218	石器	丸玉石		1.3	1.1	0.8	2.0		全面に磨り		チャート	ヒ-25
219	須恵器	高台付杯	口縁	(12.8)	-	(3.0)		横ナデ	横ナデ	回転実測 高台欠損	ル-44	
220	須恵器	杯	底	-	7.3	(1.3)		横ナデ	底部ヘラナデ 刻痕「夫」	完全実測 拓本	第Ⅱ地区	
221	鉄器	鏝	臼形冠部	(7.8)	(3.0)	0.4	15.8		柳刃端部欠損		リ-41	
222	鉄器	鏝	臼形冠部	14.2	0.6	0.5	13.4				リ-41	
223	鉄器	扇形金具	完形	6.6	2.5	0.2	11.0				リ-46	
224	鉄器	止金具	上	(4.7)	1.6	0.2	4.8		両端部欠損		ル-41	
225	鉄器	角釘	完形	8.2	0.5	0.4	8.3				ル-43	
226	青銅	鈴	臼形冠部	3.6	2.8	2.6	9.7		つまみ付		ル-43	
227	鉄器	角軸		(3.0)	0.5	0.4	2.3				レ-46	
228	鉄洋			10.0	6.0	3.5	237.9				第Ⅲ地区溝	
229	銅	古銭	1/2	(2.0)	(1.8)	0.1	1.9			開○通○「開元通宝」(621)	ラ-42	
230	銅	古銭	完形	2.7	2.7	0.1	3.8			文久永宝(江戸時代)	ラ-43	
231	鉄	古銭	完形	2.55	2.5	0.15	2.9			○通○	リ-45	

() は推定値 () は残存値

遺構番号	種類	器種	部位	法 量 (cm)			重量 (g)	成 形・調 整		備考	出土位置	
				口径(実)	底径(実)	器高(実)		内 面	外 面			
グリッド	232	石器	磨り石	11.0	2.5	2.2	135.5		磨面1	安山岩	リ-42	
	233	石器	打製石所	10.3	5.9	2.3	184.1			安山岩	リ-43	
	234	石器	磨り石	5.5	4.7	2.4	80.4		磨面1 磨痕あり 両端欠損	黒色緻密安山岩	ヨ-42	
	235	石器	凹石	10.5	9.0	4.7	146.8		凹面磨り	輝石	ヨ-43	
	236	灰釉陶器	椀	底	-	(7.0)	(1.8)		横ナデ→施軸	高台貼付→横ナデ→施軸	回転実測	ロ-48
	237	灰釉陶器	椀	底	-	(7.8)	(3.5)		横ナデ→施軸	高台貼付→横ナデ→施軸	回転実測	表採
	238	須恵器	小壺	底	-	(6.6)	(2.1)		横ナデ	高台貼付→横ナデ	回転実測	表採
	239	鉄器	紡錘車	軸	26.0	0.5	0.4	25.4		円板 軸先端欠損		表採
	240	鉄器	細小鎌	-	(7.0)	5.0	0.3	55.5				表採
	241	鉄器	角軸	先端	(3.4)	0.7	0.5	4.5				表採
	242	鉄器	鎌	刃	(5.3)	4.0	0.2	11.0		両端欠損		表採
	243	鉄器	刀子	刃	(6.3)	1.8	0.2	10.9		両端欠損		表採
	244	土製品	土鎌	ほぼ完全	(3.6)	1.6	1.6	8.9		ミガキ 孔径0.4 片側欠損		ソ-14
	245	土製品	紡錘車	完形	4.0	3.8	1.4	19.8		ミガキ 孔径0.4		ヨ-44No.9
	付属34	骨	人?	頭蓋骨	(2.7)	(2.2)	(0.4)			他24片		ソ-12・13
	付属35	骨	人	歯	1.1	1.0	(1.1)			他7片		タ-12
	付属36	骨	人	頭蓋骨	(3.1)	(2.1)	(1.3)			他20片		タ-12
	付属37	骨	哺乳類	不可	(5.9)	(3.3)	(1.2)					タ-11
	付属38	骨	イノシシ/シカ	腰椎	(2.9)	(1.9)	(1.2)					タ-23
	付属39	骨	マダロ属	尾椎	(3.9)	(3.5)	(3.6)					リ-42
	付属40	骨	哺乳類	不可	(3.1)	(2.8)	(2.0)					リ-43
	付属41	骨	ウマ/ウシ	胸骨?	(6.0)	(3.4)	(3.1)			他1片		ラ-45
	付属42	骨	哺乳類	不可	(6.2)	(2.6)	(2.4)			他1片		據土
M6	付属17	骨	ウマ	中足骨	23.8	3.8	3.2				No.1	
	付属18	骨	ウマ	下顎面	(7.3)	(2.9)	(1.5)				No.2	
	付属19	骨	ウマ	距骨	(5.2)	(4.8)	(3.3)			他1片	No.2	
	付属20	骨	ウマ	***	(6.3)	(4.0)	(2.5)			他2片	No.3	
	付属21	骨	ウマ	横骨	(11.7)	(2.1)	(2.2)			他16片	No.4	
	付属22	骨	ウマ	下顎面	(6.0)	2.7	(1.7)			他7片	No.5	
	付属23	骨	ウマ	下顎面	(5.9)	(3.5)	(1.0)			他7片	No.5	
	付属24	骨	ウマ	中手骨	(12.1)	(3.4)	(2.3)			他8片	No.6	
	付属25	骨	ウマ	横骨	(18.5)	(3.9)	(2.9)			他3片	No.7	
	付属26	骨	ウマ	中足骨	(12.2)	(2.7)	(1.6)			他2片	No.8	
	付属27	骨	ウマ/ウシ	四肢骨	(7.1)	(2.1)	(1.2)			他10片	No.10	
	付属28	骨	ウマ	上腕骨	(7.7)	(4.9)	(3.9)			他5片	No.18	
	付属29	骨	ウマ	上顎面	(3.1)	(2.5)	(1.9)			他10片		
M7	付属30	骨	哺乳類	不可	(2.9)	(1.6)	(1.3)			他11片	骨1	
	付属31	骨	哺乳類	不可	(1.7)	(1.3)	(0.4)			他7片	骨2	
M8	付属32	骨	ウマ	上顎面	(6.7)	(2.6)	(2.7)				No.1	

第3-2表 中世・近世遺物一覧表

() は推定値 () は残存値

番号	種類	器種	部位	法 量 (cm)			成 形・調 整		産地	時代	備考	出土位置
				口径(長)	底径(幅)	高さ(厚)	内 面	外 面				
1	陶器	重小甕	胴	-	-	-	ロクロナデ 自然輪付着	ロクロナデ 自然輪付着	常滑	中世	断面実測 写真	H5
2	陶器	灰釉灯明具	口縁	(8.0)	-	(0.9)	ロクロナデ→施釉	ロクロナデ	瀬戸・美濃	近世	回転実測	H5
3	陶器	踏輪鉢	底	-	-	-	ロクロナデ→施釉	ロクロナデ	瀬戸・美濃	近世	断面実測 写真	H5
4	陶器	陶板		4.0	3.9	1.3	横ナデ	ナデ	常滑	中世	破片実測 裏か重割部の二次利用	H11
5	釉陶	腰踏輪	底	-	(5.2)	(1.7)	施釉	高台貼付	瀬戸・美濃	近世末	回転実測	H15
6	陶器	灰輪鉢	口縁	-	-	-	施釉	施釉	瀬戸・美濃	近世	断面実測 写真	H20
7	磁器	染付陶輪軸	口縁	-	-	-	施釉	施釉	平戸	18C後半	断面実測 写真	H20
8	仏器	杓	底	-	3.3	(1.2)	施釉	ロクロナデ→高台貼付		近世	完全実測 蛇の目高台	H21
9	陶器	踏輪鉢鉢	口縁	-	-	-	すり目を刻む→施釉	ナデ→施釉	在地	幕末	断面実測 拓本	P186
10	瓦貫	踏鉢	底	-	-	-	すり目を刻む 磨耗	磨滅	北関東	15～16C	断面実測 拓本	H39
11	陶器	段天日茶碗	口縁	-	-	-	施釉	施釉	瀬戸・美濃	17C	断面実測 写真	H43
12	陶器	鉄輪軸	底	-	(5.4)	(2.6)	施釉	ロクロナデ→高台貼付→施釉	瀬戸・美濃	17C	完全実測	H52
13	陶器	五郎戸煎茶子	胴	-	-	-	ナデ	縹織文→施釉	瀬戸	14C	断面実測 写真	M6
14	陶器	天目茶碗	口縁	-	-	-	施釉	施釉	瀬戸大室	16C前半	断面実測 写真	ウ～オ8・9
15	陶器	灰輪軸	底	-	(3.2)	(1.2)	施釉	ロクロナデ→高台貼付	瀬戸・美濃	近世末	完全実測	ウ～オ8・9
16	陶器	灰輪軸	底	-	(8.1)	(2.5)	ロクロナデ→施釉	ロクロナデ→高台貼付→施釉		K14	回転実測	ウ～オ8・9
17	山系陶器	掬鉢鉢	口縁	-	-	-	横ナデ	横ナデ 注ぎ口あり	尾張	13C	断面実測 写真	ウ～オ11
18	陶器	重小甕	胴	-	-	-	ナデ 自然輪付着	ナデ 自然輪付着	常滑	中世	断面実測 写真	ウ～ク10
19	磁器	青磁碗	口縁	-	-	-	施釉	施釉	龍泉窯	中世	断面実測 写真	ウ～ク10
20	磁器	白磁碗	底	-	-	-	施釉	施釉	中国	11C	断面実測 写真	ウ～ク10
21	陶器	甕	口縁	-	-	-	口縁横ナデ 胴部ナデ 自然輪付着	横ナデ 自然輪付着	常滑	13C	破片実測	エ10
22	土師瓦	内耳鍋	口縁	-	-	-	横ナデ→ミガキ	横ナデ	在地	15C	断面実測 写真	キ7
23	陶器	陶板		4.1	4.1	0.9	施釉	高台貼付	瀬戸・美濃	幕末	断面実測 写真 灰輪軸の転用	ク3
24	陶器	鉢	底	-	(8.7)	(2.1)	施釉	ロクロナデ→高台貼付	京都	18C末	回転実測	ク4
25	磁器	青磁花瓶	口縁	-	-	-	施釉	施釉	龍泉窯	中世	断面実測 写真	サ11
26	磁器	青磁碗	口縁	-	-	-	施釉	施釉	龍泉窯	13C	断面実測 写真	サ11
27	磁器	青磁透文文碗	口縁	(1.4)	-	(2.8)	施釉	逆弁文→施釉	龍泉窯	13C	回転実測	サ15
28	瓦貫	踏鉢	口縁	-	-	-	すり目	ナデ	北関東	15・16C	断面実測 拓本	シ11
29	土師瓦	かわらけ	口～底	(8.0)	(6.0)	1.3	ロクロナデ	ロクロナデ→糸切りか	在地	13C	回転実測	シ11
30	土師瓦	手經かわらけ	口～底	(9.0)	(7.4)	1.6	ロクロナデ 磨耗	ロクロナデ→ナデ 磨耗	在地	13C	回転実測	シ12
31	陶器	踏輪鉢鉢	口縁	(28.4)	-	(3.1)	ロクロナデ→施釉	ロクロナデ→施釉	川越石	19C	回転実測	シ13
32	陶器	灰釉器手輪	底	-	(4.4)	(2.3)	ロクロナデ→施釉	ロクロナデ→高台貼付→施釉	唐津	17C後半か 18C前半	回転実測	ス14
33	陶器	細釉灯明具	口～底	(12.4)	(5.4)	2.1	施釉	口縁横ナデ(炬目) 底部へラケズリ→口縁施釉	川越石	19C	回転実測	セ11
34	山系陶器	掬鉢鉢	口縁	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ 下部へラケズリ	東濃	13C	断面実測 写真	セ12
35	陶器	灰輪軸	底	-	2.8	(2.2)	施釉	ロクロナデ→高台貼付→施釉	瀬戸・美濃	18C	完全実測	セ12
36	陶器	踏輪鉢鉢	口縁	-	-	-	ロクロナデ→施釉	ロクロナデ→施釉	川越石	19C	断面実測 写真	ソ14

() は推定値 () は残存値

番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			成形・調整		産地	時代	備考	出土位置
				口径(奥)	底径(奥)	器高(奥)	内面	外面				
37	陶器	松葉茶碗	口～底	-	(3.8)	(2.2)	ロクロナデ→捺輪	ロクロナデ→高台貼付→捺輪 染付	京都	18C末～19C前半	回転実測	タ11
38	土師質	かわらけ	口～底	(6.6)	(3.4)	2.4	ロクロナデ 煤付着	ロクロナデ 底部糸切り 煤付着	在地	中世	回転実測	タ11
39	磁器	紅皿	口縁	(5.8)	-	(1.4)	捺輪	渦巻きの押型文→捺輪	肥前	18C末～19C前半	回転実測	ツ19
40	磁器	青磁碗	口縁	-	-	-	捺輪	捺輪	龍泉堂	15C前半	断面実測 写真	ツ20
41	陶器	緑釉輪文皿	底	-	(5.0)	(1.3)	捺輪 トチン痕あり	高台貼付→捺輪	唐津	18C前半	回転実測 写真	ヌ16
42	陶器	黄瀬戸鉢	口縁	-	-	-	柳目→捺輪	ロクロナデ→捺輪	瀬戸・美濃	17C	断面実測 写真	ヌ16
43	陶器	鉄輪鉢	口縁	-	-	-	捺輪	捺輪	?	近世	断面実測 写真	ヌ19
44	陶器	灰輪鉢	口縁	-	-	-	捺輪	捺輪	唐津	18C	断面実測 写真	ヌ21
45	山系陶系	程ね鉢	口縁	-	-	-	捺輪	捺輪	東濃	13C	断面実測 写真	ヌ23
46	陶器	古瀬戸灰輪平碗	口縁	-	-	-	捺輪	ロクロナデ→捺輪	瀬戸	15C後半	断面実測 写真	ネ13
47	陶器	古瀬戸灰輪縁輪小皿	口縁	-	-	-	ロクロナデ→捺輪	ロクロナデ→捺輪	瀬戸	15C後半	断面実測 写真	ネ14
48	土師質	内耳鍋	口縁内耳	-	-	(4.0)	ナデ	ナデ	在地	15,16C	破片実測	ネ23
49	瓦質	火鉢	口縁	-	-	-	横ナデ	押型文	在地	近世	断面実測 拓本	ネ23
50	陶器	志野丸皿	底	-	-	(1.2)	捺輪	高台貼付→捺輪	瀬戸・美濃	18C前半	回転実測	ノ12
51	磁器	染付鉢	口～底	(9.8)	(6.6)	-	捺輪	捺輪(錦唐草)	伊万里	18C末～19C前半	回転実測	ノ15
52	陶器	鉢	肩	-	-	-	横ナデ	ナデ 自然釉付着	常滑	13C後半	断面実測 写真	ノ15
53	陶器	古瀬戸鉢	底	(10.4)	(2.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ→底部・底部外周ヘラケズリ→腰貼付	瀬戸	15C後半	回転実測	ノ20
54	陶器	灰釉須手鉢	底	(4.0)	(3.3)	-	捺輪	捺輪	唐津	17C前半～18C前半	回転実測	ハ13
55	磁器	青磁碗	口縁	-	-	-	捺輪	捺輪	龍泉堂	中世	回転実測	ヒ13
56	土師質	かわらけ	底	(5.0)	(1.6)	-	ロクロナデ	ロクロナデ→底部糸切り	在地	中世	回転実測	ヒ13
57	磁器	青磁透文碗	口縁	-	-	-	捺輪	透弁→捺輪	龍泉堂	13C	破片実測	ヒ16
58	土師質	火鉢	口縁	-	-	-	横ナデ	横ナデ→沈線	在地	近世	断面実測 写真	ヒ22
59	陶器	火鉢	頸～肩	-	-	-	ナデ	横ナデ 柳描波状文 自然釉付着	在地	近世	断面実測 写真	ヒ23
60	土師質	かわらけ	口～底	(9.9)	(6.8)	2.3	横ナデ	横ナデ→底部回転糸切り	在地	15C後半	回転実測	ラ43
61	陶器	鉄輪碗	口縁	-	-	-	捺輪	捺輪	川越石	19C	断面実測 写真	ラ43
62	陶器	灰和こね鉢	口縁	-	-	-	捺輪	捺輪	川越石	19C	断面実測 写真	ラ43
63	土師質	内耳鍋	口縁	-	-	-	ナデ	ナデ	在地	中世	破片実測	リ42
64	陶器	緑釉片口鉢	底	(9.0)	(1.6)	-	捺輪	高台貼付→横ナデ	川越石	19C	回転実測	ル43
65	陶器	灰輪碗	底	(4.0)	(1.0)	-	捺輪	高台貼付→横ナデ	瀬戸・美濃	17C	完全実測	ル43
66	陶器	緑釉石須皿	口縁	(10.0)	-	(1.6)	捺輪	ロクロナデ→捺輪	川越石	19C	破片実測	ル49
67	磁器	青磁碗	口縁	-	-	-	捺輪	捺輪	龍泉堂	13C	断面実測 写真	レ46
68	磁器	青磁碗	底	-	-	-	捺輪	捺輪	龍泉堂	13C	断面実測 写真	レ43
69	山系陶系	陶板	完形	4.3	4.6	1.0	揉り目→捺輪	捺輪	川越石	19C	断面実測 拓本 捺鉢の転用	ヨ42
70	山系陶系	程ね鉢片口	口縁	-	-	-	横ナデ 自然釉付着	横ナデ	尾張	13C後半	断面実測 写真	表探
71	土師質	かわらけ	球冠完形	7.6	5.3	1.9	横ナデ	横ナデ→底部回転糸切り	在地	15C後半	完全実測	溝伏遺構

付編

上の城遺跡から出土した動物遺体

植月 学 (山梨県立博物館)

はじめに

本稿では佐久市上の城遺跡から出土した動物遺体について報告する。調査では古墳時代後期~平安時代の住居址や中世の溝跡よりウマを中心とした動物遺体が出土している。

資料と方法

標本は風化が進み、全般に遺存状態は不良である。すべて調査時の肉眼採取資料である。点数が少なかったことからすべての標本を対象とし、動物骨という以上に同定ができなかった標本も掲載した。同定は現生標本との比較によりおこなった。計測はDriesch (1976) に従った。ウマの体高推定は林田・山内 (1957) のⅢ式により、歯冠高による年齢推定は西中川・松元(1991)によった。ウマの歯冠高は頰側、中心、舌側で計測したが、年齢推定には中心の計測値を用いた。

結果

魚類1、哺乳類4種が同定された(表)。主体となるのはウマで、その他の種は少ない。また、ヒトとマクロ属はグリッドからの出土で、時期は不明である。特にマクロ属は他の標本に比べてやや保存状態が良く、年代については注意を要する。

遺構ごとの出土傾向を見る。古墳後期の3軒の住居址(H1、H32、H38)からはウマ/ウシ、シカの2種が検出されたのみである。奈良時代のH8からは1個体分と推測されるウマ幼獣の歯が出土している。平安時代住居址2軒(H27、H33)からも獣骨が出土しているが、いずれも同定不能な破片であった。

ピットでは奈良時代のP26からウシが、古代のP191からはシカが出土している。平安時代の土坑(D20)は焼骨片のみが出土する特異なあり方を示す。火葬骨の可能性もあるが、いずれも小破片のため、ヒトかイノシシ、シカなど大型獣かの区別は困難である。

動物遺体がかつともまとまって出土した遺構は中世の溝(M6)である。ウマの頭部、前肢、後肢の各部位が出土している。歯冠高による年齢推定からは5歳前後、13歳前後の個体と、乳臼歯と第1後臼歯(未萌出?)のみの幼獣の最低3個体が識別できる。ただし、幼獣については近接するH8の個体と同一個体の流れ込みの可能性もある。他にも橈骨は左右でかなり太さが異なるので、最低2個体分が確認できることになる。完存する中足骨から推定される体高は約118cmと小型である。M8からも上顎前臼歯が出土しているが、年齢は6.5歳以下としかわからないので、M6の若齢個体との異同は不明である。

ヒトは歯種の同定が未了だが、いずれも咬耗がほとんど見られないことから若齢の個体と推定される。すべて歯根を欠くが、これも歯根の形成が未発達なことによるものかもしれない。

まとめ

本遺跡から出土した動物遺体はウマを主体とし、シカ、ウシを若干含む。

シカは古墳時代後期、ウマ、ウシは奈良時代以降の出土である。

奈良時代のウマは幼獣であり、本遺跡周辺における馬の生産を示唆する。

中世の溝からまとまって出土したウマは最低2個体分で、若齢（約5歳）と壮齢（約13歳）が含まれる。体高が小型（約118cm）の個体が1個体含まれる。

他にヒト、マグロが出土しているが、年代は不明である。

引用文献

西中川 駿・松元光春 1991 「遺跡出土骨同定のための基礎的研究—とくに在来種および現代種の骨、歯の計測値の比較」『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』科学研究費成果報告書 164-188頁

林田重幸・山内忠平 1957 「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』6 146-156頁

Dreisch, A. von den. 1976 A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites. Bulletin No.1. Peabody Museum, Harvard University, Massachusetts.

写真キャプション

1. マグロ属尾椎 (39) ヒト[2. ヒト左錐体 (36) 3. 歯 (35)] ウマ[4. 下顎右P3~M3 (22) 5. 上顎右dm321, 左dm23M1 (3,4,29.上:咬合面.下:舌側) 6. 上腕骨右 (28)
7. 基節骨 8. 中節骨 (20) 9. 橈骨左 (21) 10. 橈骨右 (25) 11. 中手骨右 (24)
12. 中足骨右 (17) 13. 距骨右 (19)] 14. ウシ臼歯 (9) シカ[15. 脛骨右 (10) 16. 中足骨左 (8) 17. イノシシ/シカ腰椎 (38) スケールは5cm. () 内は整理番号

表1 出土動物遺体一覧表

遺構	時期	整理 No.	枝 番	No.	種	部位	位置	左右	数	計測	備考	
H1	古墳 後期	1	-	No.1	ウマ/ ウシ	四肢骨	破片	?	1		脛骨?	
		2	-	No.4	哺乳類	不可	破片	?	+			
H8	奈良	3	-	No.7	ウマ	上顎歯	dm3	左	1	L32.0, HC24	幼齡, No.4と同個, 他にM1?破片あり	
		4	a	-	ウマ	上顎歯	dm2M1	左	2	dm2 HC.21	幼齡, No.3と同個	
		4	b	-	ウマ	上顎歯	dm23	右	2	dm2 L31.6/HC.22	幼齡, No.3と同個	
H27	平安	5	-	-	哺乳類	不可	破片	?	2	dm3 L32.6/B20.6/HC.23	焼け	
H32	古墳 後期	6	-	-	哺乳類	不可	破片	?	+			
H33	平安	7	-	-	哺乳類	不可	破片	?	+			
H38	古墳 後期	8	-	No.17	シカ	中足骨	近位部一連位部	左	1		地点不明	
P26	奈良	9	-	-	ウシ	臼歯	破片	?	+			
P191	古代	10	-	-	シカ	脛骨	骨幹部	右	1			
D20	平安	11	-	焼骨1	哺乳類	不可	破片	?	1		焼け	
		12	-	焼骨2	?	不可	破片	?	2		焼け	
		13	-	焼骨3	哺乳類	不可	破片	?	1		焼け	
		14	-	焼骨4	?	不可	破片	?	1		焼け	
		15	-	焼骨5	?	不可	破片	?	1		焼け	
		16	-	焼骨	哺乳類	不可	破片	?	1		焼け	
M6	中世	17	-	No.1	ウマ	中足骨	完存	右	1	QL-237.3, Bd38.4, SD:25.2	18未重合(0.0) 推定体高118.1cm	
		18	-	No.2	ウマ	下顎歯	P3/4	左	1	L29.0±, HC:59, HL:59	4.8~5.4歳	
		19	-	No.2	ウマ	距骨		右	1	G-M9.1		
		20	a	-	No.3	ウマ	基節骨		?	1	QL.63.7+	
		20	b	-	No.3	ウマ	中跗骨		?	1		
		21	-	No.4	ウマ	燒骨	近位部一連位部	左	1	SD:27.9±	若齡	
		22	-	No.5	ウマ	下顎歯	IP34M123	右	6	P3 L24.8/B:14.7, HL:20/HC.21/H:21 P4 L25.6/B:15.0, HL:26/HC.28/H:30 M1 L22.8/B:14.2, HL:29/HC.32/H:36 M2 L25.2/B:13.6, HL:31/HC.34/H:34 M3 L30.0/B:11.6, HL:34/HC.34/H:32	推定約13歳	
		23	-	No.5	ウマ	下顎骨	破片	?	1		下顎体	
		24	-	No.6	ウマ	中手骨	近位部一連位部	右	1	SD:30.6±		
		25	-	No.7	ウマ	燒骨	近位部一連位部	右	1	SD:32.6		
		26	-	No.8	ウマ	中足骨	近位部一連位部	左	1	SD:25.3±		
27	-	No.10	ウマ/ ウシ	四肢骨	破片	?	1					
28	-	No.18	ウマ	上腕骨	遠位端	右	1					
29	-	-	ウマ	上顎歯	dm1	右	1	HC.23	幼齡, No.3.4と同個 僅か(遺構近接)			
M7	中世	30	-	骨-1	哺乳類	不可	破片	?	+			
		31	-	骨-2	哺乳類	不可	破片	?	+			
M8	中世	32	-	No.1	ウマ	上顎歯	P3/4	左	1	L27.4, HC52+	約6.5歳以下	
エ9グ リッド	-	33	-	-	哺乳類	不可	破片	?	1		焼け 焼成域 灰層下部出土	
ソウ-13 グリッド	-	34	-	-	ヒト?	頭蓋骨	破片	?	+			
タ12グ リッド	-	35	-	-	ヒト	歯	I3.C.1P-1M3	?	8		未咬耗	
タ12グ リッド	-	36	-	-	ヒト	頭蓋骨	錐体	左	1			
ヌ11グ リッド	-	37	-	-	哺乳類	不可	破片	?	1		イノシシ/シカ大	
ヌ23グ リッド	-	38	-	-	イノシシ /シカ	腰椎	後関節突起	-	1			
リ42グ リッド	-	39	-	-	マゴロ属	尾椎	錐体	-	1	横径:38.5, 長:33.7		
リ43グ リッド	-	40	-	-	哺乳類	不可	破片	?	1			
ラ45グ リッド	-	41	-	-	ウマ/ ウシ	胸骨?		?	1			
排土	-	42	-	-	哺乳類	不可	破片	?	2			

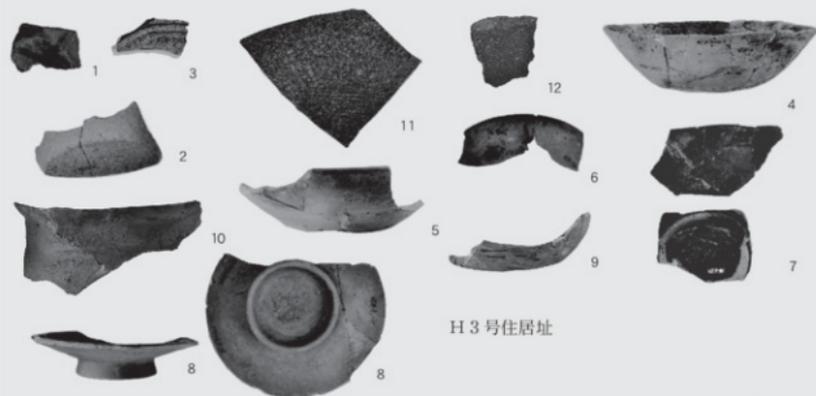
凡例: C: 犬歯, dm: 乳臼歯, I: 切歯, P: 前臼歯, M: 後臼歯

計測 B: 歯冠幅, Bd: 遠位端幅, QL: 全長, HL: 舌側歯冠高, HC: 中央歯冠高, Hb: 頬側歯冠高, L: 歯冠長, SD: 骨幹最小幅





H1号住居址



H3号住居址

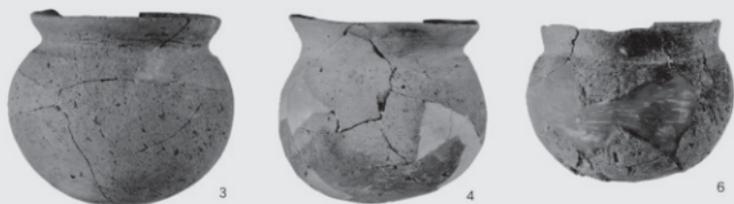


H4号住居址(1) (23~27は1:2)

32







H12号住居址 (2)



H13号住居址



H14号住居址



H15号住居址



H17号住居址



H20号住居址



18



1



2



3



H16号住居址



4



7



1



2



3



4



5



6



7



17



8



9



13



10



16



15



11



12

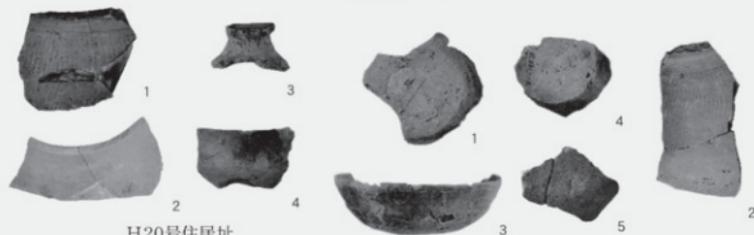


19

H18号住居址(1)

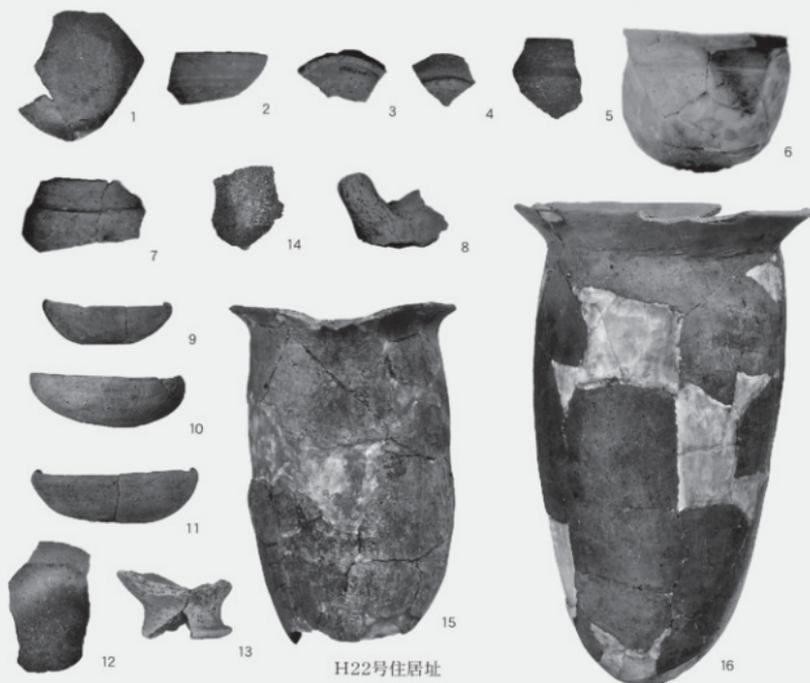


H18号住居址 (2)

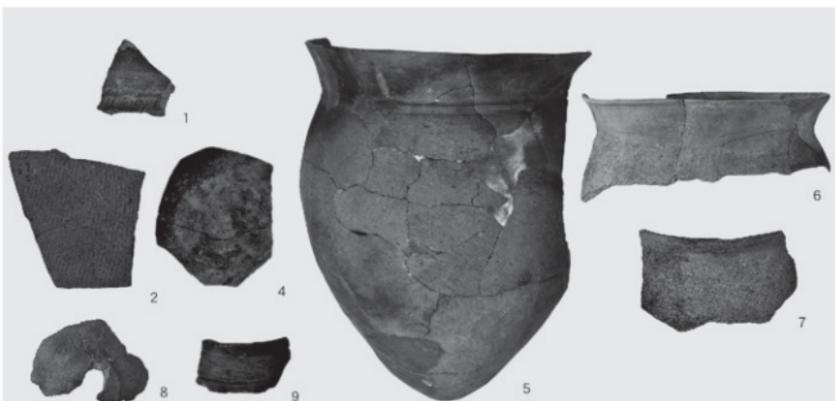


H20号住居址

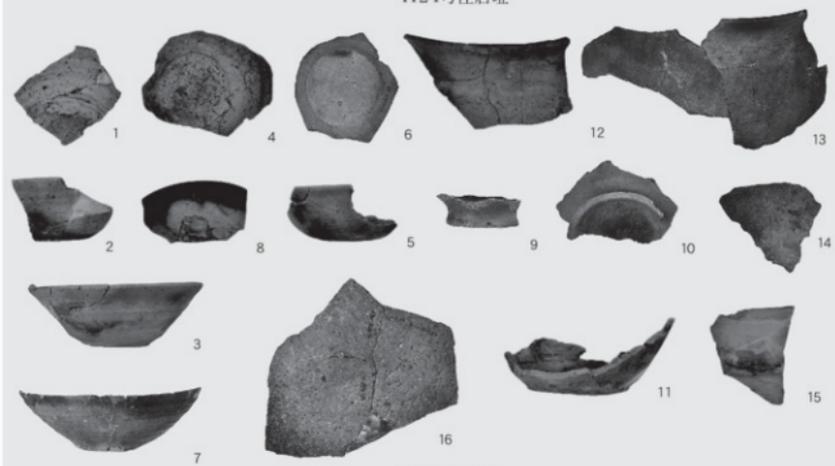
H21号住居址



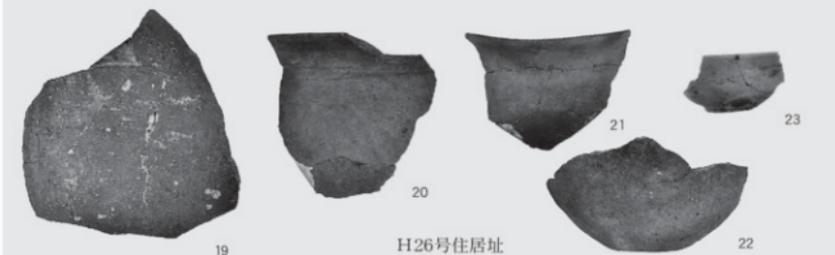
H22号住居址



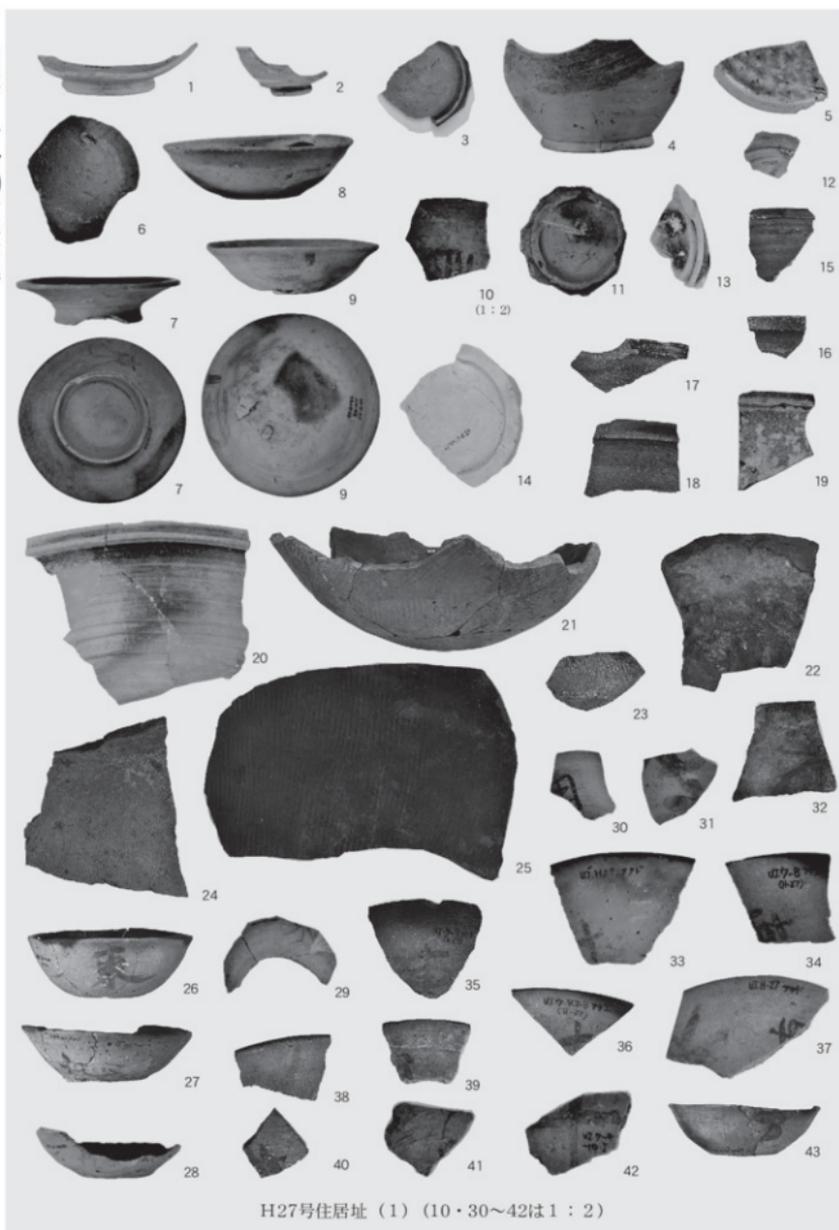
H24号住居址



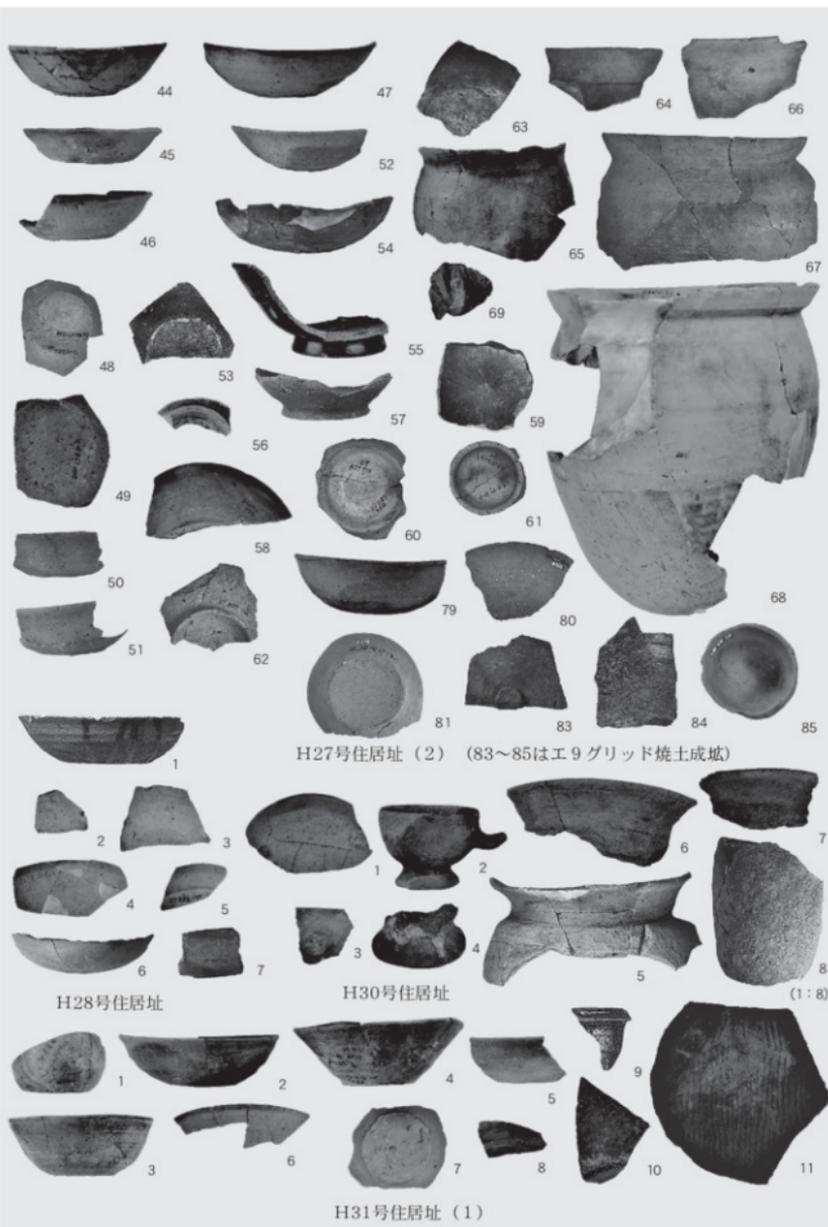
H25号住居址



H26号住居址

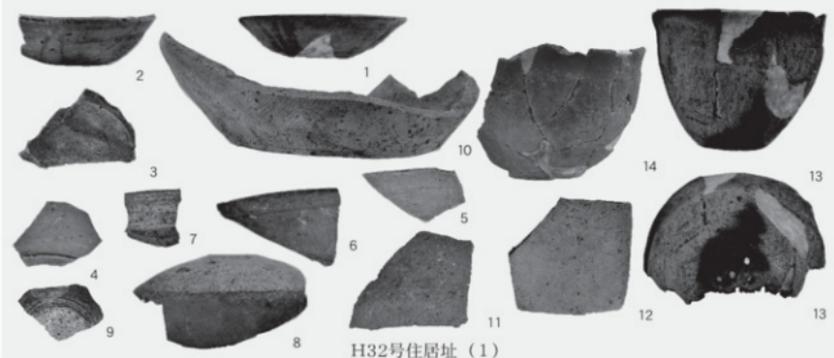


H27号住居址 (1) (10・30~42は1:2)

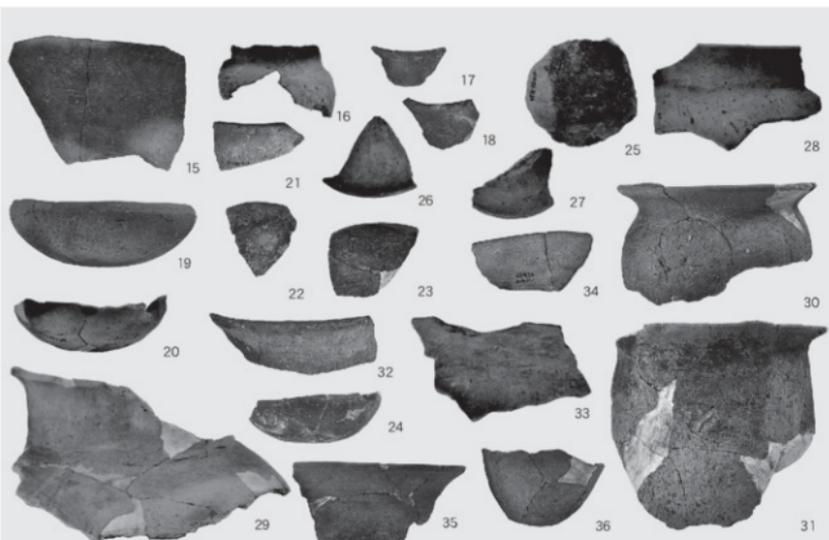




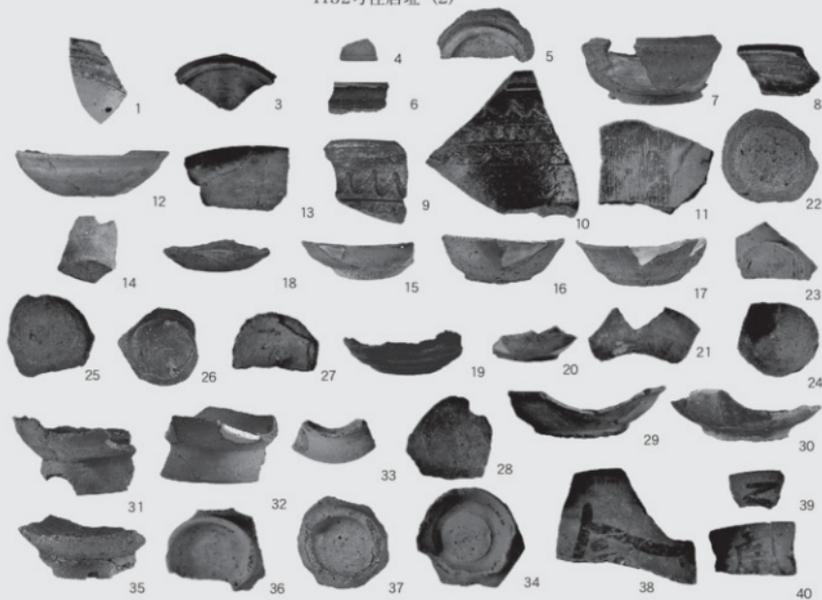
H31号住居址 (2) (31~33は1:2)



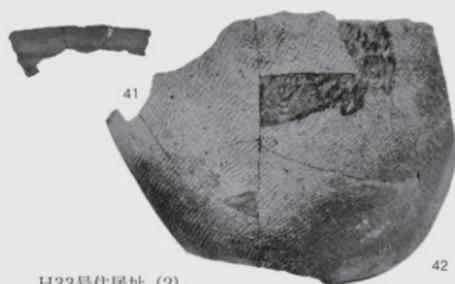
H32号住居址 (1)



H32号住居址 (2)



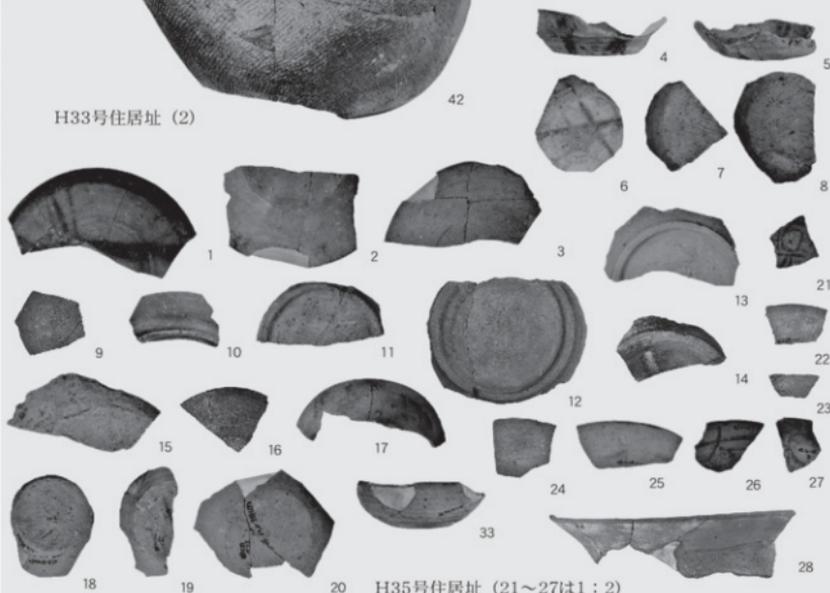
H33号住居址 (1) (38~40は1:2)



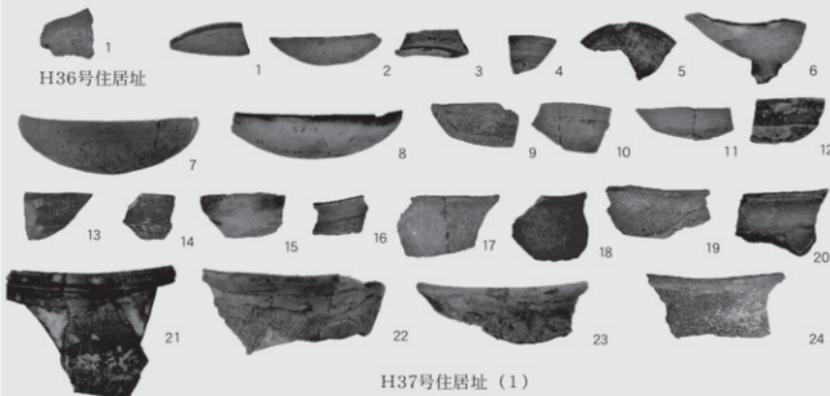
H33号住居址 (2)



H34号住居址

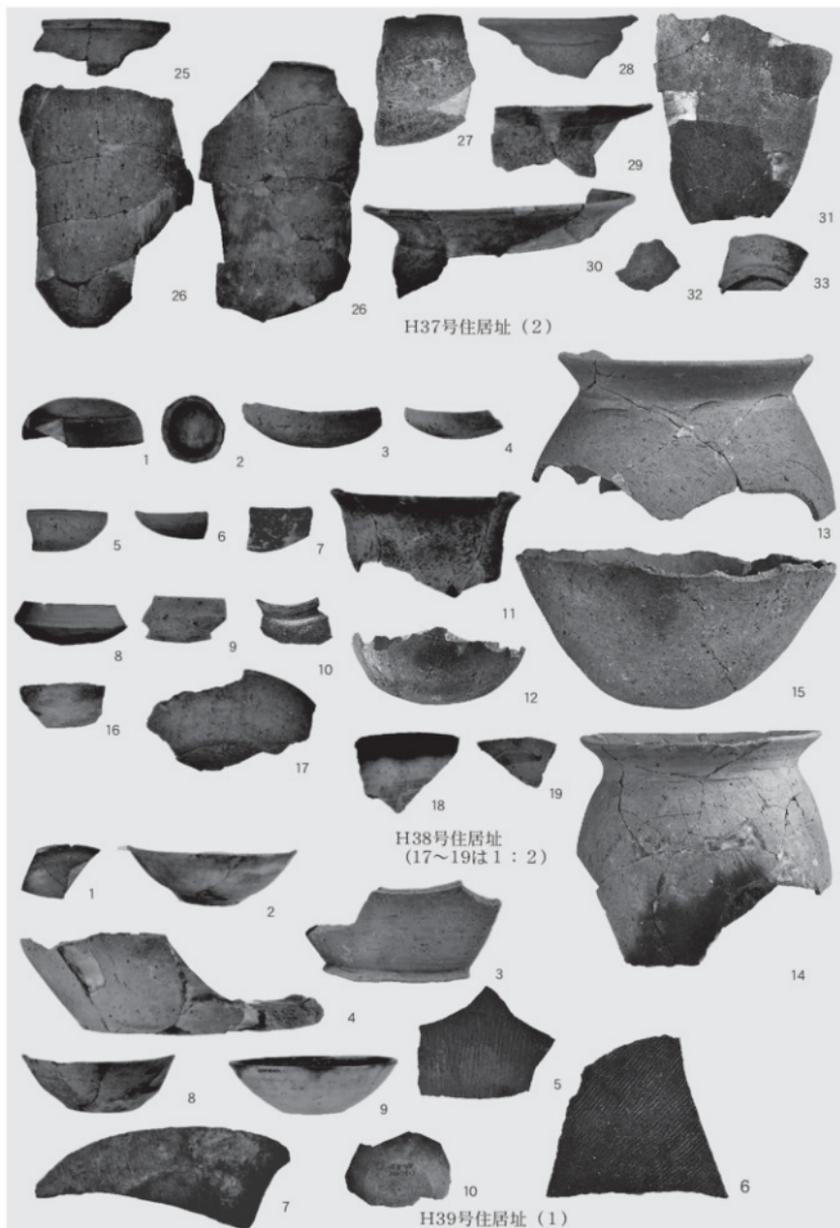


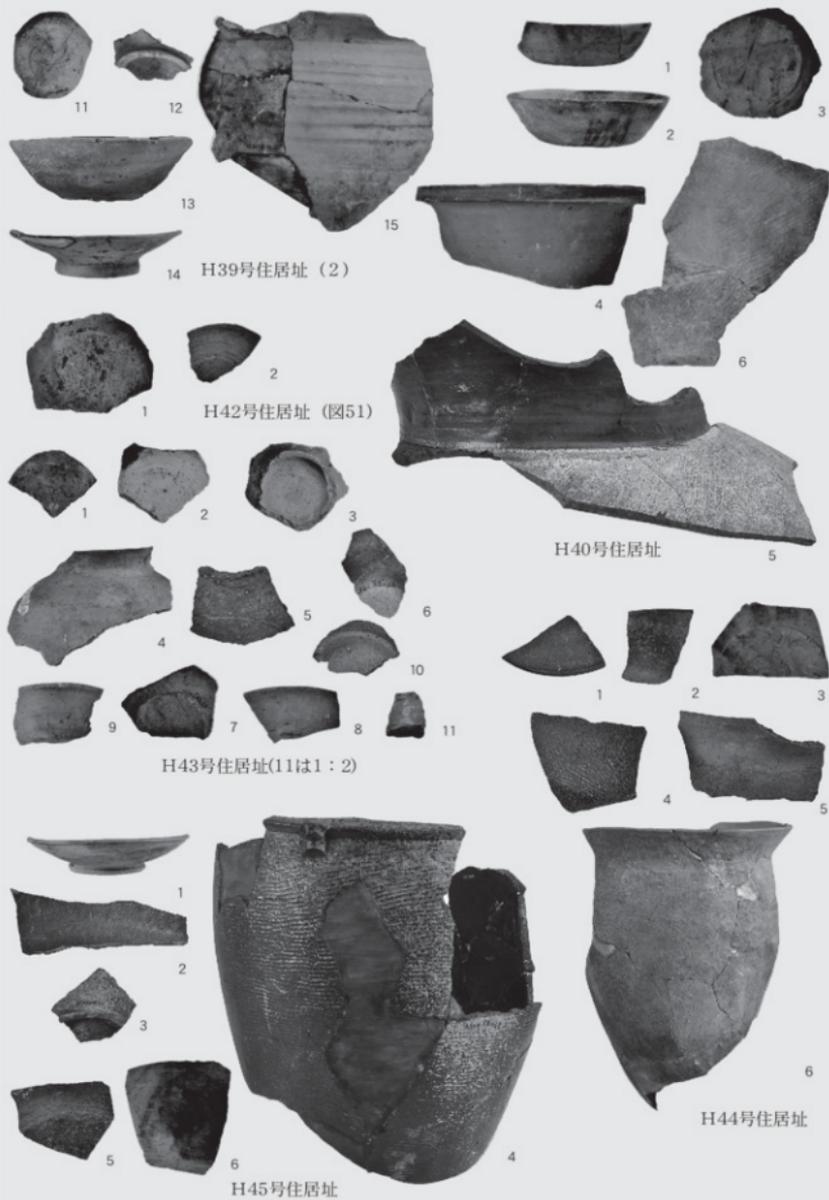
H35号住居址 (21~27は1:2)

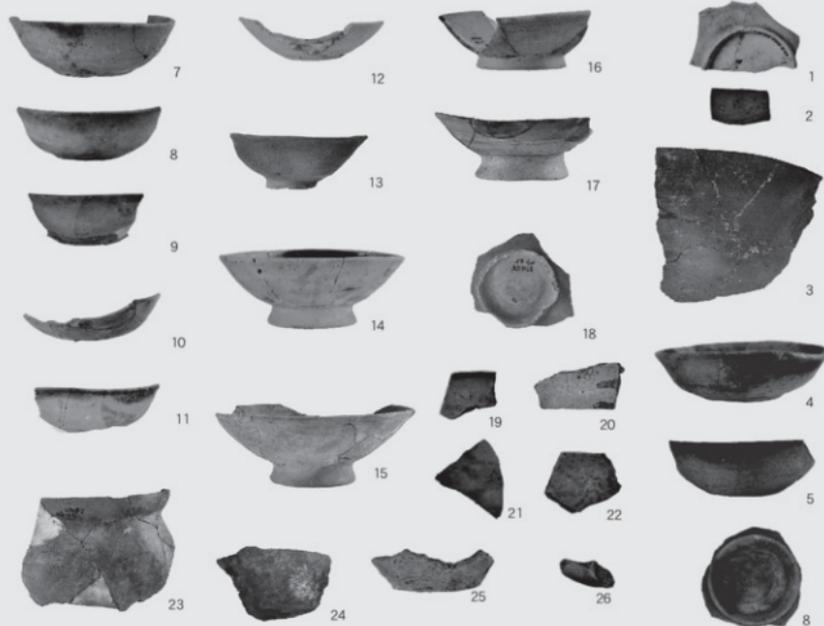


H36号住居址

H37号住居址 (1)







H45号住居址(2) (19~22は1:2)

H46号住居址(1)



H47号住居址

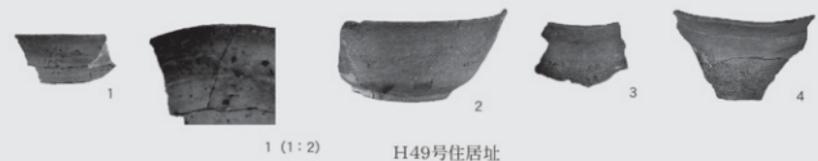
H46号住居址(2)
(12・13は1:2)



H47号住居址 (2)



H48号住居址



1 (1:2)

H49号住居址





H52号住居址 (2)



H53号住居址



F 1号掘立柱建物址



F 3号掘立柱建物址

F 4号掘立柱建物址

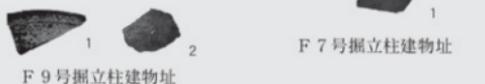


F 2号掘立柱建物址



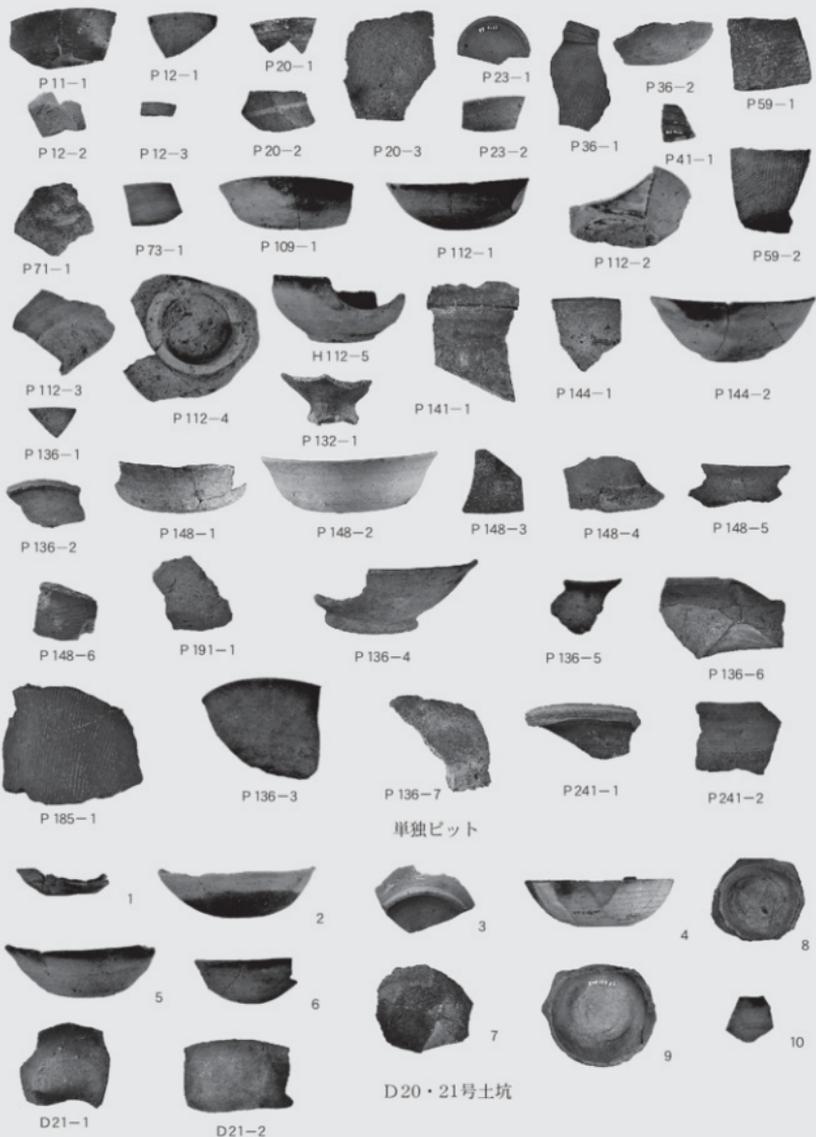
F 5号掘立柱建物址

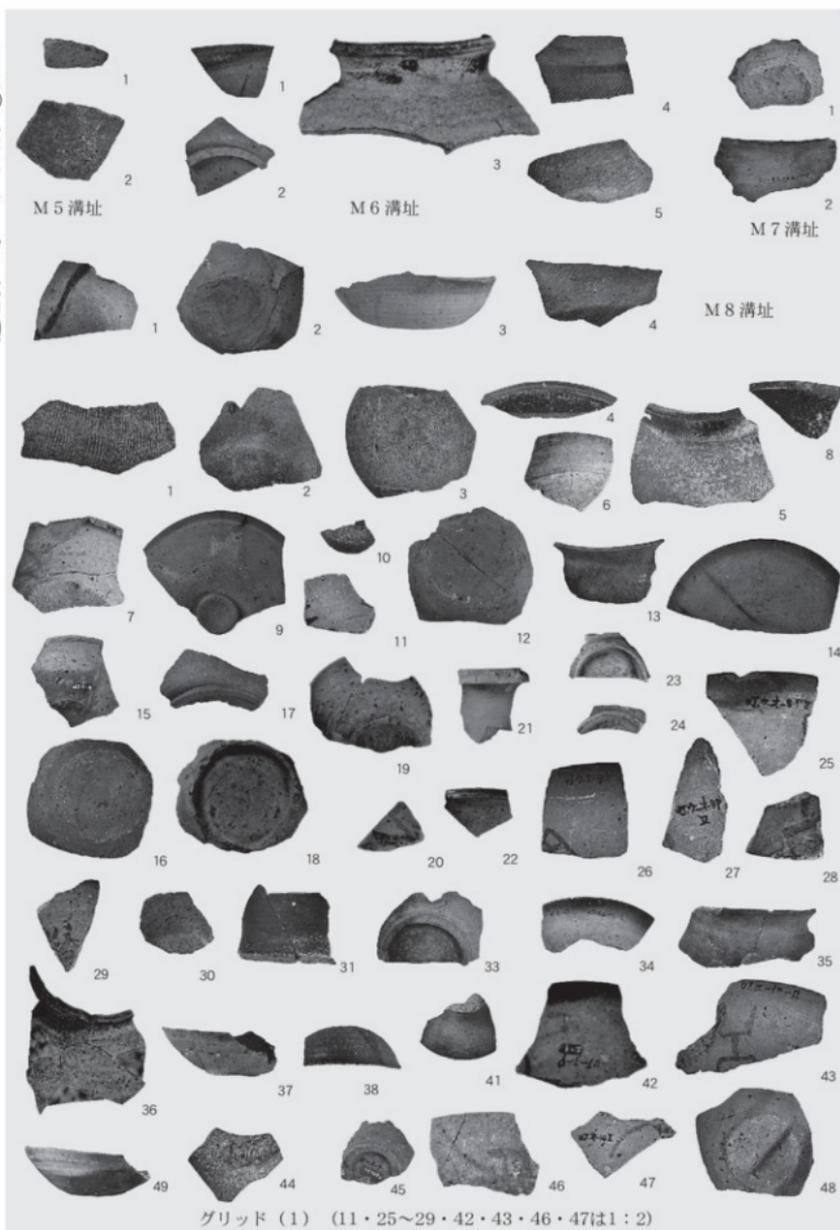
F 6号掘立柱建物址

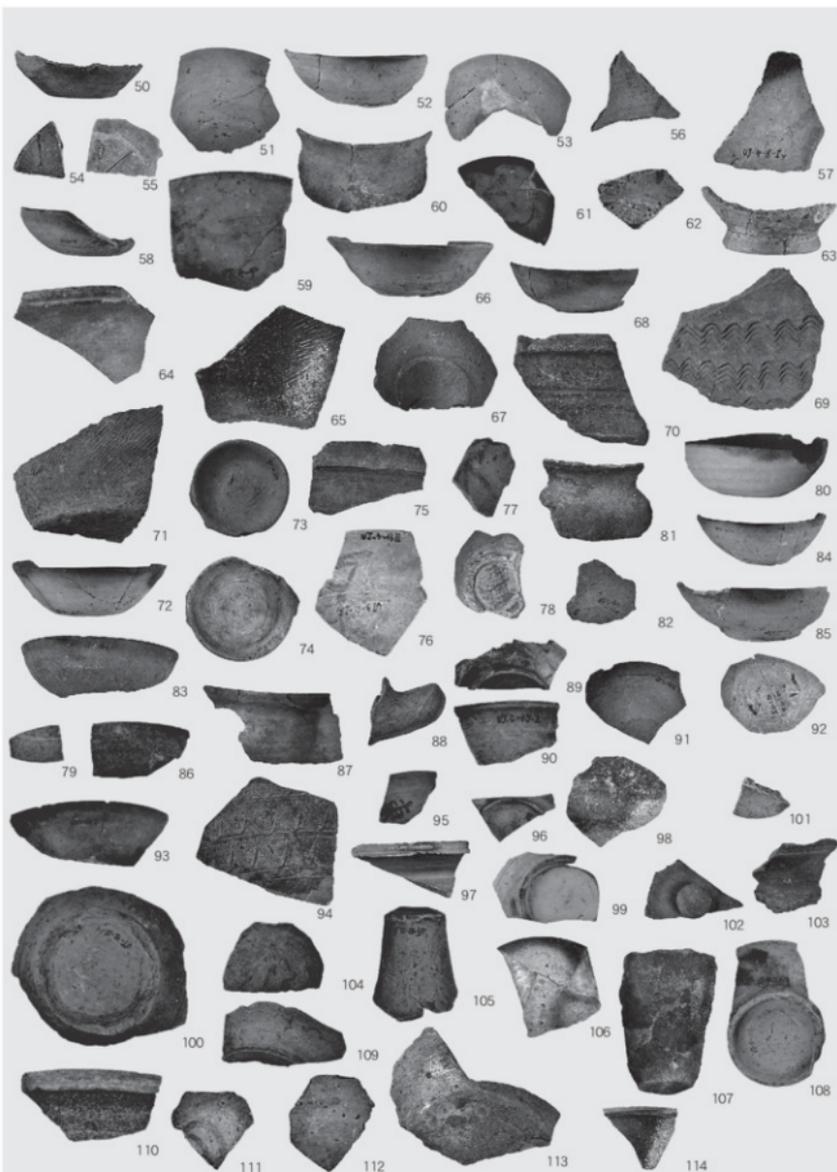


F 7号掘立柱建物址

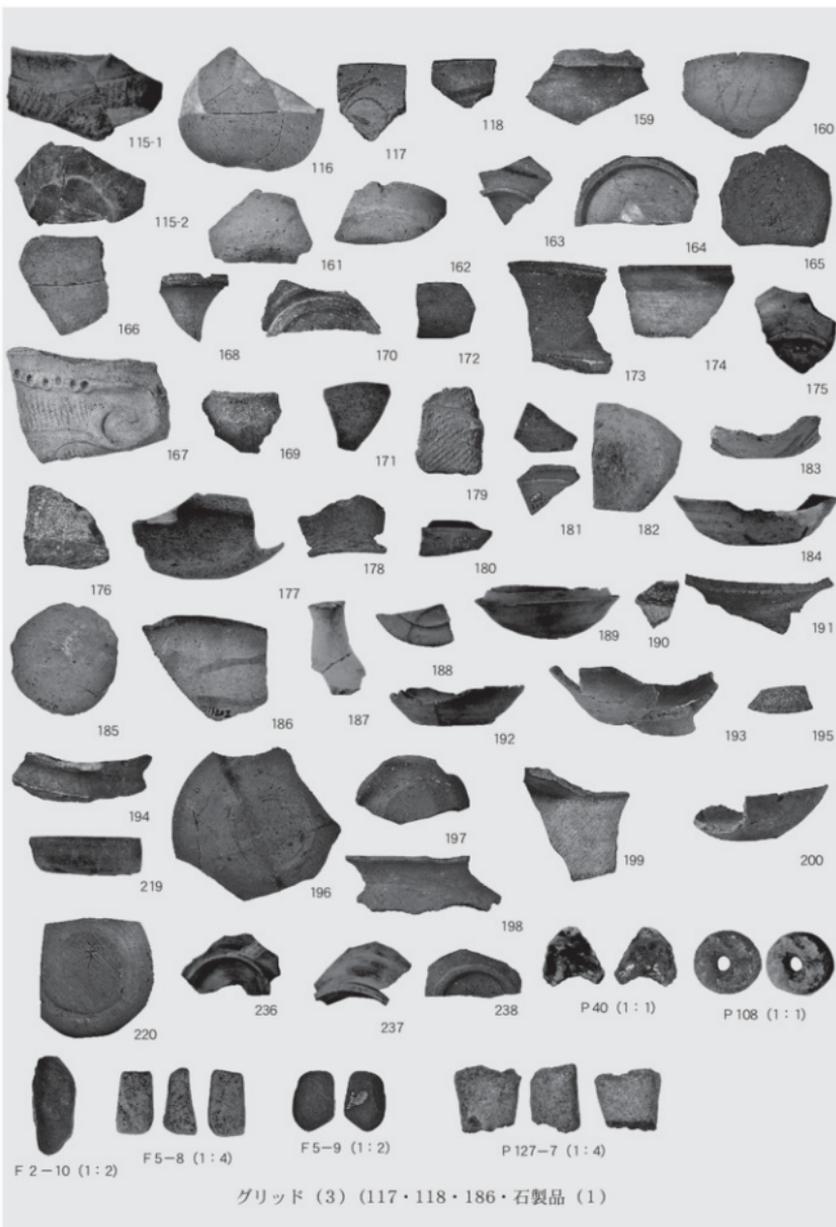
F 9号掘立柱建物址



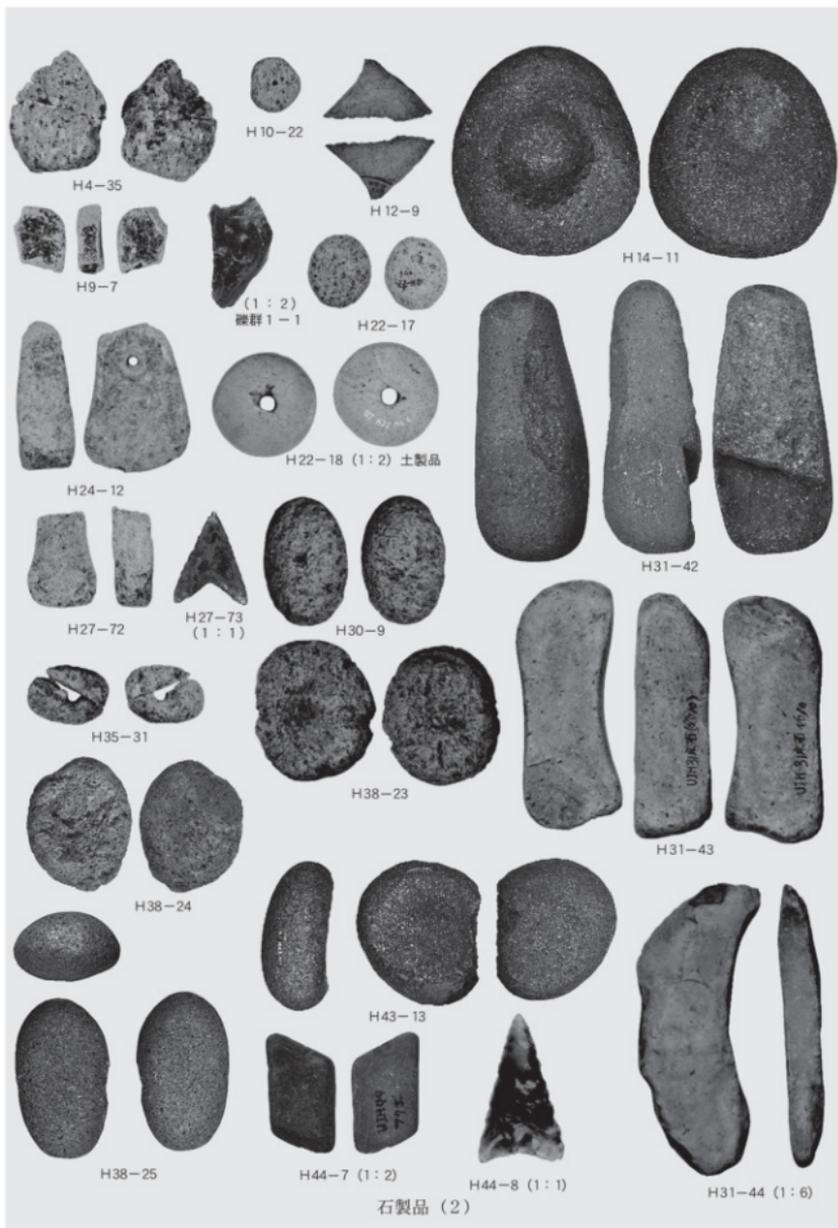


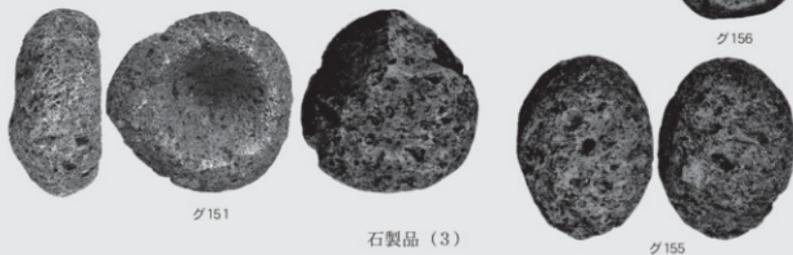
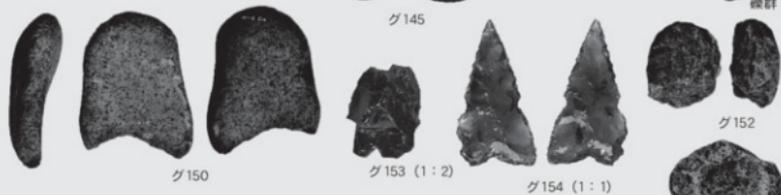
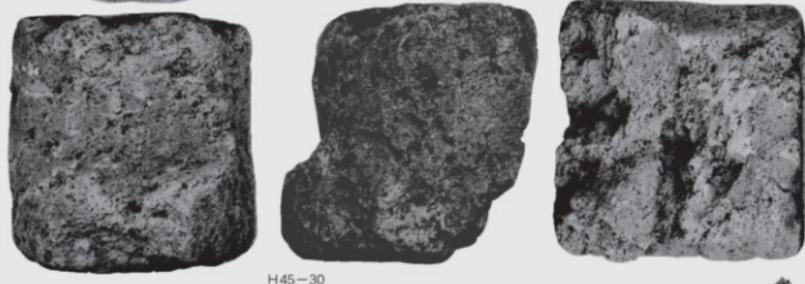
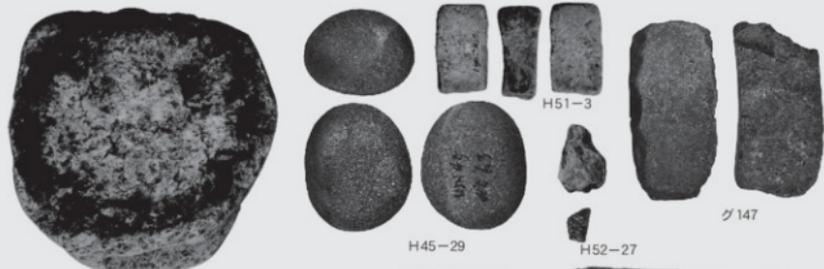


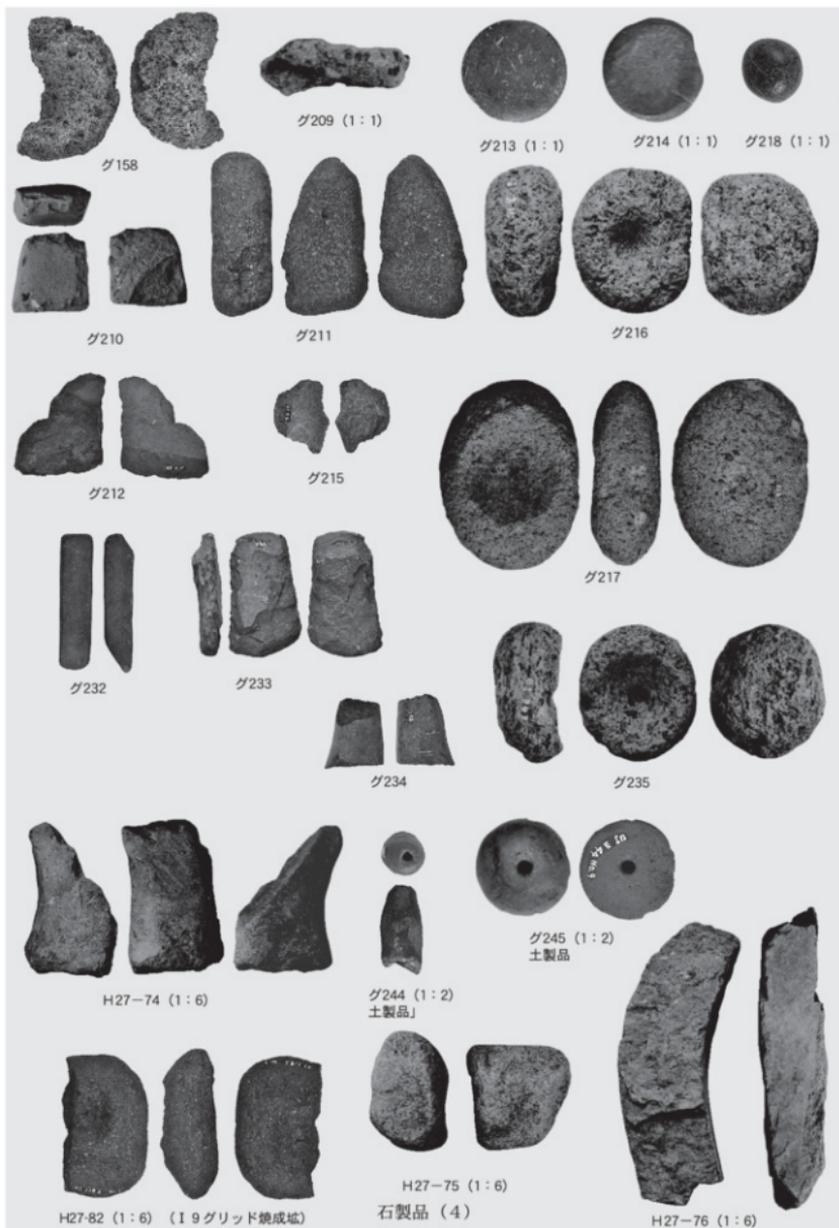
グリッド (2) (54・56・57・59・61・62・76・77・90・95は 1 : 2)



グリッド (3) (117・118・186・石製品 (1))

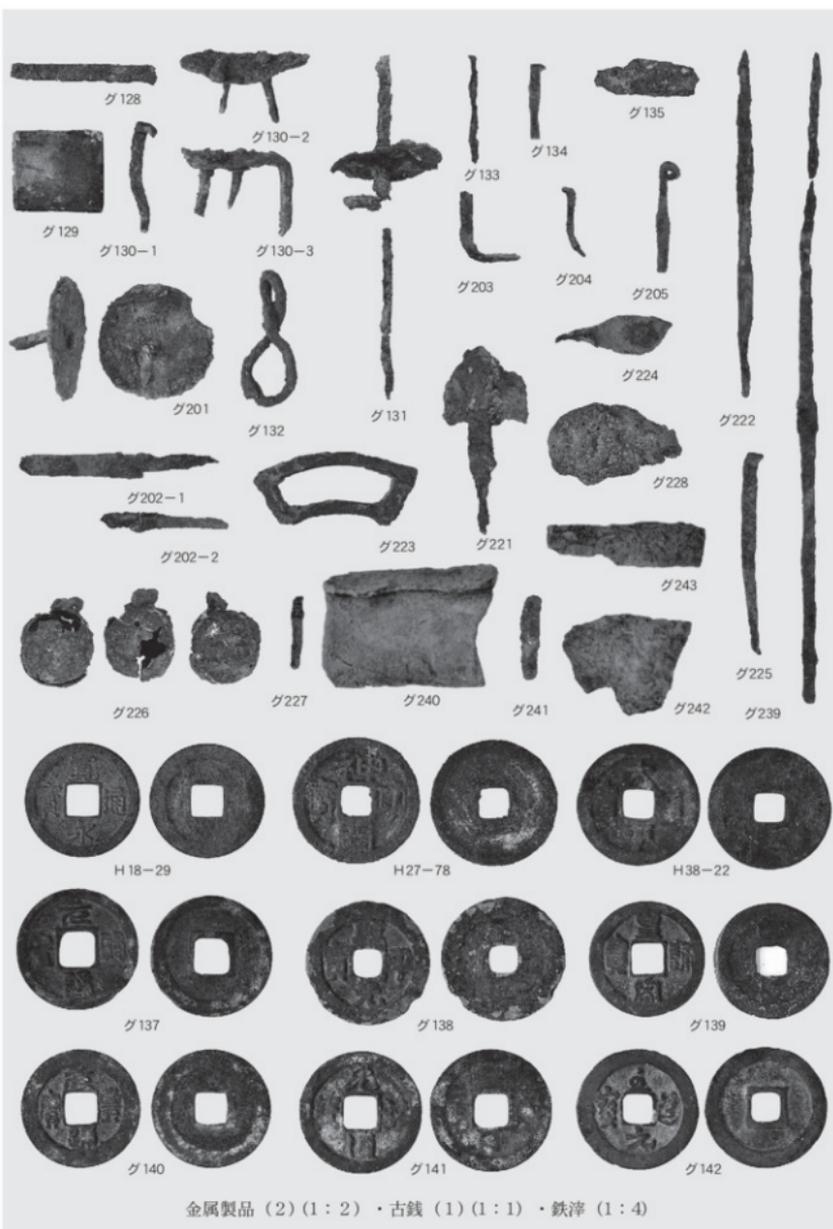




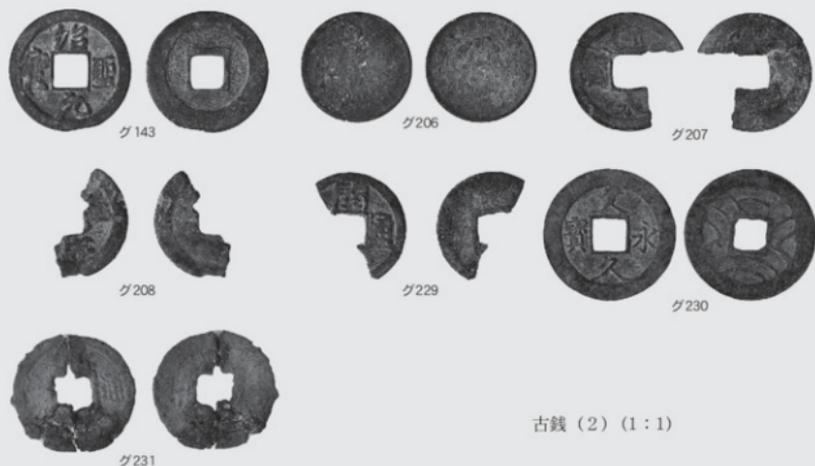




金属製品(1)(1:2)・鉄滓(1:4)



金属製品(2)(1:2)・古銭(1)(1:1)・鉄滓(1:4)



昭和48年当時の休憩風景
手前に煤で真っ黒な釜缶。焚火で湯を沸かしている。休憩棟はプレハブではなくテントを張っている。
唯一アルバムにあるスナップ写真である。

報告書抄録

ふりがな	うえのじょういせきに		
書名	上の城遺跡Ⅱ		
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書 第238集		
編著者名	森泉かよ子		
編集機関	佐久市教育委員会		
発行年月日	20160325		
郵便番号	3850006		
電話番号	0267-68-7321		
住所	長野県佐久市志賀5953		
ふりがな	いわむらだいせきぐんうえのじょういせき		
遺跡名	岩村田遺跡群上の城遺跡		
ふりがな	ながのけんさくしいわむらだあざうえのじょう		
遺跡所在地	長野県佐久市岩村田字上の城		
遺跡番号	佐久市52		
北緯	36° - 15' - 55" (世界測地系)		
東経	138° - 28' - 15" (世界測地系)		
調査期間	昭和48年7月28日～11月8日		
調査面積	約2,000㎡		
調査原因	国庫補助道路改良事業(国)141号線工事		
種別	集落・墓		
主な時代	古墳時代後期～平安時代・中世		
遺跡の概要	竪穴住居址 47棟 (古墳～平安時代) 溝址 5本 (中世) 掘立柱建物址 9棟 (奈良・平安時代) 単独ピット 199個 土坑 5基 (平安時代・中世) 古墳時代後期から平安時代にわたる集落遺跡である。中世の溝と火葬墓があることから、中世の痕跡もある。古墳時代の土器では杯の片側に把手の付いた杯が完形で出土している。平安時代の土器の杯の表に文字が墨書され「東」「九」など特定の文字が多くみられる。皇朝十二銭の「神功開寶」(初鑄年765)・「太平通寶」(初鑄年976)・平安時代とみられる青銅製巡方や鈴など貴重品が発見されている。		

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第238集

上の城遺跡Ⅱ

2016年3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

社会教育部 文化振興課 文化財事務所

〒385-0006 長野県佐久市志賀5953

TEL 0267-68-7321

印刷所 キクハラインク有限公司